

2017年度 修士論文

高知市薊野の空間的特質

- 「原型」空間とスプロール現象の重なりが導く空間の可能性-

Spacial quality of Azouno, Kochi City.

2018年1月

高知工科大学大学院

工学研究科 基盤工学専攻

社会システム工学コース 1205090

上田 悠貴

指導教員 渡辺 菊真

副指導教員 西内 裕晶

要旨

高知市薊野の空間的特質

－「原型」空間とスプロール現象の重なりが導く空間の可能性－

社会システム工学コース
1205090 上田 悠貴

本稿の目的は、高知市薊野の空間的特質を明らかにし、住宅地空間としての魅力を示すことである。空間的特質とは空間現況とそこに至るまでの変遷、空間構成の特性を含む総体を指す。

薊野は、高知県高知市の中心市街地から北東に数 km ほど離れた位置にある住宅地を主とする郊外地である。中町を中心に東町、西町、南町、北町の5つの大字からなる。現在、多くの住宅が建ち並ぶ薊野は、かつては田園が広がる農村であった。しかし、戦後の都市拡大にともなうスプロール現象により、ほぼ全域に住宅が埋め尽くされた。原型ともいえる農村時代の空間と、断続的に行われるスプロール現象による空間が重なった独特な空間を形成している。

スプロール現象により形成された住宅地は、都市計画や交通計画の観点から常に問題視される一方で、生活環境や空間の質が問われることは極めて稀である。スプロール現象が起きる土地にはその土地固有の素地がある。薊野の場合は農村である。元来の町が持つ素地と、その後の断続的なスプロール現象の幾重もの重なりが現在の空間を形成している。その意味では素地の空間的特質と時代が異なるスプロール空間が複雑に重なっているがゆえに生成される、多彩な空間的特質があるのではないかと考える。

本研究では薊野を対象に、かつて農村であった時代の空間（原型空間）に戦後高度経済成長期以後のスプロール現象の重なりが導く空間（現在型空間）の特質と、住宅地空間としての魅力を明らかにする。空間的特質としては、空間を形成する要素（街路、街区、建築、空地）の構成を、1.原型空間、2.スプロール空間、3.現在型空間の順に示し、原型とスプロール空間の重なり方がいかなる現在型空間を生み出しているかを示す。住宅地空間の魅力としては、戦後の均質的住宅地開発への反省から生み出された「豊かな地域コミュニティを形成する住宅地」の事例との相関を分析し、数多く見られる類似性から薊野の現在型空間が豊かな地域コミュニティを形成するための空間を持っていることを確認した。さらには原型空間の特質とスプロール現象の重なり方の密度や規模・速度の違いが、薊野空間の生活環境と空間の質に及ぼす影響を考察している。その結果、原型空間としては薊野全域の骨格（中心）となる街路または、場を有していること、スプロール現象としては小規模かつ断片的な開発が長期に渡り緩やかに行われることが、住宅地空間の魅力を高める大きな要因であることを示している。

Abstract

Special quality of Azouno, Kochi City.

Infrastructure Systems Engineering Course

1205090 Yuki Ueta

This study aims to find out the spatial quality of Azono, Kochi City.

Azono had been a village that was located a several kilometers away from the central area of Kochi City. In Azono we could see a lot of beautiful landscapes as a village. However almost of rice fields in Azono had disappeared because of sprawl phenomenon after the World War II. As a lot of the houses had been replaced from the rice fields by sprawl phenomenon, traditional landscapes of Azono disappeared.

Generally sprawl phenomenon is understood as bad urban problems. Many problems such as traffic confusion are pointed out in aspect of the urban planning. However the author tries to find the richness of space that is provided by overlap with Azono village and sprawl phenomenon.

On this study the author finds out the spatial quality by the following process.

1. Find out the spatial composition of the original landscape in Azono village
2. Find out the process of the sprawl phenomenon
3. Find out the special composition of the present Azono resulted in overlapping with sprawl space.

After finding out the spatial quality, the author points out of richness in housing area.

Finally the reason of richness in housing area is pointed out the way of overlapping original spatial composition with sprawl phenomenon. Core of the original space can provide the strong and unique impression as identity of the village. Series of small development of sprawl areas can provide the community spaces that have combination with original space and sprawl space. Discover of the richness of the housing area that is resulted in overlapping with original space and sprawl space could lead the discover of new system of housing process in the future.

目次

要旨.....	1
<u>序章.....</u>	<u>17</u>
0-1. 修士研究の背景.....	18
0-2. 修士研究の目的.....	19
0-3. 既往の研究.....	20
0-4. 修士研究の構成.....	21
0-5. 語句の定義.....	22
<u>第1章 市街拡大とスプロール現象.....</u>	<u>23</u>
1-1. 日本における戦後の市街拡大.....	24
1-1-1. 戦後復興期の都市計画.....	24
1-1-2. 都市計画の基本法の不成立.....	27
1-1-3. 高度経済成長と市街拡大.....	28
1-2. 日本における戸建住宅地開発.....	30
1-2-1. 合理的な住宅地開発（1960年代～）.....	30
1-2-2. 共有空間を導入した住宅地開発（1980年代～）.....	32
1-2-3. 欧米スタイルの住宅地開発（1980年代後期～）.....	36
1-3. スプロール現象と、その諸相.....	39
1-3-1. スプロール現象.....	39
1-3-2. スプロール現象の実態.....	40
<u>第2章 薊野の概要.....</u>	<u>44</u>
2-1. 薊野の概要.....	44
2-1-1. 概要.....	44
2-1-2. 歴史.....	48
2-2. 薊野の現況.....	50
2-2-1. 土地利用現況.....	50
2-2-2. 階数別建物利用現況.....	58
2-2-3. 構造別建物利用現況.....	64
2-2-4. 空き家現況.....	69

第3章 薊野の空間変遷	74
3-1. 高知市の空間変遷と薊野.....	75
3-2. 薊野の空間変遷.....	78
3-2-1. 薊野の街路形状.....	79
3-2-2. 薊野の土地利用変遷.....	82
3-3. 薊野5大字の空間変遷.....	85
3-3-1. 各大字の街路変遷.....	86
3-3-2. 各大字の土地利用変遷.....	96
第4章 薊野における「原型」とスプロール現象の重なり	106
4-1. 「原型」空間の構成.....	107
4-2. 薊野の街路体系と街区形状.....	114
4-2-1. 薊野の街路体系.....	114
4-2-2. 薊野の街区形状.....	119
4-3. 薊野空間の分析と類型.....	130
4-3-1. 薊野の「現在型」と、その類型.....	130
4-3-2. 薊野の「原型」と、その類型.....	157
4-3-3. 薊野のスプロール現象と、その類型.....	163
4-3-4. 薊野の「原型」とスプロール現象の重なりと、その類型.....	177
4-4. 薊野の「現在型」と戸建て住宅地の工夫.....	188
4-4-1. 「住まいのまちなみを創る」にみる戸建て住宅地開発.....	188
4-4-2. 地域コミュニティを図る戸建て住宅地の構成.....	194
4-4-3. 薊野空間と戸建て住宅地との相関.....	198
第5章 薊野の空間的特質と可能性	201
5-1. 薊野の空間変遷の特質.....	202
5-2. 薊野の「現在型」にみる空間的特質.....	205
5-2-1. 街路体系と街区形状にみる空間的特質.....	205
5-2-2. 空間要素の分布にみる空間的特質.....	207
5-2-3. 豊かな地域コミュニティの空間の形成.....	213

終章.....	2 1 5
6-1. 研究の成果.....	2 1 5
6-2. 研究の課題.....	2 1 5
主要参考文献.....	2 1 6

図目次

第1章

図 1.1.1.1 東京区分の空襲による被害地域.....	25
図 1.1.1.2 東京戦災復興計画の土地利用計画（1946年）.....	25
図 1.1.1.3 東京戦災復興計画の幹線道路計画（1946年）.....	26
図 1.1.1.4 東京都長岡市戦災復興プラン（1946年）.....	26
図 1.1.3.1 多摩ニュータウン計画（19465年）.....	29
図 1.2.1.1 奈良市郊外住宅団地航空写真.....	31
図 1.2.1.1 奈良市郊外住宅団地風景写真.....	31
図 1.2.1.1 イートピア名取.....	33
図 1.2.1.1 高須ニュータウン.....	34
図 1.2.1.1 常総ニュータウン.....	35
図 1.2.1.1 西神 SV ヴィレッジ配置図.....	37
図 1.2.1.1 バンクーバー村の住宅のデザイン.....	37
図 1.2.1.1 デザイン過剰なファサード.....	38
図 1.2.1.1 街並みがデザインされたミニ開発.....	38
図 1.1.3.1 第1次首都圏整備基本計画（1956年）とロンドン計画（1944年）..	42
図 1.1.3.2 東洋と町田市における区域区分の線引き（1970年）.....	43

第2章

図 2.1.1.1 高知市薊野の位置.....	46
図 2.1.1.2 薊野の5大字と薊野奥.....	46
図 2.1.1.3 掛川神社.....	47
図 2.1.1.4 板垣退助のお墓.....	47
図 2.1.2.1 海であった頃の薊野.....	49
図 2.1.2.2 参観交代で使用された経路.....	49
図 2.1.2.3 庶民の経路（中ノ川越え）.....	49
図 2.2.1 薊野の概要図.....	50
図 2.2.2 用途地域図.....	51
図 2.2.1.1 東町の土地利用現況図.....	53
図 2.2.1.2 東町の土地利用現況グラフ.....	53
図 2.2.1.3 西町の土地利用現況図.....	54
図 2.2.1.4 西町の土地利用現況グラフ.....	54

図 2.2.1.5	南町の土地利用現況図.....	5 5
図 2.2.1.6	南町の土地利用現況グラフ.....	5 5
図 2.2.1.7	北町の土地利用現況図.....	5 6
図 2.2.1.8	北町の土地利用現況グラフ.....	5 6
図 2.2.1.9	中町の土地利用現況図.....	5 7
図 2.2.1.10	中町の土地利用現況グラフ.....	5 7
図 2.2.2.1	ピロティ空間の有無に関する概念図.....	5 8
図 2.2.2.2	東町の階数別建物現況図.....	5 9
図 2.2.2.3	東町の階数別建物現況グラフ.....	5 9
図 2.2.2.4	西町の階数別建物現況図.....	6 0
図 2.2.2.5	西町の階数別建物現況グラフ.....	6 0
図 2.2.2.6	南町の階数別建物現況図.....	6 1
図 2.2.2.7	南町の階数別建物現況グラフ.....	6 1
図 2.2.2.8	北町の階数別建物現況図.....	6 2
図 2.2.2.9	北町の階数別建物現況グラフ.....	6 2
図 2.2.2.10	中町の階数別建物現況図.....	6 3
図 2.2.2.11	中町の階数別建物現況グラフ.....	6 3
図 2.2.3.1	東町の構造別建物現況図.....	6 4
図 2.2.3.2	東町の構造別建物現況グラフ.....	6 4
図 2.2.3.3	西町の構造別建物現況図.....	6 5
図 2.2.3.4	西町の構造別建物現況グラフ.....	6 5
図 2.2.3.5	南町の構造別建物現況図.....	6 6
図 2.2.3.6	南町の構造別建物現況グラフ.....	6 6
図 2.2.3.7	北町の構造別建物現況図.....	6 7
図 2.2.3.8	北町の構造別建物現況グラフ.....	6 7
図 2.2.3.9	中町の構造別建物現況図.....	6 8
図 2.2.3.10	中町の構造別建物現況グラフ.....	6 8
図 2.2.4.1	東町の空き家現況図.....	6 9
図 2.2.4.2	東町の空き家現況グラフ.....	6 9
図 2.2.4.3	西町の空き家現況図.....	7 0
図 2.2.4.4	西町の空き家現況グラフ.....	7 0
図 2.2.4.5	南町の空き家現況図.....	7 1
図 2.2.4.6	南町の空き家現況グラフ.....	7 1

図 2.2.4.7 北町の空き家現況図.....	7 2
図 2.2.4.8 北町の空き家現況グラフ.....	7 2
図 2.2.4.9 中町の空き家現況図.....	7 3
図 2.2.4.10 中町の空き家現況グラフ.....	7 3

第 3 章

図 3.1.1.1 高知市市街地と薊野の位置図 (1 9 0 7 年).....	7 6
図 3.1.1.2 高知市市街地と薊野の位置図 (原型).....	7 6
図 3.1.1.3 高知市市街地と薊野の位置図 (1 9 6 5 年).....	7 6
図 3.1.1.4 高知市市街地と薊野の位置図 (1 9 7 6 年).....	7 6
図 3.1.1.5 高知市市街地と薊野の位置図 (1 9 8 8 年).....	7 7
図 3.1.1.6 高知市市街地と薊野の位置図 (1 9 9 7 年).....	7 7
図 3.1.1.7 高知市市街地と薊野の位置図 (2 0 0 5 年).....	7 7
図 3.2.1.1 薊野の街路図 (原型).....	8 0
図 3.2.1.2 薊野の街路図 (1 9 6 5 年).....	8 0
図 3.2.1.3 薊野の街路図 (1 9 7 6 年).....	8 0
図 3.2.1.4 薊野の街路図 (1 9 8 8 年).....	8 0
図 3.2.1.5 薊野の街路図 (1 9 9 7 年).....	8 1
図 3.2.1.6 薊野の街路図 (2 0 0 5 年).....	8 1
図 3.2.2.1 薊野の土地利用図 (原型).....	8 3
図 3.2.2.2 薊野の土地利用図 (1 9 6 5 年).....	8 3
図 3.2.2.3 薊野の土地利用図 (1 9 7 6 年).....	8 3
図 3.2.2.4 薊野の土地利用図 (1 9 8 8 年).....	8 3
図 3.2.2.5 薊野の土地利用図 (1 9 9 7 年).....	8 4
図 3.2.2.6 薊野の土地利用図 (2 0 0 5 年).....	8 4
図 3.3.1.1 薊野東町の街路図 (原型).....	8 6
図 3.3.1.2 薊野東町の街路図 (1 9 7 6 年).....	8 6
図 3.3.1.3 薊野東町の街路図 (1 9 8 8 年).....	8 7
図 3.3.1.4 薊野東町の街路図 (2 0 0 5 年).....	8 7
図 3.3.1.5 薊野東町の街路図 (2 0 1 5 年).....	8 7
図 3.3.1.6 薊野西町の街路図 (原型).....	8 8
図 3.3.1.7 薊野西町の街路図 (1 9 7 6 年).....	8 8
図 3.3.1.8 薊野西町の街路図 (1 9 8 8 年).....	8 9
図 3.3.1.9 薊野西町の街路図 (2 0 0 5 年).....	8 9

図 3.3.1.10	薊野西町の街路図 (2015年)	89
図 3.3.1.11	薊野南町の街路図 (原型)	90
図 3.3.1.12	薊野南町の街路図 (1976年)	90
図 3.3.1.13	薊野南町の街路図 (1988年)	91
図 3.3.1.14	薊野南町の街路図 (2005年)	91
図 3.3.1.15	薊野南町の街路図 (2015年)	91
図 3.3.1.16	薊野北町の街路図 (原型)	92
図 3.3.1.17	薊野北町の街路図 (1976年)	92
図 3.3.1.18	薊野北町の街路図 (1988年)	93
図 3.3.1.19	薊野北町の街路図 (2005年)	93
図 3.3.1.20	薊野北町の街路図 (2015年)	93
図 3.3.1.21	薊野中町の街路図 (原型)	94
図 3.3.1.22	薊野中町の街路図 (1976年)	94
図 3.3.1.23	薊野中町の街路図 (1988年)	95
図 3.3.1.24	薊野中町の街路図 (2005年)	95
図 3.3.1.25	薊野中町の街路図 (2015年)	95
図 3.3.2.1	薊野東町の土地利用図 (原型)	96
図 3.3.2.2	薊野東町の土地利用図 (1976年)	96
図 3.3.2.3	薊野東町の土地利用図 (1988年)	97
図 3.3.2.4	薊野東町の土地利用図 (2005年)	97
図 3.3.2.5	薊野東町の土地利用図 (2015年)	97
図 3.3.2.6	薊野西町の土地利用図 (原型)	98
図 3.3.2.7	薊野西町の土地利用図 (1976年)	98
図 3.3.2.8	薊野西町の土地利用図 (1988年)	99
図 3.3.2.9	薊野西町の土地利用図 (2005年)	99
図 3.3.2.10	薊野西町の土地利用図 (2015年)	99
図 3.3.2.11	薊野南町の土地利用図 (原型)	100
図 3.3.2.12	薊野南町の土地利用図 (1976年)	100
図 3.3.2.13	薊野南町の土地利用図 (1988年)	101
図 3.3.2.14	薊野南町の土地利用図 (2005年)	101
図 3.3.2.15	薊野南町の土地利用図 (2015年)	101
図 3.3.2.16	薊野北町の土地利用図 (原型)	102
図 3.3.2.17	薊野北町の土地利用図 (1976年)	102

図 3.3.2.18 薊野北町の土地利用図 (1988年).....	103
図 3.3.2.19 薊野北町の土地利用図 (2005年).....	103
図 3.3.2.20 薊野北町の土地利用図 (2015年).....	103
図 3.3.2.21 薊野中町の土地利用図 (原型).....	104
図 3.3.2.22 薊野中町の土地利用図 (1976年).....	104
図 3.3.2.23 薊野中町の土地利用図 (1988年).....	105
図 3.3.2.24 薊野中町の土地利用図 (2005年).....	105
図 3.3.2.25 薊野中町の土地利用図 (2015年).....	105

第4章

図 4.1.1.1 「原型」空間の図式化.....	107
図 4.1.1.2 薊野全域の特質.....	108
図 4.1.1.3 東町の特質.....	109
図 4.1.1.4 西町の特質.....	110
図 4.1.1.5 南町の特質.....	111
図 4.1.1.6 北町の特質.....	112
図 4.1.1.7 中町の特質.....	113
図 4.2.1.1 原型の街路体系 (東町).....	114
図 4.2.1.2 現在型の街路体系 (東町).....	114
図 4.2.1.3 原型の街路体系 (西町).....	115
図 4.2.1.4 現在型の街路体系 (西町).....	115
図 4.2.1.5 原型の街路体系 (南町).....	116
図 4.2.1.6 現在型の街路体系 (南町).....	116
図 4.2.1.7 原型の街路体系 (北町).....	117
図 4.2.1.8 現在型の街路体系 (北町).....	117
図 4.2.1.9 原型の街路体系 (中町).....	118
図 4.2.1.10 現在型の街路体系 (中町).....	118
図 4.2.2.1 街区形状と宅地形状図 (東町).....	119
図 4.2.2.2 街区別形状図.....	120
図 4.2.2.3 街区形状と宅地形状図 (西町).....	121
図 4.2.2.4 街区別形状図.....	122
図 4.2.2.5 街区形状と宅地形状図 (南町).....	124
図 4.2.2.6 街区別形状図.....	125
図 4.2.2.7 街区形状と宅地形状図 (北町).....	126

図 4.2.2.8 街区別形状図.....	1 2 7
図 4.2.2.9 街区形状と宅地形状図（中町）.....	1 2 8
図 4.2.2.10 街区別形状図.....	1 2 9
図 4.3.1.1 街路・建築・全空地の配列パターン.....	1 3 0
図 4.3.1.2 建築の正面方向.....	1 3 0
図 4.3.1.3 両側建築型の類型.....	1 3 1
図 4.3.1.4 片側空地型の類型.....	1 3 1
図 4.3.1.5 片側田畑型の類型.....	1 3 2
図 4.3.1.6 両側空地型の類型.....	1 3 2
図 4.3.1.7 田畑空地対面型の類型.....	1 3 3
図 4.3.1.8 両側田畑の類型.....	1 3 3
図 4.3.1.9 幅広道路接続型の類型.....	1 3 4
図 4.3.1.10 袋路型の類型.....	1 3 4
図 4.3.1.11 片側空地袋路型の類型.....	1 3 5
図 4.3.1.12 片側田畑袋路型の類型.....	1 3 5
図 4.3.1.13 両アプローチ型の類型.....	1 3 6
図 4.3.1.14 空地共存型の類型.....	1 3 6
図 4.3.1.15 共有空間型の類型.....	1 3 7
図 4.3.1.16 空間要素の結合体と時間の重なり.....	1 3 8
図 4.3.1.17 表裏混在型の類型.....	1 3 9
図 4.3.1.18 袋路分岐型の類型.....	1 3 9
図 4.3.1.19 内的共有空間型の類型.....	1 4 0
図 4.3.1.20 空地内包型の類型.....	1 4 0
図 4.3.1.21 田畑内包型の類型.....	1 4 1
図 4.3.1.22 最奥空地共存型の類型.....	1 4 1
図 4.3.1.23 「現在型」の住宅・全空地分布（東町）.....	1 4 2
図 4.3.1.24 東町の単一の類型分布.....	1 4 3
図 4.3.1.25 東町の結合体の類型分布.....	1 4 4
図 4.3.1.26 分布する空間要素.....	1 4 4
図 4.3.1.27 「現在型」の住宅・全空地分布（西町）.....	1 4 5
図 4.3.1.28 西町の単一の類型分布.....	1 4 6
図 4.3.1.29 西町の結合体の類型分布.....	1 4 7
図 4.3.1.30 分布する空間要素.....	1 4 7

図 4.3.1.31 「現在型」の住宅・全空地分布（南町）	1 4 8
図 4.3.1.32 南町の単一の類型分布	1 4 9
図 4.3.1.33 南町の結合体の類型分布	1 5 0
図 4.3.1.34 分布する空間要素	1 5 0
図 4.3.1.35 「現在型」の住宅・全空地分布（北町）	1 5 1
図 4.3.1.36 北町の単一の類型分布	1 5 2
図 4.3.1.37 北町の結合体の類型分布	1 5 3
図 4.3.1.38 分布する空間要素	1 5 3
図 4.3.1.39 「現在型」の住宅・全空地分布（中町）	1 5 4
図 4.3.1.40 中町の単一の類型分布	1 5 5
図 4.3.1.41 中町の結合体の類型分布	1 5 6
図 4.3.1.42 分布する空間要素	1 5 6
図 4.3.2.1 片側田畑型の類型	1 5 7
図 4.3.2.2 両側田畑型の類型	1 5 7
図 4.3.2.3 東町の原型のみの空間要素の分布	1 5 8
図 4.3.2.4 分布する空間要素	1 5 8
図 4.3.2.5 西町の原型のみの空間要素の分布	1 5 9
図 4.3.2.6 南町の原型のみの空間要素の分布	1 6 0
図 4.3.2.7 北町の原型のみの空間要素の分布	1 6 1
図 4.3.2.8 分布する空間要素	1 6 1
図 4.3.2.9 中町の原型のみの空間要素の分布	1 6 2
図 4.3.2.10 分布する空間要素	1 6 2
図 4.3.3.1 両側建築型の類型	1 6 3
図 4.3.3.2 片側空地型の類型	1 6 3
図 4.3.3.3 両側空地型の類型	1 6 3
図 4.3.3.4 幅広道路接続型の類型	1 6 4
図 4.3.3.5 袋路型の類型	1 6 4
図 4.3.3.6 片側空地袋路型の類型	1 6 4
図 4.3.3.7 両アプローチ型の類型	1 6 4
図 4.3.3.8 空地共存型の類型	1 6 5
図 4.3.3.9 共有空間型の類型	1 6 5
図 4.3.3.10 表裏混在型の類型	1 6 6
図 4.3.3.11 袋路分岐型の類型	1 6 6

図 4.3.3.12 内的共有空間型の類型.....	166
図 4.3.3.13 空地内包型の類型.....	167
図 4.3.3.14 最奥空地共存型の類型.....	167
図 4.3.3.15 東町の新設のみの空間要素の分布.....	168
図 4.3.3.16 分布する単一の空間要素.....	168
図 4.3.3.17 分布する空間要素の結合体.....	168
図 4.3.3.18 西町の新設のみの空間要素の分布.....	169
図 4.3.3.19 分布する単一の空間要素.....	169
図 4.3.3.20 分布する空間要素の結合体.....	170
図 4.3.3.21 南町の新設のみの空間要素の分布.....	171
図 4.3.3.22 分布する単一の空間要素.....	171
図 4.3.3.23 分布する空間要素の結合体.....	172
図 4.3.3.24 北町の新設のみの空間要素の分布.....	173
図 4.3.3.25 分布する単一の空間要素.....	173
図 4.3.3.26 分布する空間要素の結合体.....	174
図 4.3.3.27 中町の新設のみの空間要素の分布.....	175
図 4.3.3.28 分布する単一の空間要素.....	175
図 4.3.3.29 分布する空間要素の結合体.....	176
図 4.3.4.1 両側建築型の類型.....	177
図 4.3.4.2 片側空地型の類型.....	177
図 4.3.4.3 片側田畑型の類型.....	177
図 4.3.4.4 両側空地型の類型.....	178
図 4.3.4.5 田畑空地対面型の類型.....	178
図 4.3.4.6 両側田畑の類型.....	178
図 4.3.4.7 幅広道路接続型の類型.....	178
図 4.3.4.8 袋路型の類型.....	179
図 4.3.4.9 片側田畑袋路型の類型.....	179
図 4.3.4.10 共有空間型の類型.....	179
図 4.3.4.11 表裏混在型の類型.....	180
図 4.3.4.12 袋路分岐型の類型.....	180
図 4.3.4.13 内的共有空間型の類型.....	180
図 4.3.4.14 田畑内包型の類型.....	180
図 4.3.3.15 東町の重なる空間要素の分布.....	181

図 4.3.3.16 分布する単一の空間要素.....	181
図 4.3.3.17 分布する空間要素の結合体.....	182
図 4.3.3.18 西町の重なり空間要素の分布.....	183
図 4.3.3.19 分布する単一の空間要素.....	183
図 4.3.3.20 南町の重なり空間要素の分布.....	184
図 4.3.3.21 分布する単一の空間要素.....	184
図 4.3.3.22 北町の重なり空間要素の分布.....	185
図 4.3.3.23 分布する単一の空間要素.....	185
図 4.3.3.24 中町の重なり空間要素の分布.....	186
図 4.3.3.25 分布する単一の空間要素.....	186
図 4.3.3.26 分布する空間要素の結合体.....	187
図 4.4.1.1 住宅地の全体計画.....	189
図 4.4.1.2 計画のディテール.....	189
図 4.4.1.3 住宅地の情景.....	189
図 4.4.1.4 住宅地の全体計画.....	190
図 4.4.1.5 計画のディテール.....	190
図 4.4.1.6 住宅地の全体計画.....	191
図 4.4.1.7 計画のディテール.....	191
図 4.4.1.8 住宅地の情景.....	191
図 4.4.1.9 住宅地の全体計画.....	192
図 4.4.1.10 計画のディテール.....	192
図 4.4.1.11 住宅地の情景.....	192
図 4.4.1.12 住宅地の全体計画.....	193
図 4.4.1.13 計画のディテール.....	193
図 4.4.1.14 住宅地の情景.....	193
図 4.4.2.1 住宅地の基本的な構成.....	194
図 4.4.2.2 フットパス.....	195
図 4.4.2.3 緑化.....	195
図 4.4.2.4 曲線街路.....	195
図 4.4.2.5 ボンエルフ街路.....	195
図 4.4.2.6 ループ街路.....	195
図 4.4.2.7 みち広場の細街路.....	196
図 4.4.2.8 中庭型クルドサック.....	196

図 4.4.2.9 ランダムな住宅配置.....	196
図 4.4.3.1 諏訪野団地の計画.....	197
図 4.4.3.2 諏訪野団地との相関（東町）.....	197
図 4.4.3.3 みらい平の計画.....	198
図 4.4.3.4 みらい平との相関（南町）.....	198
図 4.4.3.5 みらい平との相関（中町）.....	198
図 4.4.3.6 イートピア名取の計画.....	199
図 4.4.3.7 イートピア名取との相関（北町）.....	199
図 4.4.3.8 均質な住宅地の計画.....	200
図 4.4.3.9 基本にある均質性.....	200
図 4.4.3.10 部分的な均質空間の不備.....	200

第5章

図 5.1.2 地区内における居住地割合の変遷図.....	204
図 5.2.2.1 東町の分布図.....	208
図 5.2.2.2 単一空間要素の面積割合図.....	208
図 5.2.2.3 西町の分布図.....	209
図 5.2.2.4 単一空間要素の面積割合図.....	209
図 5.2.2.5 南町の分布図.....	210
図 5.2.2.6 単一空間要素の面積割合図.....	210
図 5.2.2.7 南町の分布図.....	211
図 5.2.2.8 単一空間要素の面積割合図.....	211
図 5.2.2.9 中町の分布図.....	212
図 5.2.2.10 単一空間要素の面積割合図.....	212

表目次

第1章

表 1.1.3.1 宅地審議会第6次答申と1968年法の比較.....	4
-------------------------------------	---

2

第2章

表 2.2.1 用途地域別建築物表.....	52
表 2.2.1.1 東町の土地利用現況.....	59
表 2.2.1.2 西町の土地利用現況.....	60
表 2.2.1.3 南町の土地利用現況.....	61

表 2.2.1.4	北町の土地利用現況.....	6 2
表 2.2.1.5	中町の土地利用現況.....	6 3
表 2.2.2.1	東町の階数別建物現況表.....	6 4
表 2.2.2.2	西町の階数別建物現況表.....	6 5
表 2.2.2.3	南町の階数別建物現況表.....	6 6
表 2.2.2.4	北町の階数別建物現況表.....	6 7
表 2.2.2.5	中町の階数別建物現況表.....	6 8
表 2.2.4.1	東町の空き家現況表.....	6 9
表 2.2.4.2	西町の空き家現況表.....	7 0
表 2.2.4.3	南町の空き家現況表.....	7 1
表 2.2.4.4	北町の空き家現況表.....	7 2
表 2.2.4.5	中町の空き家現況表.....	7 3
第 3 章		
表 3.2.1	地図における街路表記の移り変わり表.....	7 8
第 4 章		
表 4.2.2.1	街区周長表（東町）.....	1 2 0
表 4.2.2.2	街区周長表（西町）.....	1 2 3
表 4.2.2.3	街区周長表（南町）.....	1 2 5
表 4.2.2.4	街区周長表（北町）.....	1 2 7
表 4.2.2.5	街区周長表（中町）.....	1 2 9
第 5 章		
表 5.1.1	地区内における居住地割合の変遷表.....	2 0 4
表 5.2.2.1	単一空間要素の面積割合.....	2 0 8
表 5.2.2.2	単一空間要素の面積割合.....	2 0 9
表 5.2.2.3	単一空間要素の面積割合.....	2 1 0
表 5.2.2.4	単一空間要素の面積割合.....	2 1 1
表 5.2.2.5	単一空間要素の面積割合.....	2 1 2

序章

研究の背景

薊野は高知県高知市の中心市街地から北東に数 km ほど離れた位置にある、住宅地を主とした郊外地である。住宅をはじめとして多くの建築が密に立ち並ぶこの領域には、魅力的な空間がいたるところに散在している。商業施設が立ち並ぶ都市的な町並みから、田畑が広がる田舎の農村のような風景まで、多種多様な風景が混在している。都市の拡大に伴う環境の変化に対応して改造された住宅が建っていたり、新旧様々なインフラ（高架の高速道路、国道、路地、用水路など）による線形空間が平面上はもちろんのこと、立体的にも交差していたりする。こうした多種多様な空間の存在や重なりは、予期せぬ空間を生み、それが期せずして生き生きとした町並みを演出している。

現在、多くの住宅や建築が建ち並ぶ薊野の町も、かつては幾つかの小集落が散在しながら、全体としては広大な田園風景を形成していた。しかし、戦後の都市拡大にともなうスプロール現象により、かつての田園が広がる農村風景は瞬く間に住宅地へと変貌した。高知県において最も早期にスプロール現象が進行した薊野は、ほぼ全域に住宅が埋め尽くされ、現在ではかつての田園風景を想起することは難しい。また、スプロール現象という無秩序で場当たりの都市開発ゆえに、小規模な開発区画同士の連関性は、ほぼ考慮されておらず、交通渋滞を招くなど、都市機能の低下が問題視されている。

スプロール現象が問題視されるのは、交通の循環不全など、都市計画や交通計画からの観点からほとんどであり、スプロール現象によってできる生活環境や空間の特質が問われることは極めて少ない。空間の見地からは問題だけでなく、町の魅力につながる可能性もあるのではないか。スプロール現象が起きる土地にはその土地固有の素地がある。薊野の場合は農村という素地である。元来の町が持つ素地と、その後の断続的なスプロール現象の幾重もの重なりが現在の空間を形成している。その意味では素地の空間的特質と時代が異なるスプロール空間の特質が複雑に重なっているがゆえに生成される、多彩な空間的特質があるはずである。

戦後から現在に至るまで、住宅地開発は時代背景とともに変化を遂げていく。都市拡大に伴い大量に開発された場所の欠落した均質な住宅地やこれら均質な住宅地の反省から共有空間を導入した住宅地など様々であるが、一貫してこれらの住宅地には生活環境や空間の質としての限界を感じる。多彩な空間が存在し、生き生きとした生活風景が実現されているとは思えない。その一方で薊野の町にはそういった空間や生活風景をよく目にする。かつて農村であった時代の空間（原型空間）にスプロール現象が重なる空間（現在型空間）の特質と、薊野の町が住宅地空間として魅力的であることを明らかにすることで、素地の継承とスプロール現象の重なる空間から住宅地開発の限界を打開する整備手法の手がかりを見いだせると考えた。

研究の目的

本研究は、高知市薊野を対象に、その空間的特質を明らかにすることを目的とする。具体的には同領域における、戦後高度経済成長期以前の農村であった時代の空間（＝「原型」空間）と、それ以後のスプロール現象の重なりが導く空間（＝「現在型」空間）の特質を明らかにし、現在の薊野が住宅地として魅力的であることを示す。

戦後の高度経済成長期以降、日本では、都市拡大に伴い大規模な宅地開発が行われ、車両交通を前提にした大規模な街路敷設とともに、都市郊外には広大な面積を有する、大規模新興住宅地が数多く形成された。大規模な街路敷設や宅地開発においては、かつての土地形状は継承されず、交通機能の利便性や均質な住宅地開発の合理性が重要視される。そこには既存空間の特質が反映されず、単調さや退屈さを感じさせる、全国一律の均質な町並みが形成されてしまう。

「原型」空間を把握し、そこにスプロール現象が重なった「現在型」空間の可能性を記述すること。それにより、戦後から現在にかけて開発された、場所生が欠落した均質な住宅地空間、それらを反省に開発された共有空間導入の住宅地空間の整備手法を打開する見地を示したい。さらには、既存の空間的特質を継承しつつ、新しさと豊かさを備えた空間の整備手法への手掛りも導きだしたいと考えている。

既往の研究

スプロール現象に関する研究

スプロール地区を対象とした研究の多くは、都市問題の原因となった戦後高度経済成長期以降のスプロール現象を否定する立場に立ち、今後も進展する恐れのあるスプロール現象の予測手法の確立や抑止のための知見としてまとめられたものである。室町泰徳氏による人口減少期の都市スプロールに関する基礎的研究（2003年）では、人口減少期に起こる都市スプロールの要因を推測するため、近年のスプロール地区を対象に人口密度変化の全国的な傾向の把握を行い、人口密度変化と高齢者の割合、一戸建ての割合、大都市圏内の立地などとの関係を1990年と2000年のメッシュデータを用いて経年分析を行っている。また、森田秀幸氏による都市計画の線引き廃止による影響と課題の研究（2013年）では、中小都市において線引き制度の選択化への改正が無秩序な開発の抑止における影響と課題を提言している。

本研究では、農村風景の素地にスプロール現象が重なった薊野を対象として生活環境や住宅地空間としての魅力に対してスプロール現象も大きな要因であることを示している。合理的で均質な住宅地開発や生活環境向上のために計画された共有空間を導入した住宅地開発には空間の質に限界を感じる。それは、人間が発想できる都市計画の限界である。しかし、スプロール現象により形成される空間は、無秩序・無計画であるからこそ、予期しない空間が生み出され、それは時として魅力的な空間を形成する。そのため、住宅地開発の現状を打開する整備手法の知見として、空間性の観点から一度スプロール現象を肯定する立場に立ち研究することは意義がある。

高知市薊野に関する研究

薊野を対象とした研究では、豊島盛氏（2012年）による都市のカタチを読み取りつくる建築のカタチ（2012年）では、薊野の西町を対象に、町中に存在する魅力的で特異的な空間を「場のカタチ」と定義し、その「場のカタチ」を空間構成として抽出し、得た空間のモデルを建築空間へ取り入れた設計提案を行なっている。

本稿では、対象地区を5大字（東町、西町、南町、北町、中町）とし、それぞれの字ごとで原型空間の特質とスプロール現象の浸食形態や速度から空間の特質を明らかにし、住宅地空間の魅力を示している。

研究の構成

序章では、研究の背景、目的、構成、既往の研究、語句の定義について記す。

第1章では、まず、戦後の人口の増加と高度経済成長による都市の急速な発展により、市街地が拡大していった現状とその中で、計画された戸建て住宅地開発の変遷を記す。また、市街拡大の煽りを受ける中で発生したスプロール現象の問題とその実態を記す。

第2章では、薊野の概要と現況を記す。概要では高知市薊野の歴史を含め記述し、現況では、用途地域、土地利用現況、階数別建物利用現況、構造別建物利用現況、空き家現況の4つ項目で調査結果を記述している。

第3章では、高知市から薊野全域、各大字へとスケールを変えながら、1907年とスプロール現象が起きる以前の1947年から、2015年までの空間の変遷を記述している。高知市の空間変遷では、高知城を中心とする市街地が拡大していく過程と、市街拡大による薊野への影響を示している。また、薊野全域や、各大字では、街路の変遷と土地利用の変遷の2つの観点の空間変遷を記述している。

第4章では、薊野の「原型」空間の特質を分析と「現在型」空間における街路体系、街区形状の分析、住宅・全空地・街路の構成から、それぞれ「原型」空間、スプロール現象、「原型」空間とスプロール現象の重なる空間で、類型化を行い、その分布を調査している。また、「住まいのまちなみを創る」という書籍から地域コミュニティを図る豊かなまちなみを実現するため、共有空間の導入、環境共生をテーマとする多くの戸建て住宅地と薊野の町との相関性による考察を行っている。

第5章では、高知市における薊野、薊野全域、各大字とスケールを変えながら調査した空間変遷を統合し、そこから見られる空間的特質を考察している。また、現在の薊野を住宅・全空地・街路の構成による類型と、「原型」、「新設」、重なり空間要素の抽出、住宅地の工夫との相関性から薊野の「現在型」にみる空間的特質を考察している。さらに、これらの考察を統合し、「原型」空間とスプロール現象の重なりが導く空間的特質と、住宅地空間として魅力的であることを示している。

語句の定義

本稿では、薊野の「原型」をスプロール現象が起きる以前の1947年と設定し、その時代の空間を「原型」空間とする。そして、薊野の「現在型」を2015年の住宅地図を元に、現地調査などから建物の更新などを考慮した2017年の町と設定し、この空間を「現在型」空間と定義する。

また、ある領域内において街路、建築、空地の配列パターンによる類型化で抽出した型を空間要素と呼び、「原型」から残る街路、建築、田畑のみで構成されている領域を「原型」のみの空間要素、1947年以降に新設された街路、住宅、空地により構成される領域を「新設」のみの空間要素、「原型」の街路、住宅、田畑と「新設」の街路、住宅、空地が共存している領域を重なる空間要素と定義する。「原型」のみの空間要素と「新設」のみの空間要素、重なる空間要素を全てを統合したものを「現在型」の空間要素とする。

さらに、空き地を、住宅の建て替え後などに舗装されずにある1敷地を示し、全空地を、ボイド空間となる田畑、駐車場、空き地を総じて示したもの、空地は、全空地から田畑を除いた敷地を示すものとする。

第1章 市街拡大とスプロール現象

1-1. 日本における戦後の市街拡大

ここでは、第2次世界大戦敗戦により、甚大な被害を受け、潰滅状態となった日本の都市が、戦後における都市計画と時代背景とともに、高度経済成長期以降の市街拡大に至った経緯を記述する。

1-1-1. 戦後復興期の都市計画

第2次世界大戦に敗戦した日本は、比較的被害が大きい都市として115もの都市が戦災都市に指定され、特に東京、横浜、名古屋、大阪、神戸の大都市と原爆被害を受けた広島、長崎においては甚大な被害であった。戦後直後は多くの戦災都市が、一面焼け野原となり、戦時中に設けられた防空壕に屋根をかぶせた仮屋で都市居住者は生活を行っていた。そうした中で、一刻も早く都市の再建を図るべく、1945年12月30日に政府は、「戦災地復興計画基本方針」を閣議決定し、基本目標として「過大都市の抑制並びに地方中小都市の復興」を掲げ復興計画は急速に進められた。戦災地復興計画基本方針では、土地利用計画、街路、公園などの主要施設、建築規制などについて基本的な方針を示しており、それぞれについて計画標準をつぎつぎに決めていった。その内容は、当時として非常に高い理想を追求していたものであった。

多くの地方都市では順調に進められていた戦災復興事業も、戦災の被害が甚大であった大都市では全般的に遅れをとっており、特に東京は甚だしいものであった。また、1949年頃になるとインフレは急速に進み、国家財政は大赤字となり日本経済は破局的な状況に陥った。そのため、戦災復興都市計画は再検討され、着工していない事業に関しては打ち切りとなった。結果として区画整理の東京を除く全国の事業化率は61.2%であったが、東京に至っては、当初の計画の6.9%の施工を行い中断された。^[1-1]

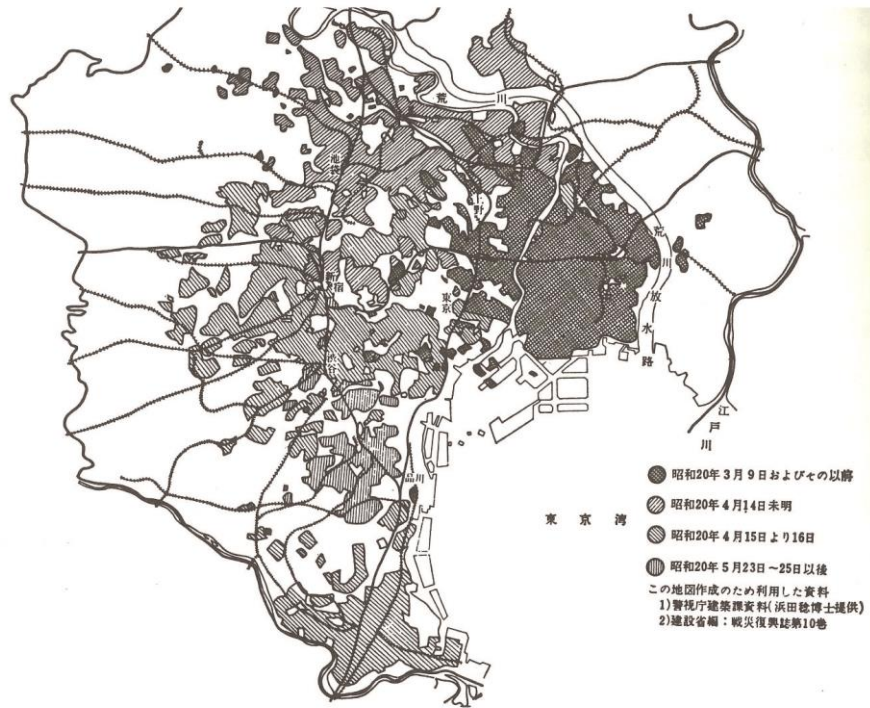


図 1.1.1.1 東京区分の空襲による被害地域

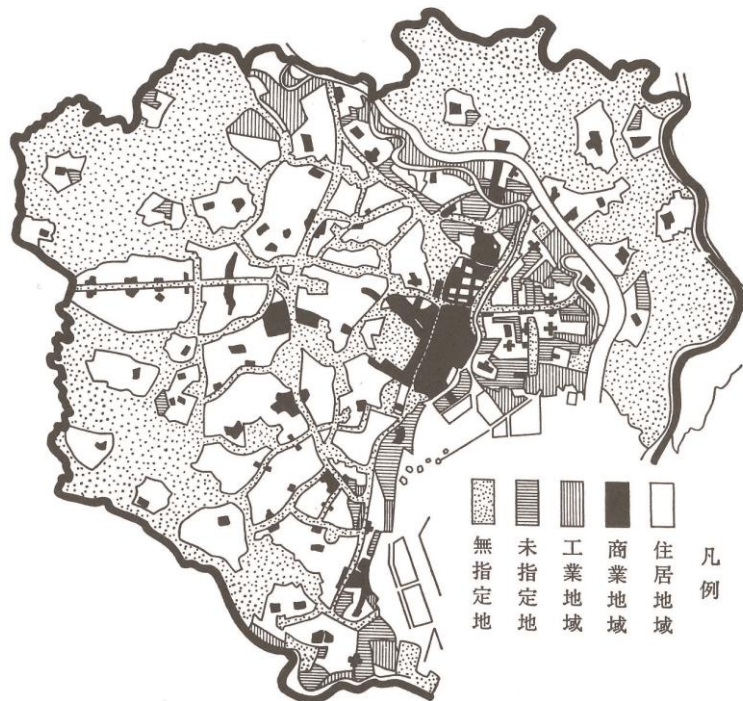


図 1.1.1.2 東京戦災復興計画の土地利用計画（1946年）



図 1.1.1.3 東京戦災復興計画の幹線道路計画（1946年）

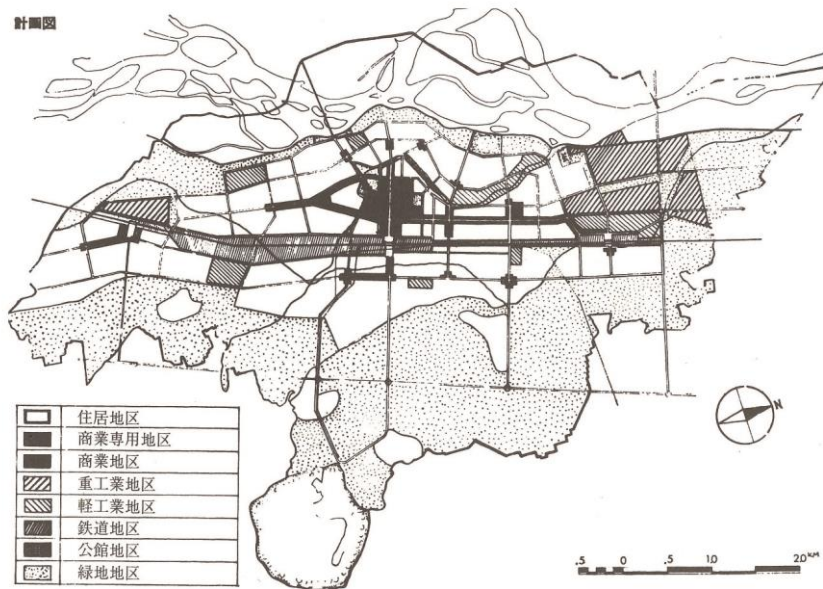


図 1.1.1.4 東京都長岡市戦災復興プラン（1946年）

1-1-2. 都市計画の基本法の不成立

明治以降、都市計画は国の公的機関が行っていたが、戦後の動きとして、都市計画を地方自治体が行うよう都市計画法の改正を求める動きが見られた。1949年8月にシャープ勧告が出され、シャープ勧告に基づき、同年12月に設けられた地方行政調査委員会議の中で、都市計画および都市計画事業は、市町村の事務であるとし、市町村が自主的に決定、執行するという勧告が出された。建設省は、この勧告を一度は受け止める形で、都市計画法改正の検討を進めていたが、結局のところは改正されず流産してしまった。また、1950年に交付された建築基準法は、戦災状況に対応すべく都市計画の制度では不十分であった市街地建築物法に代わり制定された法である。建築基準法の制定の準備として、1946年ごろから進められていた建築法草案では、市街地における用途地域の細分化と建築制限の強化、建築の禁止区域や最小限宅地区域の規定など、実に積極的な内容であった。しかし、これらの積極的な法案は建築基準法に反映されず、若干の規制力が高くなったものの、新しさはほとんど見られなかった。建築法草案の内容がほとんど反映されなかった要因としては、建築基準法成立後に予定されていた都市計画法の全面的改正に合わせて建築基準法の集団規定部分も全面的に改正する計画であったため、都市計画法が改正されることで、建築法草案が実現し得る基盤が形成されるはずであった。結果的に都市計画法が流産してしまったことで、未完の建築基準法を完成させる機会を失わせることになった。そのため、日本の都市計画はしっかりとした都市計画の基本法を欠いたまま進められていった。都市計画いかなる理由で改正されなかったのか明確なことはわかっていないが、都市計画法の基本法が確立し得なかったことが、その後の高度経済成長期の市街拡大とそれに伴う都市問題を防げなくなった要因の一つであったとされている。^[1・1]

1-1-3. 高度経済成長と市街拡大

戦後の日本の工業生産は潰滅状態であったのだが、1950年に起きた朝鮮戦争をきっかけに、アメリカ式の大量生産技術を学ぶこととなった日本は、特需景気となり、鉱工業生産は急速に拡大していった。また、都市においてもビルブームが起きるなど民間建設活動も急速に活性化していった。その後も、1960年頃に入り、日本経済は急速に向上、日本は高度経済成長期に突入していく。そうした経済成長の中で、都市部は資本・生産の場としての開発が行われ、それに伴う急激な人口増加をもたらした。基本法の未完という状況下ではあったが、高度経済成長政策のための基盤づくりの地域開発や都市開発を進めるために、多様な都市開発事業制度が作られ、また地方自治体以外の多様な公的事業主体が作られた。これらの事業主体は、多くの技術者を集めて専門性と機動力をもって開発事業にあたること、民間資金を含めて様々な資金を都市開発に導入できる等の点で積極的な意義があるとされていた。その結果、大規模な都市開発や市街地改造事業などが可能となり、人口が集中した都市圏では、既成市街地に隣接する地域を巻き込みながら市街地を拡大していった。また、未完成のままであった基準法は、都市計画の決定権が未だに国がもっていたことで、住民はそれに従わざるを得なかったことや土地利用計画の制度の弱さ、用途地域が指定されていない都市が存在することとなり、計画的な開発を行うための基盤や規制もないまま、そうした公的な開発事業は地域性を考慮した計画ではなく、公的事業主体の企業的な性各に基づく事業の論理で都市開発が進められた。^[1-1]

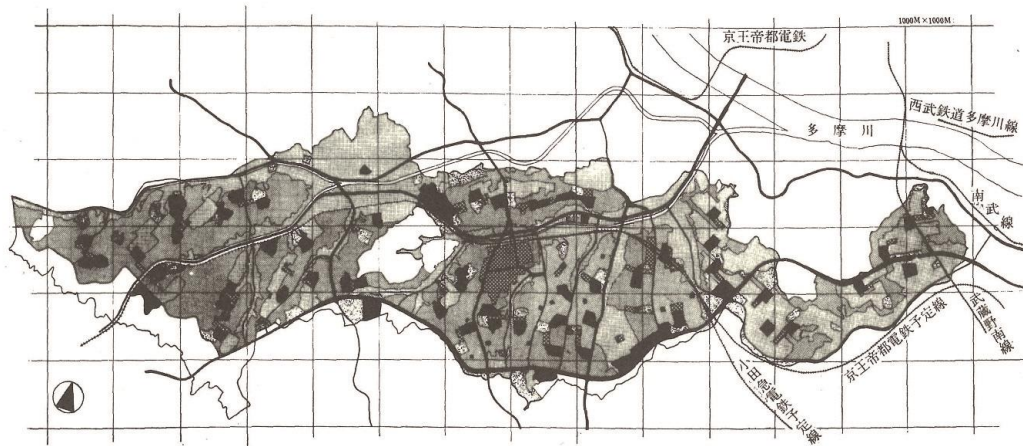


図 1.1.3.1 多摩ニュータウン計画 (1946年)

1-2. 日本における戸建て住宅地開発

ここでは、高度成長期以降に計画された戸建て住宅地開発の開発手法における3つ特徴的な手法を事例とともに見ていく。

1-2-1. 合理的な住宅地開発（1960年代～）

戦前、一部の富裕層のものであった郊外住宅地は、戦後の高度経済成長期に入ると、持家戸建て住宅の大量建設が進行し、戸建て住宅地は一般庶民の住まいとなった。この時期の開発手法の特徴としては、住宅用地の造成により計画された団地やニュータウンと呼ばれる大規模住宅地であり、それらの多くは、単に住宅を最も効率良く大量に配置するため、宅地は細分化され、小さな敷地や住宅が建ち並ぶ画一的な計画であった。また、住宅単位での手法として、区画を生垣や塀で囲い込むことにより、境界内の領域をすべて私有領域として閉鎖する構成手法が一般的に取り入れられていた。事例として、1964年～1969年に大手ハウスメーカーにより開発された団地をあげる。この団地は、奈良市郊外の元国有林であった場所を造成して生まれた郊外住宅地であり、203区画が売り建て（建築条件付宅地分譲）方式で分譲された。規則的なハモニカ型の区画割がなされた住宅群が、山の中に忽然と姿を現したかのような状況である。その造成計画には、曲線道路やクルドサックなどの街路に配慮した工夫は見られず、公園や集会場などのコミュニティを図ろうとする施設も計画されない、人が単に住む場所としての合理的な計画であることが伺える。また、居住開始後の住環境をコントロールするための規則の設定などを行っておらず、そのため、住宅の規模の小ささや外構のみすぼらしさを解消しようとして、居住者が住環境の改善を積極的かつ個別的行った。その結果、住環境は全体として秩序のない状態へと変化していった。こうした住宅地が都市部を中心に、幾つもの開発が行われていた。^[1-3]



图 1.2.1.1 奈良市郊外住宅团地航空写真



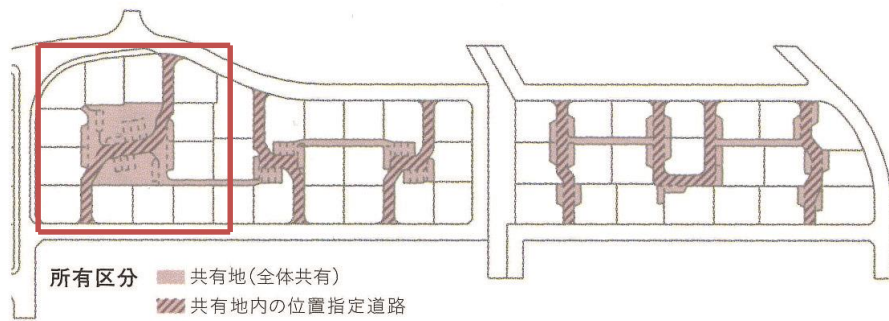
图 1.2.1.1 奈良市郊外住宅团地風景写真

1-2-2. 共有空間を導入した住宅地開発（1980年代～）

しかし、1980年代に入り、戸建て住宅地において「街並み」という視点から、その集住体としての住環境がクローズアップされ始める。この頃の住宅地開発の特徴として、高度経済成長期の開発が、個々の要求に応じた個性的な住宅の乱立によって形成された無秩序な集積であったため、打開する術として集合という概念の導入、つまりは、これまでの「住戸」という私的所有物と「道路」などの公共的な施設の2種に区分する開発ではなく、道路と宅地の境界付近に公的であり、私的であるような共有の空間が設定され、コミュニティを図る計画が行われる。^[1-3]公園や広場、街路など共有となる空間はそれぞれの住宅地により様々で、イートピア名取では、地区の内部にコミュニティを図る公園などを配置し、骨格の街路から細街路、そしてフットパスと三段階の段階的な街路構成により、中心に人の集まるような計画がなされている。街路を共有空間に設定しているものとして、高須ニュータウンでは、住宅間を走る街路をボンエルフ化することで、車のスピード抑制し、ボンエルフ化した街路の一部を拡幅することで、共有空間を設定している。高須ニュータウンは、日本で最初に共有空間を取り入れた住宅地開発で、街区内部には、60戸で共有される緑豊かな幾つもの共有空間が設けられており、コミュニティの活性化を図っている。また、ボンエルフの考え方をクラスター状に展開し、クルドサックを設け、そのクルドサックを必要面積よりも少し大きく取ることで、コミュニティ広場としての機能を設けた常総ニュータウンなどもある。^[1-2]



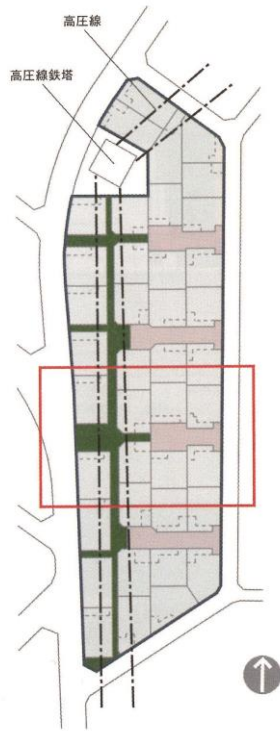
図 1.2.1.1 イトピア名取



計画のディテール

化粧舗装	庭・外構	専有・共有境界
アスファルト舗装	高木植栽	計画区域
植栽帯		縮尺 1:800

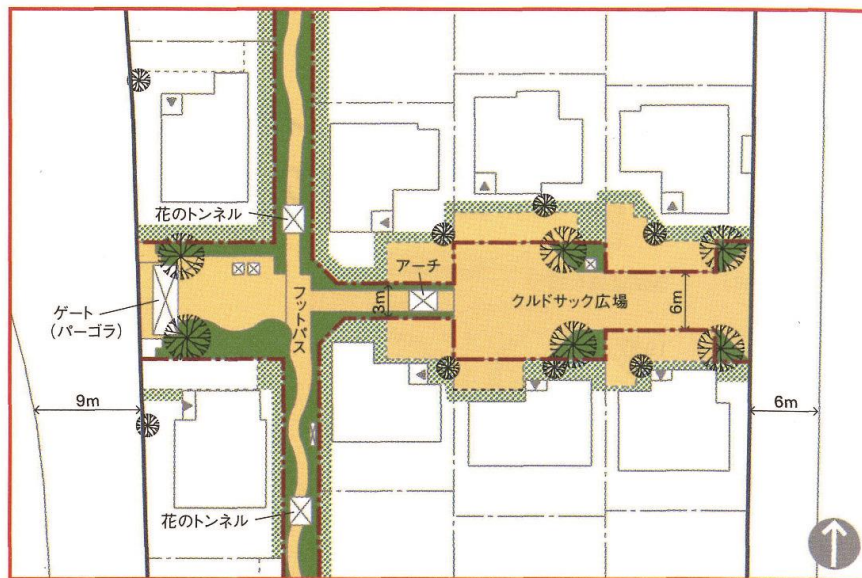
図 1.2.1.1 高須ニュータウン



街区図

- 道路
- フットパス
- 専有宅地
- 計画のディテール記載範囲
- 計画区域

縮尺 1:2500



計画のディテール

- 化粧舗装
- 植栽帯
- 庭・外構
- 高木植栽
- ファニチュア
- 官民境界
- 計画区域

縮尺 1:1000

図 1.2.1.1 常総ニュータウン

1-2-3. 欧米スタイルの住宅地開発（1980年代後期～）

住宅地開発に共有空間が導入され、全国的に普及し始めると次第に、単体の住宅は、デザインを競い合う「商品」としての性格を強めていく。この商品としての性格は、住宅地デザインにも影響を及ぼし、戸建て住宅地の街並みに特定のテーマを設定、そのテーマに基づいて外構と住宅ファサードがデザインされていく。そして、これらの住宅地にあてがわれるテーマの多くは、アメリカやヨーロッパの街並みであった。こうした欧米の街並みで見られる街区内の構成や住宅のファサードを摸して、それらを並べた住宅地には、「〇〇村□」と名付けられたものが多く、こうした呼び方をしているのは、団地やニュータウンなどとは隔絶した、独特の文化（テーマ）を持つ居住地だというイメージを持たせるためだと思われる。1989年に開発された神戸の西神シアトル・バンクーバーヴィレッジという戸建て住宅地では、アメリカからの輸入住宅（内外装を海外の住宅風に仕上げたり、設計に海外の思想を取り入れられている住宅）である「シアトル村」とカナダからの輸入住宅である「バンクーバー村」が隣り合って1つの住宅地を形成している。この戸建て住宅地開発が行われた後、この新たな街並みは、今までにない画期的なデザイン手法として人気商品となり、同様の街並みを持つ輸入住宅村が全国に広まっていく。

また、輸入住宅村とは異なる要因で欧米の住宅ファサードを導入した住宅地開発が存在する。バブル崩壊後、戸建て住宅地の都市回帰が強まり、従来中小企業が行っていた都市内部でのミニ戸建て開発に大手ディベロッパーが取り組まざるを得なくなってくる。そのため、中小企業の劣悪なミニ開発との違いを表現するために、欧米の住宅地に見られる塔や円形の外壁などの様々なデザインによるファサードを並べて、街並みの形成を行い、高級感溢れる別世界のような住宅地を生み出すことが図られている。^[1-3]

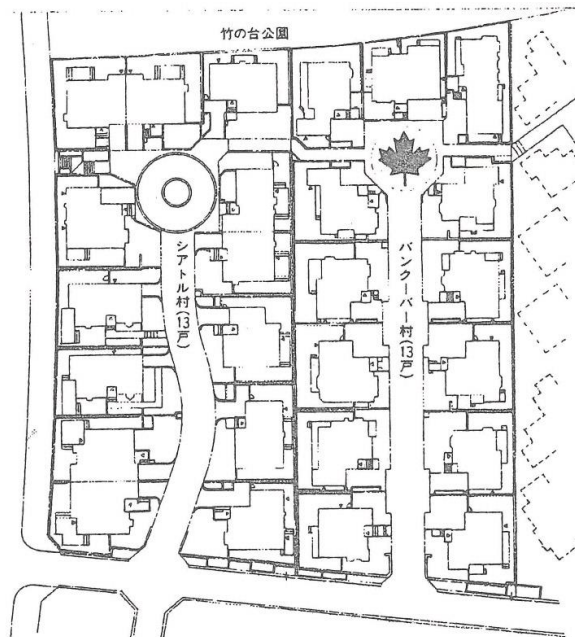


図 1.2.1.1 西神 SV ヴィレッジ配置図



図 1.2.1.1 バンクーバー村の住宅のデザイン



図 1.2.1.1 デザイン過剰なファサード



図 1.2.1.1 街並みがデザインされたミニ開発

1-3. スプロール現象と、その諸相

高度経済成長期ここでは、戦後高度経済成長期の都市拡大に伴い郊外地にまで広がる都市化の波と、その結果引き起こされる不秩序な宅地計画の実態を記述する。

1-3-1. スプロール現象

高度経済成長期に都市圏では、多種にわたる工業生産の場としての発展と人口増加に伴い、経済成長を進める基盤としての地域開発、都市計画が行なわれた。多様にわたる公的事業主体の参入により、都市圏において市街を拡大しながら、都市開発技術は著しく進歩を遂げ、水準の高い都市空間の創出が行われていった。しかし、そうしためざましい都市開発の影には、いくつかの都市問題を作り出し、その1つとしてスプロール現象が挙げられる。^[1-1]スプロール現象とは、急速な都市化とともに拡大する都市地域において土地利用の転換が無秩序、無計画に行われ、虫食い状に混在する開発のことである。都市への人口や資本・生産の場が進行し、徐々に過密化してくると、都市周辺において急激に進む団地・住宅の乱立、工場・住宅の混合やサービス施設の進出などように、それらは都市周辺（近郊農村）への分散するかたちで促進される。こうした土地利用の転換に対する統制や規則は後手に回ることが多く、したがって、道路や交通機関などの生活基盤とか、公的施設を含む生活環境とかの整備は遅れることにもなりやすい。また、地震や水害などの自然災害に対処する対策も後回しにされることが多い。こうした問題を抱えるスプロール現象は、特に東京、大阪、名古屋の三代都市圏で、著しく広がっており、家屋や工場が立ち並んでから、道路や下水道、その他の都市施設の整備が後追いの形で行われている。^[1-4]

一方で、スプロール化した住宅地は、計画性に乏しいが故に土地区画、住宅の種類や形態、住宅の供給年代の多様性をもたらしている。このため、住民の年齢構成の偏りや多様な所得階層の存在という特徴も備えており、そのため計画的に形成されたニュータウンで指摘されるような人口現象や急速な若年層の現象、高齢化といった諸問題を緩和させているという側面も持っている。

1-3-2. スプロール現象の実態

戦後の復興時に都市計画法の基本法が確立しなかったことが、資本・生産や人口の集中に伴う市街拡大と、そうした都市化が進むことで生み出されたスプロール現象を有効にコントロールする土地利用計画を制度化することできず、必要以上に広汎な地域で都市近郊農業が影響を受け、大量の用地が潰されていった。1960年から10年もの間で、全国では、全耕地面積の4.2%にあたる26.0万haの耕地が減少し、特に都市化の激しい南関東では18.3%にあたる5.3万haの耕地が、農地造成と市街造成の差として減少している。

スプロールが問題視され、解消する手段を都市計画に取り入れ始めたのは高度経済成長期である。この時期は、行政区域をこえた市街化・工業立地により、一体的な経済圏・都市圏として発展しつつある三大都市圏においてさらなる開発や整備を進めるための計画が行われていた。計画として、既成市街地を中心に置き、既成市街地を取り巻く近郊地帯とその外側に市街地開発区域の3層構成となる地域区分を行った。既成市街地に対しては、人口増加の抑制や産業等の抑制を行い、人口密度、土地利用形態の適正化を図る。近郊地帯において、市街地の無秩序な発展、膨張を防ぐための地域とし、土地利用の規制と緑地の保全を計画的に行う地域であるとした。また、最外周を取り巻く市街地開発区域では、既成市街地への人口や産業の集中を緩和するために設置され、工業団地を造成し、衛星都市として人口と産業を定着させる計画であった。しかし、これらの計画には初めから問題点を抱えており、東京の場合では、そもそも中枢管理機能が集積するにより、人口や産業が増加していたため、市街地開発区域に、単に工業生産の場や大学を分散させたところで改善されず、市街地開発区域を設置することは、かえって大都市圏へと中枢管理機能の集積や過密化を促進させた。また、近郊地帯では、地元市町村の反対により土地利用規制は設定されず、市街化抑制のための土地利用計画制度が未確立となってしまった結果、1955年から65年にかけて、203万人もの人口増加に襲われ、劣悪なスプロール地域が広範囲に形成されてしまった。

このように市街が膨張的に拡大していく中で、戦後からこれまで議論にあがっていた都市計画の民主化とスプロール現象の無秩序な市街拡大を抑制する趣旨で、1968年には、新都市計画法制定と1970年には建築基準法の集団規定の全面的改正が行われた。スプロールの抑制に対する内容として、都市計画区域を市街化区域と市街化調整区域の2区分に分け、これまで、必要性を強調されながら制度化できなかった市街化を抑制する地域を市街化調整区域と定め制度を与えること、また、用途地域の細分化と容積率制の全面的適用を行い、市街地の土地利用の純化、建築密度のコントロールをより具体的かつ詳細的に行うことを意図していた。新都市計画法は、1967年に行われた宅地審議会第6次答申を基礎としており、多くの制度に反映されていたが、その反映方法があまりにも杜撰なものであった。^[1]市街化区域内においては、0.1ha以上の開発には開発許可を必要とし、一定の水準を要求されたため、ミニ開発が増大したこ

とと、6次答申では既成市街地のみであった、建築基準法の要件を満たしていれば個別建築行為が容認される規制を、新しく計画的に形成されるべき市街化地域も含めてしまったことで、市街化区域内にスプロール現象を引き起こしてしまった。また、6次答申では、市街化を図る地域に適応していた規制内容を例外的開発（一定以上の規模以上の計画的開発、農家の次男・三男の住宅、生活必需品店舗など）として市街化調整区域へ適応したことで、市街化調整区域内に開発行為・建築行為が行われ、「滲み出し」的开发が進んでいった。[1-5]

また、新都市計画法の制定は、都市計画の民主化を図ったことで、都市計画決定権限の地方自治体への移譲と住民を否応なしに関与させるように進められていた。実態としては、地域により大きな差が生まれ、住民の参加が全くない地域もあれば、住民が積極的に参加し計画案にしっかりと意見を組み込む地域も存在していた。しかし、次第に広がりを持ち始める都市問題や地域開発をめぐる住民運動が、まちづくり計画に関わっていくようになり、いくつかの市町村では、地域の整備に独自の発想を取り組む姿勢が見られてくる。その姿勢は、スプロール、ミニ開発問題に対しても見られ、新都市計画法の不備を補うための様々な工夫が地方自治体により行われ、札幌市の詳細な都市計画決定による「住区整備計画」や茨城県勝田市・神奈川県城山町などのガイドラインプランによる開発指導、横浜市による建築協定の促進など、多くの型の多くの事例が計画されている。[1-1]

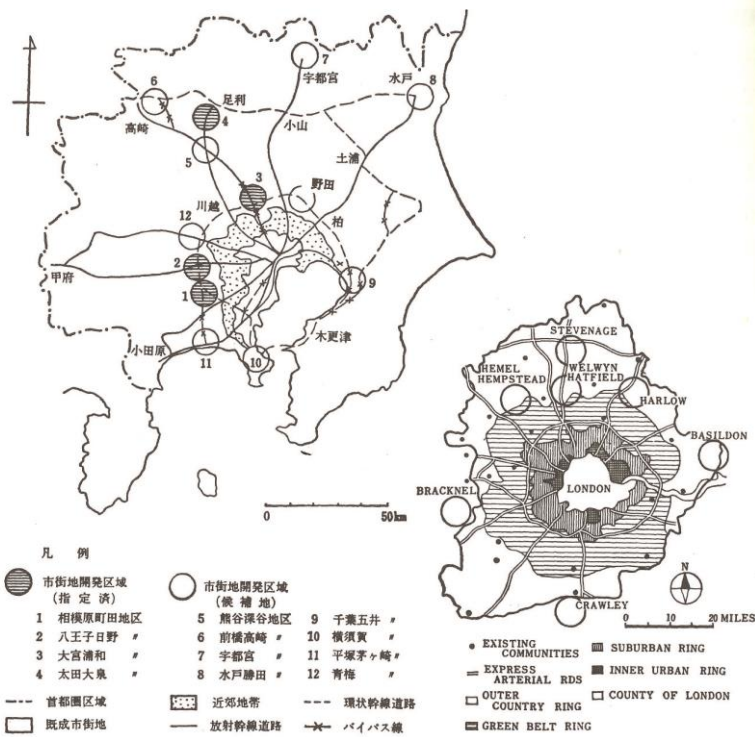


図 1.1.3.1 第 1 次首都圏整備基本計画（1956 年）とロンドン計画（1944 年）

表 1.1.3.1 宅地審議会第 6 次答申と 1968 年法の比較

宅地審議会第六次答申1967年		地域の概念		1968年都市計画法	
地域名	規制内容			区域名	規制内容
既成市街地	個別開発行為も認める	連坦市街地 これと接続し現に市街化しつつあり10年以内に同様になる見込み		市街化区域	個別建築行為も認める
市街化地域	計画的かつ一定規模以上の開発行為のみ認める	将来一定期間に市街化の可能性あり	優先的かつ積極的に市街化をはかるべき地域		
市街化調整地域	当面原則的に開発禁止	あり	当面市街化をおさえるべき地域	市街化調整区域	計画的な一定規模以上の開発・例外的開発行為は認めることがある
保存地域	開発禁止、土地売買制限	種々の条件から市街化をさせるべきでない地域			

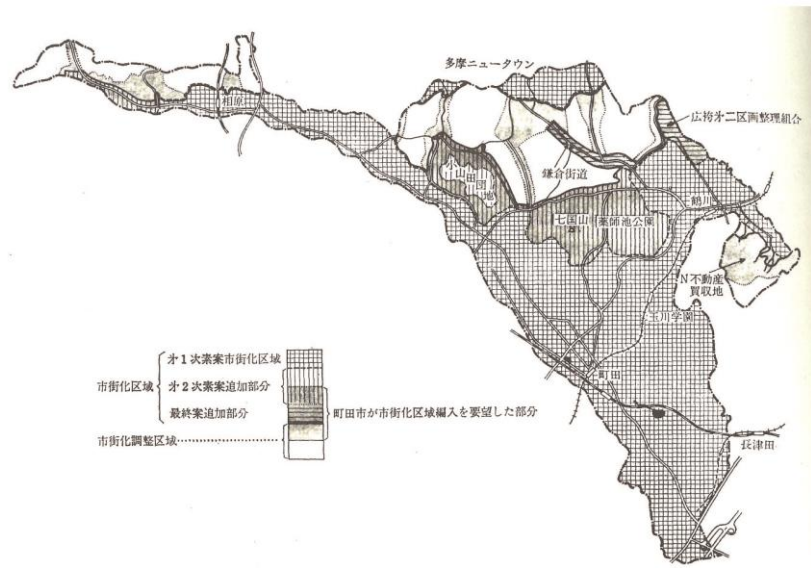


図 1.1.3.2 東洋と町田市における区域区分の線引き (1970年)

第2章 薊野の概要

2-1. 薊野の概要

2-1-1. 概要

高知県高知市に属する薊野は、高知城から北東に数キロ離れた場所に位置する郊外住宅地である。薊野と呼ばれる地区は、南側を流れる久万川と北側に連なる山脈に挟まれた平野部で、東町、西町、南町、北町、中町の5つの大字と北町のさらに北奥に集落を構える薊野奥から形成されている。高知市に非常に近い立地により、薊野を分断するかのように、県道249号線や県道44号線などの高知市中心市街地を結ぶ主要な道路が敷かれ、その道沿いには、幾つもの創業施設が建ち並ぶ。一方で、一歩住宅地内に足を踏み入れれば、新築のモダンな住宅やアパートと木造の古い屋敷や田畑が入り混じる住宅街が内包されている。また、寛永17年に高知城の鬼門鎮護として、2代藩主忠義により中町の陽貴山に掛川神社が造営されていたり、北町や東町の山麓には、絵金や人斬り似蔵、板垣退助などといった著名な人のお墓が立てられており、都市としての重要な機能も担っている。



図 2.1.1.1 高知市薊野の位置

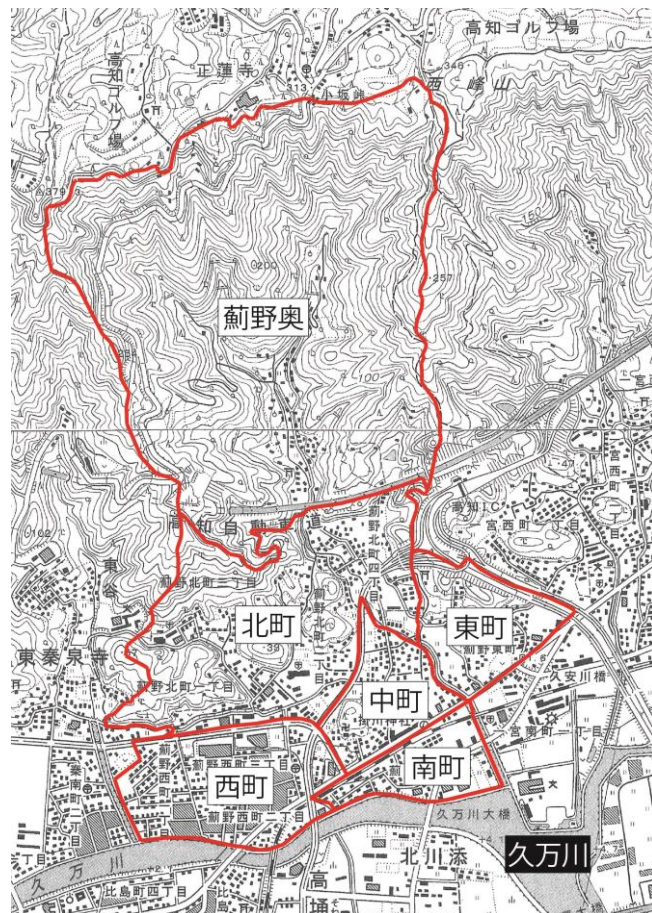


図 2.1.1.2 薊野の5大字と薊野奥



図 2.1.1.3 掛川神社



図 2.1.1.4 板垣退助のお墓

2-1-2. 歴史

長宗我部地検帳により、以前から集落を構えていた部落の村名が薊野村であることが記されている。遠い昔、現在の岩屋集落から南は海であったが次第に陸地化されていく。薊野の土地が具体的示されている最古（1588年）の書物である長宗我部地検帳に、海の中の小島であった陽貴山は陸地の小山となり、陽貴山より北側は新たに田畑が開拓され岩屋まで広がる田園風景を見せていた。また、陽貴山を挟むようにして東西には塩田が広がり、南側は陸地化した後は手入れされず砂地であったと記されている。当時の薊野村の土地面積は約350㎏で、そのうち田畑は約306㎏の面積を占めていた。屋敷の数は、48件ほどあり、そのうちの32件は居屋敷で、そのほとんどが長宗我部家臣の給地であった。

藩政時代になると新田開発が急速に進み、本田より多くの新田が開拓された。その大部分は、陽貴山よりも南側の砂地を開拓し、田畑面積を拡大していった。また、この時代、江戸幕府は各藩の大名を定期的に江戸へ出仕させる参観交代の制度を定めていた。これにより、土佐藩の大名は高知城から江戸へと出仕する道として、3通りの道が使用され、その一つが薊野村を通るルートであった。さらに、城下町などに住む庶民が隣国へと遠出する際、参観交代の道とは別の本山道を利用しており、その道も薊野村を通過していた。このため、人の往来は多く、商人などが店を構えていたことでかなりの賑わいを見せていた。

明治時代では、県令として高知に着任した田辺良顯が県民の福利増進や産業の復興をはかることは、今後の高知を発展させていく上で重要性であると考え、その基盤となる道路や港湾の開設整備に奮起する。県民などから多くの反対を受けながらも、約10年の歳月を費やし、国道32号線、国道33号線の整備を行った。国道32号線に関しては、布師田の村民に反対され、大きく計画は変更されたが、薊野地区では参観交代の道に沿って計画されている。

この働きにより、高知では一気に産業が拡大していく。大正2年には高知-琴平間に自動車の営業運転が始まり、昭和にかけて自動車交通は盛んになり始めた。鉄道の開通も早くから要望があり、民間企業も設立され鉄道が計画され、須崎から始まった土讃線の建設は、約10数年かけてようやく全通した。昭和27年には薊野駅も設置され、鉄道利用はさらに便利なものとなっていく。^[2-1]



図 2.1.2.1 海であった頃の薊野

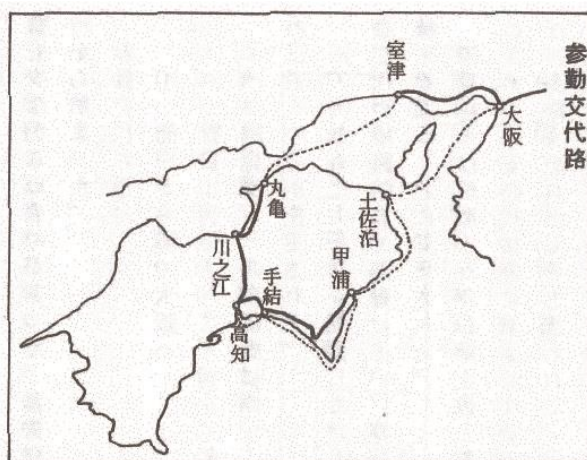


図 2.1.2.2 参勤交代で使用された経路



図 2.1.2.3 庶民の経路 (中ノ川越え)

え)

2-2. 薊野の現況

「原型」空間とスプロール現象の重なる空間の分析・考察を行うことが研究の主題であるため、スプロール現象の影響がほぼ見られない薊野奥を除外した5つの大字を対象地区とする。また、北町では、山を切り開き宅地化するような「原型」空間を持たない領域を省くため、以降の「北町」は、2丁目と4丁目の範囲とする

対象地区の土地や建物の調査では、5つの大字毎で、住宅地図をベースに、現地にて目視で現況判定を行った。また、領域の面積把握では Illustrator の「はかりや」というソフトを用いて計測している。

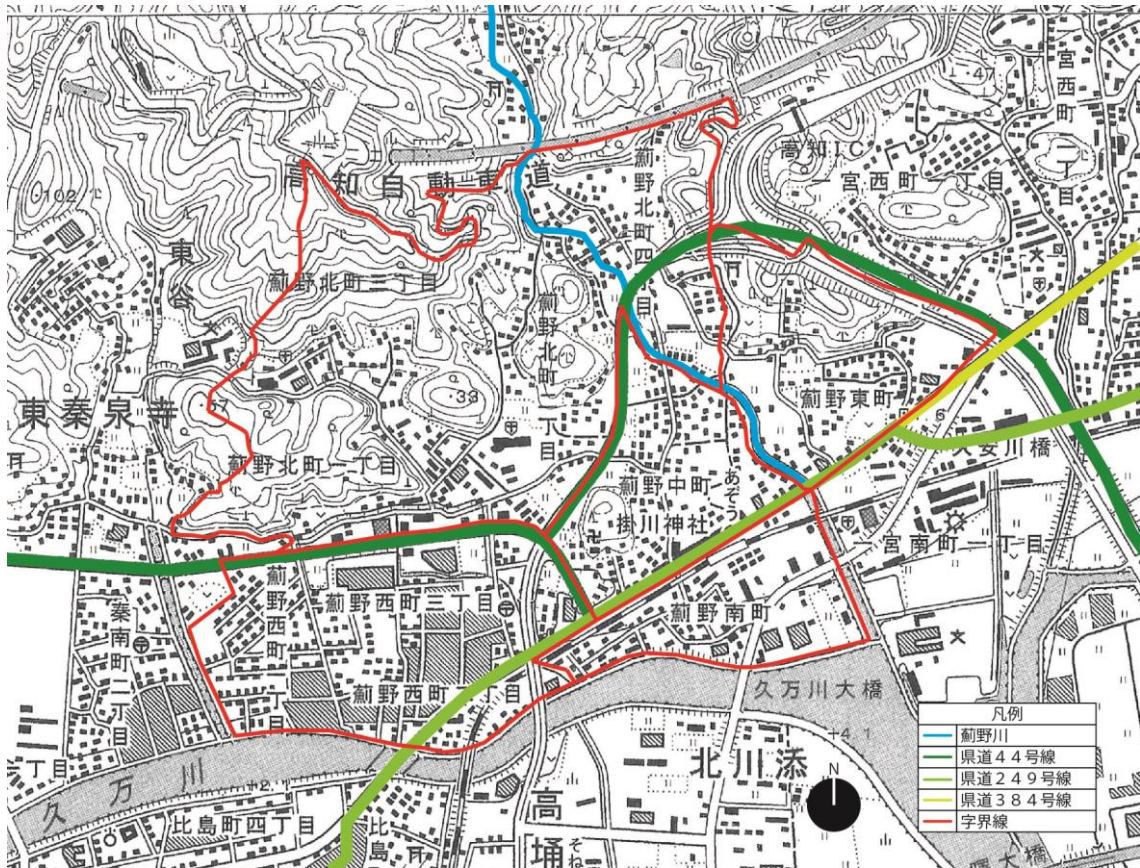


図 2.2.1 薊野の概要図

以下は、用途地域を示した図である。薊野は、第1種中高層住居専用地域、第2種住居地域、準工業地域、近隣商業地域の4つの地域に含まれている。5つある大字の境界を示す字界には、2本の県道が通っていることもあり、西町と北町を分ける県道44号線近辺では、近隣商業地域に指定され、中町と北町、西町を分ける県道249号線近辺では、第2種住居地域に指定されているが、多くの面積を第1種中高層住居専用地域に指定され、住宅地としての用途制限が敷かれている。一方で、南町は東側の大半を準工業地域が占め、残りが第2種住居地域に指定され、住宅に限らず多種多様な建物が計画可能となっている。

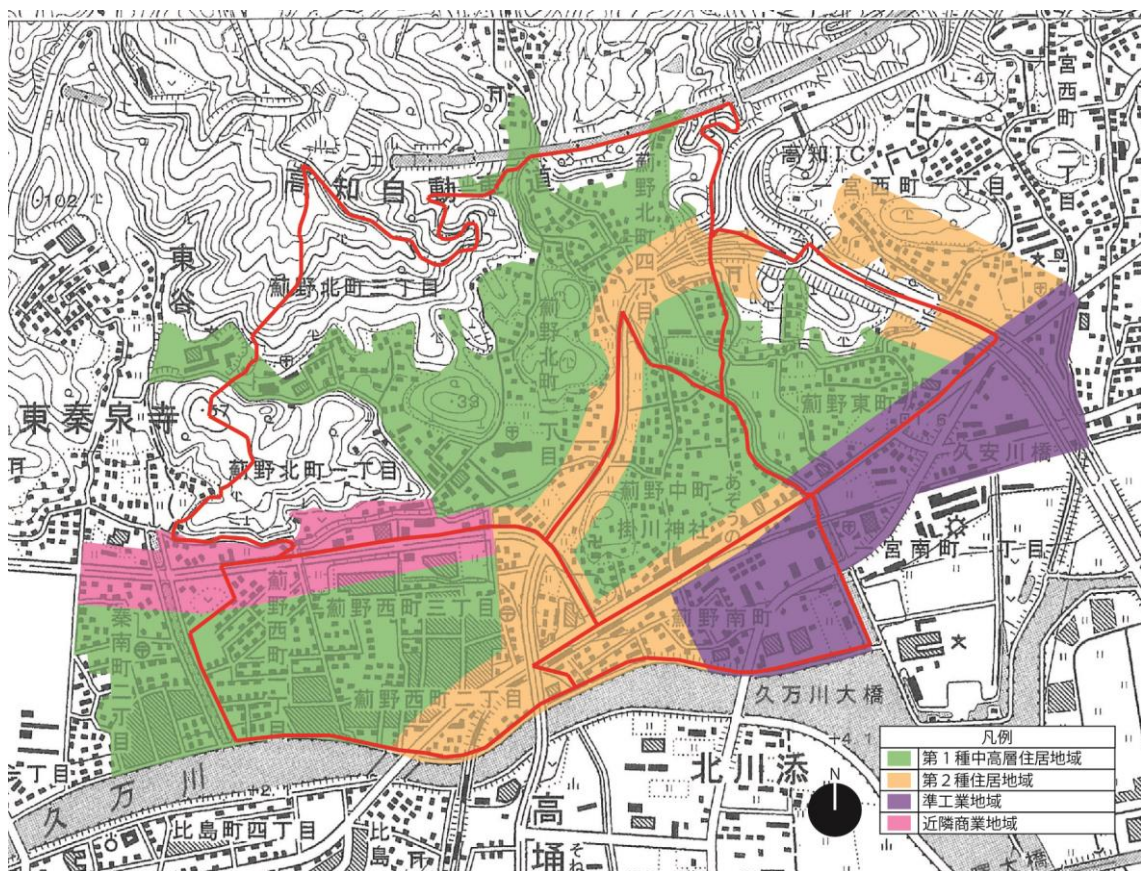


図 2.2.2 用途地域図

表 2.2.1 用途地域別建築物表

		第一種低層住居専用地域	第二種低層住居専用地域	第一種中高層住居専用地域	第二種中高層住居専用地域	第一種住居地域	第二種住居地域	準住居地域	近隣商業地域	商業地域	準工業地域	工業地域	工業専用地域	備考
住宅、共同住宅、寄宿舎、下宿		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
兼用住宅で、非住居部分の床面積が、50m ² 以下かつ建築物の延べ面積の2分の1未満のもの		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	非住居部分の用途制限あり
店舗等	店舗等の床面積が150m ² 以下のもの	×	①	②	③	○	○	○	○	○	○	○	④	① 日用品販売店舗、喫茶店、理髪店、及び建具屋等のサービス業用店舗のみ。2階以下 ② ①に加えて、物品販売店舗、飲食店、損保代理店・銀行の支店・宅地建物取引業者等のサービス業用店舗のみ。2階以下 ③ 2階以下 ④ 物品販売店舗、飲食店を除く
	店舗等の床面積が150m ² を超え、500m ² 以下のもの	×	×	②	③	○	○	○	○	○	○	○	④	
	店舗等の床面積が500m ² を超え、1500m ² 以下のもの	×	×	×	③	○	○	○	○	○	○	○	④	
	店舗等の床面積が1500m ² を超え、3000m ² 以下のもの	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	④	
	店舗等の床面積が3000m ² を超え、10000m ² 以下のもの	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	④	
事務所等	店舗等の床面積が10000m ² を超えるもの	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	④	
	事務所等の床面積が150m ² 以下のもの	×	×	×	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	
	事務所等の床面積が150m ² を超え、500m ² 以下のもの	×	×	×	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	
	事務所等の床面積が500m ² を超え、1500m ² 以下のもの	×	×	×	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	
事務所等	事務所等の床面積が1500m ² を超え、3000m ² 以下のもの	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	
	事務所等の床面積が3000m ² を超えるもの	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	
ホテル、旅館		×	×	×	×	▲	○	○	○	○	○	×	▲ 3000m ² 以下	
遊戯施設 風俗施設	ボーリング場、スケート場、水泳場、ゴルフ練習場、パッティング練習場等	×	×	×	×	▲	○	○	○	○	○	○	×	▲ 3000m ² 以下
	カラオケボックス	×	×	×	×	▲	▲	○	○	○	○	▲	×	▲ 10000m ² 以下
	マージャン屋、ぼちこ屋、射的場、勝馬投票券発売所、場外車券発売所、ゲームセンター	×	×	×	×	×	▲	▲	○	○	○	▲	×	▲ 10000m ² 以下
	劇場、映画館、演芸場、観覧場	×	×	×	×	×	×	▲	○	○	○	×	×	▲ 客席200m ² 以下
公共施設 病院 学校等	キャバレー、ダンスホール等、個室付浴場等	×	×	×	×	×	×	×	×	×	▲	×	×	▲ 個室付浴場等を除く
	幼稚園、小学校、中学校、高等学校	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	大学、高等専門学校、専修学校等	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	図書館等	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	巡査派出所、一定規模以下の郵便局等	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	神社、寺院、教会等	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	病院	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	公衆浴場、診療所、保育所等	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	老人ホーム、身体障害者福祉ホーム等	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
	老人福祉センター、児童厚生施設等	▲	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
工場 倉庫等	自動車教習所	×	×	×	×	▲	○	○	○	○	○	○	○	
	単独車庫(付属車庫を除く)	×	×	▲	▲	▲	○	○	○	○	○	○	○	
	建築物付属自動車車庫	①	①	②	②	③	③	○	○	○	○	○	○	
	①②③については、建築物の延べ面積の1/2以下かつ備考欄に記載の制限	※一団地認定については、別に制限あり												
	倉庫業を営む倉庫	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	
	畜舎(15m ² を超えるもの)	×	×	×	×	▲	○	○	○	○	○	○	○	
	車庫等で作業場の床面積が50m ² 以下	×	▲	▲	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	▲ 600m ² 以下
	危険性や環境を悪化させるおそれが少ない工場	×	×	×	×	①	①	②	②	○	○	○	○	▲ 3000m ² 以下
	危険性や環境を悪化させるおそれが多い工場	×	×	×	×	×	×	×	×	②	②	○	○	原動機の制限あり ▲ 2階以下
	危険性が大きい又は著しく環境を悪化させるおそれがある工場	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	原動機・作業内容の制限あり 作業場の床面積 ①50m ² 以下 ②150m ² 以下
自動車修理工場	自動車修理工場	×	×	×	×	①	①	②	②	③	③	○	○	作業場の床面積 ①50m ² 以下 ②150m ² 以下 ③300m ² 以下 原動機の制限あり
	火薬、石油類、ガスなどの危険物貯蔵、処理の量	量が非常に少ない施設	×	×	×	①	②	○	○	○	○	○	○	①1,500m ² 以下 2階以下 ②3,000m ² 以下
		量が少ない施設	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	
		量がやや多い施設	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	
量が多い施設	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○		
卸売市場、火葬場、と畜場、汚物処理場、ごみ焼却場等		都市計画区域内においては都市計画決定が必要												

2-2-1. 土地利用現況

薊野東町

東町における土地利用現況は以下の通りである。東町では、住宅用地の面積が20,418㎡で全体の35%と最も広い面積を占め、ついで、山林・荒地等が10,772㎡で全体の18.9%の面積を占めている。北側に大部分が山林地となり、南側に住宅用地が広がっている。また、田畑が全体の9.7%、交通施設用地が全体の11.2%となっており、ボイド空間となってる面積も広く、町自体がゆとりある空間となっている。

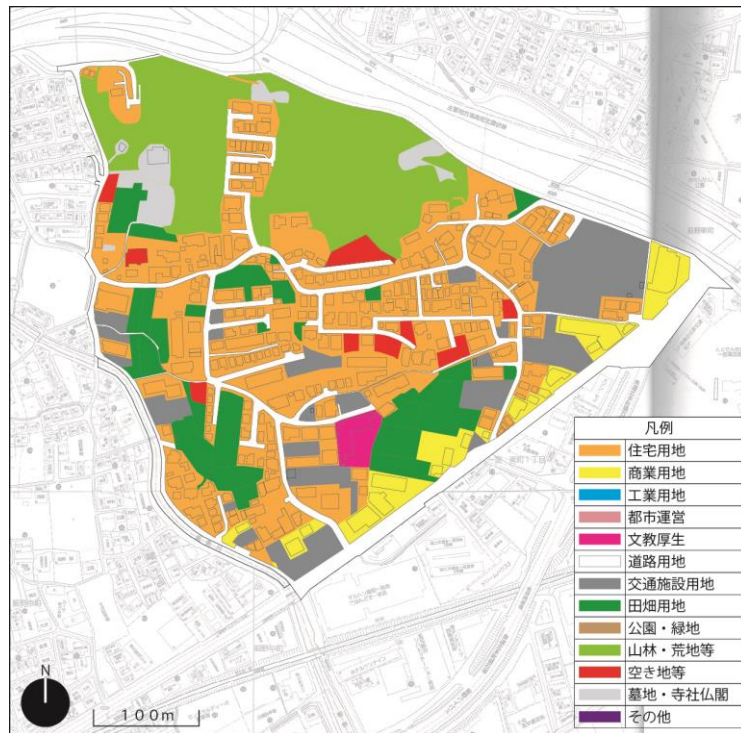


図 2.2.1.1 東町の土地利用現況図

表2.2.1.1 東町の土地利用現況

項目	面積(㎡)	割合(%)
住宅用地	20,418	35.8
商業用地	3,540	6.2
工業用地	0	0.0
都市運営	0	0.0
文教厚生	602	1.1
道路用地	8,091	14.2
交通施設用地	6,415	11.2
田畑	5,560	9.7
公園・緑地	0	0.0
山林・荒地等	10,772	18.9
空き地等	645	1.1
墓地・寺社仏閣	1,045	1.8
その他	0	0.0
計	57,088	100.0

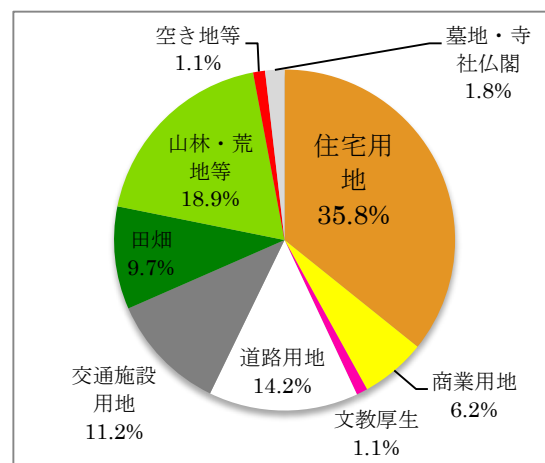


図 2.2.1.2 東町の土地利用現況グラフ

薊野西町

西町における土地利用現況は以下の通りである。西町は、住宅用地が56,273㎡で、全体の49.1%と最も広い面積を占めている。また、ついで、道路用地が33,636㎡で全体の29.4%と2番目に多くの面積を占めている。したがって、住宅用地と道路用地を合わせると、全体の約80%を占め住宅地としての特色が色濃く表れている。また、商業用地が全体の12.5%を占めているのは、西町の東側から北側にかけて敷かれている県道44号線が、その付近に規模の大きい商業施設を建てさせているためである。

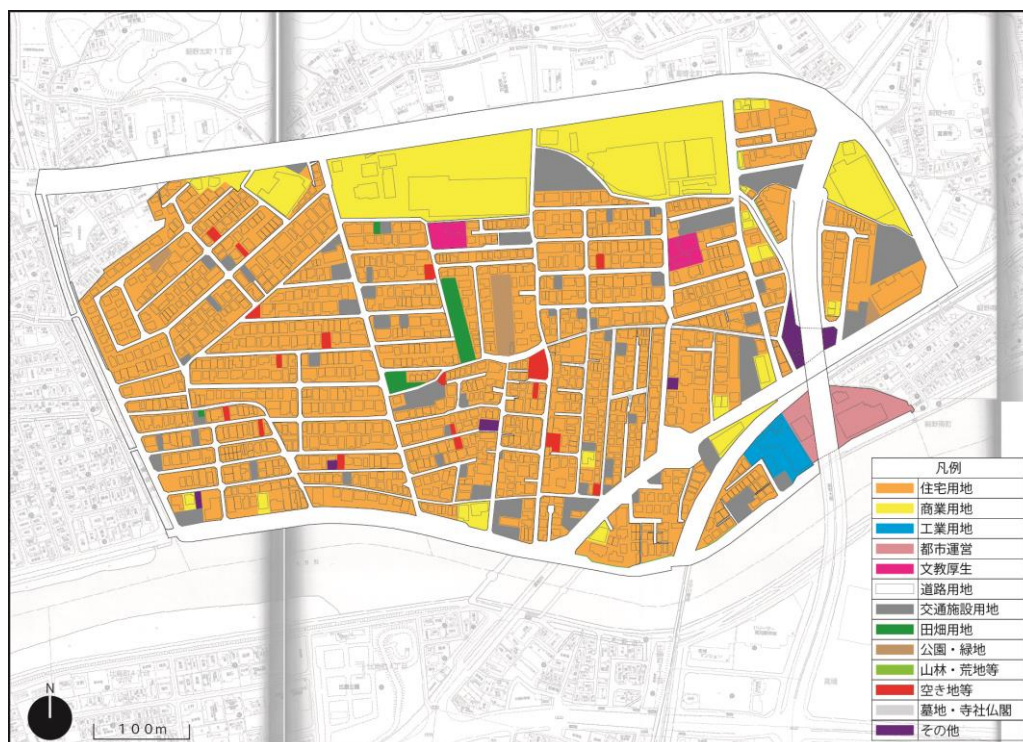


図 2.2.1.3 西町の土地利用現況図

表 2.2.1.2 西町の土地利用現況

項目	面積(㎡)	割合(%)
住宅用地	56,273	49.1%
商業用地	14,312	12.5%
工業用地	975	0.9%
都市運営	1,521	1.3%
文教厚生	729	0.6%
道路用地	33,636	29.4%
交通施設用地	6,327	5.5%
田畑	691	0.6%
公園・緑地	619	0.5%
山林・荒地等	0	0.0%
空き地等	820	0.7%
墓地・寺社仏閣	0	0.0%
その他	195,434	0.2%
計	114,579	100.0%

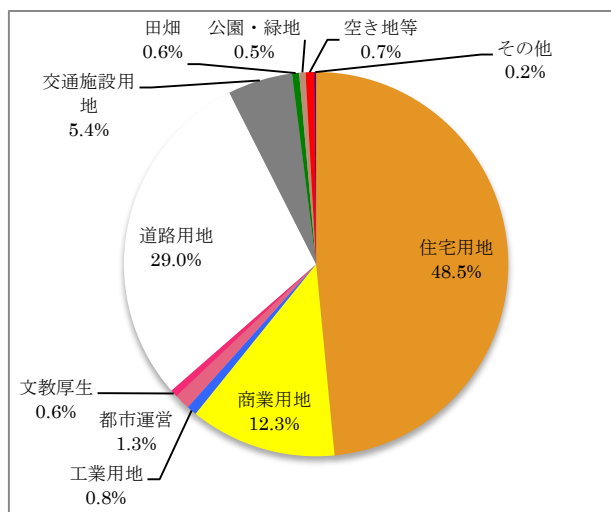


図 2.2.1.4 西町の土地利用現況グラフ

薊野南町

南町における土地利用現況は以下の通りである。南町では、道路用地の面積が13,412 km^2 で全体の26.4%と最も広い面積を占め、ついで、住宅用地が12,688 km^2 で全体の25%の面積を占めている。また、東側には工場や商業施設が立ち並んでいるため、工業用地、商業用地と交通施設用地を合わせると約30%を占めしめており、居住地と商業地がほぼ同じ面積を誇っている。その他は鉄道の線路の面積を示している。

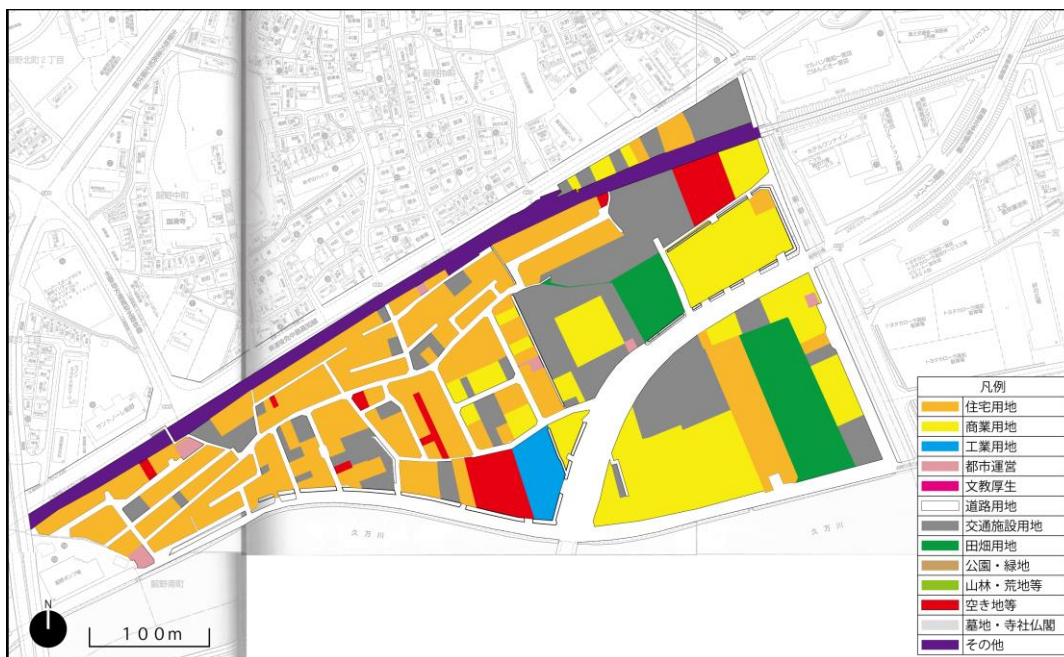


図 2.2.1.5 南町の土地利用現況図

表2.2.1.3 南町の土地利用現況

項目	面積(m^2)	割合(%)
住宅用地	12,688	25.0
商業用地	8,044	15.9
工業用地	734	1.4
都市運営	289	0.6
文教厚生	0	0.0
道路用地	13,412	26.4
交通施設用地	7,979	15.7
田畑	2,969	5.9
公園・緑地	0	0.0
山林・荒地等	0	0.0
空き地等	1,702	3.4
墓地・寺社仏閣	0	0.0
その他	2,899	5.7
計	50,716	100.0

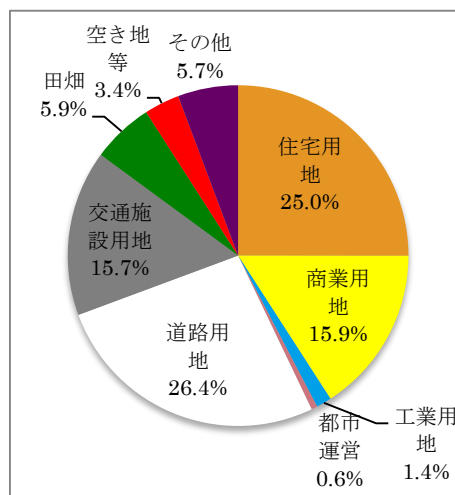


図 2.2.1.6 南町の土地利用現況グラフ

薊野北町

北町における土地利用現況は以下の通りである。北町では、住宅用地の面積が84,363㎡で全体の56.3%と最も広く全体の半分以上の面積を占め、ついで、山林・荒地等が26,415㎡で全体の17.6%の面積を占めている。北町には2箇所低山を有しており、山林地の面積が多くなる。また、県道が南側に敷かれていることもあり、病院や教育施設が存在している。

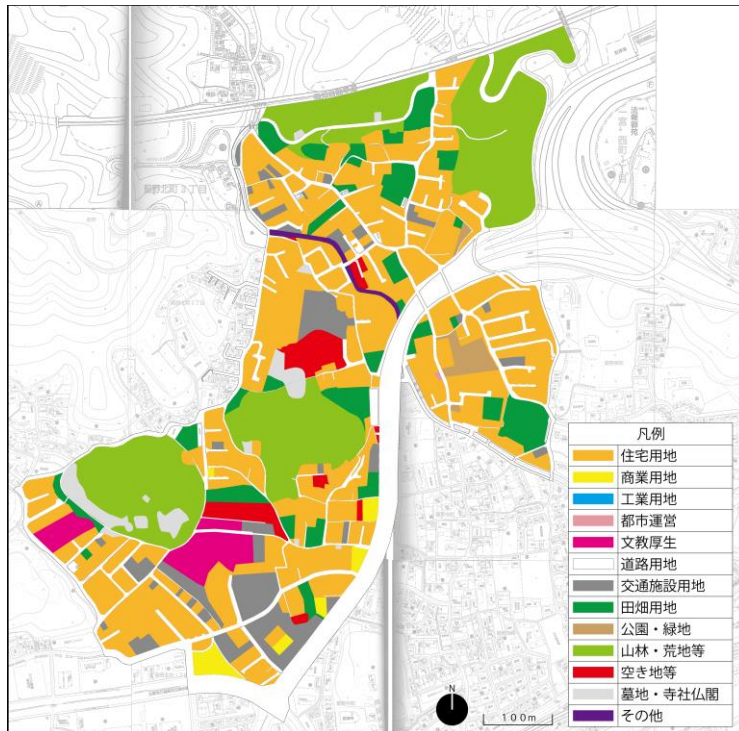


図 2.2.1.7 北町の土地利用現況図

表2.2.1.4 北町の土地利用現況

項目	面積(㎡)	割合(%)
住宅用地	84,363	56.3
商業用地	1,432	1.0
工業用地	0	0.0
都市運営	27	0.0
文教厚生	3,263	2.2
道路用地	9,136	6.1
交通施設用地	9,136	6.1
田畑	8,947	6.0
公園・緑地	1,181	0.8
山林・荒地等	26,415	17.6
空き地等	2,940	2.0
墓地・寺社仏閣	2,361	1.6
その他	554	0.4
計	149,754	100.0

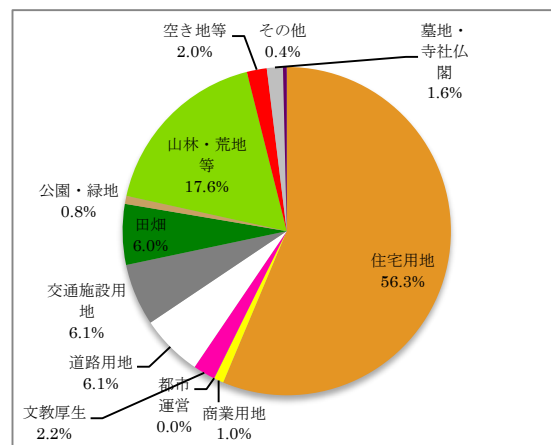


図 2.2.1.8 北町の土地利用現況グラフ

薊野中町

中町における土地利用現況は以下の通りである。中町は、住宅用地が26,764㎡で、全体の37.3%を占め、最も広い面積の土地利用である。ついで、道路用地が26,630㎡で、全体の37.1%を占めている。また、中町の南側には県道249号線が、西側には県道44号線が走り、その主要な道沿いには、商業用地が多く見られる。さらに、中町の西南部には陽貴山が位置し、その低山に鬼門鎮護の掛川神社が立地している。そのすぐ隣地には国分寺があり、掛川神社と国分寺を山林が囲い込んでいる。

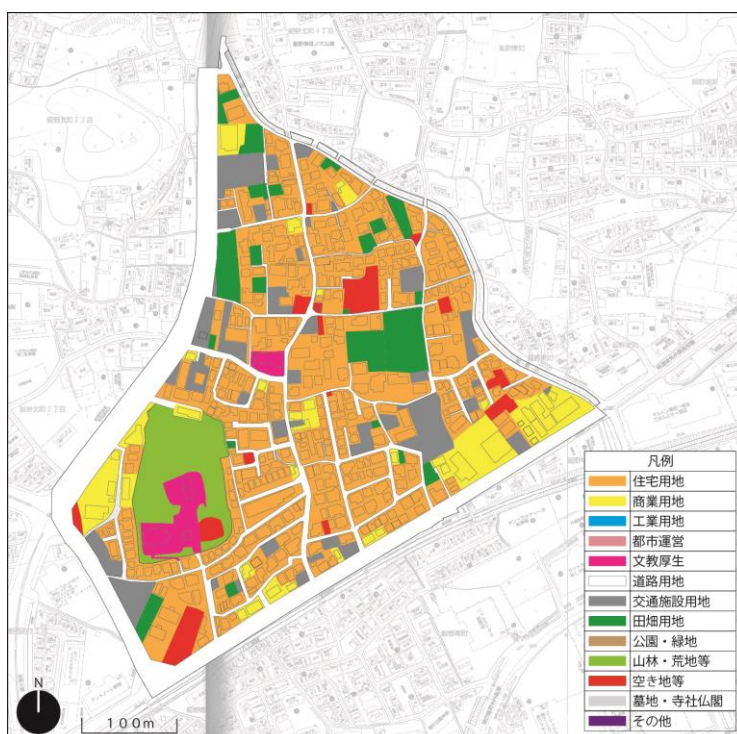


図 2.2.1.9 中町の土地利用現況図

表2.2.1.5 中町の土地利用現況

項目	面積(㎡)	割合(%)
住宅用地	26,764	37.3
商業用地	5,035	7.0
工業用地	0	0.0
都市運営	0	0.0
文教厚生	1,525	2.1
道路用地	26,630	37.1
交通施設用地	3,819	5.3
田畑	2,963	4.1
公園・緑地	0	0.0
山林・荒地等	3,136	4.4
空き地等	1,552	2.2
墓地・寺社仏閣	421	0.6
その他	0	0.0
計	71,844	100.0

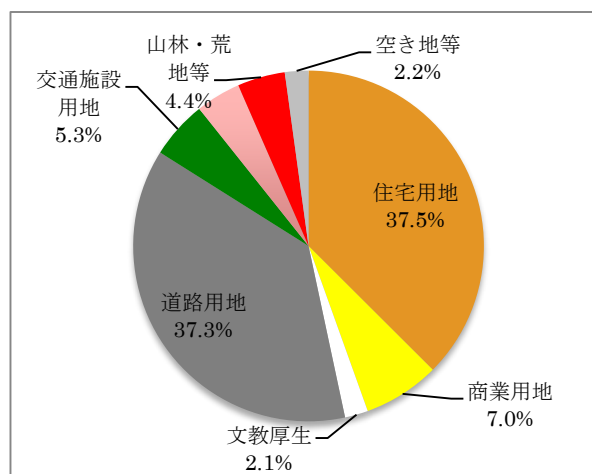


図 2.2.1.10 中町の土地利用現況グラフ

2-2-2. 階数別建物利用現況

階数別建物利用現況では、1階建、2階建、3階建（ピロティ）、3階建、4階建（ピロティ）、4階建、5階建以上の7つの項目に分類している。3階建て（ピロティ）と4階建て（ピロティ）の項目に関しては、建物の高さが、それぞれに3階建て、4階建てであることに加えて、一層目部分にピロティ空間を設け、専用の車庫として利用している建物とする。

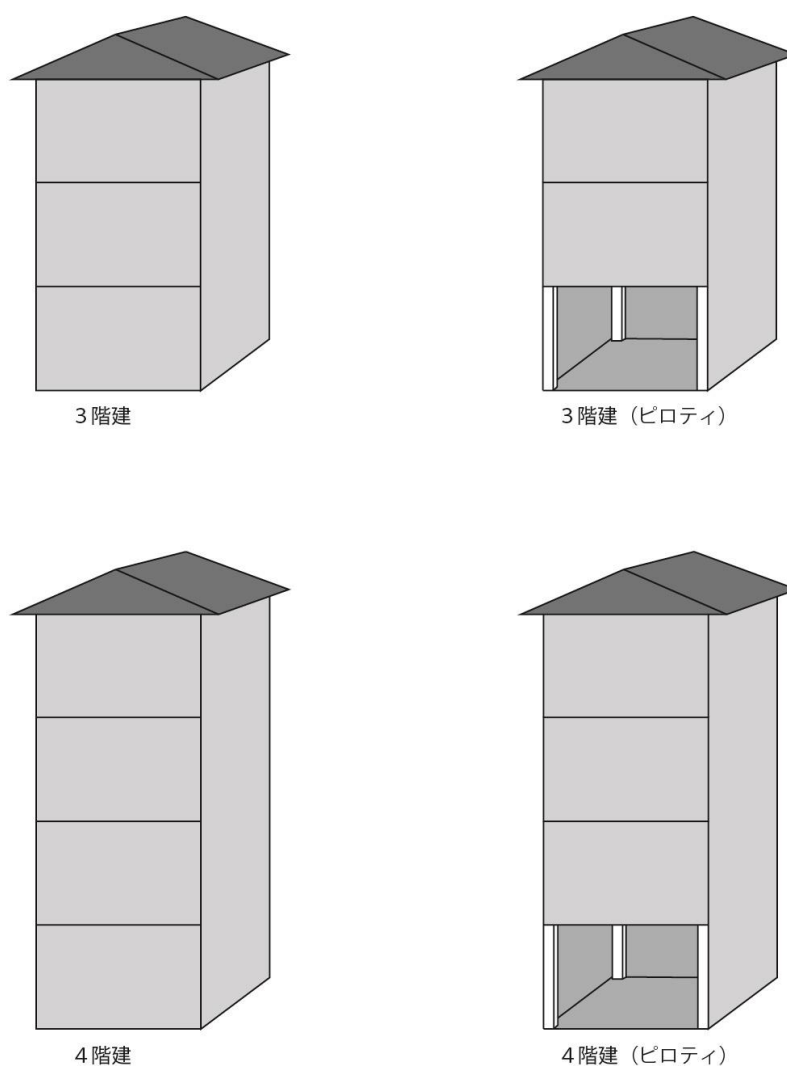


図 2.2.2.1 ピロティ空間の有無に関する概念図

薊野東町

東町における階数別建物利用現況は以下の通りである。東町では、全体の87.8%を2階建の建物が占めており最も多い。また、川沿いにマンションが建っていたり、県道沿いに商業施設が建っていたりするため境界線付近では、1階建や3階建の建物も確認できる。

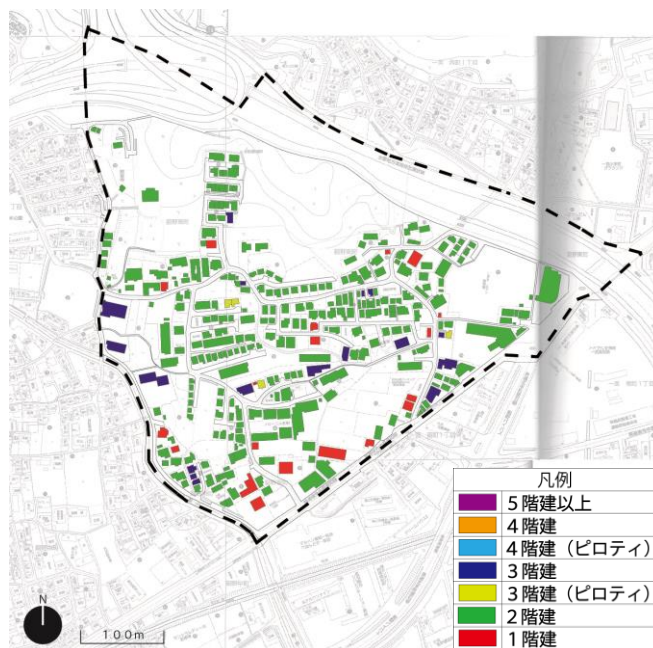


図 2.2.2.2 東町の階数別建物現況図

表2.2.2.1 東町の階数別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
1階建	20	6.0
2階建	294	87.8
3階建(ピロティ)	4	1.2
3階建	17	5.1
4階建(ピロティ)	0	0.0
4階建	0	0.0
5階建	0	0.0
計	335	100.0

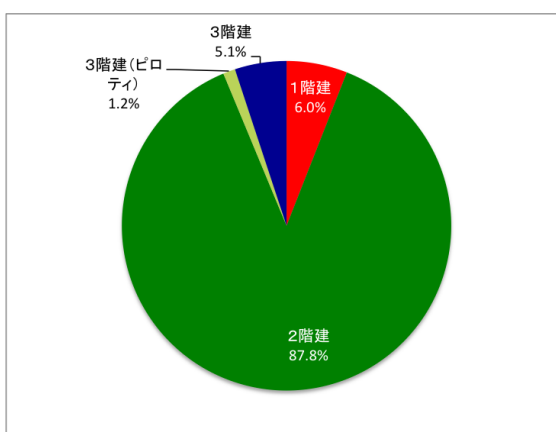


図 2.2.2.3 東町の階数別建物現況グラフ

薊野西町

西町における階数別建物利用現況は以下の通りである。西町では、全体の75.4%を2階建の建物が占めており最も多く、次に多い3階建が11.3%、ついで、3階建（ピロティ）が7.1%となっている。また、戸数自体少ないものの4階建、4階建（ピロティ）、5階建以上の建物も見られ、全体としては、比較的建端の高い建物により町並みが形成されている。



図 2.2.2.4 西町の階数別建物現況図

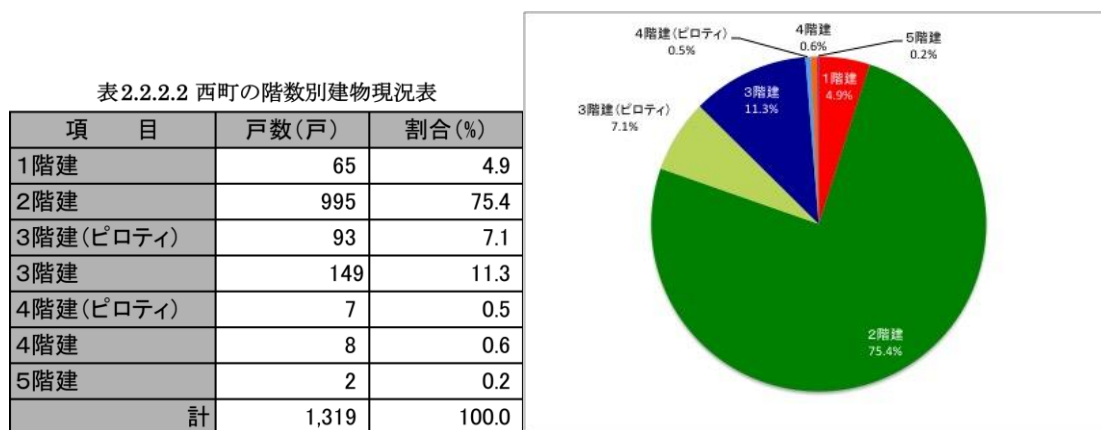


図 2.2.2.5 西町の階数別建物現況グラフ

薊野南町

南町における階数別建物利用現況は以下の通りである。南町では、全体の76.7%を2階建の建物が占めており最も多い。また、県道が中町を貫いているため、県道沿いには5階建以上のマンションや商業施設が建っている。

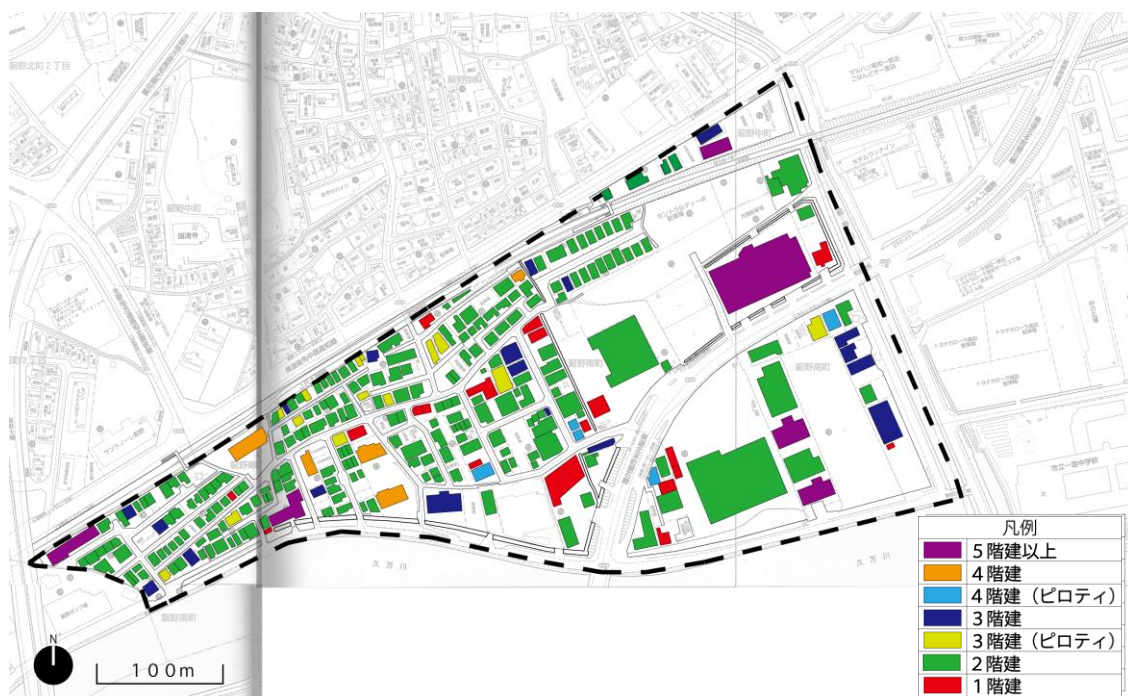


図 2.2.2.6 東町の階数別建物現況図

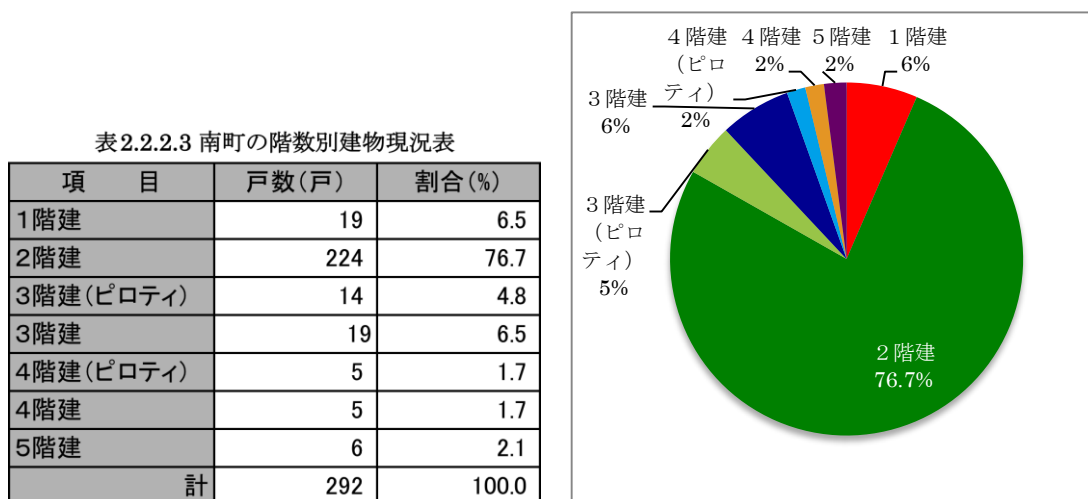


図 2.2.2.7 南町の階数別建物現況グラフ

薊野南町

東町における階数別建物利用現況は以下の通りである。東町では、全体の77.7%を2階建の建物が占めており最も多い。また、南端の県道沿いに商業施設や病院、マンションが建っており、4階建や5階建以上の建物も確認できる。

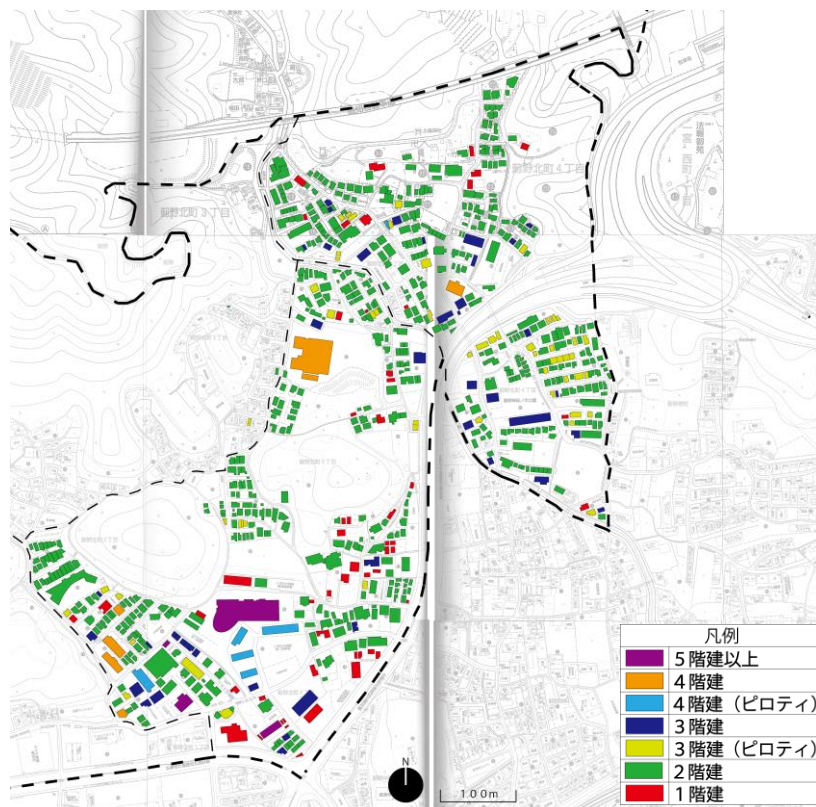


図 2.2.2.8 東町の階数別建物現況図

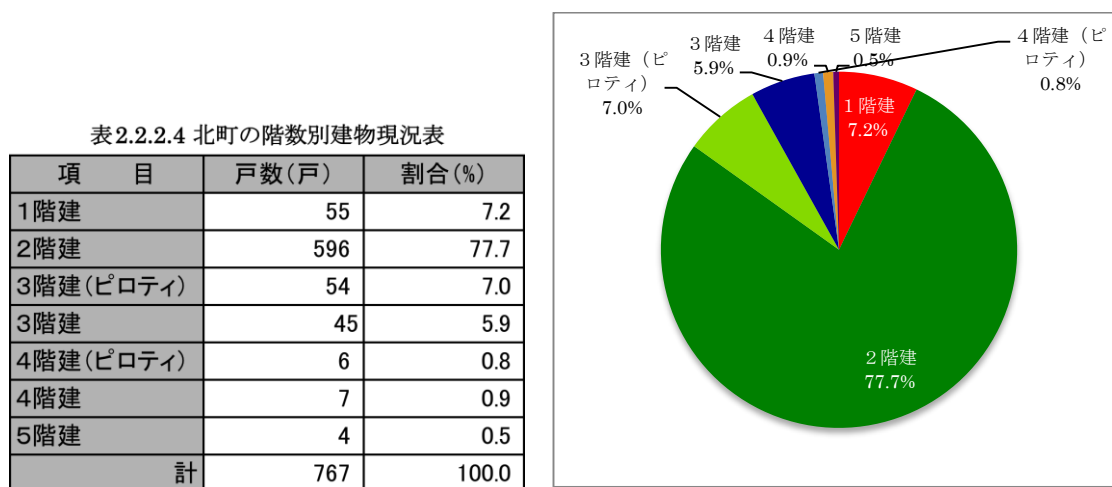


図 2.2.2.9 東町の階数別建物現況グラフ

薊野中町

中町における階数別建物利用現況は以下の通りである。中町では、全体の78.0%を2階建が占めており最も多く、次に多いのが12.3%の1階建、ついで、6.8%の3階建である。また、3階建（ピロティ）も数は少ないが、各所に散在しており、中町の境界線付近には4階建の建物も見られる。

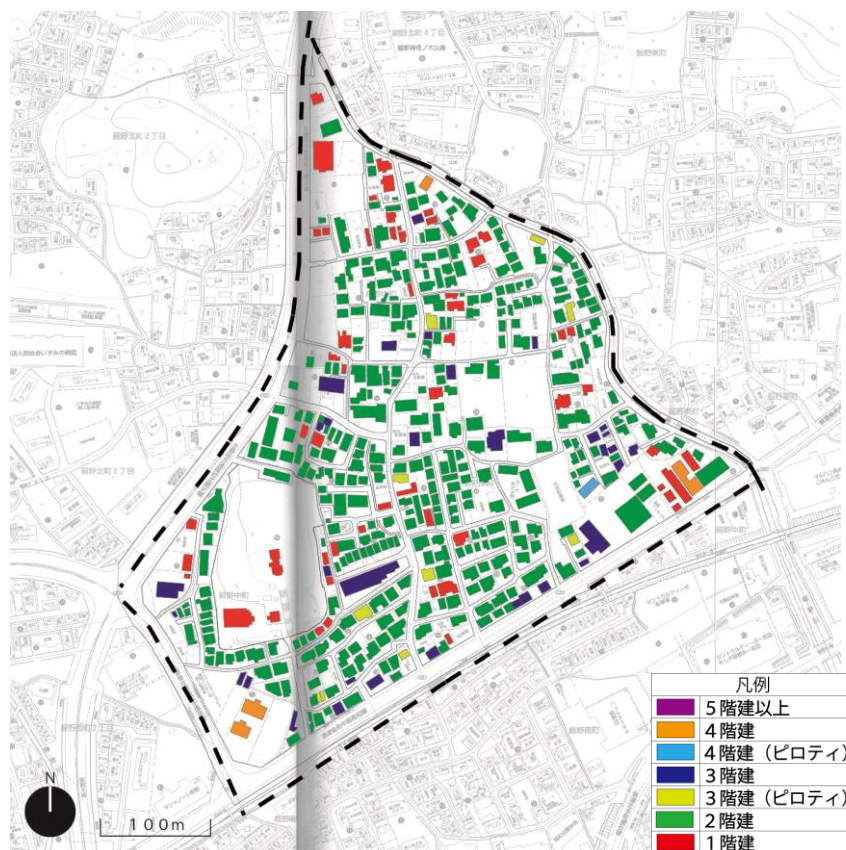


図 2.2.2.10 中町の階数別建物現況図

表2.2.2.5 中町の階数別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
1階建	58	12.3
2階建	368	78.0
3階建(ピロティ)	10	2.1
3階建	32	6.8
4階建(ピロティ)	1	0.2
4階建	3	0.6
5階建	0	0.0
計	472	100.0

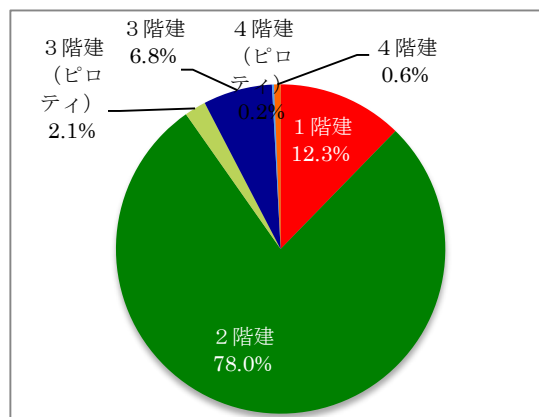


図 2.2.2.11 中町の階数別建物現況グラフ

2-2-3. 構造別建物利用現況

薊野東町

東町における構造別建物利用現況は以下の通りである。東町では、全体の83.3%が木造の建物であり、多くは住宅である。2番目に多い9.9%の鉄骨造は、そのほとんどがアパート・マンションなどである。分布では、県道が走る南側には比較的RC造や鉄骨造が多く、北に上がるにつれ、木造の比率が高くなっている。

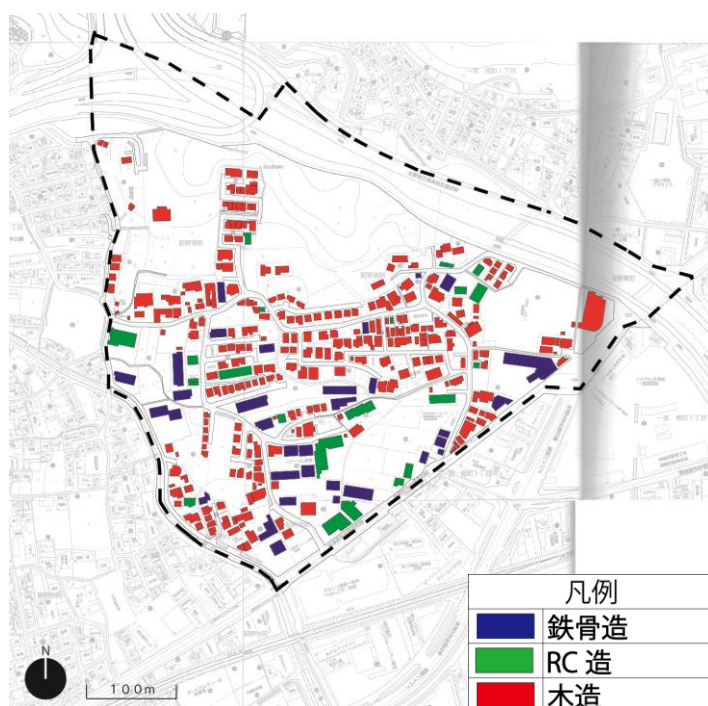


図 2.2.3.1 東町の構造別建物現況図

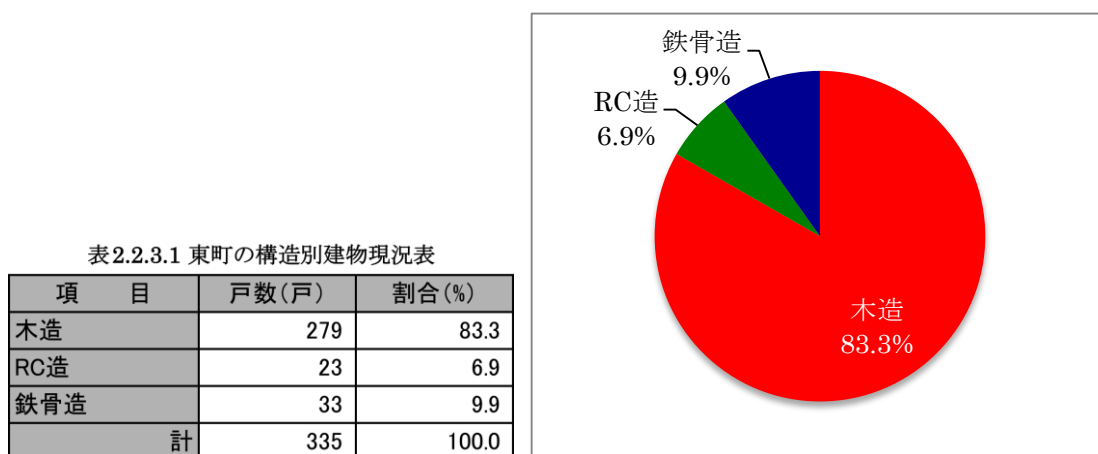


図 2.2.3.2 東町の構造別建物現況グラフ

薊野西町

西町における構造別建物利用現況は以下の通りである。西町では、全体の83.3%が木造の建物で、最も多い構造である。また、アパート・マンションや大規模な商業施設も数多く建てられていることもあり、RC造や鉄骨造の建物も全体の約10%を占めている。分布では、東から北側の境界線付近にRC造や鉄骨造が多い印象を受けつつも、町中にも多く散在している。



図 2.2.3.3 西町の構造別建物現況図

表2.2.3.2 西町の階数別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
木造	1,099	83.3
RC造	119	9.0
鉄骨造	101	7.7
計	1,319	100.0

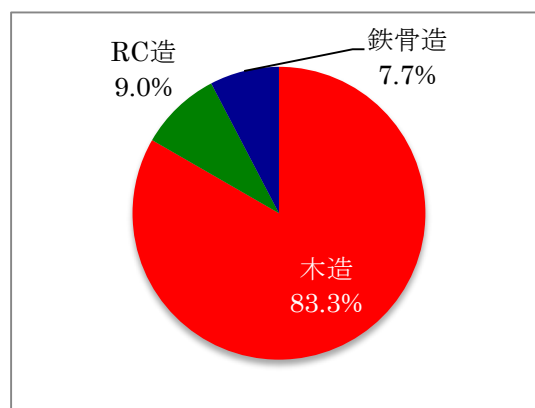


図 2.2.3.4 西町の構造別建物現況グラフ

薊野南町

南町における構造別建物利用現況は以下の通りである。南町では、全体の72.9%が木造の建物であり、多くは住宅である。2番目に多い16.4%の鉄骨造は、そのほとんどがアパート・マンションなどである。分布では、県道が走る東側のほとんどがRC造や鉄骨造が多く、西側に木造の建物が集中している。

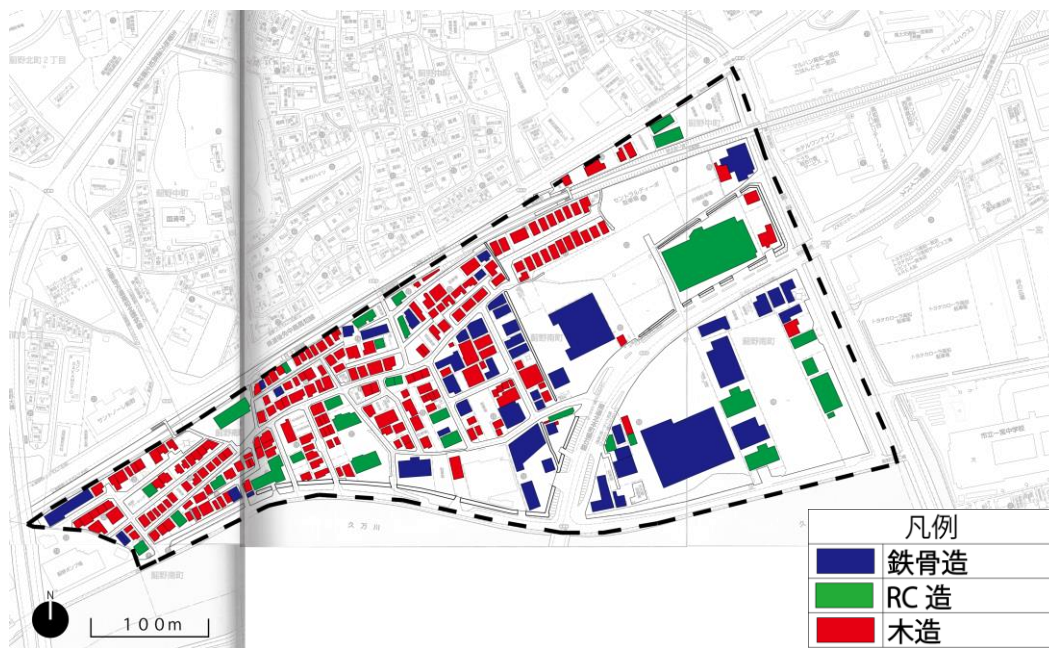


図 2.2.3.5 構造別建物現況図

表2.2.3.3 南町の構造別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
木造	213	72.9
RC造	31	10.6
鉄骨造	48	16.4
計	292	100.0

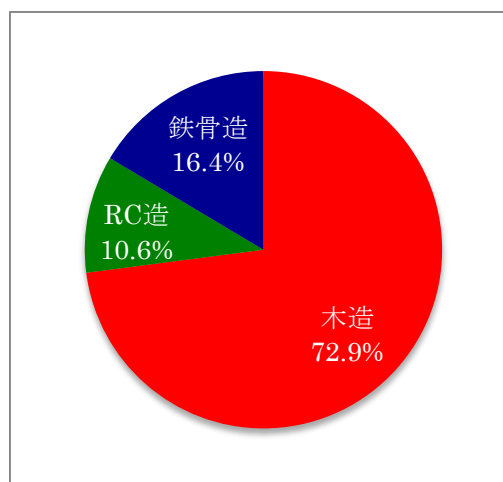


図 2.2.3.6 東町の構造別建物現況グラフ

薊野北町

東町における構造別建物利用現況は以下の通りである。東町では、全体の84.5%が木造の建物であり、多くは住宅である。2番目に多いのが10.2%の鉄骨造で、アパート・マンションなどである。分布では、県道が走る南側には商業施設やマンションが建っているため比較的RC造や鉄骨造が多く、住宅が多くなる北側はほとんど木造である。

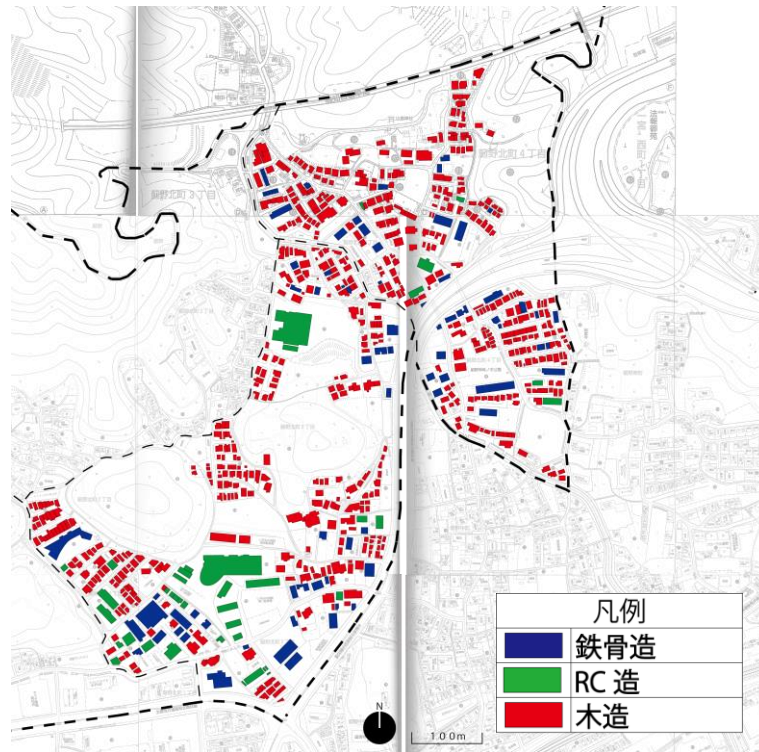


図 2.2.3.7 構造別建物現況図

表2.2.3.4 北町の構造別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
木造	648	84.5
RC造	41	5.3
鉄骨造	78	10.2
計	767	100.0

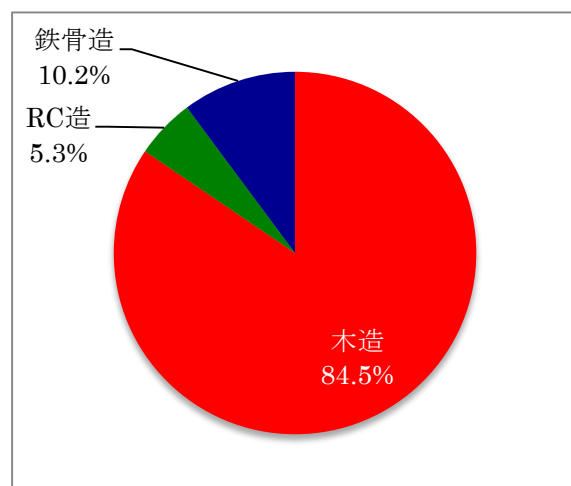


図 2.2.3.8 東町の構造別建物現況グラフ

薊野中町

中町における構造別建物利用現況は以下の通りである。中町では、全体の87.0%が木造の建物であり、最も多い構造である。また、分布の観点から、RC造の多くは南側に位置しており、鉄骨造の建物は西側に、比較的多く位置していることが確認できる。

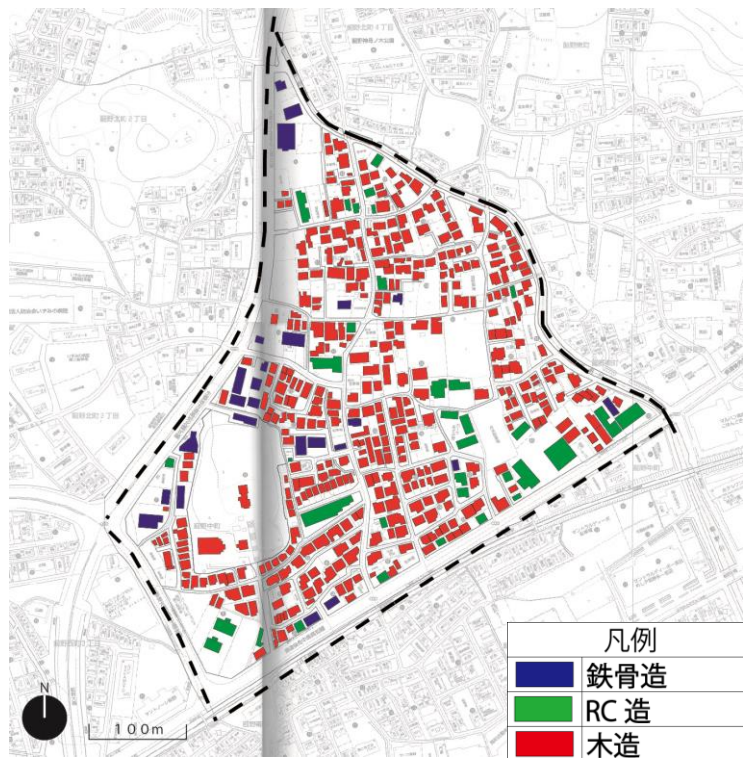


図 2.2.3.9 中町の構造別建物現況図

表 2.2.3.5 中町の階数別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
木造	407	87.0
RC造	36	7.7
鉄骨造	25	5.3
計	468	100.0

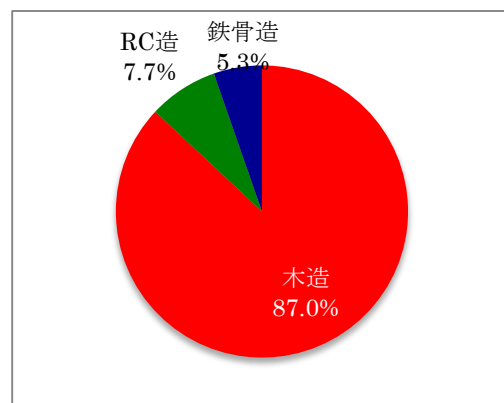


図 2.2.3.10 中町の構造別建物現況グラフ

2-2-4. 空き家現況

薊野東町

東町における空き家現況は以下の通りである。東町では全体の2.7%、9戸の建物が空き家であった。分布に関しては、散在しており、場所における偏りはあまり見られない。

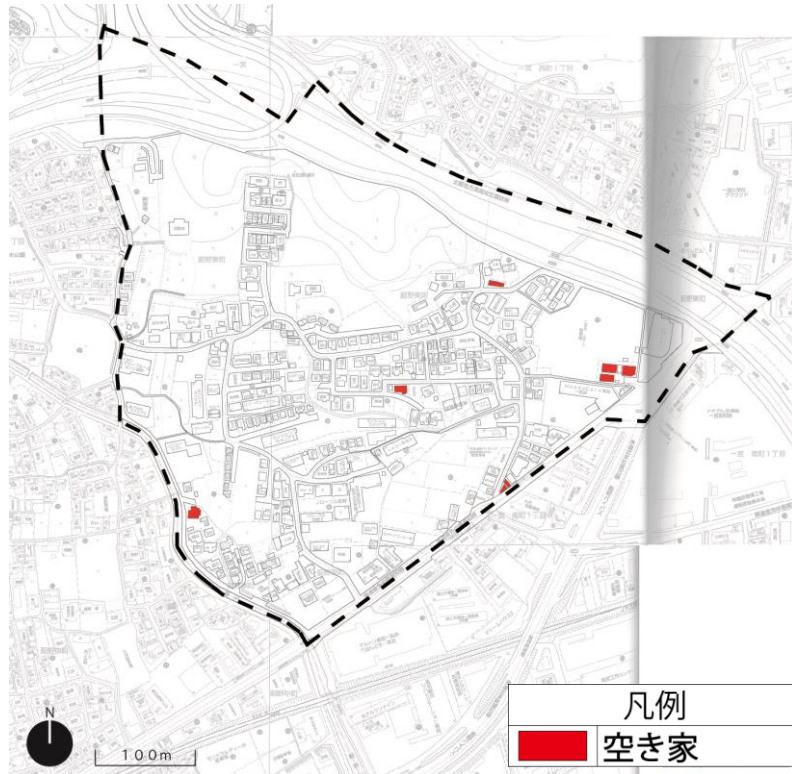


図 2.2.4.1 東町の空き家現況図

表2.2.4.1 東町の構造別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
人家	326	97.3
空き家	9	2.7
計	335	100.0

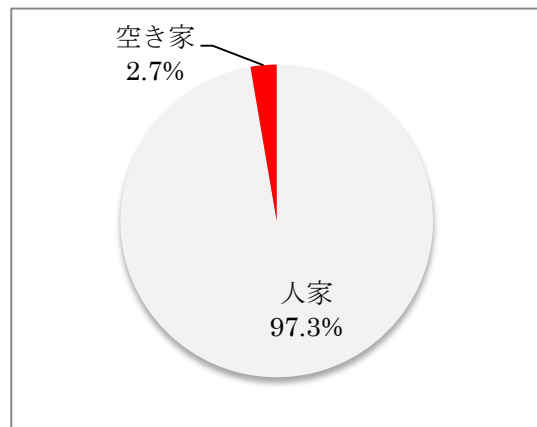


図 2.2.4.2 東町の空き家現況グラフ

薊野西町

西町における空き家現況は以下の通りである。西町では、全体の2.5%、33戸の建物が空き家であった。分布に関しては、基本的に散在してはいるが、南側の境界線付近や中央やや東側では、空き家の集合している箇所がいくつか見られる。

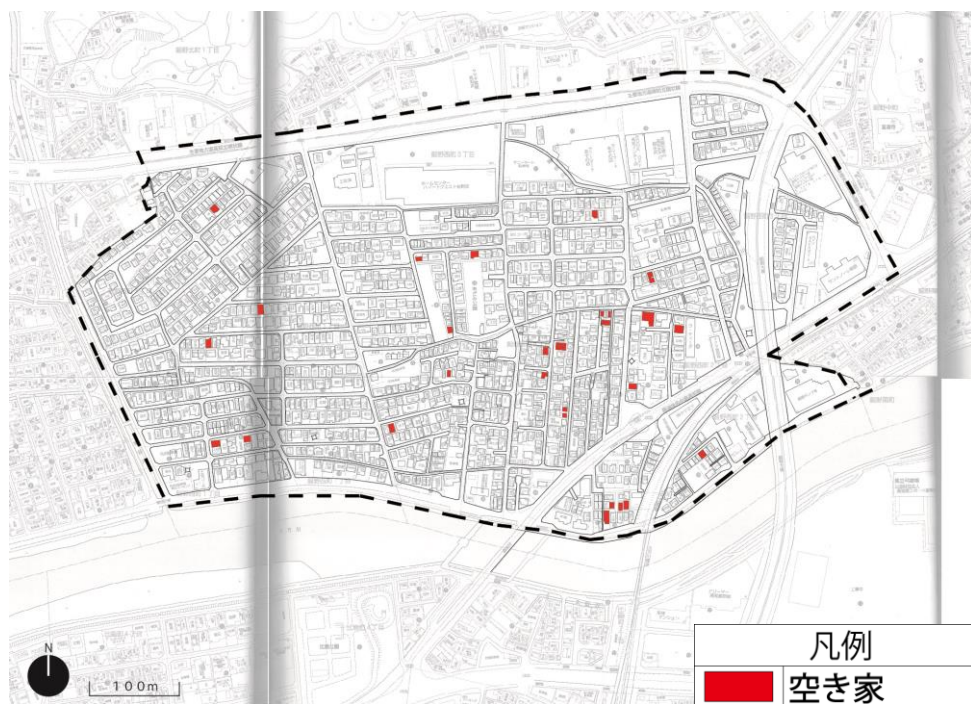


図 2.2.4.3 西町の空き家現況図

表2.2.4.2 西町の階数別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
人家	1,286	97.5
空き家	33	2.5
計	1,319	100.0

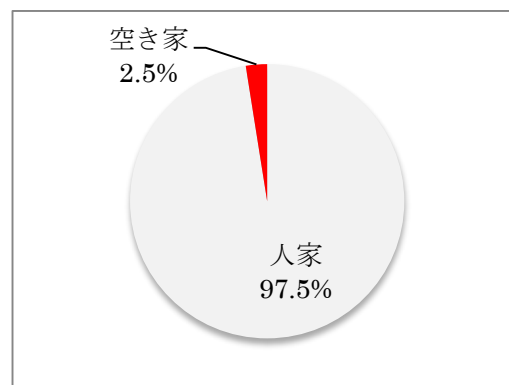


図 2.2.4.4 西町の空き家現況グラフ

薊野南町

南町における空き家現況は以下の通りである。南町では全体の6.8%、20戸の建物が空き家であった。河川や鉄道が四周を囲み孤立している南町は、建物の更新がうまくいかず、空き家が比較的多く見られる。分布に関しては集中している領域が幾つか見られ、同じ時期に建てられたものが空き家になり、放置されていると思われる。



図 2.2.4.5 東町の空き家現況図

表2.2.4.3 南町の構造別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
人家	272	93.2
空き家	20	6.8
計	292	100.0

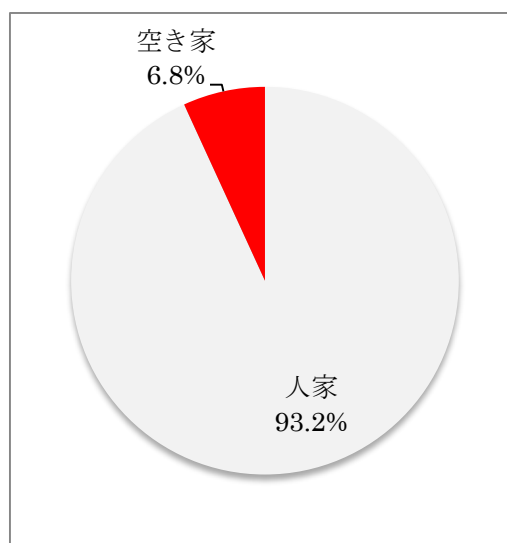


図 2.2.4.6 東町の空き家現況グラフ

薊野北町

東町における空き家現況は以下の通りである。東町では全体の0.8%、6戸の建物が空き家であった。総戸数に対して空き家の数はかなり少ない。分布に関しては散在しており、場所における偏りはあまり見られない。

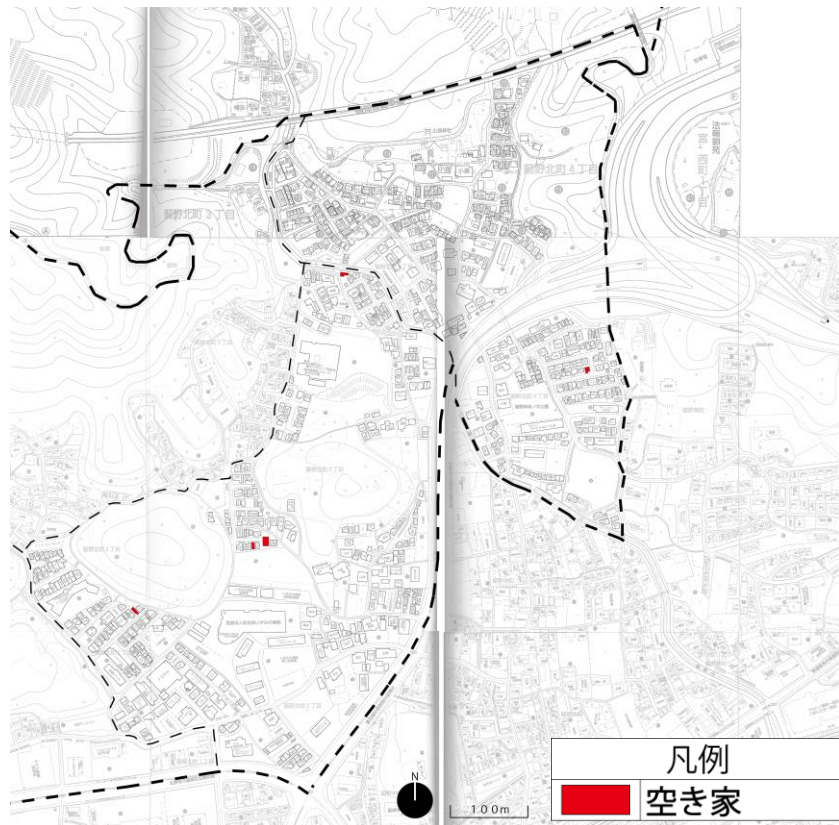


図 2.2.4.7 東町の空き家現況図

表2.2.4.4 北町の構造別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
人家	761	99.2
空き家	6	0.8
計	767	100.0

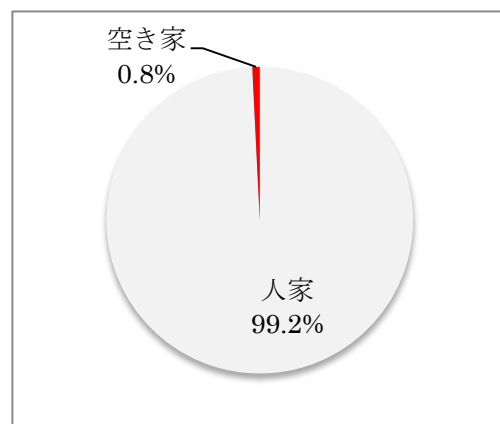


図 2.2.4.8 東町の空き家現況グラフ

薊野中町

中町における空き家現況は以下の通りである。中町では、全体の3.0%、14戸の建物が空き家であった。分布に関しては、中町の西側に位置している掛川神社付近において、空き家が集中していることが確認できる。

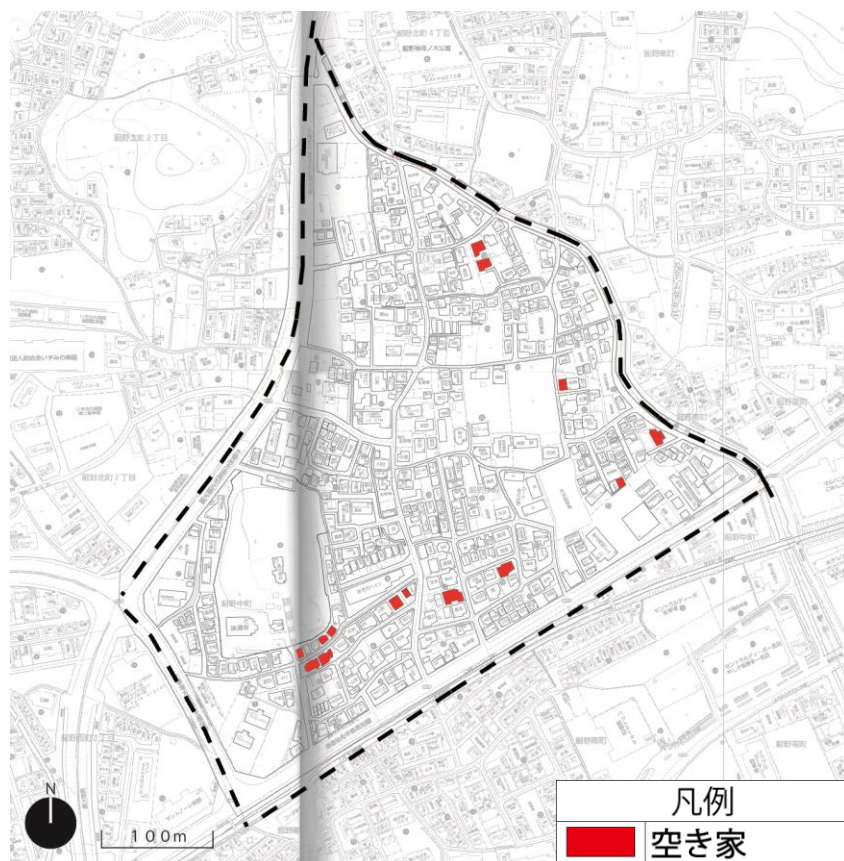


図 2.2.4.9 中町の空き家現況図

表 2.2.4.5 中町の階数別建物現況表

項目	戸数(戸)	割合(%)
人家	454	97.0
空き家	14	3.0
計	468	100.0

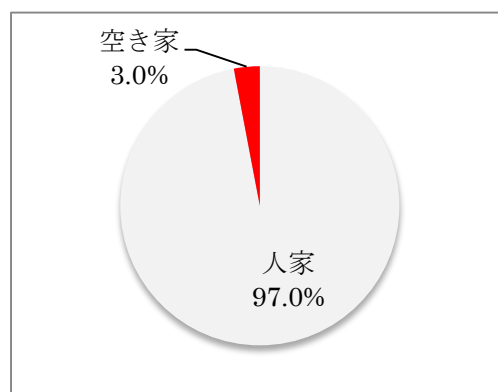


図 2.2.4.10 中町の空き家現況グラフ

第3章 薊野の空間変遷

3-1. 高知市の空間変遷と薊野

ここでは、高知市の市街地が拡大していく過程と市街拡大の煽りを受け、住宅地へと侵食していく薊野の空間変遷をたどる。その際、国土地理院の地形図として記録されている1907年から1922年、1947年、1965年、1976年、1988年、1997年、2005年の8つ年ごとに空間変遷を見ていく。

1907年

1907年の高知市では、高知城を中心として市街地は東西に広く、北に流れる江口川と南に流れる鏡川に挟まれた陸地に位置している。また、この頃の薊野では、中町に広大な集落があるものの、面積の大半を田畑が占めている。

1947年（原型）

1947年の高知市では、新たに宅地開発が行われている地域はあるが、1907年の頃からそれほど市街拡大は見られず、薊野においても、ほぼ変化はない。

また、この時期に、市街地北部から薊野の南部を通る東西に敷かれた鉄道と市街地を銃横断する2本の路面電車のための線路が新たに敷かれている。

1965年

1947年から65年にかけて高知市では市街拡大が進んでいる。江口川と鏡川に挟まれ、東西に広がった1947年までの市街地は、それぞれの川を越え、南北方向に市街を拡大し始める。一方の薊野では、まだ、市街拡大の波にさらされてはいないが、南側では徐々に田畑を住宅地が喰い潰し始めている。

また、市街地を中心に小学校・中学校・高校・大学などの教育施設（1）がいくつも計画され、郊外地には敷島紡績や工場（2）の建設も見られる。

1976年

1976年の高知市では、さらに市街拡大は進み、北側に流れている久万川を渡り、かつて田畑が広がっていた郊外は、多くの住宅地が建ち並んでいる。薊野においても、1965年から宅地開発が一気に進み、西町の大半を住宅地が占めている。

また、山林地や農地をある程度の範囲にわたり宅地として整備し、団地（3）などの広域な住宅地が突如として出現している。

1988年

1988年の高知市では、住宅地の割合も非常に多くなり、山林地以外の平地は、居住地として多くの住宅や商業施設などが建ち並び、田畑などはほとんど見られない。薊野でも、西町、中町、東町、南町は市街拡大の煽りを受け、面積の大半が住宅地へと変貌を遂げている。

1997年

1988年までの開発で、住宅、商業施設や工場が、ある程度充足したためか急速に進んでい

た市街化は止まり、高知市では、1988年から97年の間での変化はほとんど見られない。一方の藪野では、宅地へと変容する面積は少なく、北側の山麓部めがけて若干の宅地化が進んでいる。

2005年

2005年の高知市を見ても、1988年からの変化はあまり見られない。また、藪野においては、北側に向けての侵食が少し見られる。

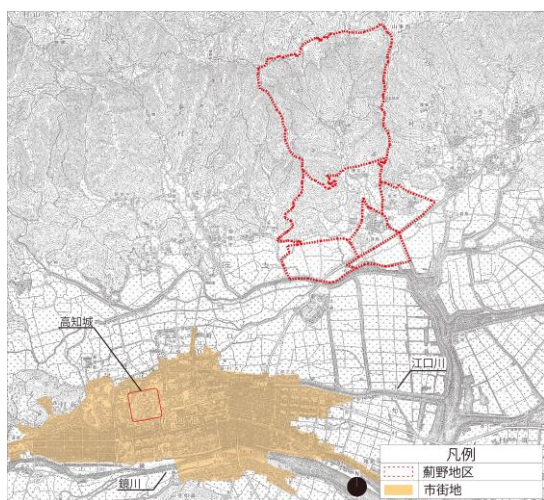


図 3.1.1.1 高知市市街地と藪野の位置図(1907年)

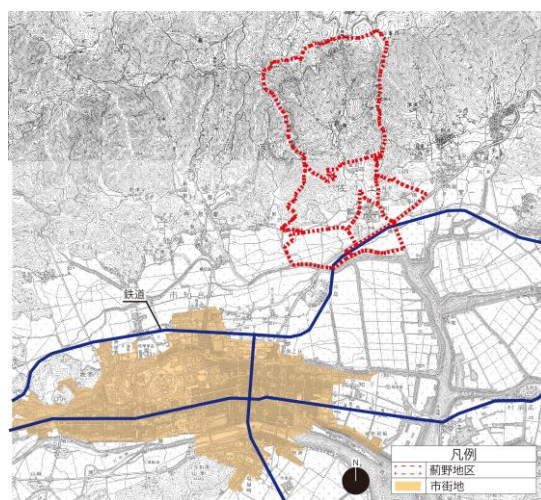


図 3.1.1.2 高知市市街地と藪野の位置図(原型)

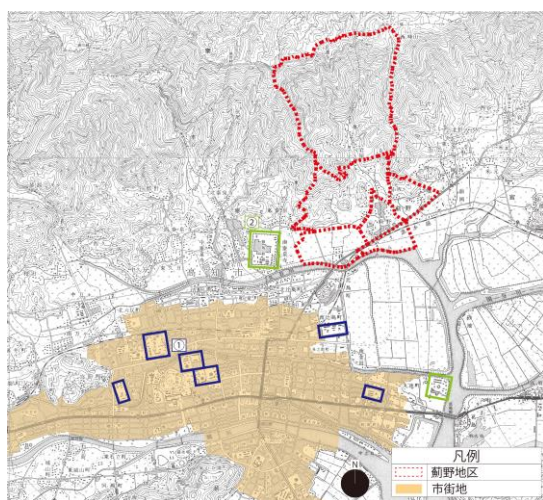


図 3.1.1.3 高知市市街地と藪野の位置図(1965年)

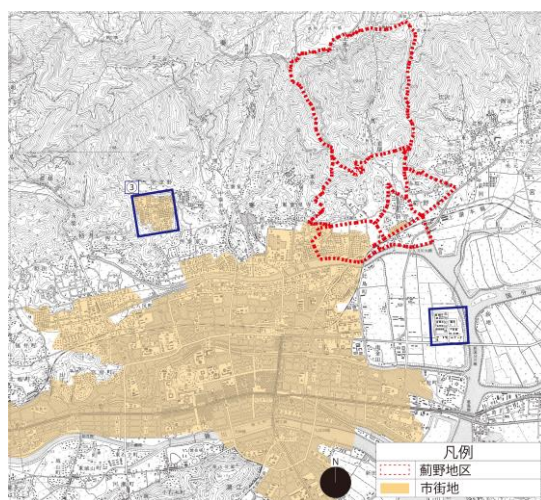


図 3.1.1.4 高知市市街地と藪野の位置図(1976年)

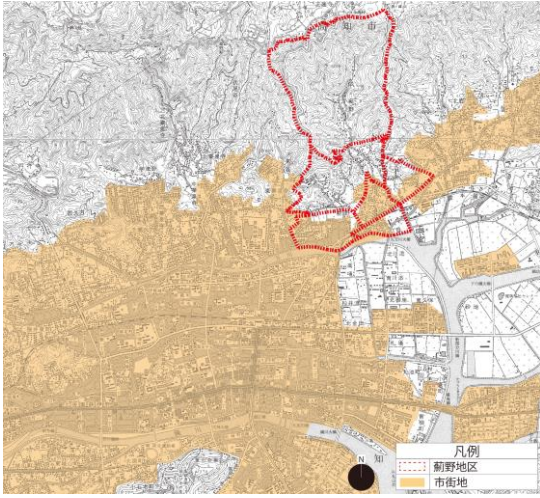


図 3.1.1.5 高知市市街地と藪野の位置図(1988年)

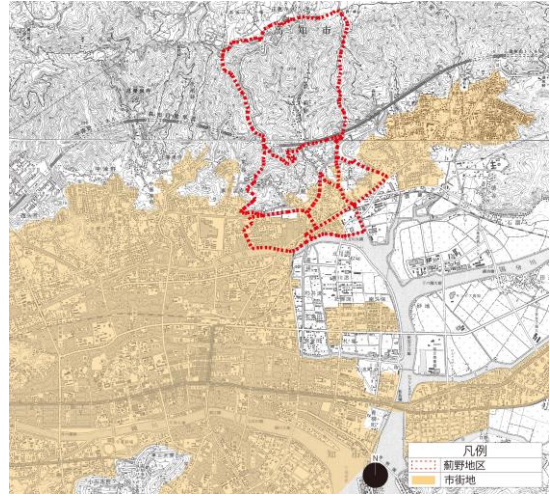


図 3.1.1.6 高知市市街地と藪野の位置図(1997年)

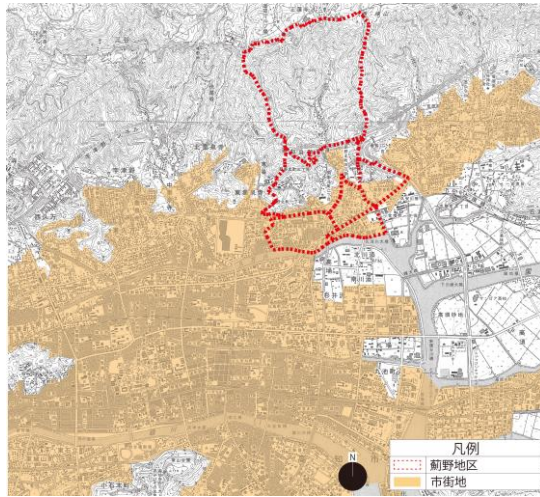


図 3.1.1.7 高知市市街地と藪野の位置図(2005年)

3-2. 薊野の空間変遷

薊野の空間変遷では、薊野奥を含めた全域における街路変遷と土地利用変遷を見ていく。その際、1947年から1965年、1976年、1988年、1997年、2005年の6つの年の空間変遷を追う。また、国土地理院の地形図では、年代毎に道路の名称や記載方法を変えているため、以下の表に従って年代毎での整合性を図る。

表 3.2.1 地図における街路表記の移り変わり表

むかしの地図記号と地図記号のうつりかわり 56													
種類/図式	明治11年(1878)測絵図	明治16年(1883)～ 明治17年(1884)～ 複製	明治18年(1885)回式集から	明治23年(1890)回式集から	明治27年(1894)回式集から	明治33年(1900)回式集から	明治42年(1909)回式集から	大正6年(1917)	昭和17年(1942)	昭和30年(1955)	昭和40年(1965)	平成14年(2002)	メモなど
1.5車線道路	==== (同三等)								==== 5m以上	====	なし	なし	1.5しゃせんどうろ
1車線道路	==== (里道一等)	==== 村道	==== 村道	==== 村道	==== 郷路	==== 郷路	==== 郷路	==== 郷路	==== 町村道2m以上	==== 3m以上	==== 1車線以上	==== 2.5m以上	1しゃせんどうろ
小型自動車道	==== (同二等)		==== 特設道	==== 農工道	==== 間路	==== 間路	==== 間路	==== 間路		==== 2m以上	==== 小型自動車道	なし	こがたじどうしやどう
軽車道	==== (同三等)	==== 騎小徑	==== 騎小徑	==== 騎小徑	○	○	○	○	==== 町村道1m以上	==== 1m以上	==== 荷車道	==== 1.5m以上	けいしやどう
徒歩道		==== 徒小徑	==== 徒小徑	==== 徒小徑	○	○	○	○	○	○	○	○	とほどう

むかしの地図記号と地図記号のうつりかわり 55													
種類/図式	明治11年(1878)測絵図	明治16年(1883)～ 明治17年(1884)～ 複製	明治18年(1885)回式集から	明治23年(1890)回式集から	明治27年(1894)回式集から	明治33年(1900)回式集から	明治42年(1909)回式集から	大正6年(1917)	昭和17年(1942)	昭和30年(1955)	昭和40年(1965)	平成14年(2002)	メモなど
寬幅道路25m以上	==== (国道一等)								==== 5m以上	====		====	しんぶくどうろ
国道	==== (同二等)	==== 国道	==== 国道	==== 国道	==== 国道	==== 国道	==== 国道	==== 国道				==== (アミ)	こくどう
国道	==== (同三等)											==== (アミ)	こくどう
4車線以上道路	==== (県道一等)	==== 県道	==== 県道	==== 県道	==== 県道	==== 県道	==== 県道	==== 府県道	なし	==== 3車線以上	==== 11m以上	====	4しゃせんどうろ
2車線道路	==== (同二等)	==== 里道	==== 里道	==== 里道	==== 達路	==== 達路	==== 達路	==== 達路	==== 町村道3m以上	==== 7m以上	==== 2車線以上	==== 5.5m以上	2しゃせんどうろ

3-2-1. 薊野の街路変遷

1947年の街路体系（原型）

1947年の街路体系は、薊野の南部に位置し東西を結ぶ国道（土佐街道）が敷かれ、国道から薊野の中心を貫き、まっすぐ薊野奥まで伸びる間路と枝分かれし東西に伸びる間路が敷かれ、薊野の村をつなぐ主要な里道であった。また、その主要な里道から各所に散在する山麓部の集落へと伸びる騎小径と田畑を横断する小径（あぜ道）が敷かれた単純明快な街路体系をしていた。

1965年の街路体系

1965年の地図では、1947年頃にあった多くの街路が消えてしまっている。実際に使われず消えてしまったものもあれば、残っているものの、この時代のネットワークとしては機能しておらず表記されていないものもある。これは後の地形図にて再び表記されていることから推測される。1965年の薊野では、南部に国道（土佐街道）がはしり、国道から南部に位置する幾つかの集落とを結ぶ里道が拡幅されている。また、各山麓部の集落へとつなぐ騎小径と田畑の間に設けられた小径が敷かれており、大まかな街路体系としては1947年からさほど変化はしていない。

1976年の街路体系

1976年の薊野では、都市拡大により住宅地が多く建てられた。そのため、街路も多く敷かれている。特に薊野の西側では、住宅地開発が活発であり、多くの施設街路が形成されている。また、国道（土佐街道）は県道となり、その街道の南側に新たに国道が敷かれている。都市拡大により住宅地が増え始め、自動車を走らせるために住宅間をつなぐ里道は拡幅され、1965年頃までに見られた街路のヒエラルキーは、1976年になると同等の街路により構成されている。

1988年の街路体系

1988年の薊野では、都市拡大がさらに進みより多くの住宅地が建てられた。そのため、薊野の全域には多くの街路がこの10数年もの間に一気に開発されている。

1997年の街路体系

1997年の薊野では、新たに県道が2本敷かれ、また、薊野北町と薊野奥の境界線上には、高知自動車道（国道）が敷かれている。市街地と郊外を結ぶ主要な街道が新たに敷かれたことによる街路の変容はあるが、住宅地内にはあまり変化は見られない。

2005年の街路体系

2005年の薊野では、県道がその距離を伸ばしている以外の変化はあまりない。

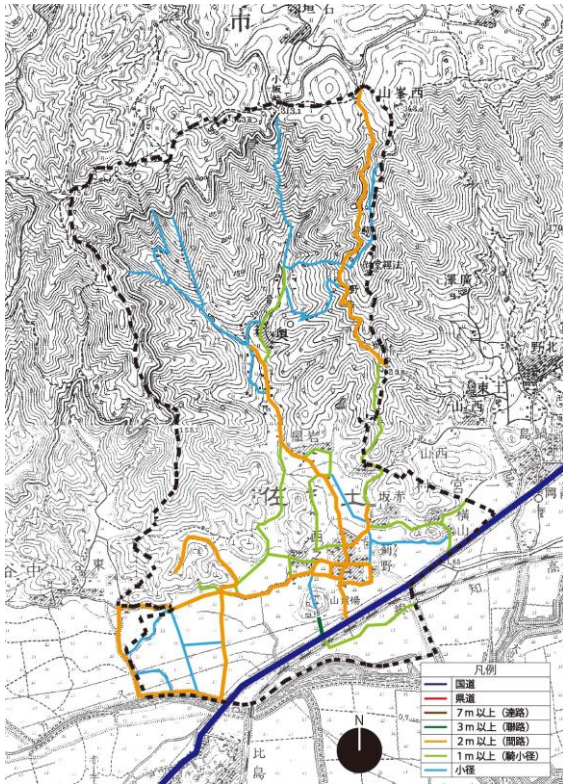


図 3.2.1.1 薊野の街路図(原型)

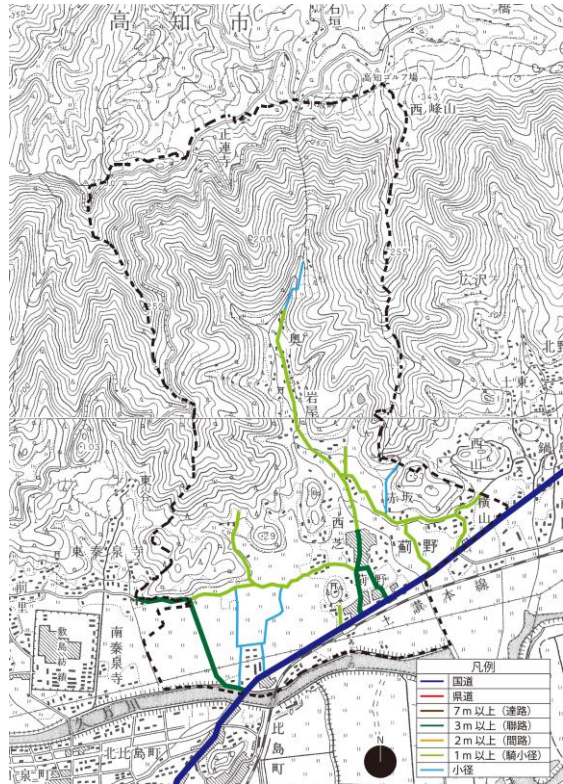


図 3.2.1.2 薊野の街路図(1965年)

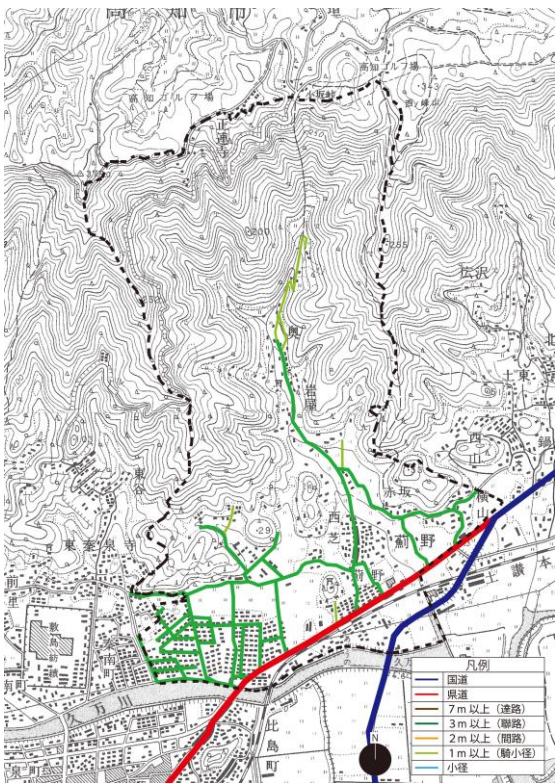


図 3.2.1.3 薊野の街路図(1976年)

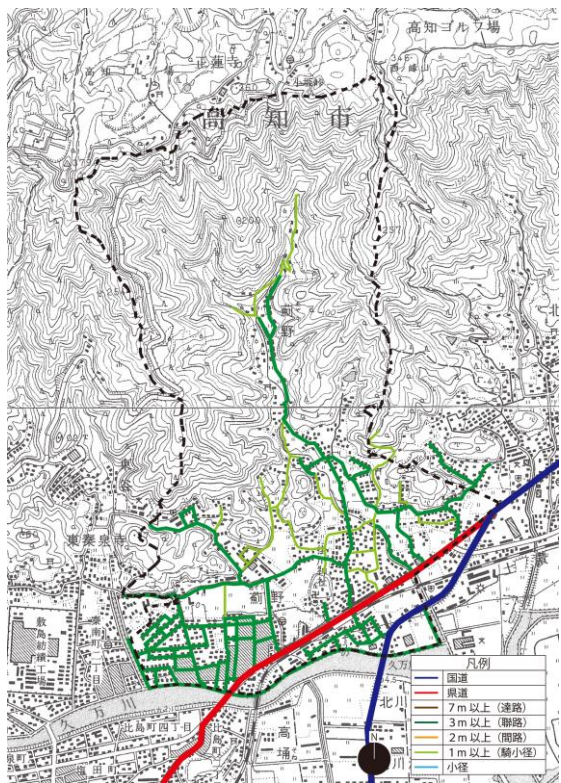


図 3.2.1.4 薊野の街路図(1988年)

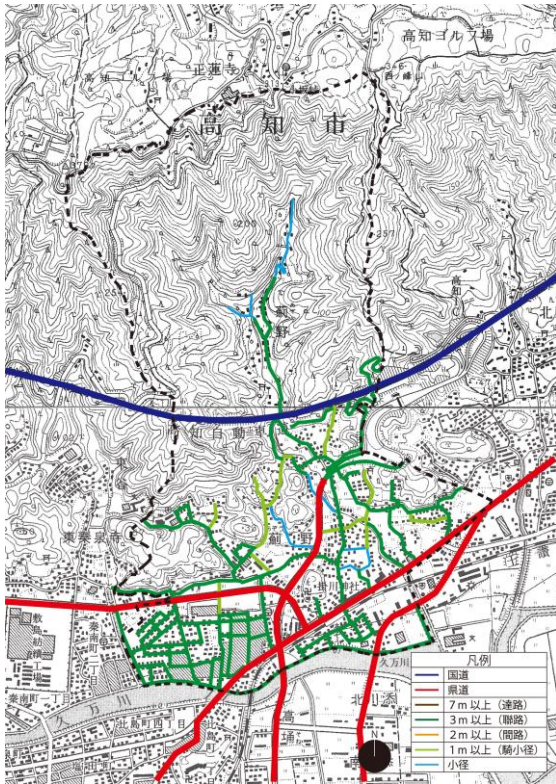


図 3.2.1.5 薊野の街路図(1997年)

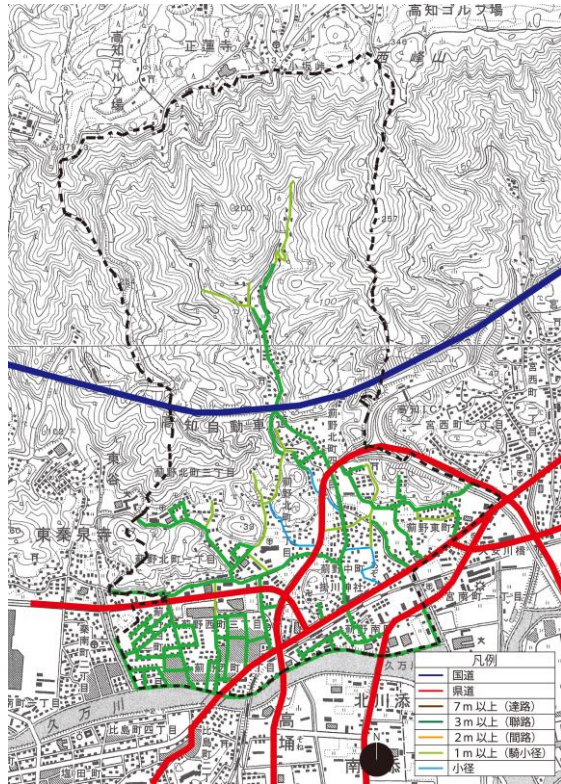


図 3.2.1.6 薊野の街路図(2005年)

3-2-2. 薊野の土地利用変遷

1947年の土地利用（原型）

1947年の薊野では、南側には広大な面積を生業領域が占めており、北上するにしたがって、谷間地形へと変化していく。谷間には、薊野の氏神を祀る星神社が建てられ、さらにその奥には狭小な集落を構えている。薊野南部には、広域な田畑を生業領域としていた幾つかの集落があり、生業領域の中心に陣取る広大な集落と山麓部に位置する狭小な集落が存在している。また、薊野西部の山林地には東西に広い葬地領域を設け、絵金などの著名人が埋葬されており、南部の陽貴山には鬼門鎮護の掛川神社が設けられているなど、都市機能が集落とある程度の距離を取りながら共存している。さらに、薊野の中心を南北に流れる薊野川と集落のない西部の生業領域に流れる川も幾つか見られる。

1965年の土地利用

1965年の薊野では、1947年頃にあった幾つかの集落を起点として、その周辺に新たな居住地が構えられている。また、薊野南部に位置する国道（土佐街道）の道に沿っても新たに居住地が増え始めている。特に薊野東部では、かつて葬地を設けていた小丘陵が宅地へと変貌しており、郊外における宅地化が進み始めているのがうかがえる。

1976年の土地利用

1976年の薊野では、さらに宅地化が進み、西側では広大な面積を占めていた生業領域の大半が居住領域へと変容している。一方で、かつての集落を構えていた領域は、1965年と比べて土地利用の変容はあまり見られない。

1988年の土地利用

1988年の薊野では、都市拡大がさらに進みより多くの面積を居住領域が占めている。そのため、1976年の頃の宅地化が進んでもなお、広大な面積を占めていた生業領域は激減し、十数年もの間で、その多くが居住地へと変容、面積比において居住領域が生業領域を逆転している。また、住民が一気に増加したため、新居住者のお墓を建てる場所として、幾つかの山林地が切り開かれ、山麓から中腹にかけて聖地・葬地が増加している。

1997年の街路体系

1997年の薊野の土地利用は、新たに県道が2本敷かれ、その街道沿いに大型の建築物が建てられているものの、1988年からの変化はあまり見られない。

2005年の街路体系

2005年の薊野では、1997年に県道が敷かれ、市街地との交通の便が良くなったこともあり、一気に宅地化が進んでいる。かつては、広大な田畑が広がっていた薊野は、そのほとんどが居住領域となり、小さくなった田畑が散在している。

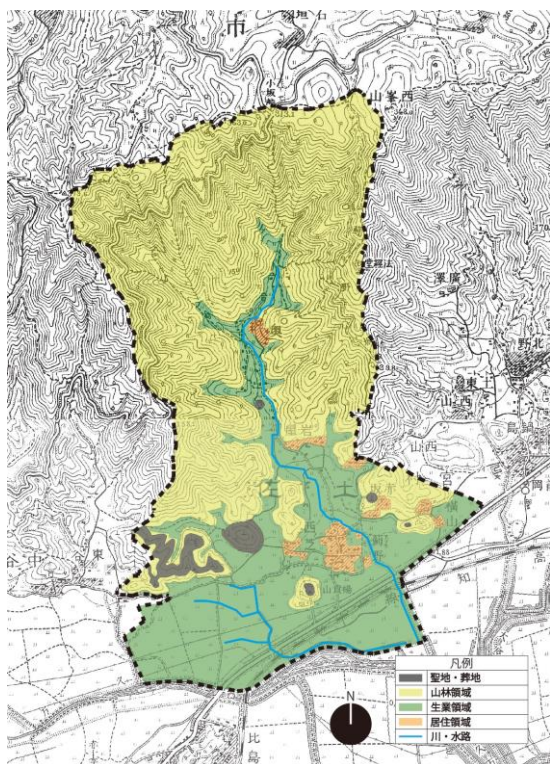


図 3.2.2.1 薊野の土地利用図(原型)

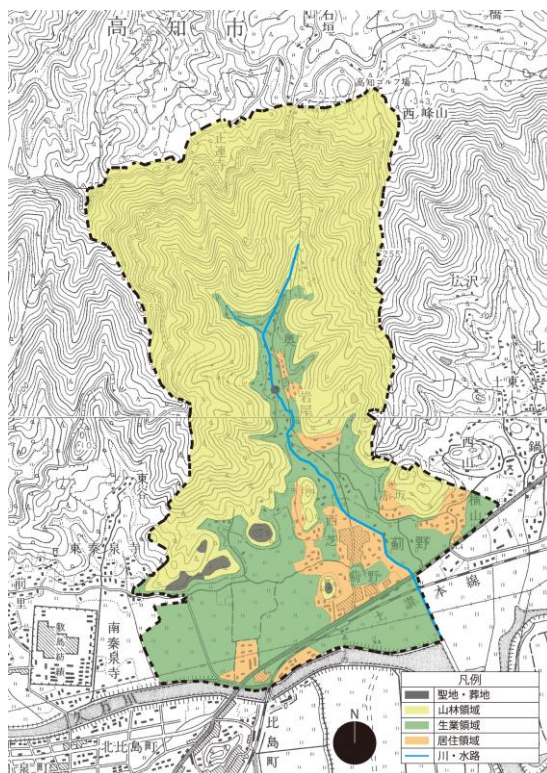


図 3.2.2.2 薊野の土地利用図(1965年)

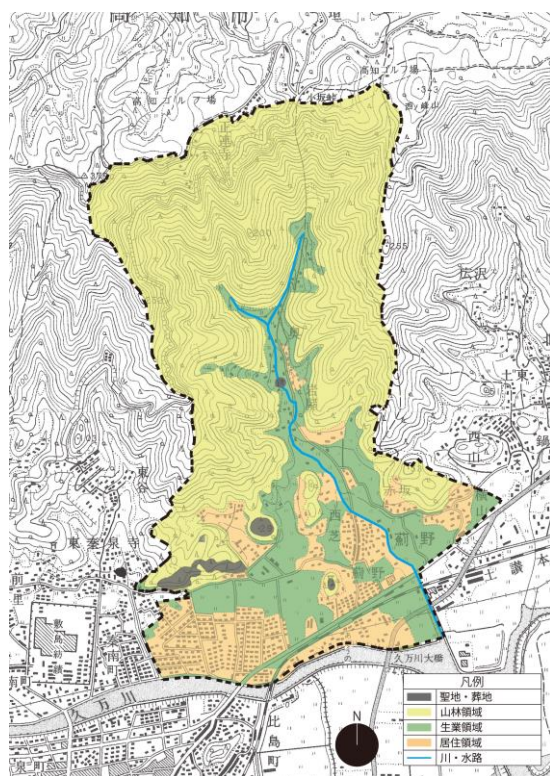


図 3.2.2.3 薊野の土地利用図(1976年)

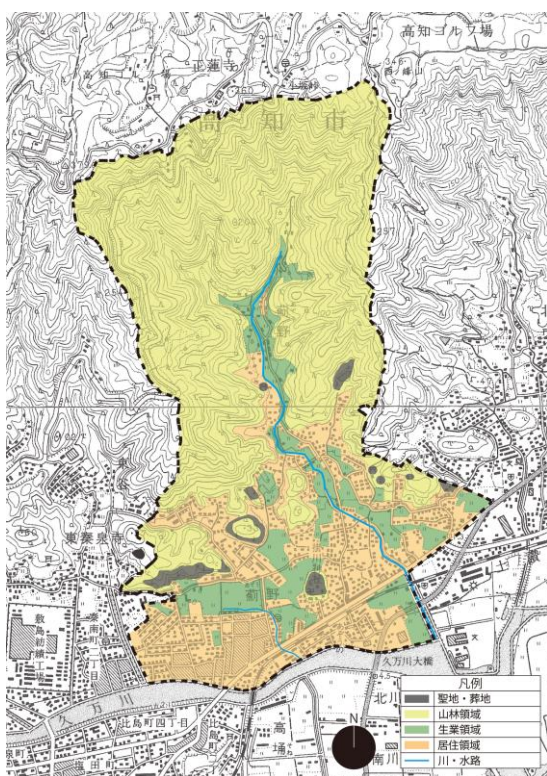


図 3.2.2.4 薊野の土地利用図(1988年)

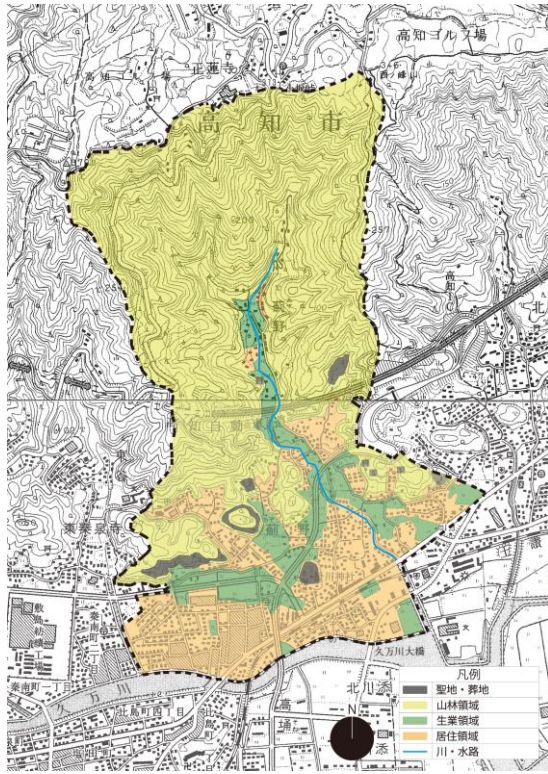


図 3.2.2.5 蕪野の土地利用図(1997年)

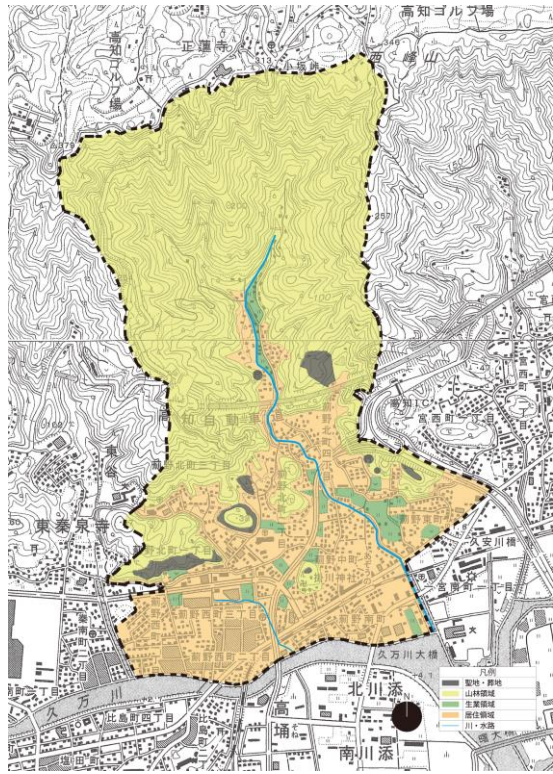


図 3.2.2.6 蕪野の土地利用図(2005年)

3-3. 薊野5大字の空間変遷

ここでは、各大字での街路変遷と土地利用変遷を見ていく。但し、使用している地図は、ゼンリンの住宅地図であり、明確に変遷を追うことができるのが1976年からであるため、1947年（原型）は2万5千分の1の地形図を使用し、住宅地図による空間変遷の調査は、1976年から1988年、2005年、2015年の4つ年にて行う。

3-3-1. 各大字の街路変遷

薊野東町

1947年の街路体系（原型）

南部に隣国とをつなぐ土佐街道（国道）が敷かれ、土佐街道からそれぞれの集落へ接続するための里道と広大な田畑を横断するための小径が伸びており、円環状の街路体系をしている。

1976年の街路体系

1976年の東町では、南側に県道（土佐街道）が走り、国道から円環の形状をもつ、聯路が敷かれている。この聯路が東町の主要な里道となり、この里道から密集住宅地や山麓部に建てられた斜面地住宅群に敷かれた騎小径、田畑内に敷かれた小径など幾つかの里道が接続している。

1988年の街路体系

聯路に沿って宅地化が進む中で、1988年には、円環を描く聯路から数個の住宅がくっついていく袋路状道路の開発が増えているのがわかる。

2005年の街路体系

大きな変化としては東町の北側に高知自動車道が敷かれている。ただ、街路体系自体には大きな変化は見られず、袋路状道路の数が若干増えている程度である。また、小径の一部が拡幅されている。

2015年の街路体系

2015年の東町も2005年の頃と同様に幾本かの袋路状道路が新設されている。また、小径の数が増えている。



図 3.3.1.1 薊野東町の街路図（原型）

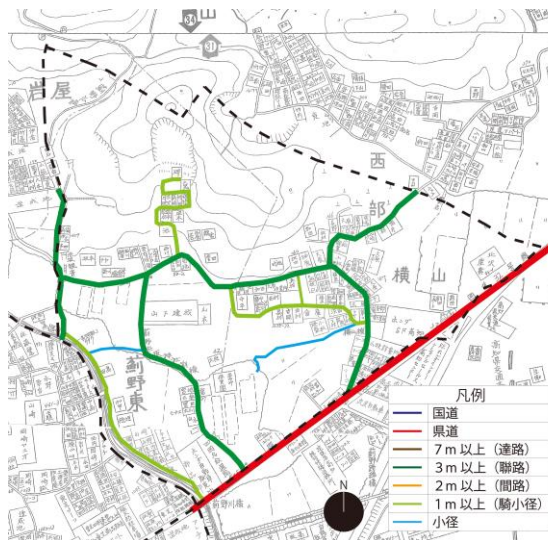


図 3.3.1.2 薊野東町の街路図（1976年）

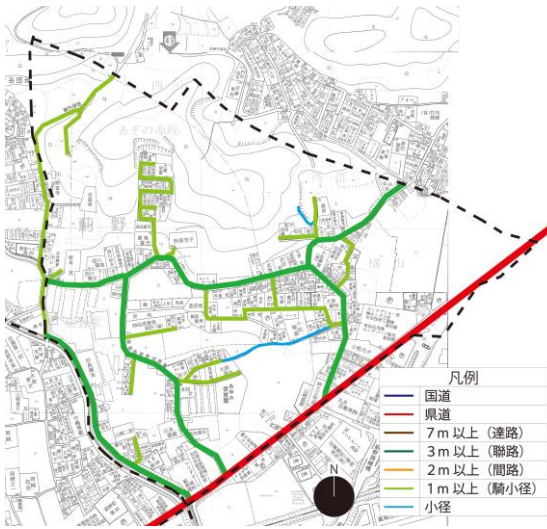


図 3.3.1.3 薊野東町の街路図 (1988年)

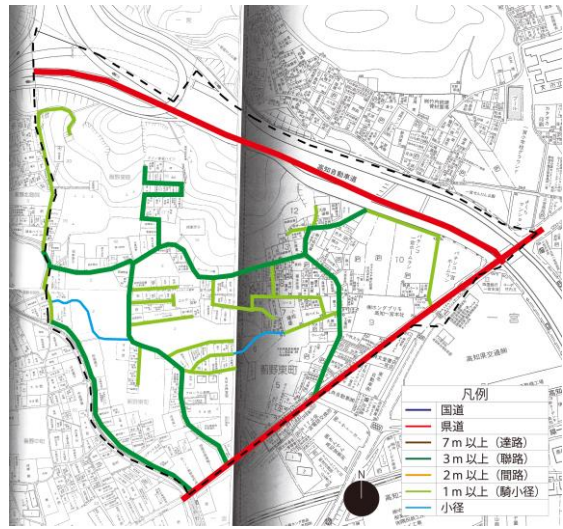


図 3.3.1.4 薊野東町の街路図 (2005年)

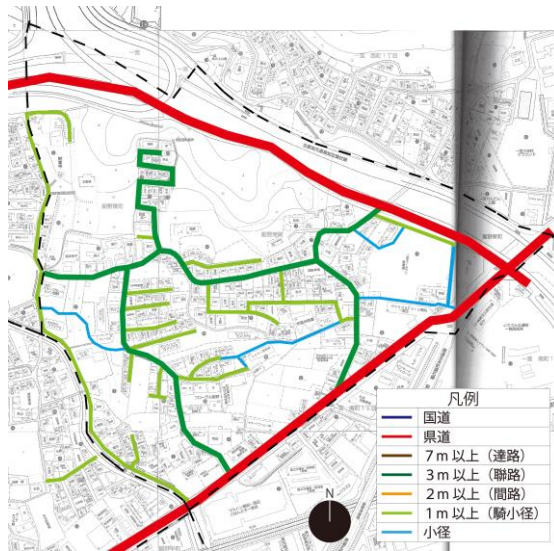


図 3.3.1.5 薊野東町の街路図 (2015年)

薊野西町

1947年の街路体系（原型）

集落が有していなかった西町に里道はなく、南部をはしる土佐街道（国道）と西町のさらに北側に設けられた広域な葬地へと導く参道、また、広大な田畑を縦横断する小径が敷かれ、それぞれに独立した役割を持つ街路が共存していた。

1976年の街路体系

急速な開発により多くの住宅が立ち並び、新設された街路が広範囲に張り巡らされている。基本的に南北方向と東西方向を結ぶ直線の街路により構成されており、グリッド体系を形成している箇所も見受けられる。ただ、形成された年代の違いや敷地形状の依存の影響により袋路状道路が多く見られたり、西町の北西部の斜めの街路が存在することで、街路体系は複雑化している。

1988年の街路体系

東側の宅地開発が進み、幾つもの新たな袋路状道路が敷かれている。

2005年の街路体系

北町との境界線状に県道44号線、住宅地を分断するように東側にはバイパスが新たに建設されている。

2015年の街路体系

北西に住宅地が開発され、新設の街路が敷かれている。また、東側には小径も見られる。

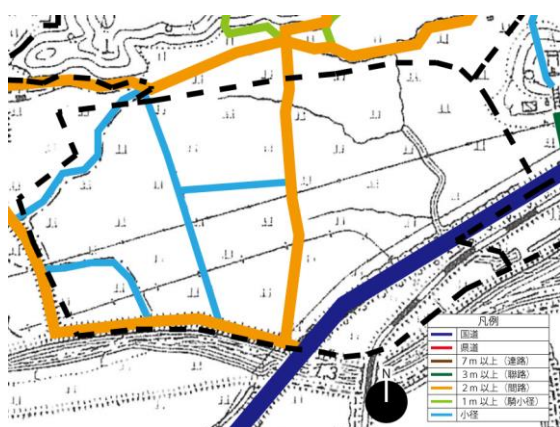


図 3.3.1.6 薊野西町の街路図（原型）



図 3.3.1.7 薊野西町の街路図（1976年）

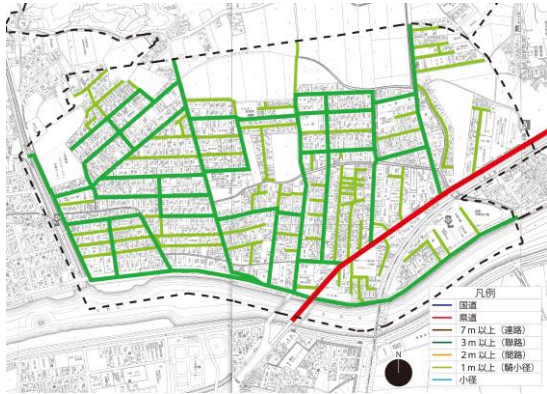


図 3.3.1.8 薊野西町の街路図 (1988年)

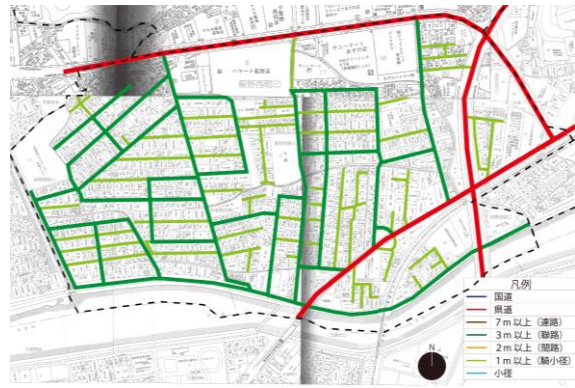


図 3.3.1.9 薊野西町の街路図 (2005年)

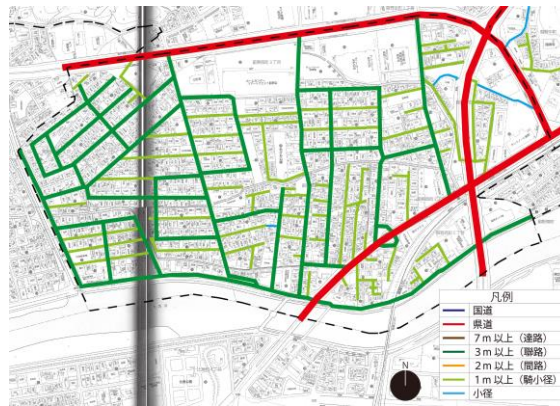


図 3.3.1.10 薊野西町の街路図 (2015年)

薊野南町

1976年の街路体系

北側に土佐街道（国道）が敷かれている。全域が田畑であった南町にはあぜ道しか敷かれておらず、東西に長いあぜ道とそのあぜ道から土佐街道に接続する2本のあぜ道が敷かれていた。

1976年の街路体系

急速な宅地化が進み、西側から宅地化が進む。また、南から東にかけて国道が設けられる。西側は住宅地として進展し、地区内街路が一気に数を増やす。一方東側では、国道沿いに商業施設が経ち広域な面積を敷地として整備しているため、街路は増えず、かつてのあぜ道は消されている。

1988年の街路体系

住宅地の数はさらに増え続け、街路の数もそれに伴い増えている。また、住宅地内の街路の幅も種類が増え、街路のヒエラルキーが生まれている。

2005年の街路体系

国道であった東側の道が県道へと変更になったこと以外は変化はあまり見られない。

2015年の街路体系

あまり変化は見られない。



図 3.3.1.11 薊野南町の街路図 (原型)

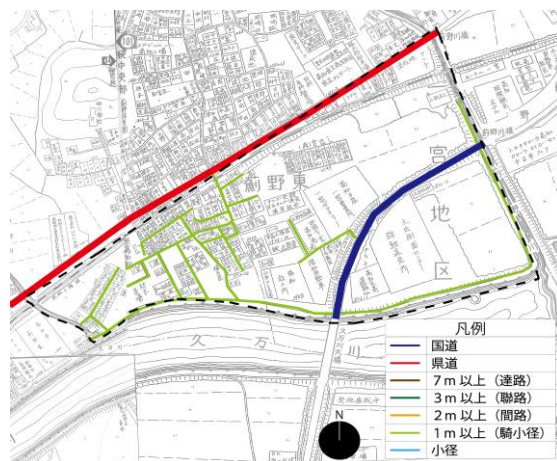


図 3.3.1.12 薊野南町の街路図 (1976年)

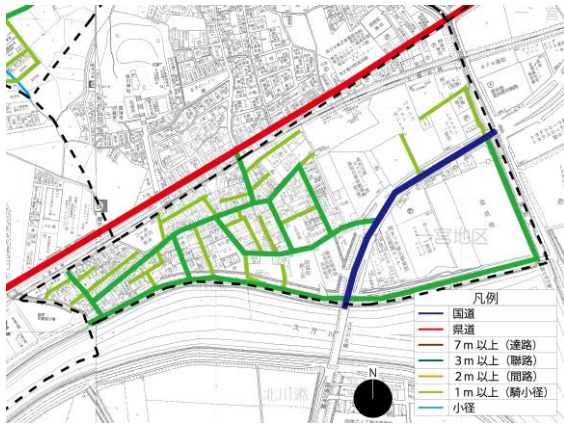


図 3.3.1.13 薊野南町の街路図 (1988年)

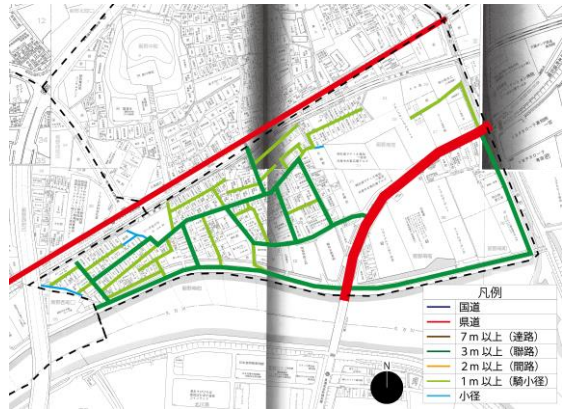


図 3.3.1.14 薊野南町の街路図 (2005年)

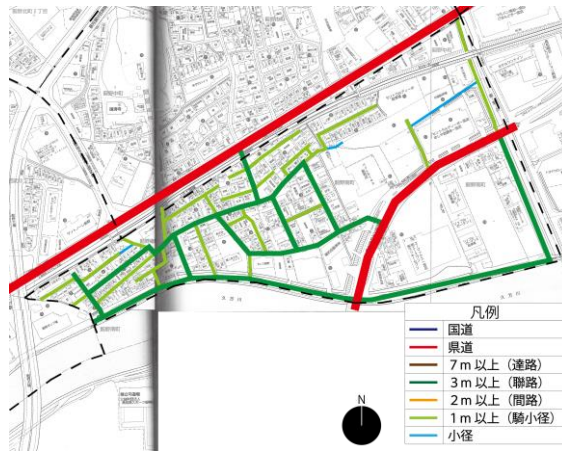


図 3.3.1.15 薊野南町の街路図 (2015年)

薊野北町

1976年の街路体系

「原型」から集落を有しており、多くの街路が形成されていた。また、北町のさらに奥には薊野の氏神である星神社が建てられており、薊野の中心を走る星神社までの主要な街路（間路）と東西から星神社へ敷かれた幾つもの里道の集束点が存在している。

1976年の街路体系

土佐軌道から距離のある北町は、スプロール現象の開始時期が遅い。1976年では、それほど宅地化進んでおらず、「原型」時に主要（間路）であった街路沿いに建築が立ち始め、それに伴い袋路などが少しずつ形成されている。

1988年の街路体系

北側と南側の低山下で宅地化が進み、街路の数を増やしている。また中央付近では、新たに小径が幾つか新設されている。

2005年の街路体系

北町の南端と東端に県道が敷かれ、それらが字界線となっている。また、北側はさらに宅地化が進み、袋路に新たな袋路が形成されている。

2015年の街路体系

局所的に新設された街路はあるものの、大きな変化は見られない。



図 3.3.1.16 薊野北町の街路図（原型）

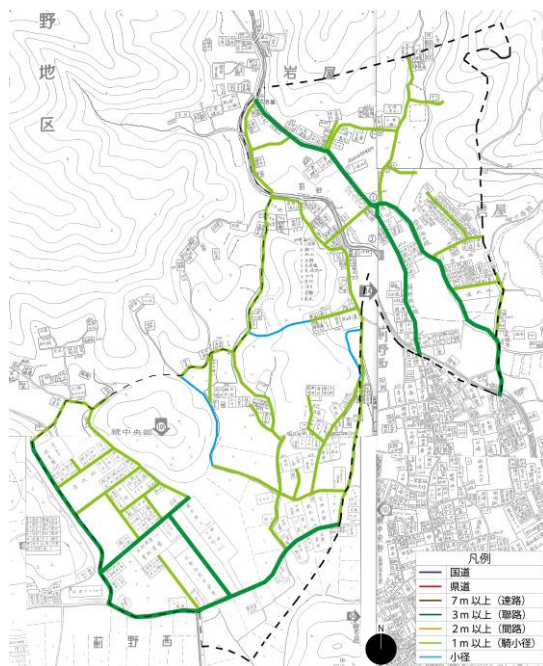


図 3.3.1.17 薊野北町の街路図（1976年）

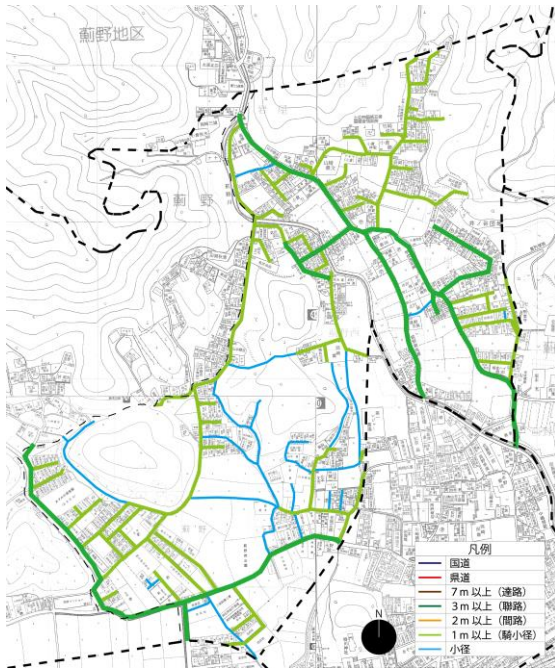


図 3.3.1.18 薊野北町の街路図 (1988年)

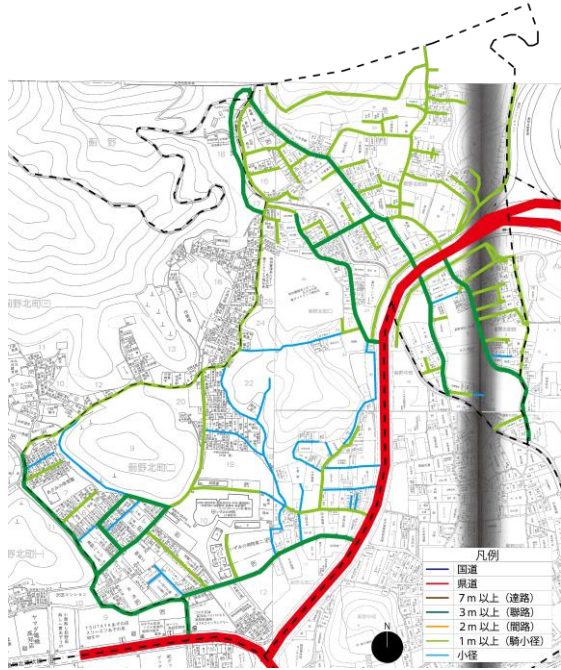


図 3.3.1.19 薊野北町の街路図 (2005年)

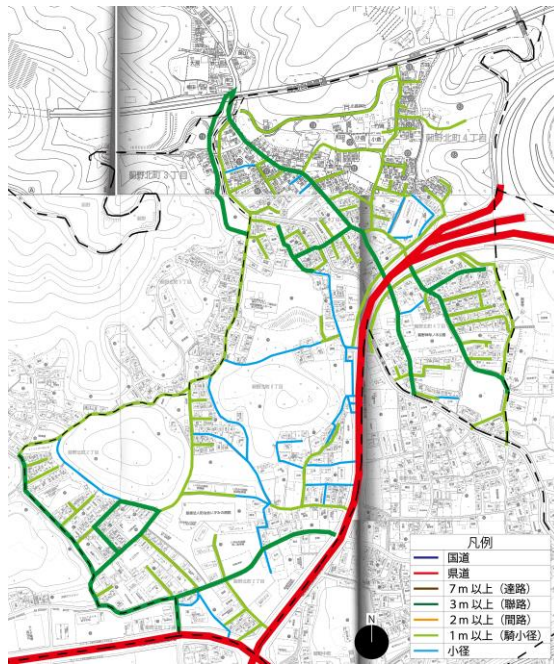


図 3.3.1.20 薊野北町の街路図 (2015年)

薊野中町

1976年の街路体系

南側に土佐街道（国道）が敷かれ、中心には、星神社まで伸びる薊野地区において主要な里道が敷かれている。また、この主要な里道からは各集落をつなぐ里道が枝分かれしており、いくつもの円環状街路が形成されている。

1976年の街路体系

急速な宅地化が進み、住宅地内には多くの街路が張り巡らされている。「原型」時に、広域な集落を有し、街路体系もある程度整備されていたため、新設されている街路は、既存街路かに接続する袋路状道路や既存街路が形成する広域な街区を細分化するようなグリッド街路が敷かれている。

1988年の街路体系

新たに袋路状道路が何本も整備され、掛川神社へつなぐ小径も敷かれている。

2005年の街路体系

一部の道路が小径として変更されているが、それ以外の変化はあまり見られない。

2015年の街路体系

2015年の中町も、街路の体系に大きな変化は見られないが、聯路や騎小径を結ぶ小径が幾つか整備されている。



図 3.3.1.21 薊野中町の街路図（原型）



図 3.3.1.22 薊野中町の街路図（1976年）

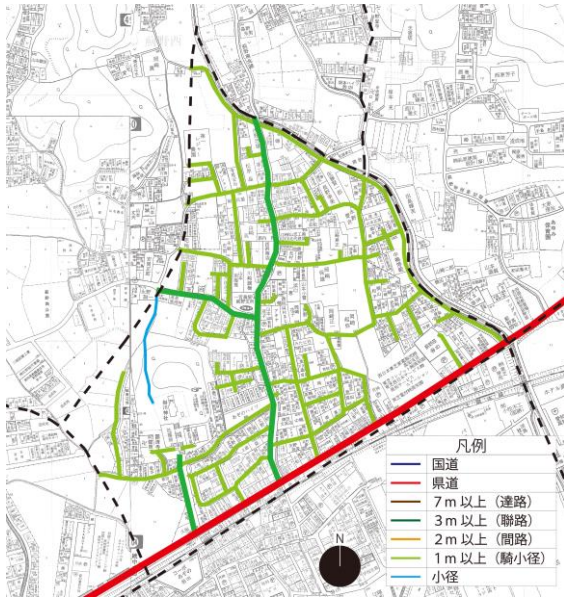


図 3.3.1.23 薊野中町の街路図 (1988年)

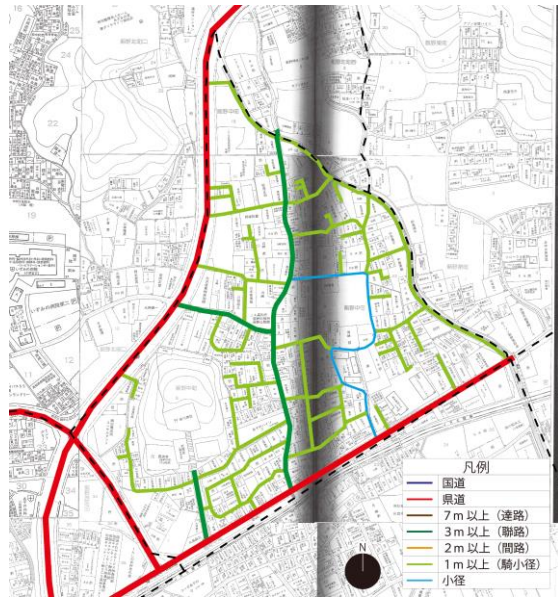


図 3.3.1.24 薊野中町の街路図 (2005年)

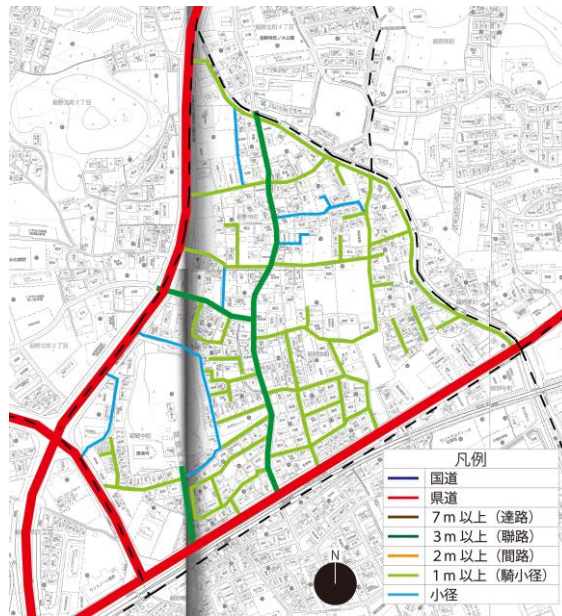


図 3.3.1.25 薊野中町の街路図 (2015年)

3-3-2. 各大字の土地利用変遷

薊野東町

1947年の土地利用（原型）

北側にそびえる山林地と南側に広がる生業領域、そして山麓部に構える2つの狭小な居住領域を有している。葬地は、東側の山麓部と中央に位置する低山の頂きの2箇所設けられており、それぞれの集落で別々のお墓を持っていたと思われる。

1976年の土地利用

山麓に位置している居住領域は徐々に面積を広げており、特に葬地を設けていた低山は整備され、宅地化されている。また、南側をはしる土佐街道沿いには、新たに居住領域が増えている。西側の山麓には赤坂観音や黙堂寺が造営され、東側の山麓には葬地が新たに設けられている。さらに、南部に残る広大な田畑を横断するように用水路が敷かれている。

1988年の土地利用

1988年では、広大な面積を占めていた田畑は、徐々に居住領域へと変容し、領域が広がり始めている。ただ、東町東部の田畑はあまり宅地化が進んでおらず、その広さを残している。

2005年の土地利用

2005年では、東町北部に高知自動車道が敷かれ、東町の領域が少しばかり圧縮される。また、1988年の頃には広く残っていた東側の田畑も、パチンコなどの商業施設へと変わり、生業領域は徐々に範囲を狭めている。さらに、居住者が急激に増加し、それに伴い、山麓部には新たに葬地が設けられ、板垣退助のお墓も斜面地住宅群の北側に設けられている。

2015年の土地利用

2015年の東町では、さらに宅地化が進み、広大な面積を占めていた田畑は、宅地化により分断され、狭小なものが散在する形となっている。

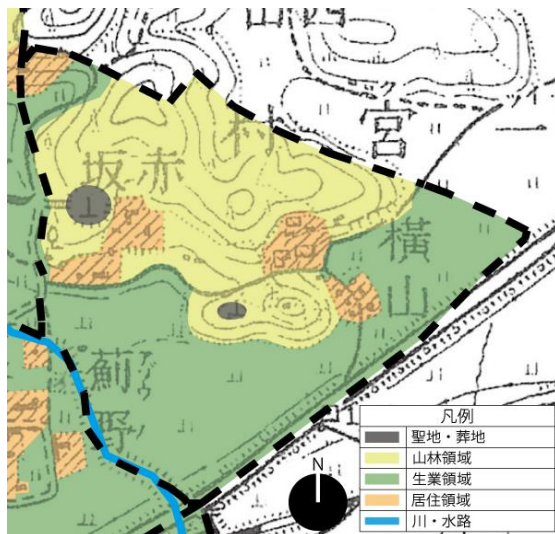


図 3.3.2.1 薊野東町の土地利用図(原型)

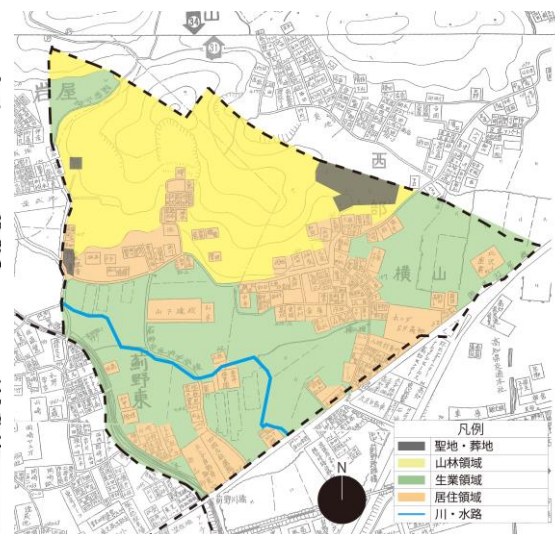


図 3.3.2.2 薊野東町の土地利用図(1976年)

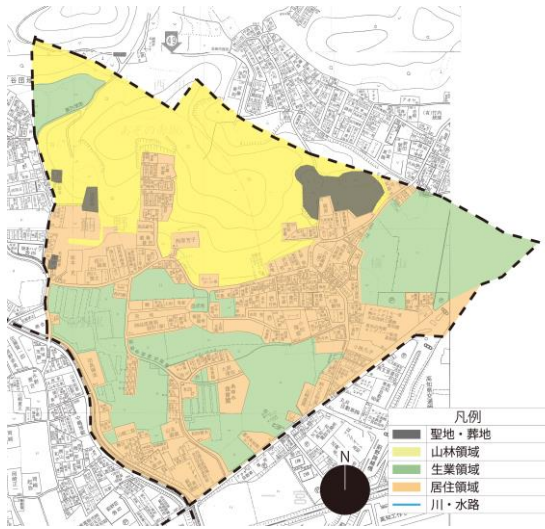


図 3.3.2.3 薊野東町の土地利用図(1988年)

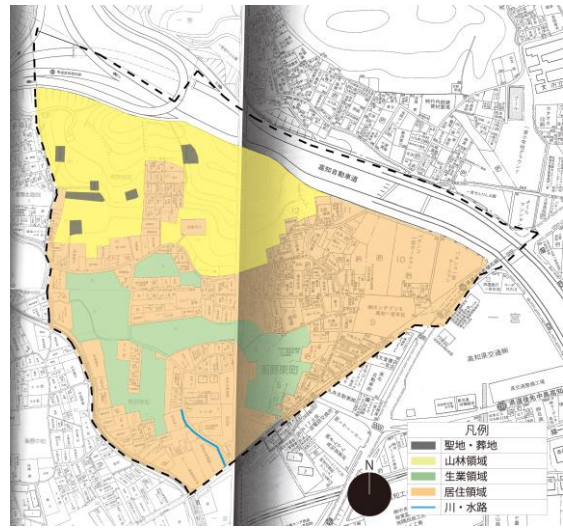


図 3.3.2.4 薊野東町の土地利用図(2005年)

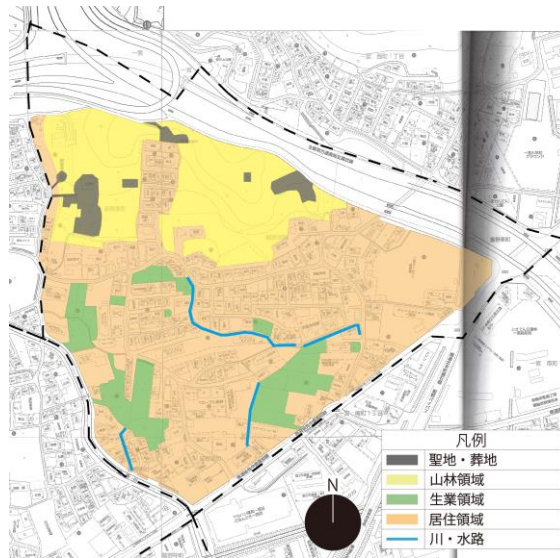


図 3.3.2.5 薊野東町の土地利用図(2015年)

薊野西町

1947年の土地利用（原型）

集落や山林地を有しておらず、「原型」時の西町は、生業領域のみであった。また、広域な田畑へ水を供給するため、幾つも分岐する水路が設けられている。

1976年の土地利用

急速な宅地化が進み、生業領域のみであった西町は、その大半を居住領域が占めている。生業領域は、宅地化の波が届いていない北側と中央に位置する3つの狭小な田畑が残るほどにまで減少している。また、広大な田畑に水を供給していた水路は、宅地化が進んでもなお、数多く残存している。

1988年の土地利用

1976年では宅地化の波が届いていなかった北側も、徐々に宅地が進み、生業領域は少しずつ減少している。

2005年の土地利用

西町の北部に県道が敷かれたことで、県道沿いには大規模な商業施設が建設される。唯一残存していた北側の広大な生業領域は、一気に居住領域へと変容する。また、中央部に残っていた田畑もそのほとんどが住宅地へと姿を変えている。

2015年の土地利用

東側に残っていた田畑も食いつぶされ、1947年時、生業領域のみであった西町は、ほぼ宅地化され、残存している生業領域は中央の南北に長い田畑のみとなった。

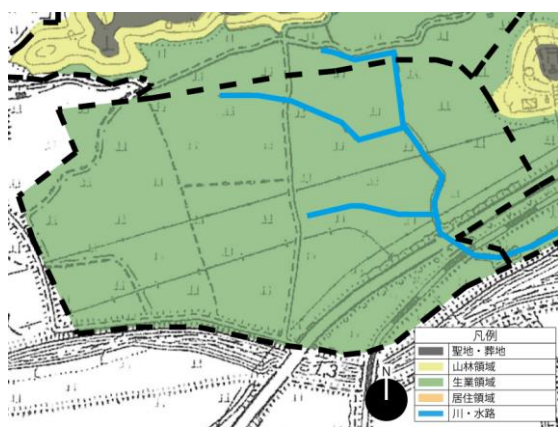


図 3.3.2.6 薊野西町の土地利用図(原型)

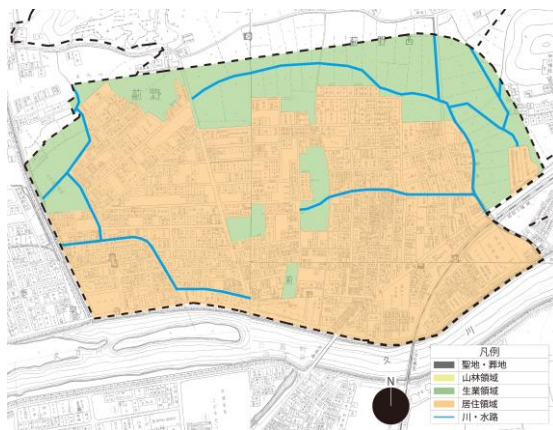


図 3.3.2.7 薊野西町の土地利用図(1976年)

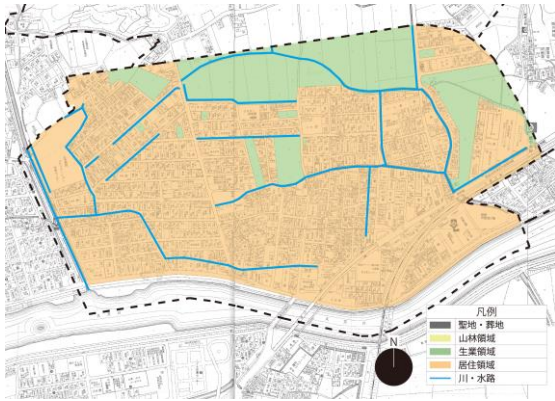


図 3.3.2.8 蕪野西町の土地利用図(1988年)

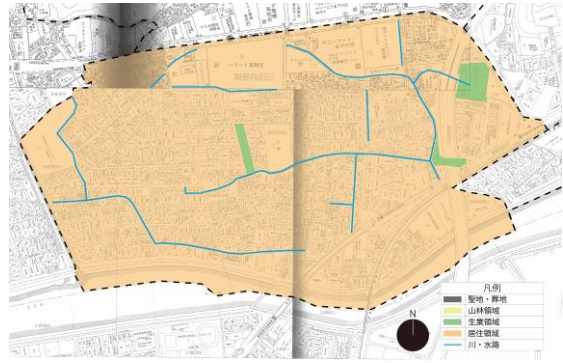


図 3.3.2.9 蕪野西町の土地利用図(2005年)

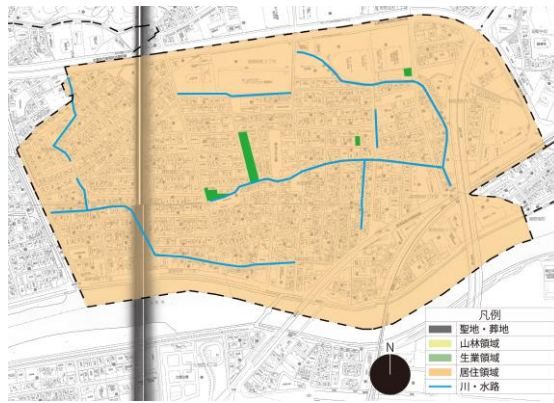


図 3.3.2.10 蕪野西町の土地利用図(2015年)

薊野南町

1947年の土地利用（原型）

南端に久万川が東端には薊野川が流れ、北端は鉄道と土佐街道が敷かれている。領域を分けるような線で囲まれている南町は集落を有しておらず、田畑のみが広がる地域であった。

1976年の土地利用

土佐街道が北端に敷かれていること、比較的市街地に近い立地であることで、土佐街道沿いから中央に向け早くから宅地化が行われている。また、南から東に国道が敷かれ、その街路に沿って大規模な建築が建ち始める。

1988年の土地利用

一気に宅地開発が進み南町全体を埋め尽くす。それでもなお土佐街道と市街地から離れた東側では辛うじて田畑を残す。

2005年の土地利用

辛うじて残っていた田畑も少しずつ宅地開発により面積を狭めている。

2015年の土地利用

大きな土地利用の変化は見られない。

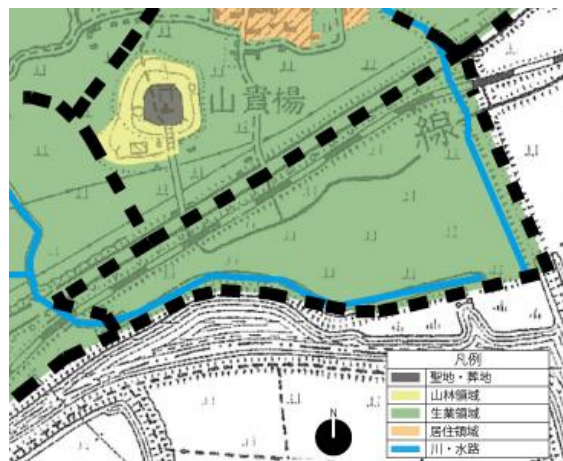


図 3.3.2.11 薊野南町の土地利用図(原型)



図 3.3.2.12 薊野南町の土地利用図(1976年)

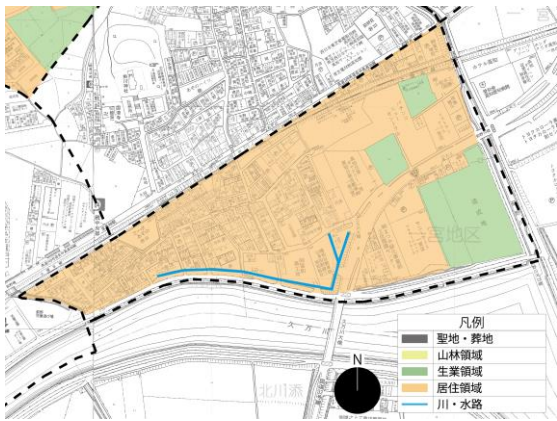


図 3.3.2.13 蕪野南町の土地利用図(1988年)

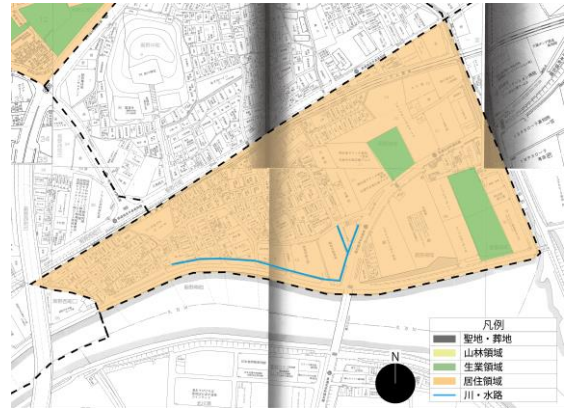


図 3.3.2.14 蕪野南町の土地利用図(2005年)

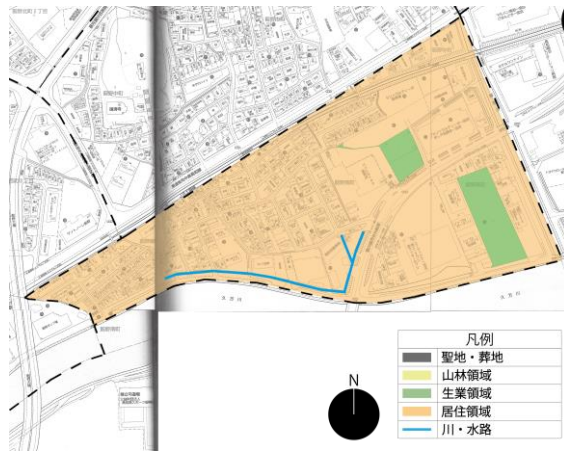


図 3.3.2.15 蕪野南町の土地利用図(2015年)

薊野中町

1947年の土地利用（原型）

北町では、北奥の岩屋村と縦長の低山山麓に構える西芝村の2集落を有していた。また、西側にある低山には住民たちの葬地が設けられていた。北町では、西から北、東にかけて山に囲まれており、地区内には低山と薊野川が流れ、幾つかの領域が存在していた。

1976年の土地利用

土佐街道から距離を置く北町では、急速な宅地開発は行われず、多くの田畑が残存する。また、「原型」時に多くの街路を有していたことで、宅地開発は一点に集中せず、まばらに行われている。

1988年の土地利用

1988年になると周辺の町の急速な宅地化が陰りを向かえ始め、すでに街路が多く敷かれていたこともあり、宅地化が進み始める。1976年多く残っていた田畑の領域も急速に面積を狭めている。

2005年の土地利用

その後も宅地化が進み狭小な田畑が散在するまで居住領域が浸食している。また、南北に長い低山の北側には老人ホーム建設のため土地整備が行われており、一部消滅している。

2015年の土地利用

2005年までに広範囲に宅地が行われたため、浸食速度は緩やかになっているが、多くの田畑は面積を削られている。

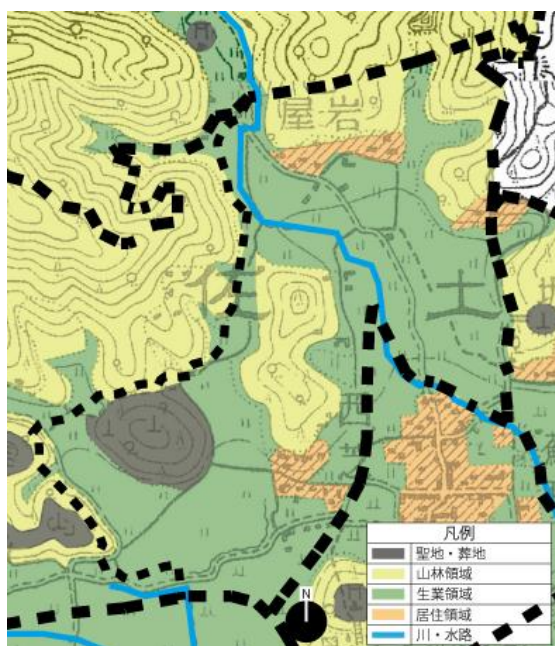


図 3.3.2.16 薊野北町の土地利用図(原型)

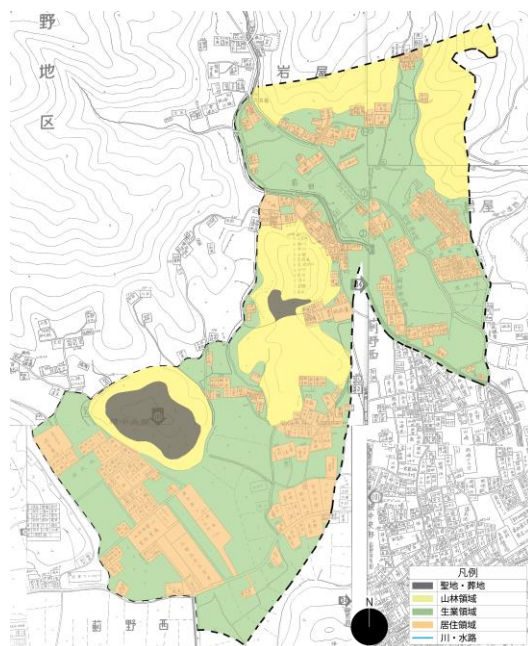


図 3.3.2.17 薊野北町の土地利用図(1976年)

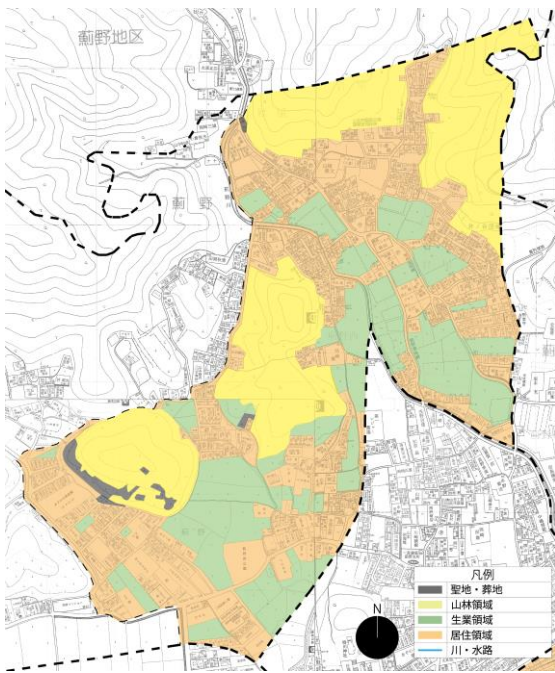


図 3.3.2.18 蕪野北町の土地利用図(1988年)

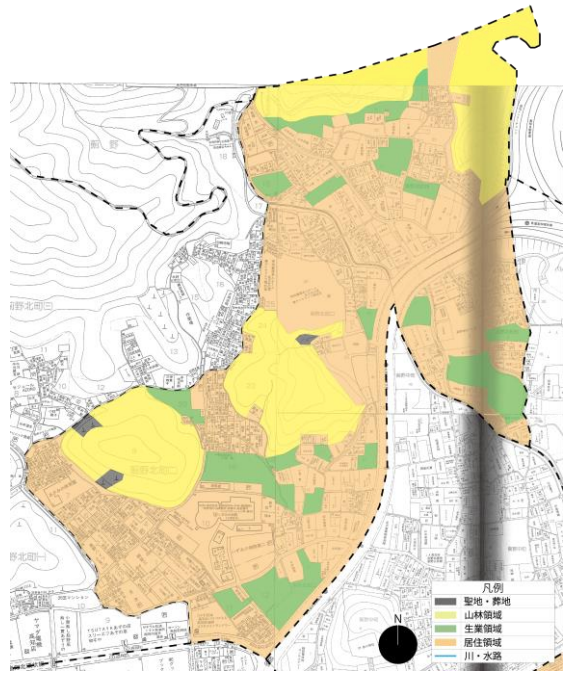


図 3.3.2.19 蕪野北町の土地利用図(2005年)

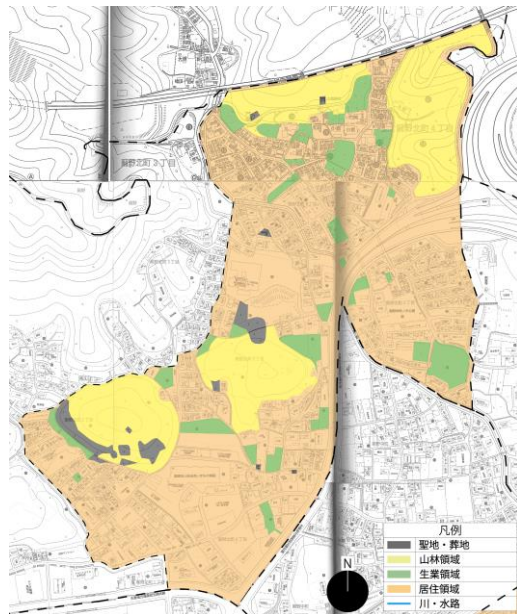


図 3.3.2.20 蕪野北町の土地利用図(2015年)

薊野中町

1947年の土地利用（原型）

背後に構える山林地や葬地はなく、広大な生業領域と田畑に囲われた広域な居住地域が存在していた。また、南側には高知城の鬼門鎮護として祀られている掛川神社が、陽貴山という低山に造営されている。

1976年の土地利用

一気に進んだ宅地化により、その大半を居住領域が占めている。西側は、未だ宅地化されておらず南北にかけて田畑が残っている。東側もほぼ居住領域が占めているが局所的に田畑が見られる。

1988年の土地利用

1976年からの変化はあまり見られない。また、かつて使用されていた水路が、住宅地内に多く残存している。

2005年の土地利用

北町との字界に県道が敷かれたことで、県道沿いの宅地化が進み、生業領域は急速に減少している。南北に長かった田畑は、局所的な宅地化により分割されている。

2015年の土地利用

生業領域は若干減少しているものの、大きな土地利用の変化は見られない。

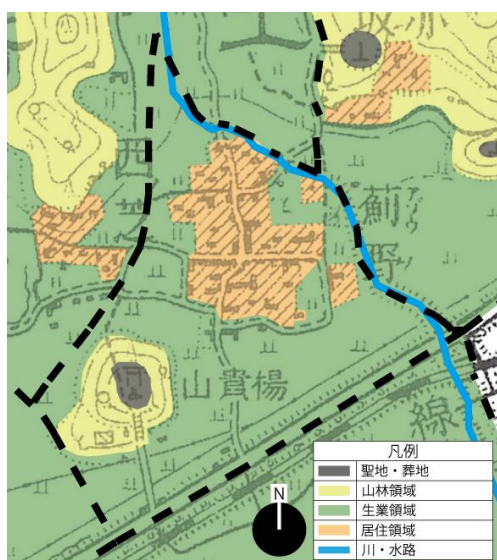


図 3.3.2.21 薊野中町の土地利用図(原型)

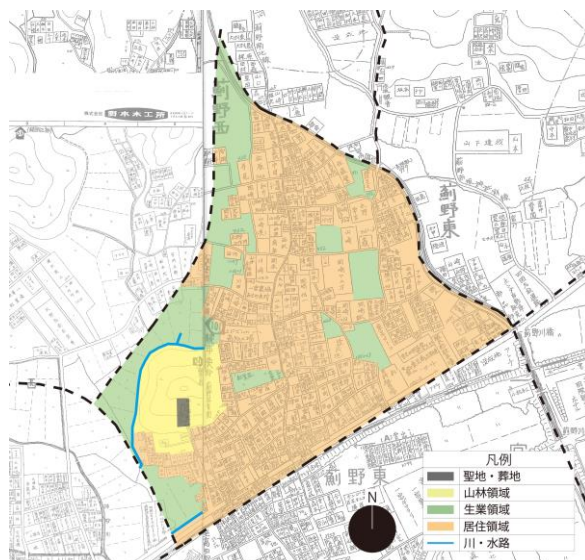


図 3.3.2.22 薊野中町の土地利用図(1976年)

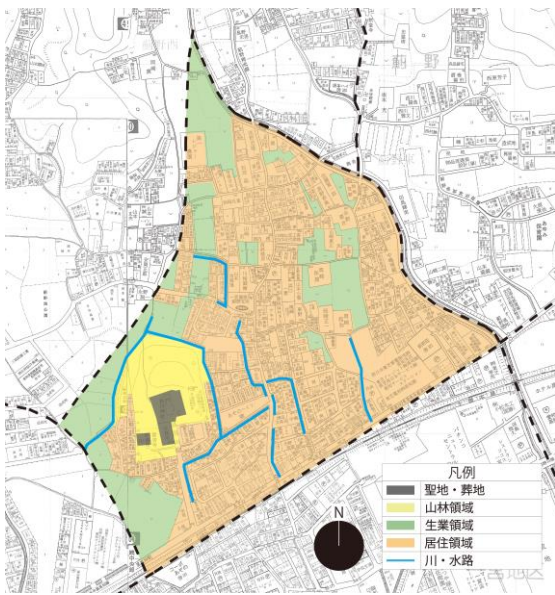


図 3.3.2.23 蕪野中町の土地利用図(1988年)

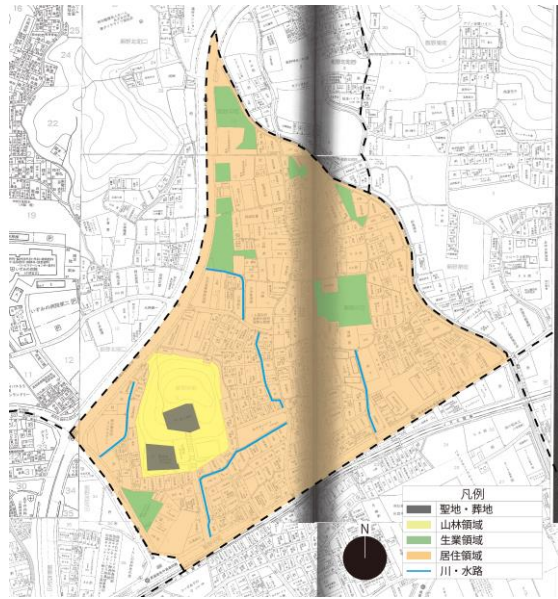


図 3.3.2.24 蕪野中町の土地利用図(2005年)

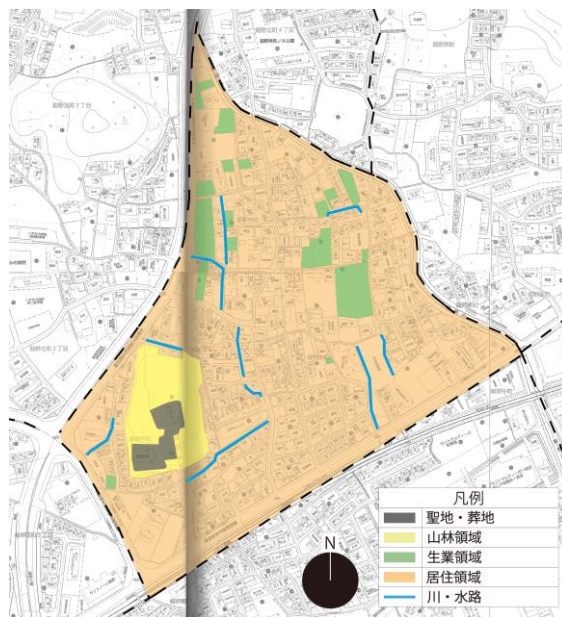
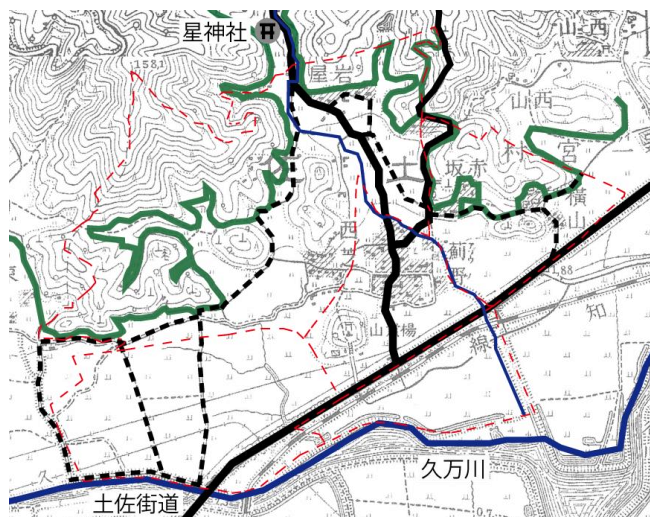


図 3.3.2.25 蕪野中町の土地利用図(2015年)

第4章 薊野における「原型」とスプロール現象の重なり

4-1. 「原型」空間の構成

ここでは、薊野の「原型」空間の特質を分析していく。分析方法としては、1.領域、2.軸、3.中心、4.道、5.水の5つ項目により空間分析を行う。1.領域では、山（低山）などの性質の異なる領域や河川、都市機能を有する街路などの領域を分断するような線といった異質な空間のエッジの抽出を行っている。2.軸では、基本的にはその地区の主要な道のことであり、地区内に方向性を生み出すような要素である。3.中心では、神社やお寺といった地区内にある求心性を持つ建物や主要な道が交錯する場所のことであり、日常の核であり特殊な場のことである。4.道では、街路のパターンを示したものである。5.水では、水路や河川のことを示す。これら5つの項目で示した「原型」空間の特質を、薊野全域で図式化による分析を行ったのちに、大字ごとに取り出しさらに分析を行っている。



↓図式化

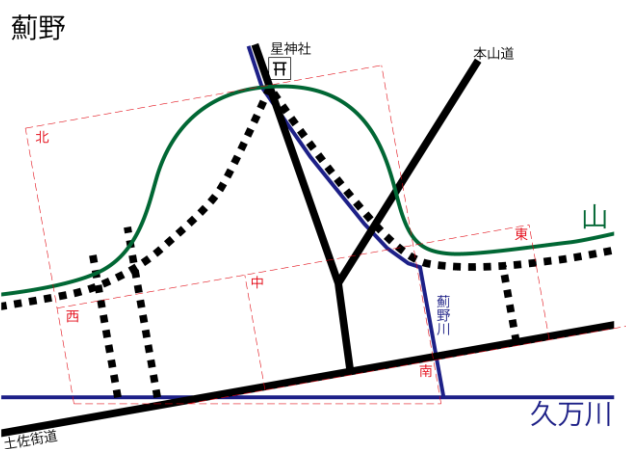


図 4.1.1.1 「原型」空間の図式化

薊野全域

1.領域としては、北側にそびえる山と南側に流れる久万川に挟まれた地域である。また都市機能を持つ土佐街道が東西方向に敷かれ、薊野川が久万川から北に流れている。これらにより幾つかの領域に分けられている。2.軸では、参勤交代のために設けられた土佐街道から氏神を祀る星神社へと伸びる主要な街路と庶民が隣国へと渡るための本山道が分岐するY字の軸を持つ。3.中心では、北端に位置する星神社へと幾つもの里道が集約する場と星神社への主要道と本山道が分岐する場の2点を持つ。4.道では、東西に敷かれた土佐街道から北へと伸びる主要な2本の街路と、集落から星神社へとつなぐ里道による体系をしている。5.水では、南端を流れる久万川、南北にながれる薊野川を有していた。

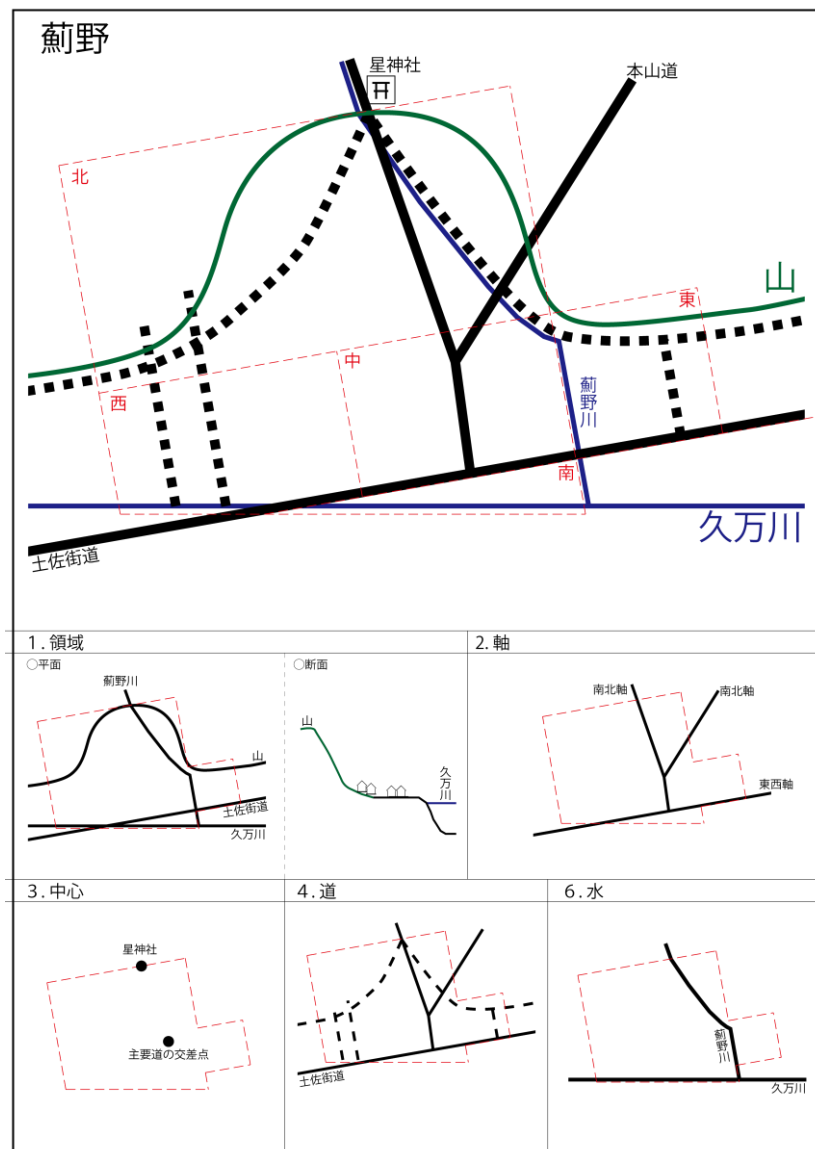


図 4.1.1.2 薊野全域の特質

薊野東町

1.領域としては、北側にそびえる山と西側に流れる久万川、南端の土佐街道に囲まれた領域である。東側にはエッジとなるものがないため閉鎖的にならない。また、東町の中央部には墓地を有する低山が位置していた。2.軸では、星神社へと伸びる南北軸の里道とその里道と土佐街道をつなぐ南北の軸を有していた。3.中心に関しては、存在していない。4.道では、星神社へとつなぐ里道とその里道と土佐街道をつなぐ里道を有しており、また南北の里道から薊野川に向かうあぜ道が設けられていた。5.水では、西端を流れる薊野川が領域のエッジとなっている。

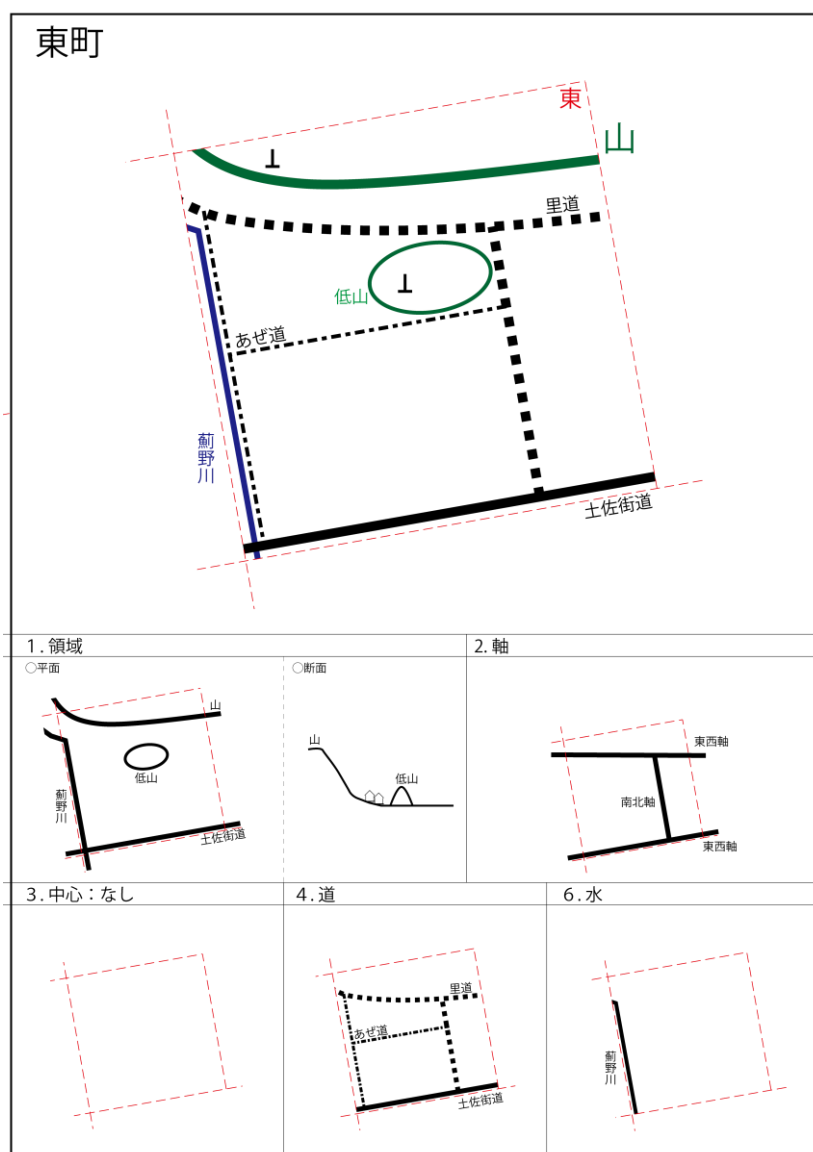


図 4.1.1.3 東町の特質

薊野西町

- 1.領域としては、南端に流れる久万川と土佐街道によるエッジはあるが、囲まれた領域は存在しない。どこまで広がるような広々とした空間となっている。
- 2.軸では、葬地へと伸びる山道による2本の南北軸を有している。
- 3.中心に関しては、存在していない。
- 4.道では、領域のエッジとして存在する土佐街道と葬地をつなぐために敷かれた2本の参道
- 5.水では、南端を流れる久万川が土佐街道と同様に南端の領域のエッジとなっている。

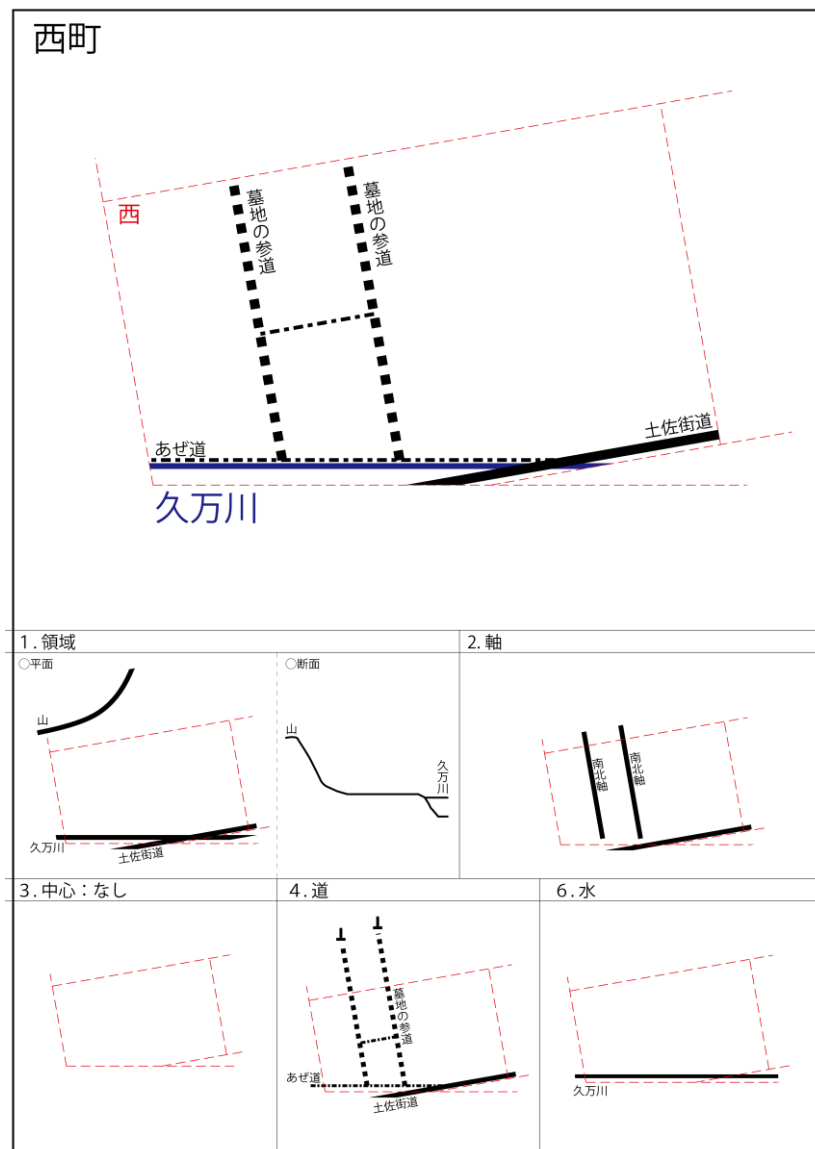


図 4.1.1.4 西町の特質

薊野南町

1.領域としては、北端に土佐軌道が敷かれ、東側には薊野川、南端には久万川が流れており、周囲をエッジが取り囲んでいる。そのため南町は閉鎖的な領域となっている。北側にそびえる山と西側に流れる久万川、南端の土佐街道に囲まれた領域である。2.軸では、土佐街道による東西軸と地区内のあぜ道による東西軸の2本が平行に並んでいる。3.中心に関しては、存在していない。4.道では、東西方向に長い地区を横断するために東西に設けられたあぜ道が敷かれそのあぜ道から土佐街道と行き来できるように数本のあぜ道が土佐軌道と接続している。5.水では、南端を流れる久万川と東端を流れる薊野川が領域のエッジとなっている。

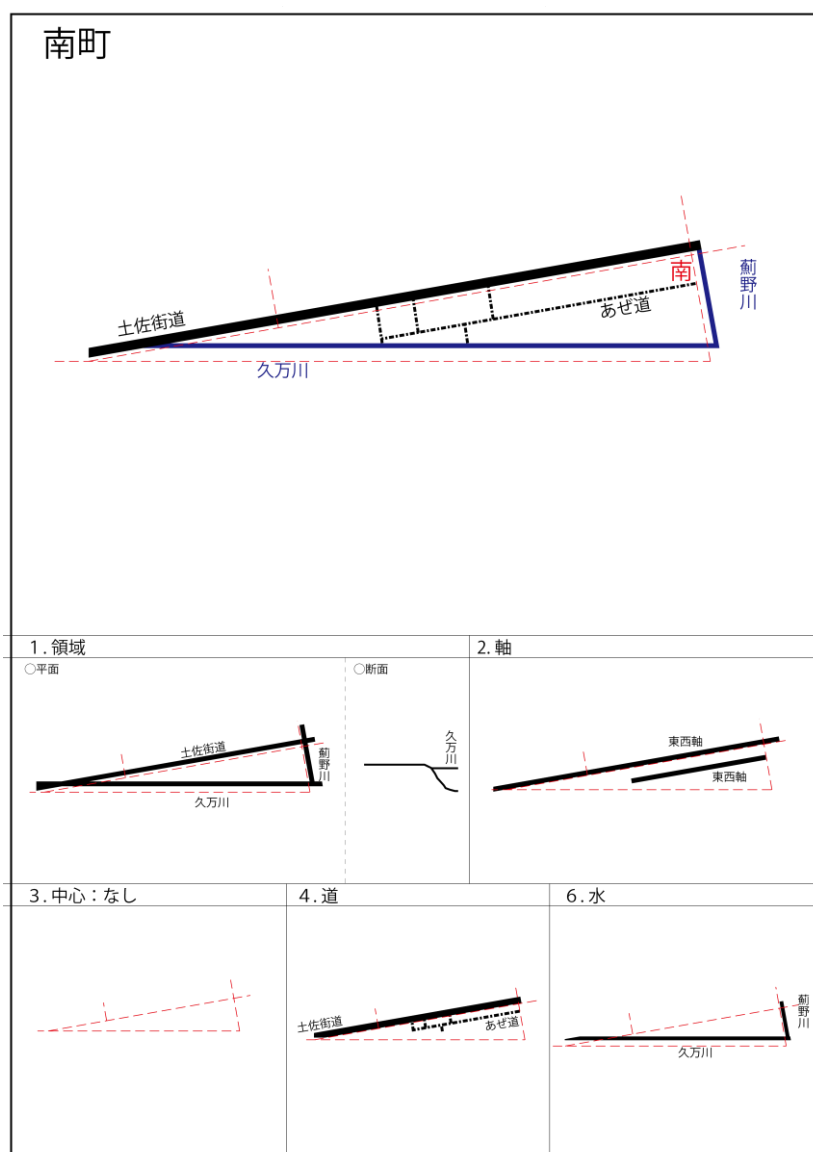


図 4.1.1.5 南町の特質

薊野北町

1.領域としては、北側にそびえる山が弧を描いており、三方を山が囲っている。また、薊野川が星神社奥まで流れ、2つの低山を有している。そのため、低山自体が性質の異なる領域を生み出す上に、2つの低山と山に囲まれた領域や低山と山と薊野川で囲まれた領域というように、北町の中に幾つもの狭小な領域を形成している。2.軸では、星神社へと伸びる主要な街道と里道により放射状の軸線を有している。3.中心では、北町の奥に星神社の存在とそこに向け各集落から敷かれた幾つもの里道が集約する場が存在する。4.道では、中心から各集落へ伸びる里道が放射状を形成している。5.水では、中央を流れる薊野川が領域のエッジとなっている。

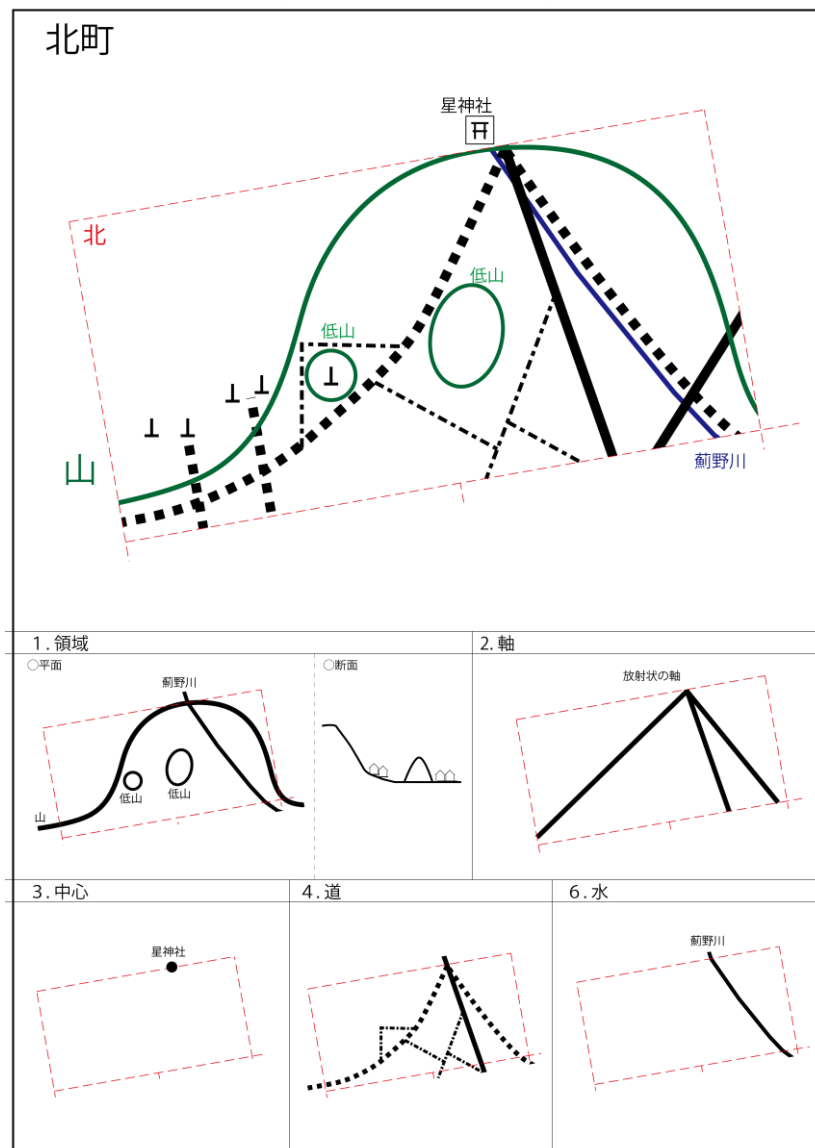


図 4.1.1.6 北町の特質

薊野中町

1.領域としては、南端の土佐街道が走り、東端は薊野川が流れている。また、掛川神社が建つ陽貴山という低山や北町の縦長低山により、閉鎖的ではないが囲まれた領域を有している。2.軸では、土佐街道の東西軸と星神社へと伸びる南北軸軸を有している。3.中心にでは、星神社へと導く主要な街道と隣国とを結ぶ本山道が分岐する場が存在し、各所から遠出する庶民が集い、かなり賑わいのある薊野の中心となっていた場であった。4.道では、星神社へとつなぐ街路と本山道が軸となりその街路に幾つもの東西方向の街路が接続するあみだ型をしている。5.水では、東端を流れる薊野川が領域のエッジとなっている。

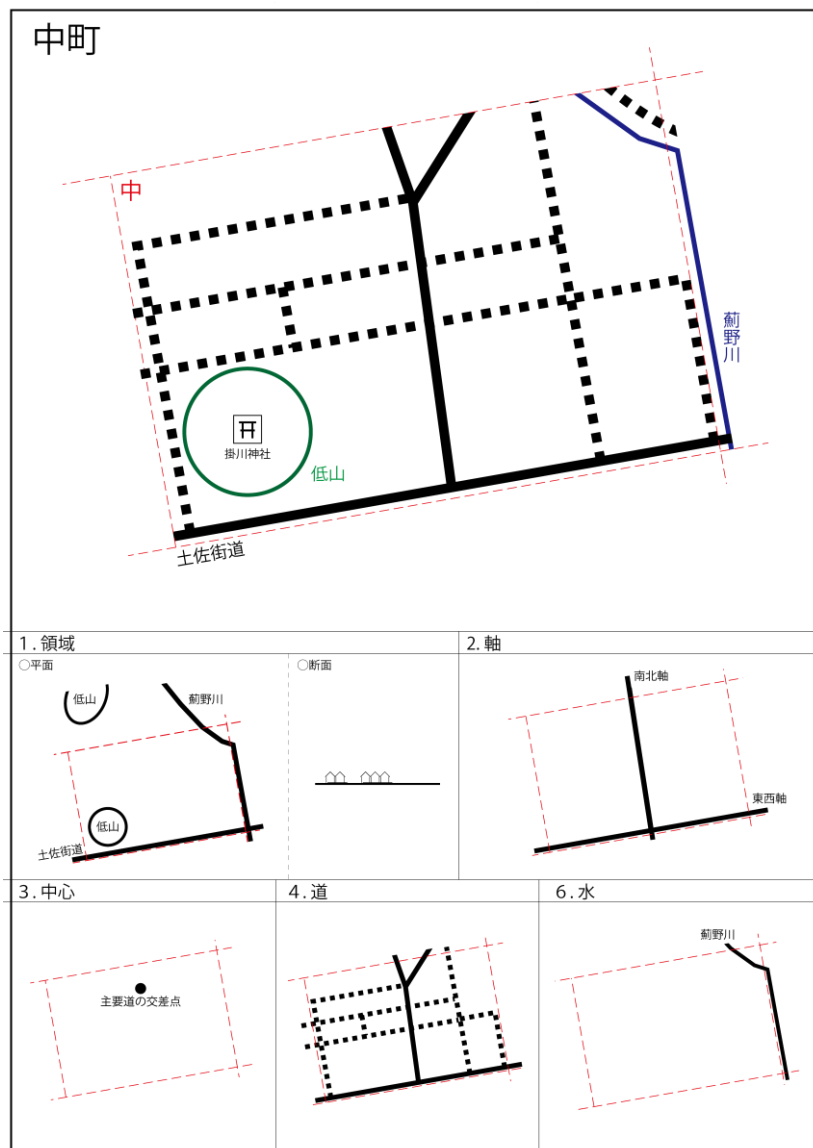


図 4.1.1.7 中町の特質

4-2. 薊野の街路体系と街区形状

薊野の「現在型」空間を街路体系と街区形状の観点で分析する。街路体系では、原型の街路体系、原型と新設の重なる街路体系の2項目による分析を行い、街区形状では、街区長における原型線と新設線の割合と原型線と街区の形状との関係性を見ていく。

4-2-1. 薊野の街路体系

薊野東町

原型の街路体系

薊野東町において南端には高知市街地と他国とをつなぐ土佐街道が走り、そこから弧を描くように山麓集落に向け里道が敷かれている。原型の街路の多くは不規則に湾曲が繰り返される曲線街路であり、街路体系としては東町の全域にわたりループを形成している。

現在型の街路体系

全域にわたりループを描く原型の街路が東町の骨格街路として機能し、その街路にいくつもの袋路の新設街路が接続する形となっている。

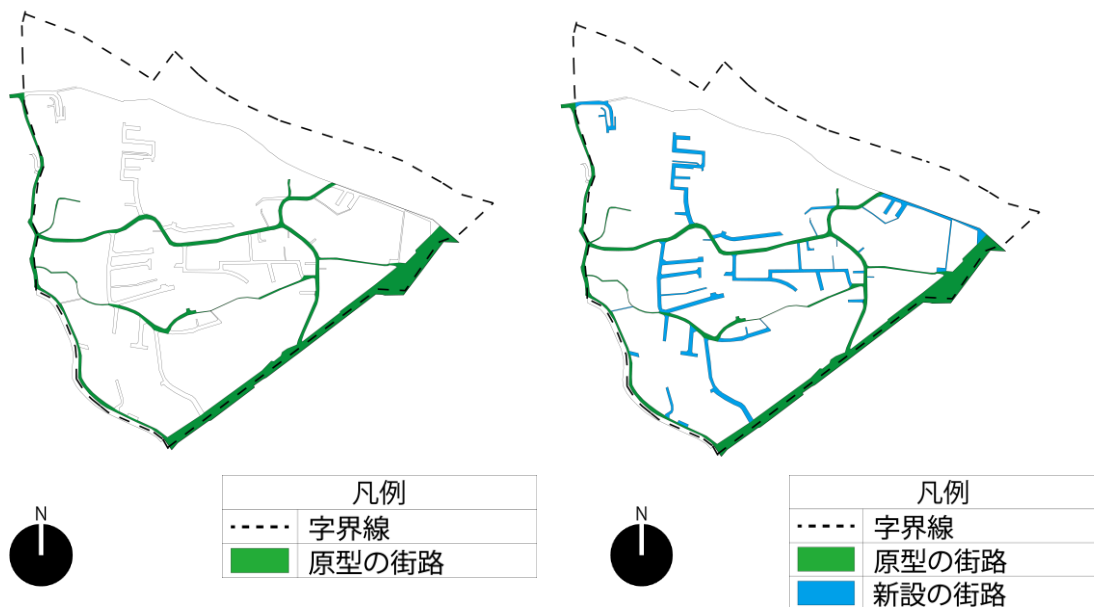


図 4.2.1.1 原型の街路体系（東町）

図 4.2.1.3 現在型の街路体系（東町）

薊野西町

原型の街路体系

南端の川沿いに敷かれた東西に長い街路から東方向に敷かれた土佐街道と北方向に伸びる葬地への2本の参道のみであった。基本的に参道は直線的な形態をしており、街路体系としては地区外にわたり巨大なループを形成している。

現在型の街路体系

南北に敷かれた2本のかつての参道が、通過交通のための街路となっている。また、西町自体が広域なため、2本の参道の東西には新設街路により袋路やハモニカ体系やグリッド体系が形成されている。



凡例	
-----	字界線
■	原型の街路
■	原型の水路



図 4.2.1.4 原型の街路体系（西町）



凡例	
-----	字界線
■	原型の街路
■	原型の水路
■	新設の街路



図 4.2.1.5 現在型の街路体系（西町）

薊野南町

原型の街路体系

北端に敷かれた都市機能の土佐街道と南端から東端にかけ川沿いの道により南町という領域を原型の街路が縁取っている。また、南町の中心を東西に敷かれた里道から土佐街道や南端の川沿いの道をつなぐ幾つもの里道が、結果として小規模なループを作り出している。

現在型の街路体系

宅地化が進み出すよりも前に、まず鉄道が南町の北端に敷かれる。都市機能の土佐街道と河川が四周に取り巻き、そのうえ鉄道が敷かれたことで南町は孤立する。

街路体系としては、原型の街路を骨格に新設街路が新たなループを幾つも形成している。また、県道が敷かれたことで、南町の東は準工業地域となり工場や商業施設が集まる。そのため、住宅が密集する西と工場・商業地の東では別世界の風景を作り出している。

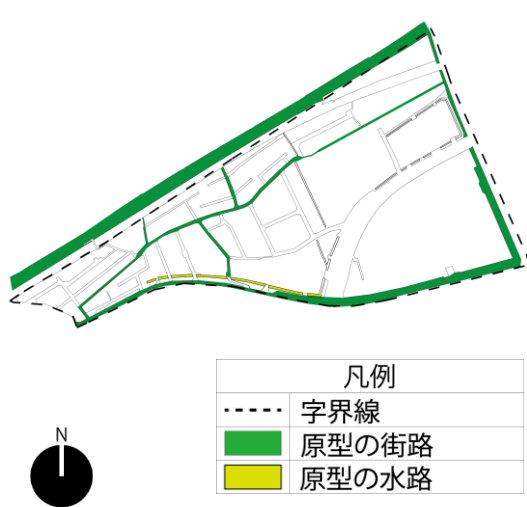


図 4.2.1.6 原型の街路体系（南町）

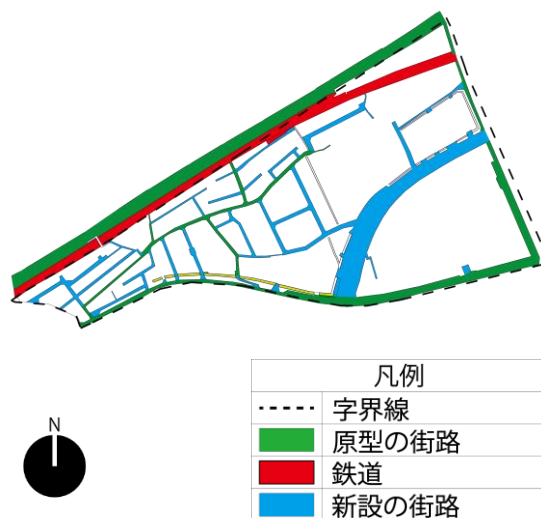


図 4.2.1.7 現在型の街路体系（南町）

薊野北町

原型の街路体系

北町のさらに奥には、薊野の氏神を祀る星神社が造営されている。そのため、土佐街道から星神社へと敷かれた薊野の主要な街路と山麓部などに散在する幾つもの集落から星神社へ向けて敷かれた里道が北町の北端で集約する。そのため、多くの曲線街路が形成されており、街路体系としては放射状を構成している。

現在型の街路体系

原型の街路が多く敷かれていたため、新設の街路は街区を細分化するか袋路が形成される。特に北町では、小規模な袋路が多く見られ、また、すでに整備されている袋路にさらに袋路が直行方向に接続している領域も多く見られる。



図 4.2.1.8 原型の街路体系（北町）

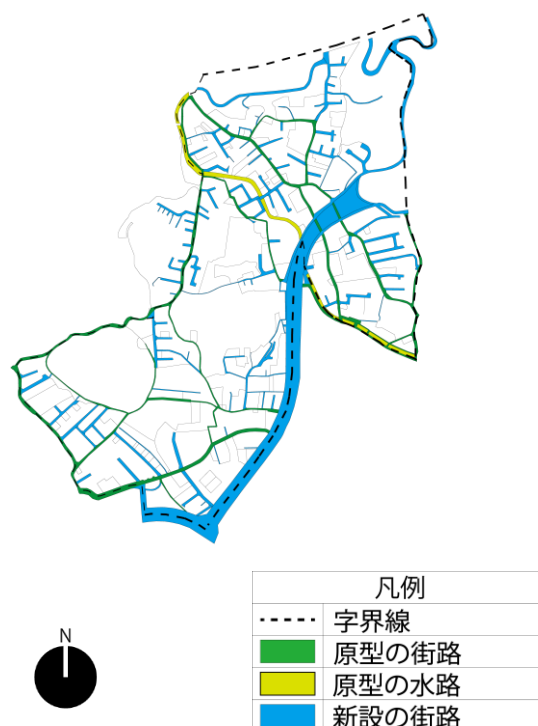


図 4.2.1.9 現在型の街路体系（北町）

薊野中町

原型の街路体系

南端の土佐街道から北へと伸びる骨格街路が走り、その街路から枝分かれしている幾つものループ接続している。また、原型依存の街路の多くは、曲線形状をしている。

現在型の街路体系

土佐街道から北に伸びる骨格街路とそこから枝分かれるいくつものループ街路により、地区内の基本的な街路体系が原型依存の街路で形成されている。そのため、新設の街路は、より多くの住宅を開発するため、原型依存の街路から中心に向け袋路を設けるか、街区を細分化するような計画が行われている。

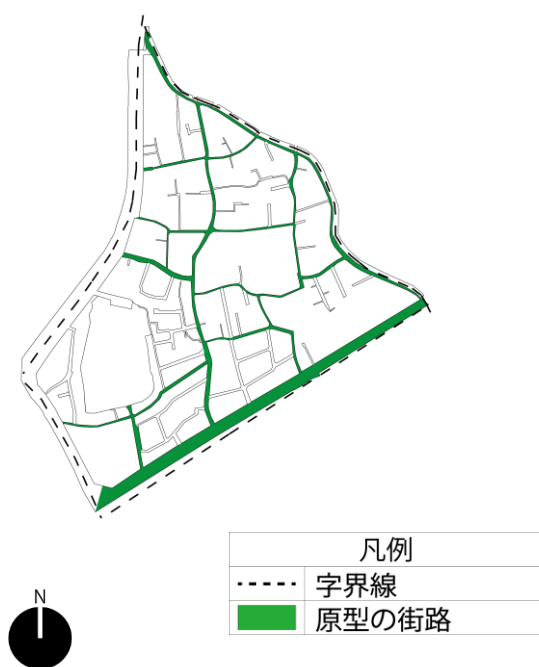


図 4.2.1.10 原型の街路体系（中町）

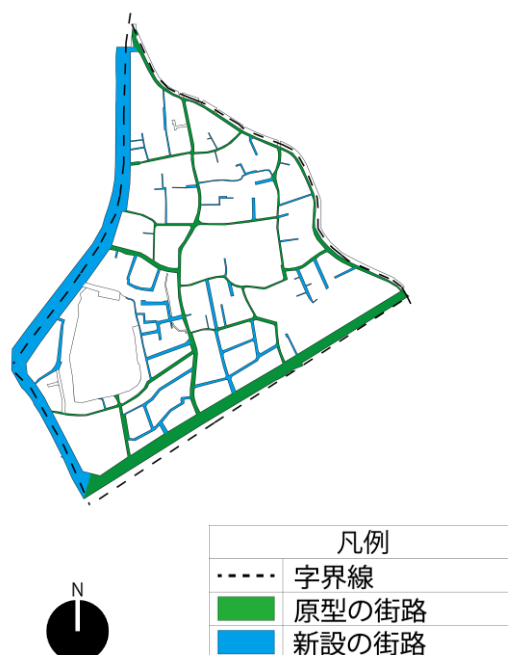


図 4.2.1.11 現在型の街路体系（中町）

4-2-2. 薊野の街区形状

薊野東町

原型街路がそれほど多く敷かれていなかったが、新設街路の多くは袋路状道路であり、街区の数自体も非常に少ない。そのため、ほとんどの街区形状は原型の街区線を含んでいる。原型線が5割を占めるものが多いが、街区面積は大小様々で基本的に多くの街区形状は不定形であり、町並みとしては不均質な空間を作り出している。



図 4.2.2.1 街区形状と宅地形状図（東町）

原型線>新設線を赤色で示す

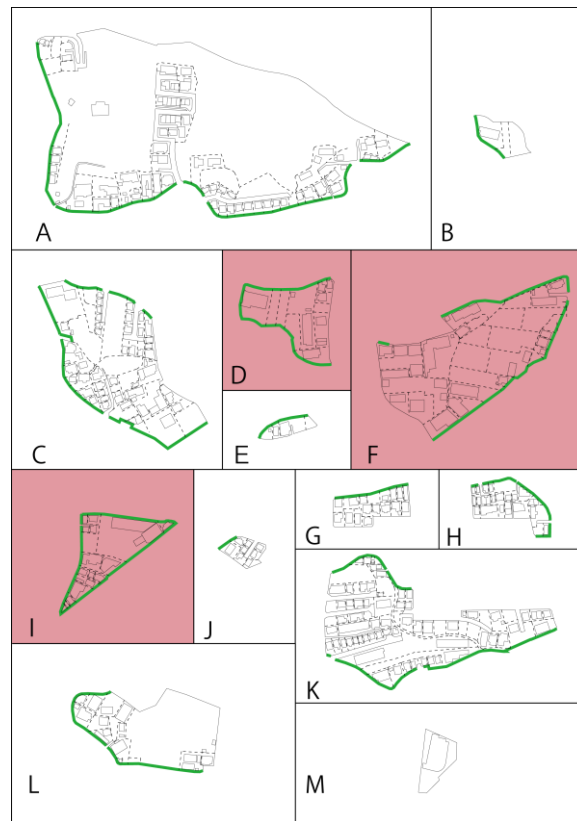


図 4.2.2.2 街区別形状図

表 4.2.2.1 街区周長表（東町）

原型線>新設線を赤色で示す

街区番号	総街区長 (m)	街区長 原型線 (m)	街区長 新設線 (m)
A	2,854	716	2,139
B	205	71	133
C	1,012	466	547
D	415	303	113
E	191	73	118
F	791	467	325
G	285	96	189
H	444	156	288
I	465	442	23
J	209	28	181
K	1,630	442	1,188
L	549	264	284
M	217	0	217

薊野西町

西町では原型の街路が比較的少なく、多くの街区が新設街路により形成されている。また、原型の街路自体が直線形状であるため、街区線の一部が原型の街路であっても方型の街区を形成しているものが多い。そのため、西町には、背割り線の方型街区が多く見られる。一方で、原型の水路により街区形状に曲線が用いられている場合もあり、不規則な敷地が形成されている箇所も見られる。

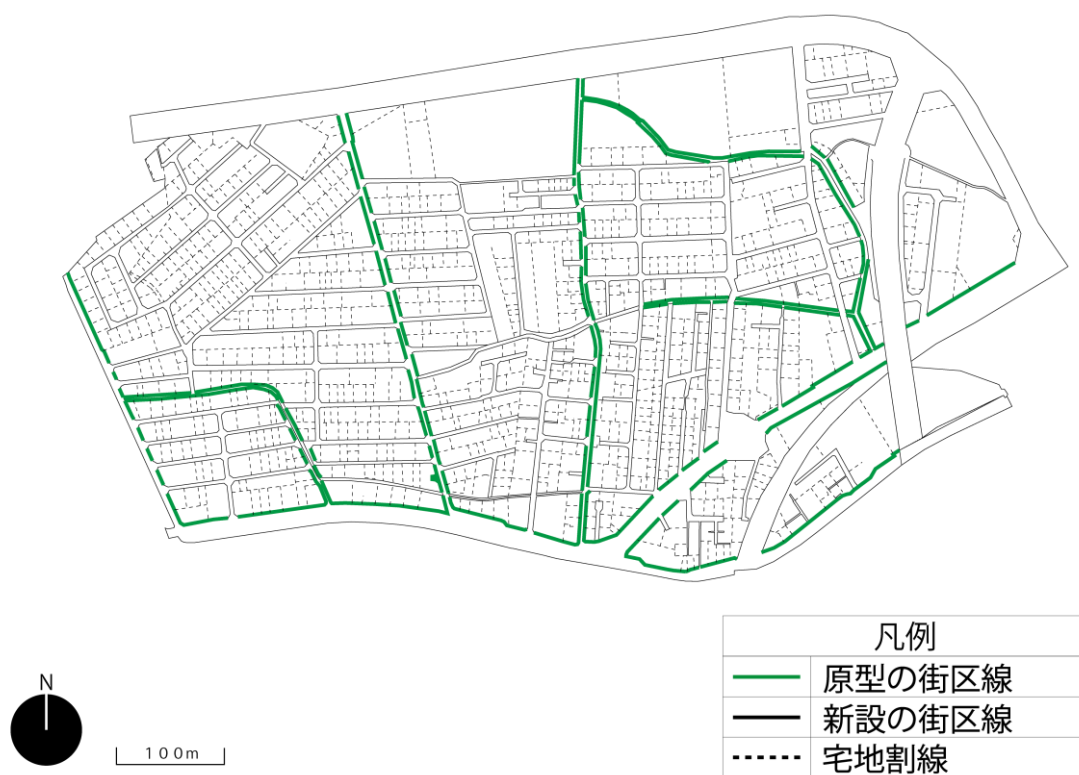


図 4.2.2.3 街区形状と宅地形状図（西町）

原型線>新設線を赤色で示す



図 4.2.2.4 街区別形状図

表 4.2.2.2 街区周長表（西町）

原型線>新設線を赤色で示す

街区番号	総街区長(m)	街区長 原型線(m)	街区長 新設線(m)
A	327	0	327
B	175	0	175
C	260	0	260
D	271	0	271
E	208	0	208
F	222	0	222
G	734	105	630
H	230	29	202
I	277	0	277
J	393	39	354
K	214	50	164
L	182	0	182
M	304	36	268
N	414	32	382
O	299	0	299
P	235	32	203
Q	166	78	88
R	308	99	210
S	249	30	219
T	329	160	168
U	191	14	177
V	157	18	138
W	112	37	75
X	271	30	240
Y	178	0	178
Z	168	13	155

街区番号	総街区長(m)	街区長 原型線(m)	街区長 新設線(m)
A1	269	26	243
B1	169	17	152
C1	190	17	173
D1	206	91	116
E1	297	52	246
F1	179	82	97
G1	245	129	116
H1	286	162	124
I1	221	42	179
J1	181	98	84
K1	620	167	452
L1	239	27	212
M1	241	30	211
N1	212	0	212
O1	234	10	224
P1	125	8	116
Q1	97	11	86
R1	235	32	203
S1	229	27	201
T1	233	25	208
U1	156	23	133
V1	516	29	486
W1	222	66	156
X1	277	0	277
Y1	322	87	235
Z1	216	62	154

街区番号	総街区長(m)	街区長 原型線(m)	街区長 新設線(m)
A2	285	26	259
B2	216	63	153
C2	157	24	133
D2	358	26	332
E2	349	216	133
F2	579	366	214
G2	170	28	142
H2	167	29	138
I2	228	0	228
J2	229	0	229
K2	175	77	98
L2	167	30	137
M2	231	0	231
N2	106	0	106
O2	121	0	121
P2	216	0	216
Q2	668	165	503
R2	447	25	421
S2	193	23	169
T2	248	0	248
U2	167	15	152
V2	219	0	219
W2	326	15	311
X2	383	0	383
Y2	244	0	244
Z2	269	105	164

街区番号	総街区長(m)	街区長 原型線(m)	街区長 新設線(m)
A3	374	48	326
B3	291	57	235
C3	259	0	259
D3	98	0	98
E3	205	0	205
F3	194	31	163
G3	176	56	120
H3	215	81	134
I3	123	34	89
J3	93	43	50
K3	104	46	58
L3	322	0	322
M3	243	0	243
N3	469	0	469
O3	291	63	228
P3	245	64	181
Q3	688	38	649
R3	821	169	653

薊野南町

「原型」空間では集落を有さず田畑が広がる領域であり、原型の街路はあぜ道がほとんどであったと思われる。原型街路が住宅地の中心を走るも新設街路により細分化されていることが多い。そのため、原型線を含む街区はそれほど多くない。

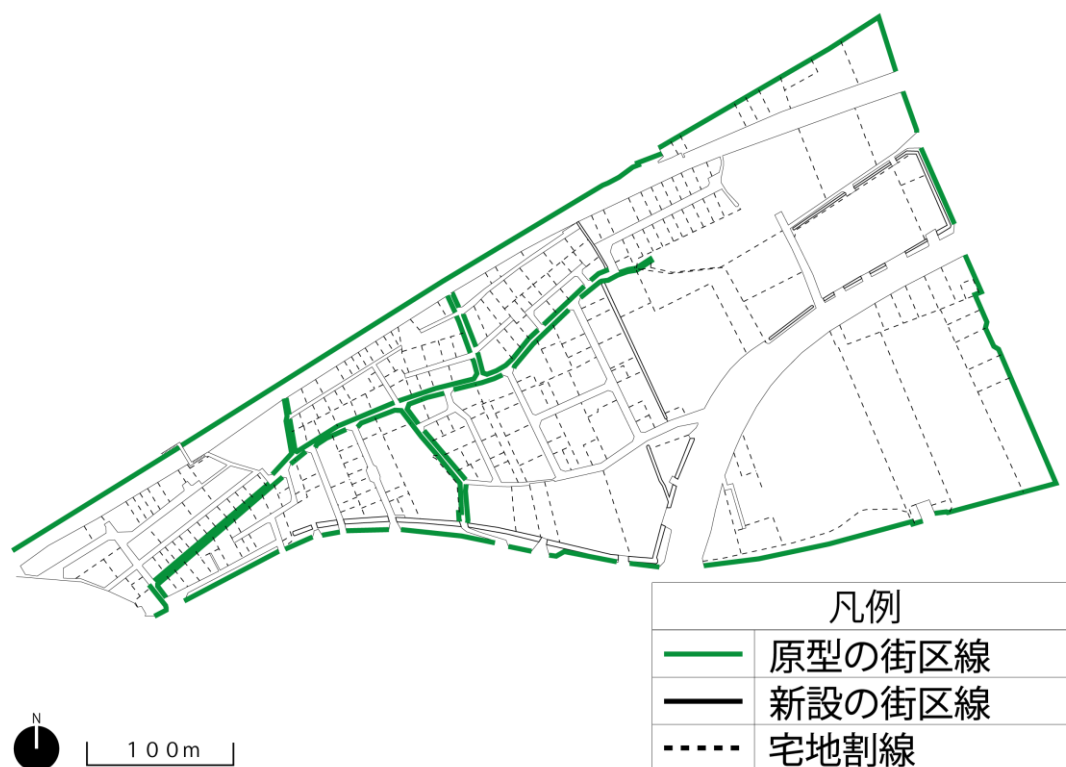


図 4.2.2.5 街区形状と宅地形状図（中町）

原型線>新設線を赤色で示す

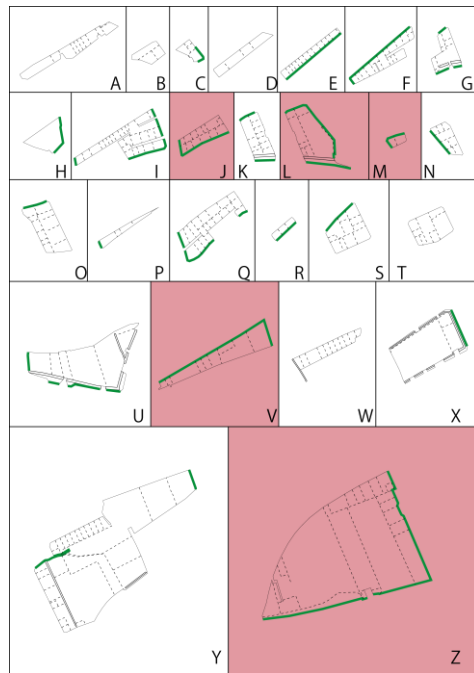


図 4.2.2.6 街区別形状図

表 4.2.2.3 街区周長表 (南町)

原型線>新設線を赤色で示す

街区番号	総街区長(m)	街区長	
		原型依存(m)	新設街路(m)
A	386	0	386
B	134	0	134
C	118	33	85
D	236	0	236
E	249	112	137
F	377	134	242
G	206	50	155
H	185	63	122
I	596	130	466
J	211	107	104
K	211	59	152
L	339	207	132
M	82	45	37
N	156	48	108
O	247	38	209
P	231	12	219
Q	428	112	315
R	106	42	64
S	221	60	161
T	199	0	199
U	604	120	483
V	443	233	210
W	260	0	260
X	416	62	355
Y	926	120	807
Z	254	129	125

薊野北町

北側では、東町と同様に新設街路の多くは袋路状道路であり、多くの街区形状は原型線により構成されている。街区面積は大小様々であり、原型の湾曲する街路は不定形な街区形状を形成している。そのため、街区内に形成される宅地割の配置や形状も不規則に割り当てられている。

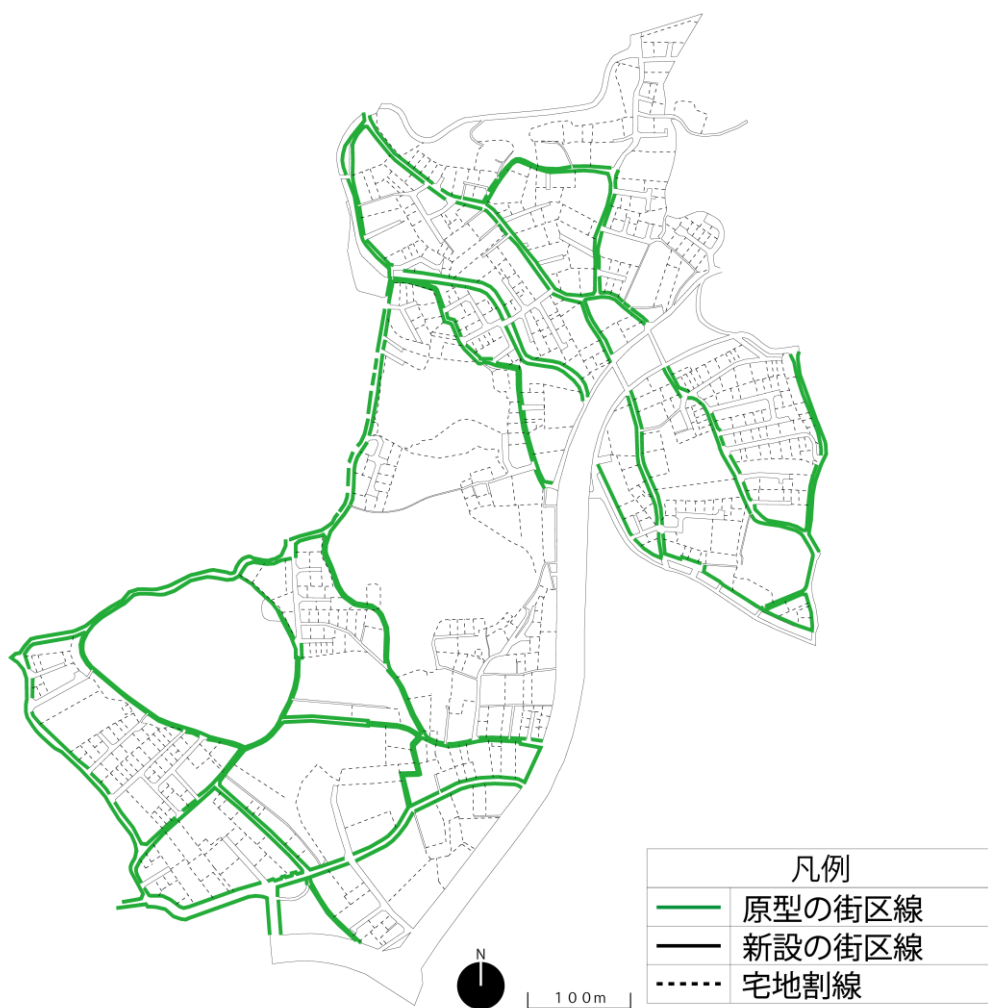


図 4.2.2.7 街区形状と宅地形状図（北町）

原型線>新設線を赤色で示す



図 4.2.2.8 街区別形状図

表 4.2.2.4 街区周長表（北町）

原型線>新設線を赤色で示す

街区番号	総街区長(m)	街区長 原型線(m)	街区長 新設線(m)
A	214	0	214
B	235	0	235
C	1,189	298	891
D	734	445	289
E	614	57	558
F	383	0	383
G	237	8	229
H	250	176	75
I	92	23	69
J	1,066	471	595
K	268	86	182
L	84	22	62
M	187	139	49
N	495	228	267
O	241	160	81
P	116	32	84
Q	123	35	89
R	1,269	1,180	89
S	232	38	194
T	180	79	101
U	402	226	177
V	424	188	236
W	683	140	543
X	159	21	138
Y	514	181	333
Z	1,066	560	506

街区番号	総街区長(m)	街区長 原型線(m)	街区長 新設線(m)
A1	91	62	29
B1	142	142	0
C1	59	0	59
D1	228	0	228
E1	135	31	104
F1	537	430	107
G1	241	137	104
H1	205	29	176
I1	1,316	336	979
J1	461	0	461
K1	708	311	397
L1	431	391	40
M1	751	590	161
N1	315	150	165
O1	361	158	203
P1	274	70	204
Q1	163	15	148
R1	197	100	97
S1	116	19	97
T1	191	107	84
U1	663	449	214
V1	625	396	228
W1	390	134	256
X1	75	0	75
Y1	87	49	38
Z1	237	78	159

薊野中町

北側では、東町と同様に新設街路の多くは袋路状道路であり、ほとんどの街区の形状は原型線で構成している。街区面積は大小様々であり、原型の湾曲する街路は不定形な街区形状を形成している。そのため、街区内に形成される宅地割の配置や形状も不規則に割り当てられている。街区内の中心には不定形な敷地が形成され、湾曲する原型の街路や新設の直線街路に沿って並ぶ住宅群は不均質な町並みを作り出す。ただ、南側の土佐街道付近では、新設街路により街区が細分化されているため、背割り線が引かれた方型街区が多々見られる。

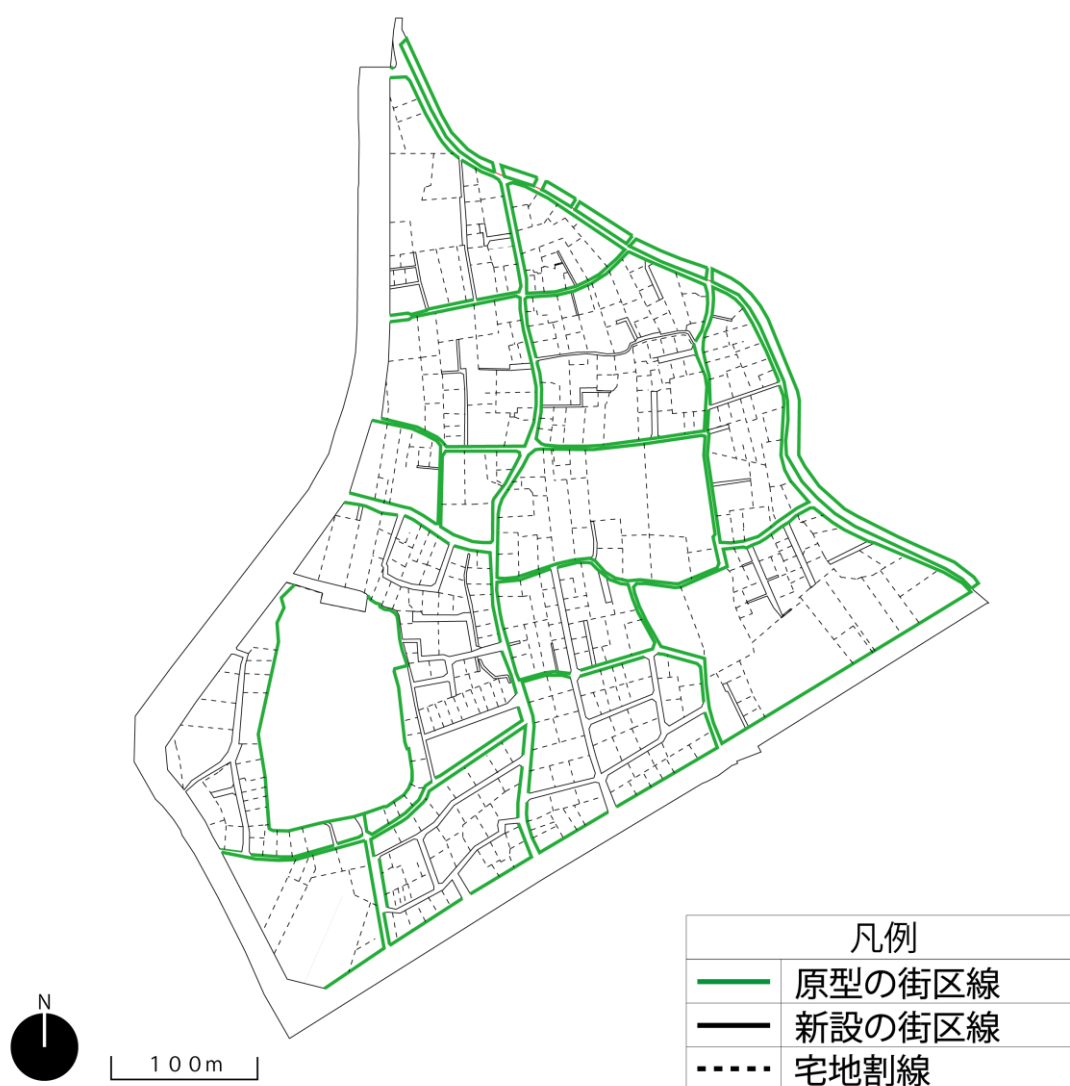


図 4.2.2.9 街区形状と宅地形状図（中町）

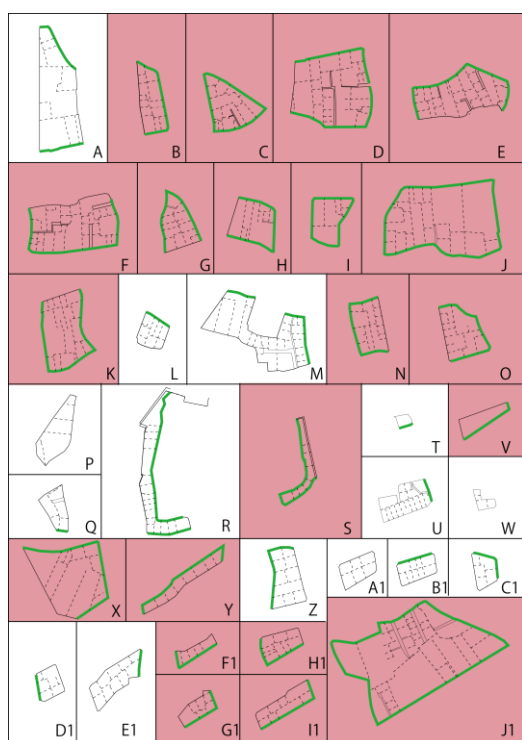


図 4.2.2.10 街区別形状図

表 4.2.2.5 街区周長表（中町）

原型線＞新設線を赤色で示す

街区番号	総街区長(m)	街区長 原型依存(m)	街区長 新設街路(m)
A	436	150	286
B	254	150	105
C	268	268	0
D	397	325	72
E	370	239	131
F	379	254	126
G	233	179	53
H	241	185	57
I	225	225	0
J	505	505	0
K	324	269	56
L	155	40	115
M	522	136	386
N	235	156	79
O	247	167	80
P	246	0	246
Q	174	17	158
R	622	291	332
S	310	212	98
T	74	20	54
U	249	34	215
V	191	89	102
W	111	0	111
X	380	245	135
Y	315	179	136
Z	249	121	128

街区番号	総街区長(m)	街区長 原型依存(m)	街区長 新設街路(m)
A1	169	0	169
B1	166	50	116
C1	150	60	89
D1	147	37	110
E1	251	38	212
F1	163	88	75
G1	161	80	81
H1	178	99	79
I1	228	115	112
J1	663	663	0

4-3. 薊野空間の分析と類型化

ここでは、「現在型」空間の分析を行うため空間要素の抽出を行った。空間要素とは、空間における住宅・街路・全空地の配列パターンにより類型化を行ったもので、それらの分布により空間の特質を調査している。また、空間要素の類型をさらに時間の重なりによる細分化を行っている。時間の重なりによる細分化では「原型」のみの空間要素、新設のみの空間要素、「原型」と新設が共存する重なり空間要素の3つに分類され46種類の空間要素を抽出している。以下では、抽出した空間要素と各大字でのそれらの分布の比較を行っていく。

4-3-1. 薊野の「現在型」の空間要素と、その類型

空間要素の抽出では、ある領域において街路、建築、全空地（田畑・駐車場・空き地）が構成する様々な配列パターンによる類型を行っている。また、街路、建築、全空地の構成による類型をさらに建築の向きによる分類わけを行う。その際、街路に沿って正面を向いているか否かを入り口の向きによって分類している。類型の種類として単一の空間要素を19種類抽出し、その19種類の要素の中からいくつか組み合わせることで空間に変化を与える空間要素の結合体を11種類抽出した。それぞれの型について以下に示している。

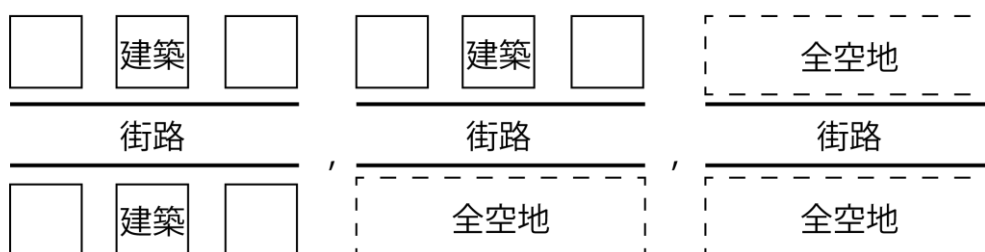


図 4.3.1.1 街路・建築・全空地の配列パターン

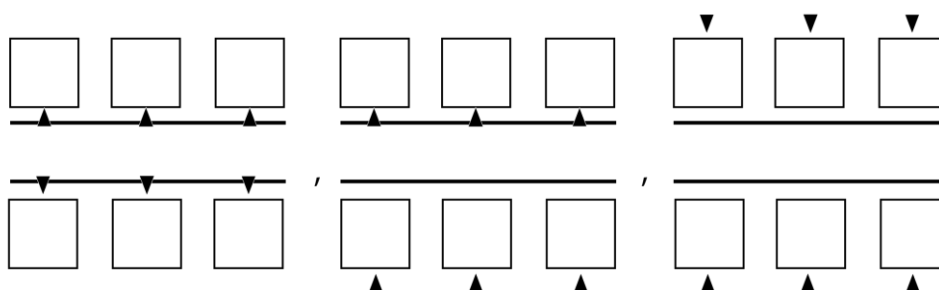


図 4.3.1.2 建築の正面方向

単一の空間要素

両側建築型（青色、藍色、水色）

1つの街路に沿って両側に建築が建ち並ぶ空間要素である。この空間要素では、街路に対して両側の建築が入り口を持つもの、片側の建築が入り口を持つもの、両側の建築が入り口を持たないものの3つに分類される。

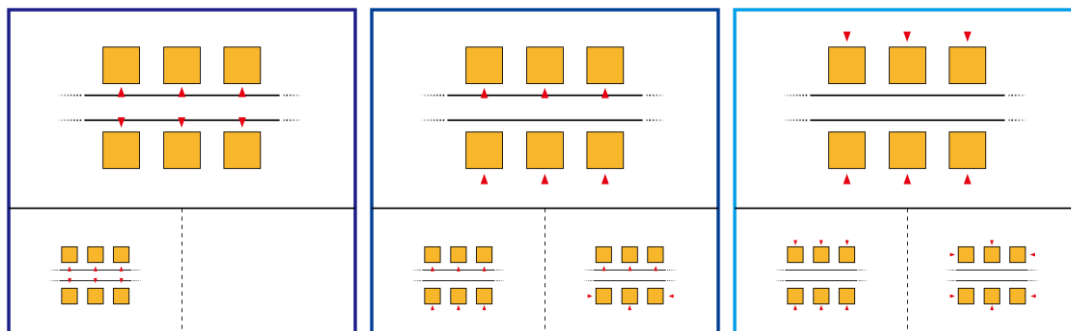


図 4.3.1.3 両側建築型の類型

片側空地型（黄土色、茶色）

1つの街路に沿って片側に空地が設けられている空間要素である。設けられる空地は広大なものや住宅間に小さく設けられているものを含んでいる。また、対面する建築が街路に対して入り口を持っているか持っていないかによる分類を行っている。

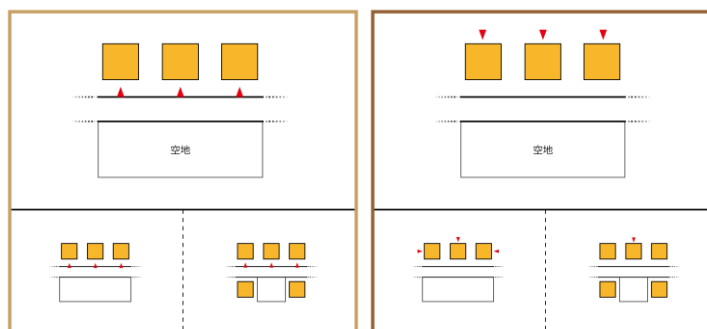


図 4.3.1.4 片側空地型の類型

片側田畑型（深緑色、緑色）

1つの街路に沿って片側に田畑が残存している空間要素である。片側空地型同様、残存する田畑は広大なものや住宅間に小さく設けられているものを含んでいる。また、対面する建築が街路に対して入り口を持っているか持っていないかによる分類を行っている。

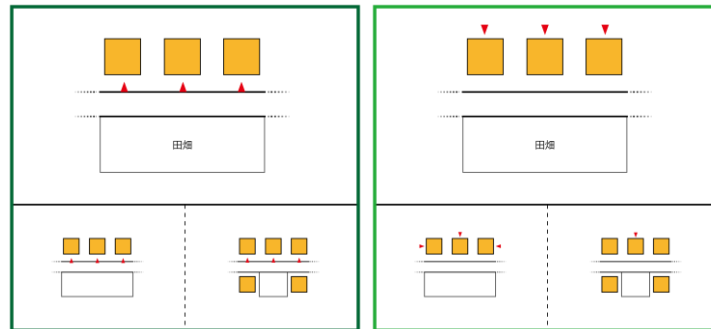


図 4.3.1.5 片側田畑型の類型

両側空地型（焦茶色）

1つの街路に沿って両側に空地が設けられている空間要素である。設けられる空地は広大なものや住宅間に小さく設けられているものを含む。

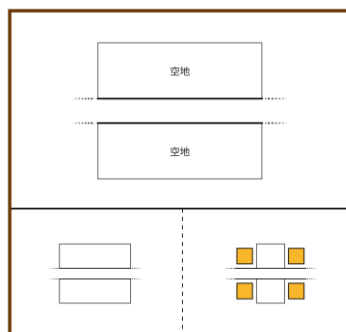


図 4.3.1.6 両側空地型の類型

田畑空地対面型（淡黄色）

1つの街路に沿って方側に田畑、もう片側に空地が設けられている空間要素。設けられる空地や残存する田畑は広大なものや住宅間に小さく設けられているものを含む。

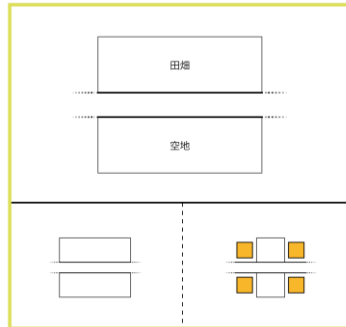


図 4.3.1.7 田畑空地対面型の類型

両側田畑型（黄緑色）

1つの街路に沿って両側に田畑が残存している空間要素である。残存する田畑は広大なものや住宅間に小さく設けられているものを含む。

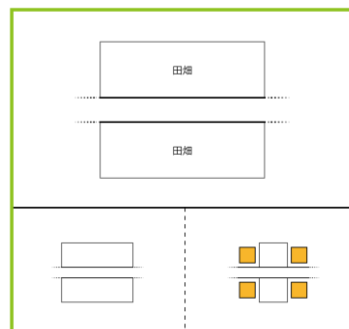


図 4.3.1.8 両側田畑型の類型

幅広道路接続型（黄色、浅黄色）

市街地などと繋ぐ県道沿いに建築が建ち並ぶ空間要素である。道路幅員が広いため、建物の圧迫感はなく見通しの良い空間となっている。県道沿いの住宅群と同様に河川沿いの建築群もこれに属する。

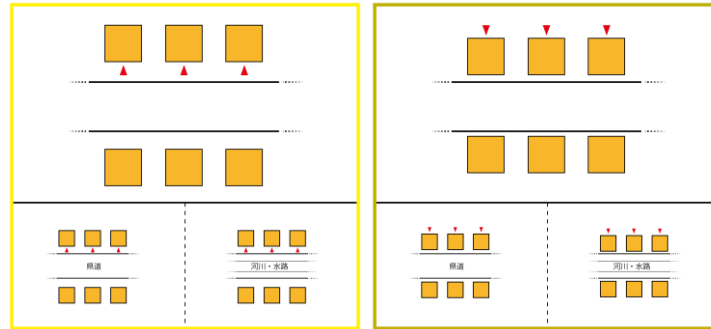


図 4.3.1.9 幅広道路接続型の類型

両側建築袋路型（青紫色、紫色、赤紫色）

街路から行き止まりの袋路が敷かれ、その道に沿って数戸の住居が建ち並んでいる空間要素である。この空間要素では、袋路に対して両側の建築が入り口を設けているもの、片側の建築が入り口を設けているもの、最奥部に位置する建築のみが入り口を設けているもの、の3つに分類される。

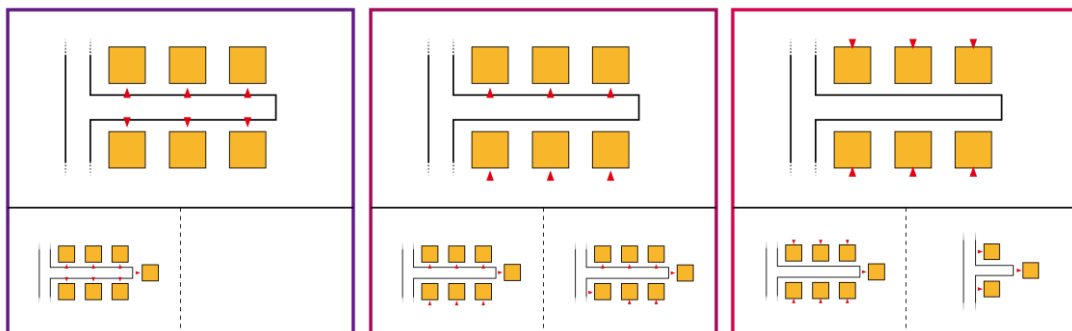


図 4.3.1.10 袋路型の類型

片側空地袋路型（橙色）

街路から行き止まりの袋路が敷かれ、その道に沿って片側には数戸の住居が建ち並び、もう片側には空地が設けられている空間要素である。また、最奥部に位置する1戸の建築のための袋路に空地が接続する空間も含む。

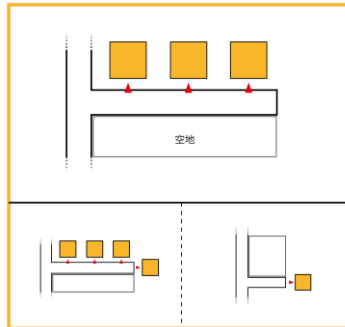


図 4.3.1.11 片側空地袋路型の類型

片側田畑袋路型（朱色）

街路から行き止まりの袋路が敷かれ、その道に沿って片側には数戸の住居が建ち並び、もう片側には田畑が残存している空間要素である。

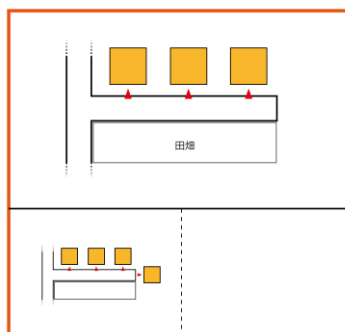


図 4.3.1.12 片側田畑袋路型の類型

両アプローチ型（赤色）

2つ街路に面し、ピロティ空間を設けているため、両街路からアプローチできる空間要素である。

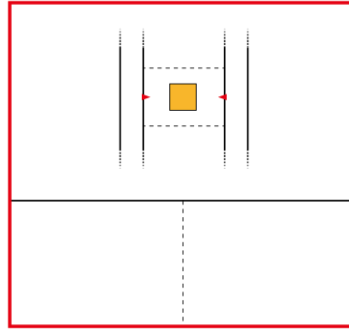


図 4.3.1.13 両アプローチ型の類型

空地共存型（灰色）

アパートやマンションなどの同敷地内に広い空地を有しているものや住宅がセットバックしており、手前に空地ができている空間要素である。その際、セットバックの定義として、前面道路から敷地の奥行き 1 / 2 後方に住宅が建てられているものとする。

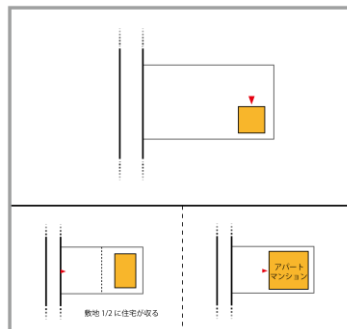


図 4.3.1.14 空地共存型の類型

共有空間型（薄紅色）

街路に接続する空地を数個の建築が共有している空間要素である。

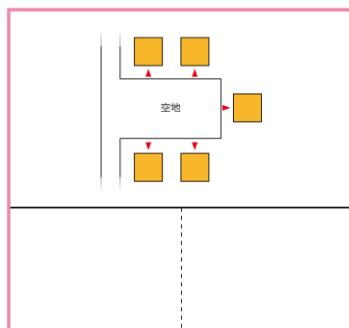


図 4.3.1.15 共有空間型の類型

空間要素の結合体

単一の空間要素が複数個組み合わせ、空間に変化を与える空間要素である。これらの空間要素は長期にわたるスプロール現象により、時代の異なる無秩序な開発が隣接することで生み出される。そのため、これらの空間要素の分布が多いことは、幾つものスプロール現象が重なることを示す。

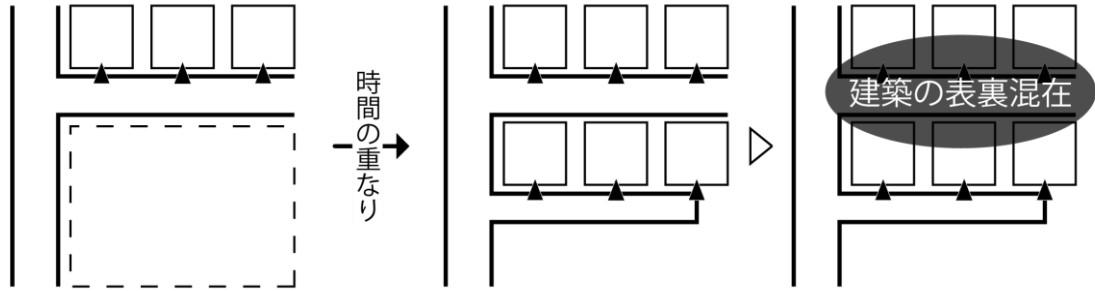


図 4.3.1.16 空間要素の結合体と時間の重なり

表裏混在型（藍色＋青紫色 or 紫色）

両側建築型と袋地型が結合した空間要素である。ある街路や袋路に沿ってすでに建物が建っており、その後、その街路、袋路に対して平行な袋路が形成され建築が新設される。元の街路、袋路への配慮がなされないこの計画は、無意識的に表裏が混在する空間が生まれる。

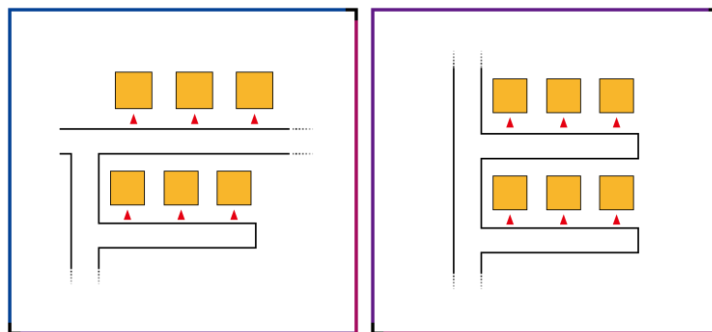


図 4.3.1.17 表裏混在型の類型

袋路分岐型（紫色 or 青紫色＋紫色 or 青紫色 or 赤紫色）

袋地型と袋地型が結合した空間要素である。街路から新たに行き止まりの袋路が敷かれる。これらは、後の宅地開発が考慮されておらず、袋路の最奥部に建築が計画され行き止まりとなっているものがほとんどである。そのため、その後の宅地開発の際に、袋路の真ん中辺りから分岐するように新たな袋路が計画される。

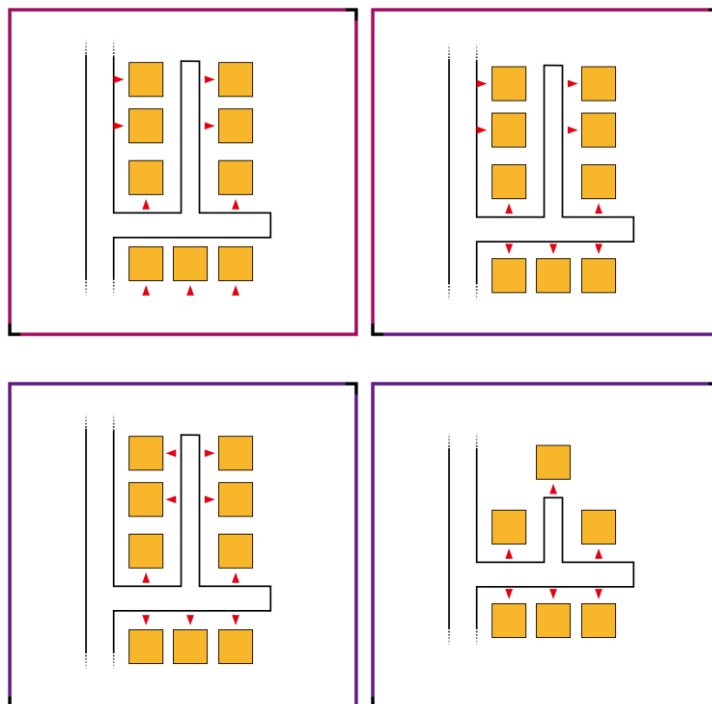


図 4.3.1.18 袋路分岐型の類型

内的共有空間型（薄紅色＋青紫色 or 赤紫色）

袋地型と共有空間型が結合した空間要素である。この空間要素は、袋路分岐型とは逆の形成過程を経ている。袋路の最奥部に位置する数個の建築がすでに存在しており、袋路が敷かれていた。その後の宅地開発でこの袋路の両側に建築が新設されたため、共有空間を持つ建築が住宅地の内部に形成されたものである。

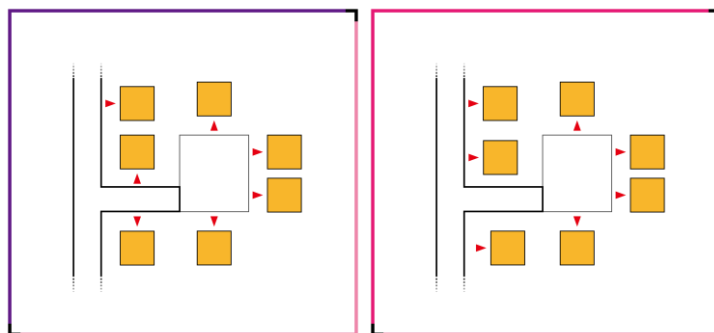


図 4.3.1.19 内的共有空間型の類型

空地内包型（青紫色＋焦茶色 or 黄土色）

袋路型に片側空地型が結合している空間要素である。この空間要素は、かつて袋路にそって建築が立ち並んでいたが、その後、一部の建築が取り壊されるなどにより空き地や駐車場といったボイド空間が付加されている。

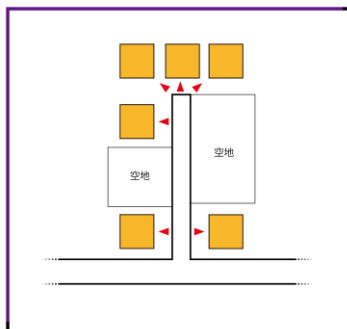


図 4.3.1.20 空地内包型の類型

田畑内包型（青紫色＋淡黄色 or 深緑色 or 黄緑色）

袋路型に片側田畑型が結合している空間要素である。この空間要素は、はじめに袋路が敷かれ、その袋路に徐々に建築が開発されていったため、田畑が断片的に残っているものである。

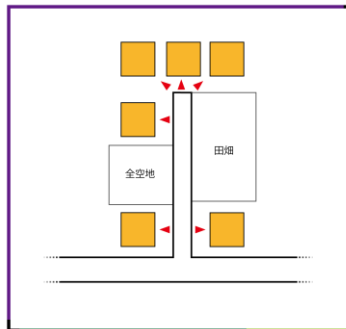


図 4.3.1.21 田畑内包型の類型

最奥空地共存型（青紫色＋灰色）

袋路型に空地共存型が結合している空間要素である。この空間要素では、先に袋路が形成され、その後、袋路奥の広大な空地にアパートやマンションが開発されたものである。

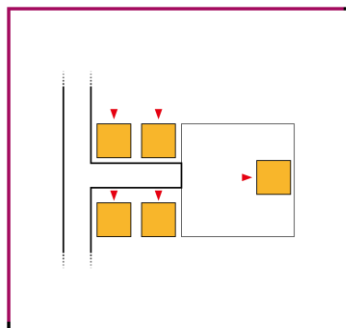


図 4.3.1.22 最奥空地共存型の類型

薊野東町

「現在型」空間

「原型」から残存する建築は、2017年現在では3件にまで数を減らしている中で、西側の川沿いや土佐街道付近には、ある程度の面積を持つ田畑が今もなお残存している。また、土佐街道沿いには商業施設が建ち並び、広大な駐車場が新設され、空き地も密集する住宅地の中に散在している。

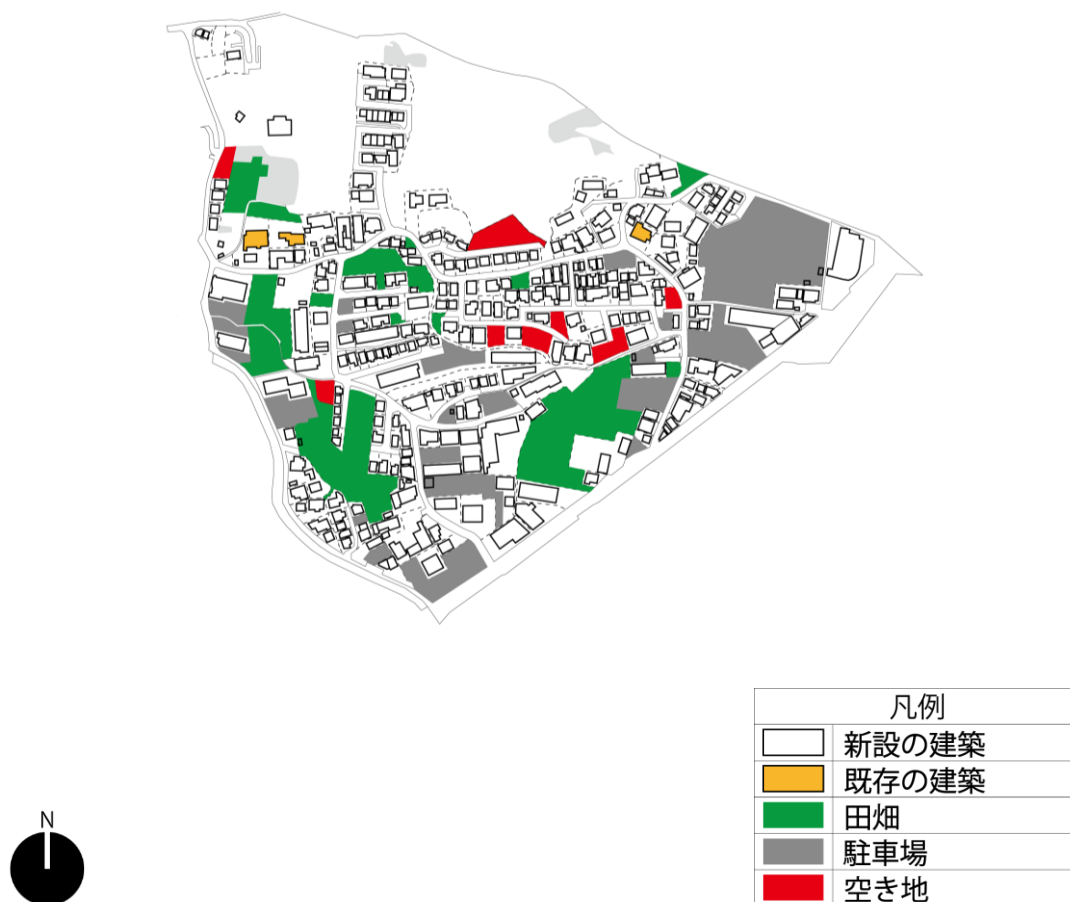


図 4.3.1.23 「現在型」の住宅・全空地分布（東町）

単一の空間要素の分布

東町における単一の空間要素の分布は以下の通りである。単一の空間要素では全19種類の内、片側空地袋路型（橙色）と両アプローチ型（赤色）以外は分布している。

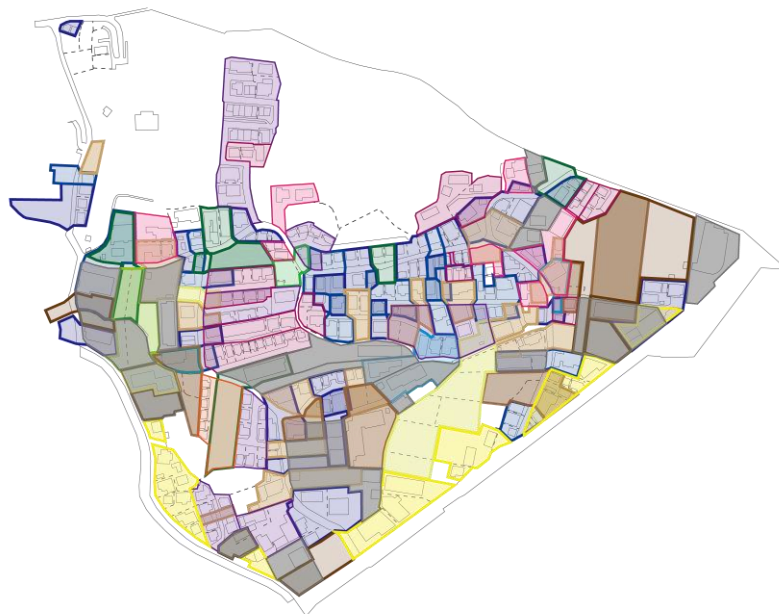


図 4.3.1.24 東町の単一の類型分布

結合体の空間要素の分布

東町における結合体の空間要素の分布は以下の通りである。分布する空間要素は表裏混在型 2 種類、袋路分岐型、空地内包型、最奥空地共存型の 5 種類である。また、最奥空地共存型は 5 つの大字の中で東町が唯一有している空間要素である。分布として表裏混在型はそれぞれ 2 箇所ずつ分布しており、袋路分岐型、空地内包型と最奥空地共存型は 1 箇所ずつの合計 7 箇所である。



図 4.3.1.25 東町の結合体の類型分布

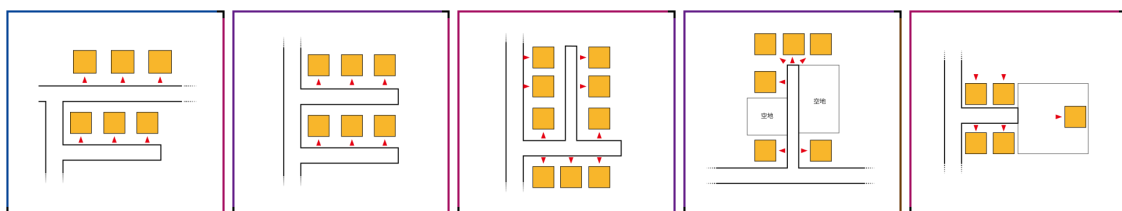


図 4.3.1.26 分布する空間要素

薊野西町

「現在型」空間

「原型」時には集落を有しておらず、西町に建てられている住宅はすべて新設である。また、土佐街道沿いや北端の県道沿いには、多くの商業施設が立ち並び、広大な駐車場が新設され、住宅地内にも月極めの小さな駐車場や空き地が数多く散在している。一方で、かつて広大な面積を占めていた田畑は、現在の西町にはほとんど残っていない。

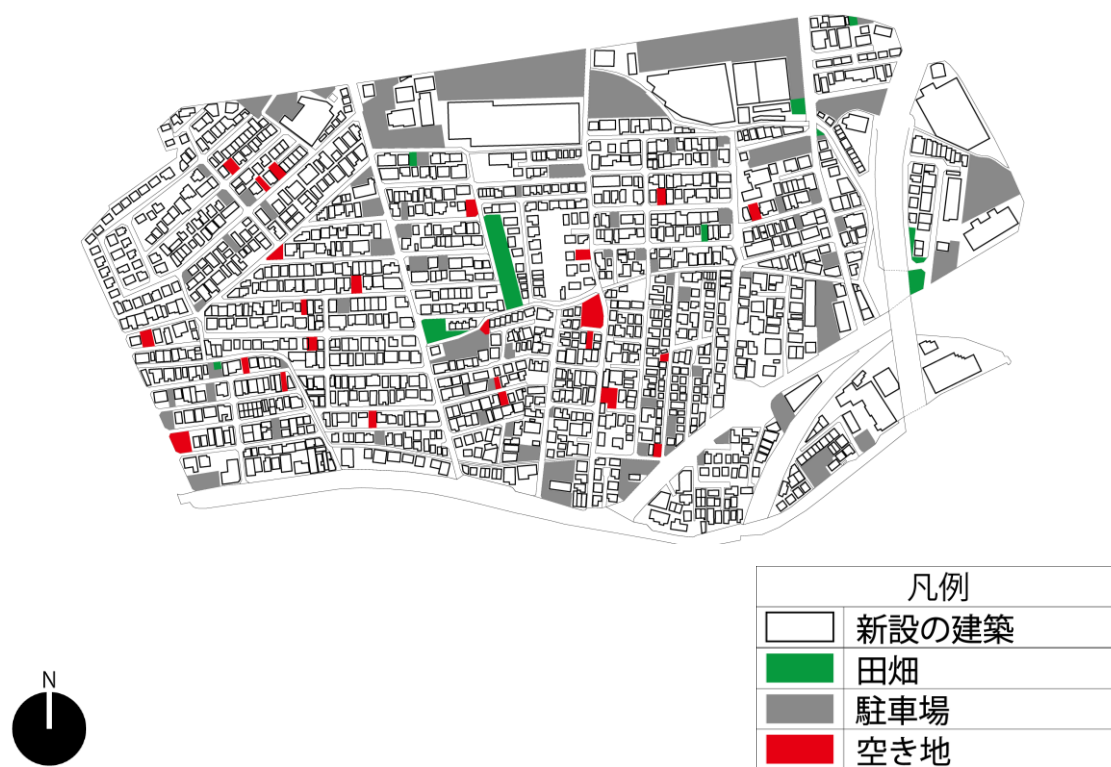


図 4.3.1.27 「現在型」の住宅・全空地分布（西町）

単一の空間要素の分布

西町における単一の空間要素の分布は以下の通りである。単一の空間要素では全19種類の内、両側田畑型（黄緑色）、片側空地袋路型（橙色）、片側田畑袋路型（朱色）、両アプローチ型（赤色）、共有空間型（薄紅色）以外は分布している。また、片側田畑袋路型は5つの大字の中で東町が唯一有している空間要素である。



図 4.3.1.28 「現在型」空間要素の類型分布（西町）

空間要素の結合体

西町における結合体の空間要素の分布は以下の通りである。分布する空間要素は表裏混在型、袋路分岐型が4種類、空地内包型の6種類である。分布としては、6種類の空間要素はそれぞれ1箇所ずつの合計6箇所である。



図 4.3.1.29 「現在型」空間要素の類型分布（西町）

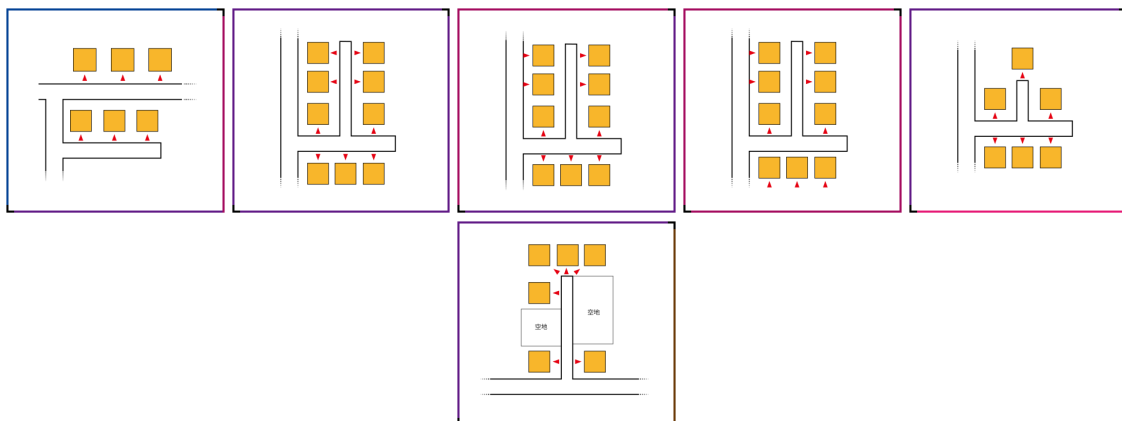


図 4.3.1.30 分布する空間要素

薊野南町

「現在型」空間

「原型」では集落を有しておらず、田畑のみが広がる領域であった。そのため、「原型」から残る既存の建築は存在しない。また、県道が敷かれた影響もあり、西側では住宅が密集し、東側では工場や商業施設が建ち並ぶ。西側と東側で町並みの様相が大きく変化する。そのため、西側では住宅間に設けられた駐車場や空地は狭小なものが多く、東側では、スーパーなどに設けられた広域な駐車場が多いことが伺える。さらに、田畑は東側に2箇所広大なものが残存している。

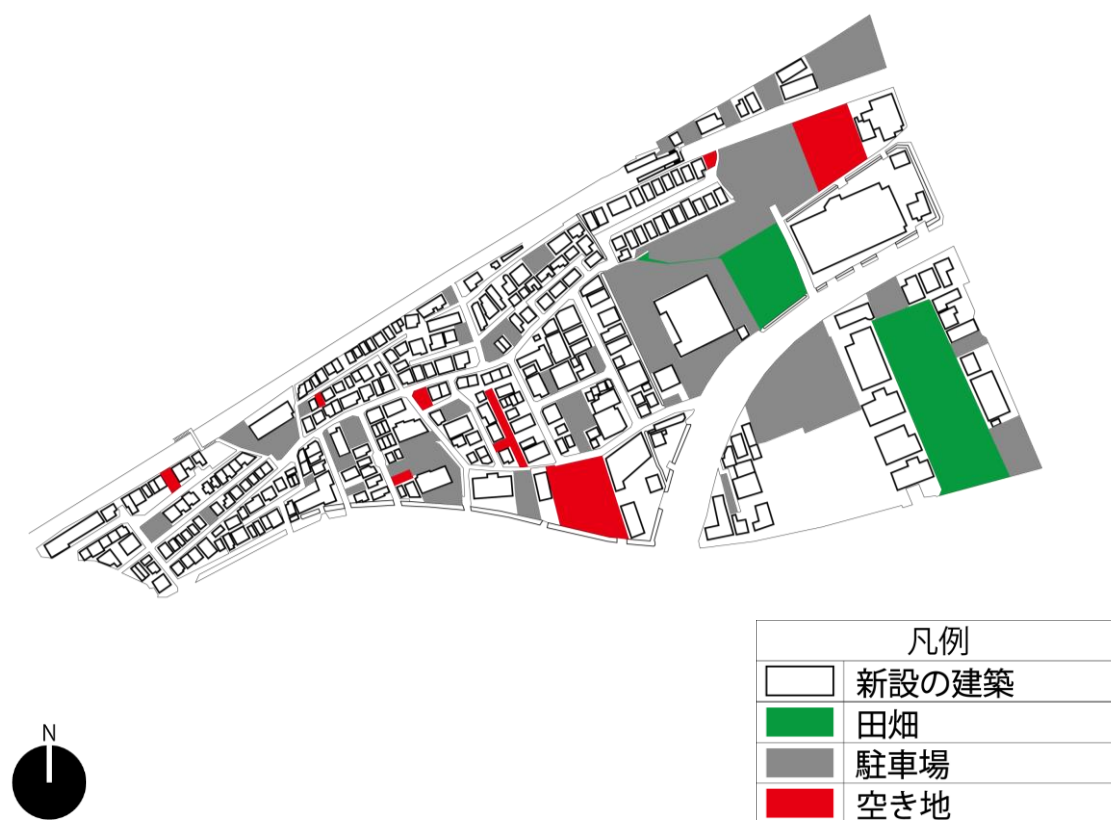


図 4.3.1.31 「現在型」の住宅・全空地分布（南町）

単一の空間要素の分布

南町における単一の空間要素の分布は以下の通りである。単一の空間要素では全19種類の内、片側田畑型（深緑色）両側田畑型（黄緑色）、片側空地袋路型（橙色）、片側田畑袋路型（朱色）、共有空間型（薄紅色）以外は分布している。また、両アプローチ型（赤色）は5つの大字の中で南町が唯一有している空間要素である。



図 4.3.1.32 「現在型」空間要素の類型分布（南町）

空間要素の結合体

南町における結合体の空間要素の分布は以下の通りである。分布する空間要素は表裏混在型 2種、空地内包型の 3種類である。分布としては表裏混在型（藍色+青紫色）が 3箇所、表裏混在型（青紫+紫）が 1箇所、空地内包型が 2箇所の合計 6箇所である。



図 4.3.1.33 「現在型」空間要素の類型分布（南町）

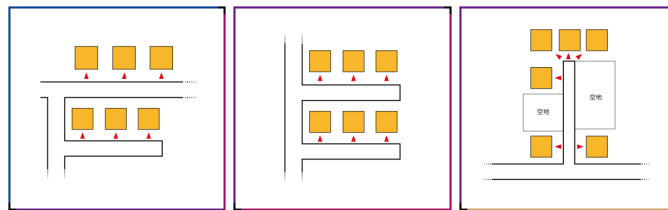


図 4.3.1.34 分布する空間要素

薊野北町

「現在型」空間

「原型」から残存する住宅は、2017年現在では2件にまで数を減らしている中で、ある程度の面積を持つ田畑が今もなお多く残存している。また、南側には県道が走り大きめの商業施設が立ち並ぶため広大な駐車場が新設され、空き地も密集する住宅地の中に散在している。

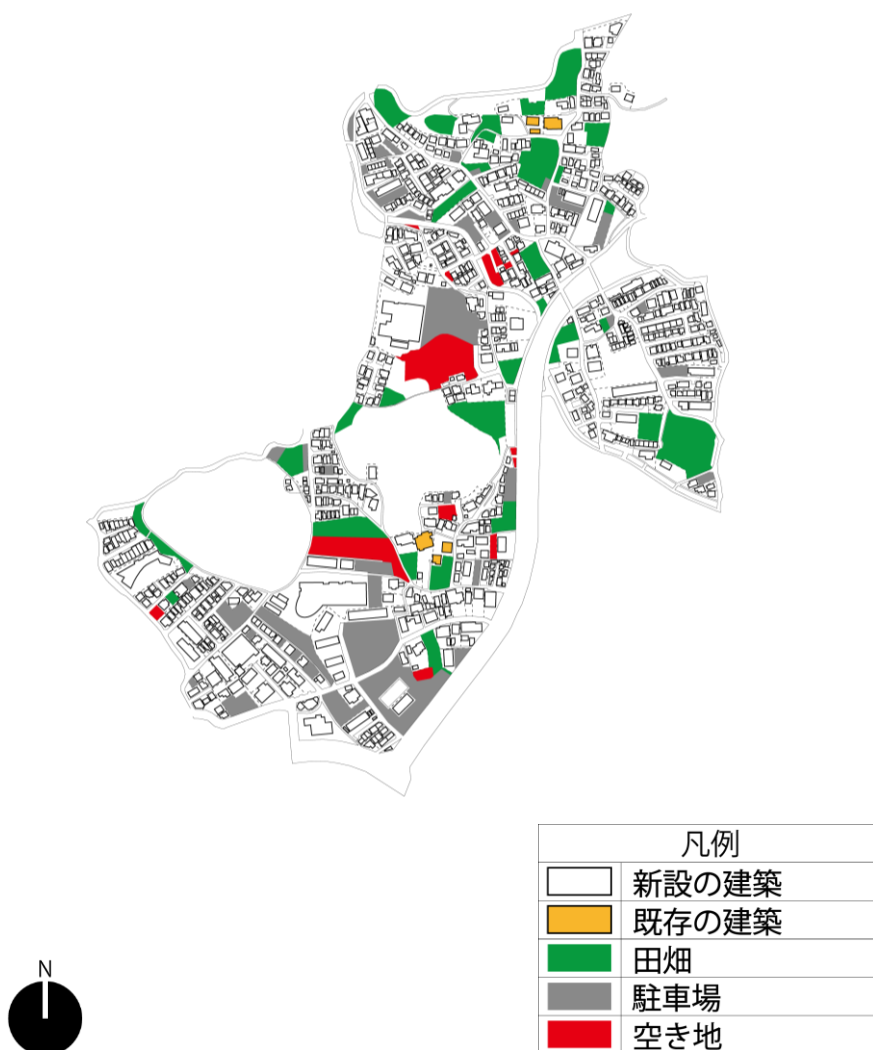


図 4.3.1.35 「現在型」の住宅・全空地分布（北町）

単一の空間要素の分布

北町における単一の空間要素の分布は以下の通りである。単一の空間要素では全19種類の内、両側田畑型（黄緑色）、両アプローチ型（赤色）、共有空間型（薄紅色）以外は分布している。また、片側空地袋路型（橙色）は5つの大字の中で北町が唯一有している空間要素である。



図 4.3.1.36 「現在型」空間要素の類型分布（北町）

空間要素の結合体の分布

北町における結合体の空間要素の分布は以下の通りである。分布する空間要素は表裏混在型が2種類、袋路分岐型が3種類、空地内包型の6種類である。分布として表裏混在型（藍色＋青紫色）は4箇所分布しており、表裏混在型（青紫色＋紫色）と空地内包型が3箇所、袋路分岐型（青紫色＋紫色）と袋路分岐型（青紫＋赤紫）が2箇所、袋路分岐型（青紫色＋青紫色）が1箇所の合計15箇所である。

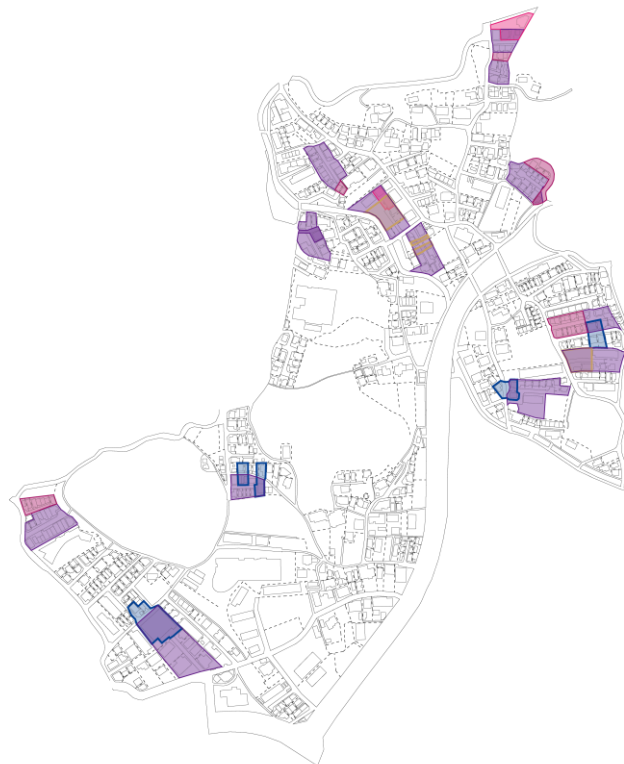


図 4.3.1.37 「現在型」空間要素の類型分布（北町）

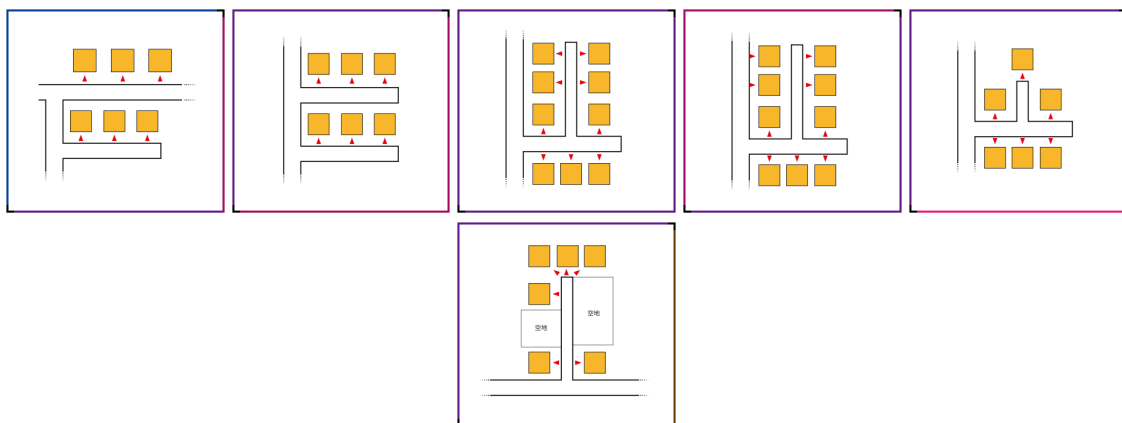


図 4.3.1.38 分布する空間要素

薊野中町

「現在型」空間

「原型」から残存する住宅は、2017年現在では7件にまで数を減らしている。北側には、ある程度の面積を持つ田畑が今も尚、残存している。土佐街道沿いや特に県道沿いには商業施設が立ち並び、駐車場が新設され、空き地も散在している。

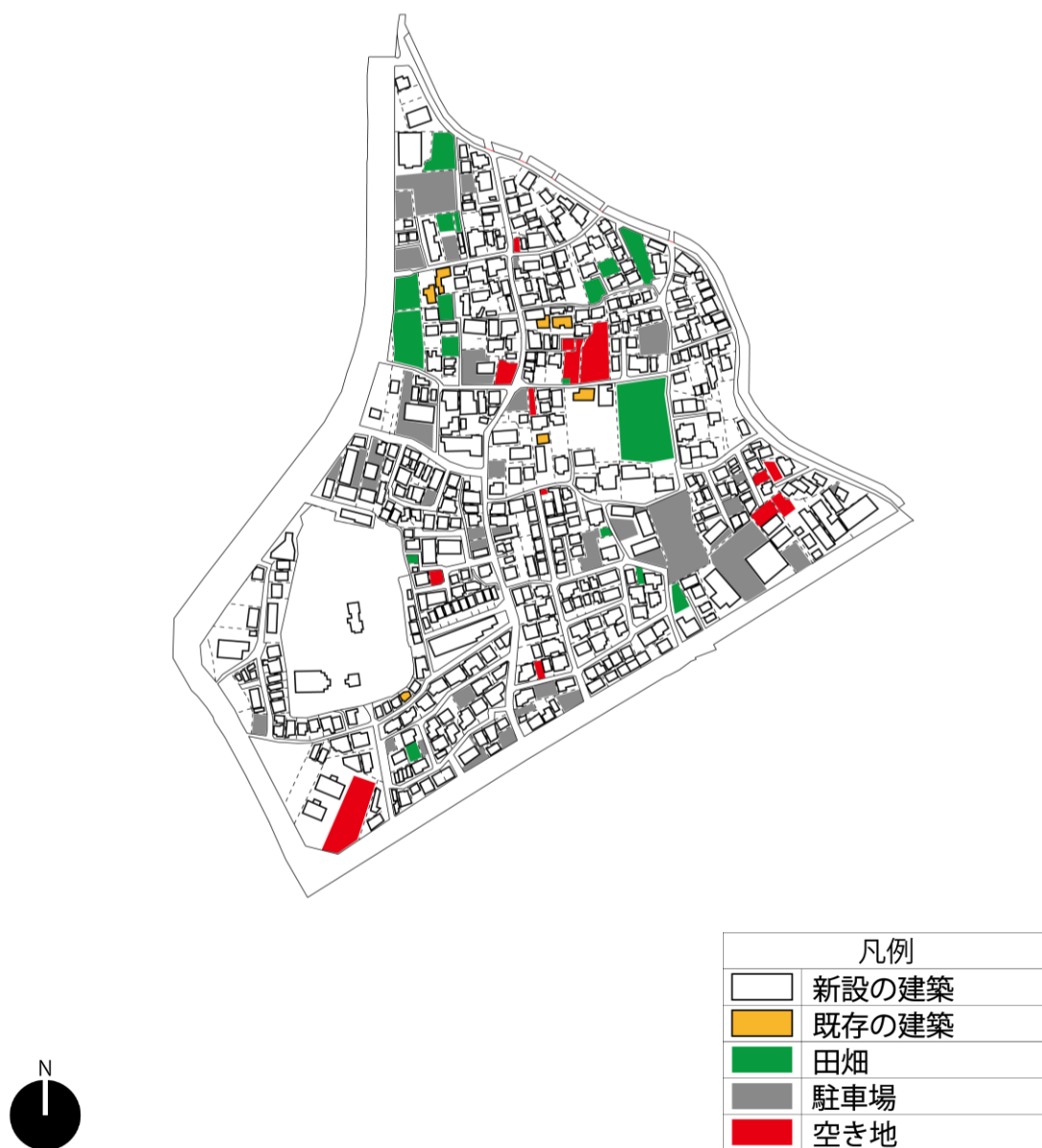


図 4.3.1.39 「現在型」の住宅・全空地分布（中町）

単一の空間要素の分布

南町における単一の空間要素の分布は以下の通りである。単一の空間要素では全19種類の内、片側空地袋路型（橙色）と両アプローチ型（赤色）以外は分布している。

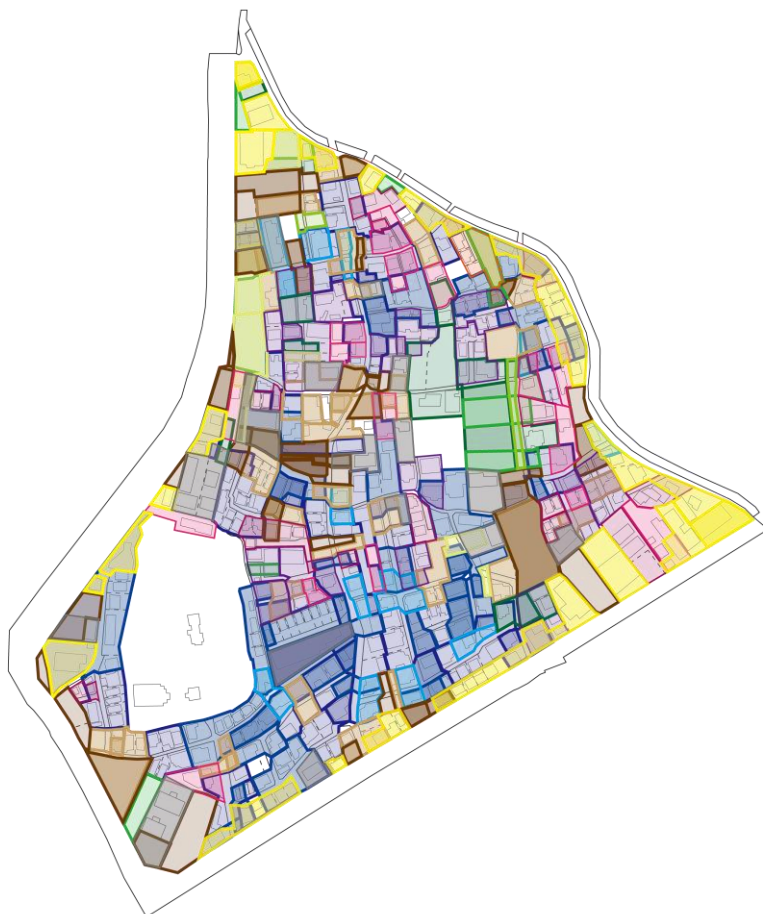


図 4.3.1.40 「現在型」空間要素の類型分布（中町）

空間要素の結合体の分布

中町における結合体の空間要素の分布は以下の通りである。分布する空間要素は表裏混在型、袋路分岐型が3種類、内的共有空間型が2種類、空地内包型、田畑内包型の8種類である。また、2種類の内的共有空間型と田畑内包型は中町に唯一存在する空間要素である。分布として袋路分岐型（青紫色+紫色）、袋路分岐型（青紫+赤紫）、空地内包型が3箇所ずつ分布しており、表裏混在型（藍色+青紫色）、袋路分岐型（青紫色+青紫色）、田畑内包型が2箇所ずつ、内的共有空間型（青紫色+薄紅色）と内的共有空間型（赤紫色+薄紅色）が1箇所ずつの合計17箇所である。

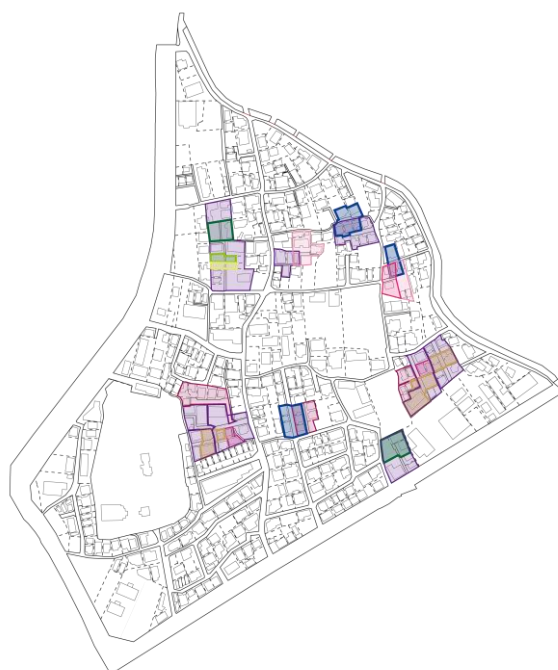


図 4.3.1.41 「現在型」空間要素の類型分布（中町）

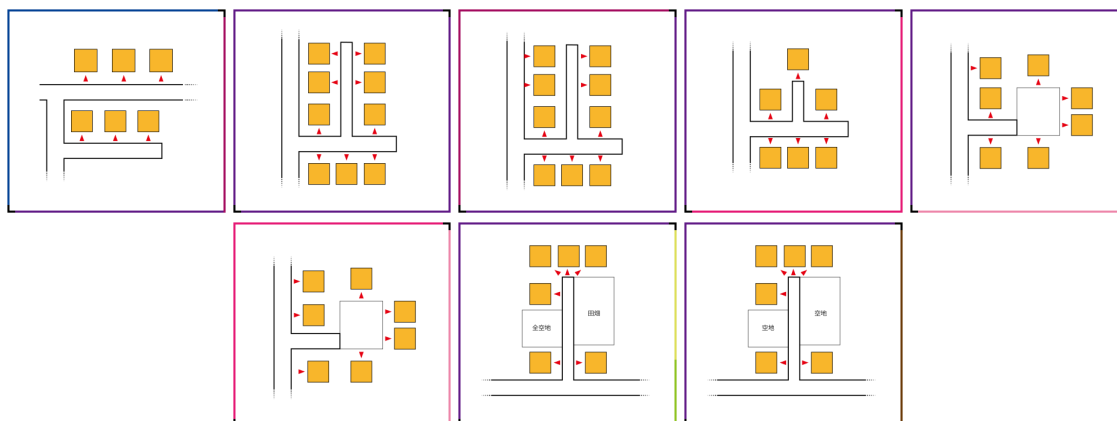


図 4.3.1.42 分布する空間要素

4-3-2. 薊野の「原型」と、その類型

「現在型」において類型化を行い抽出した空間要素の中から「原型」のみの空間要素を示す。「原型」のみの空間要素は単一の空間要素のみであり、片側田畑型、両側田畑型の3種類である。但し、これらの類型はすべて、「原型」から残存する街路、建築、田畑で構成されている。以下では、これらの類型において各大字の分布を示す。

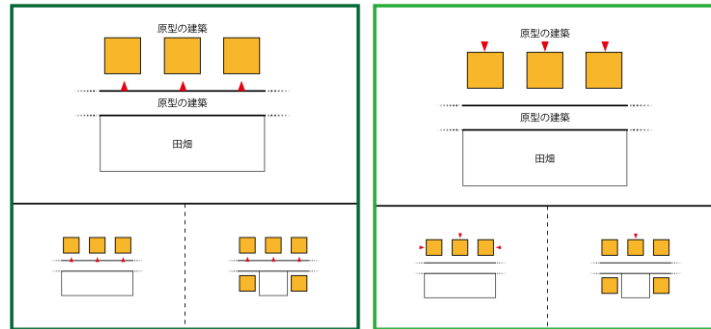


図 4.3.2.1 片側田畑型の類型

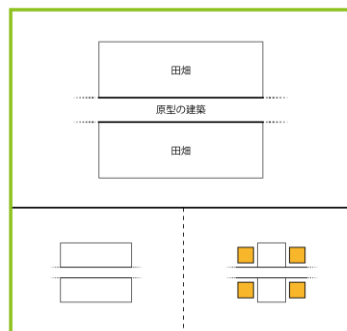


図 4.3.2.2 両側田畑型の類型

薊野東町

かつて2つ集落を有し、広大な田園風景を形成していた東町も、現在そうした風景が断片として残り、空間要素は両側田畑型のみとなっている。領域としては、1箇所しか存在せず、面積は狭小である。



図 4.3.2.3 東町の原型のみの空間要素の分布

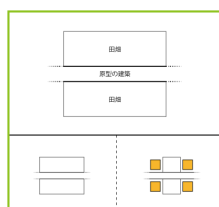


図 4.3.2.4 分布する空間要素

薊野西町

西町では、もともと集落を有していなかったこと、原型の街路が極めて少なかったこともあり、「原型」のみの空間要素は存在しない。



図 4.3.2.5 西町の原型のみの空間要素の分布

薊野南町

南町も西町と同様に、集落を有しておらず原型の街路が極めて少なかったため、「原型」のみの空間要素は存在しない。



図 4.3.2.6 南町の原型のみの空間要素の分布

薊野北町

北町では、かつて集落を有していた北側の山麓部に片側田畑側の空間要素を有している。しかし、東町と同様に1箇所しか存在せず、範囲としても狭小である。



図 4.3.2.7 北町の原型のみの空間要素の分布

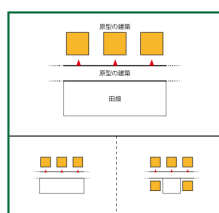


図 4.3.2.8 分布する空間要素

薊野中町

かつて広がりのある田園風景と広域な集落を有していたこともあり、住宅地開発で領域の大半を住宅が埋め尽くしているものの、「原型」のみの空間要素として、片側田畑型と両側田畑型と3つの空間要素を有している。5つの大字の中で最も多くの空間要素が分布している。しかし、それでも範囲としては狭小である。



図 4.3.2.9 中町の原型のみの空間要素の分布

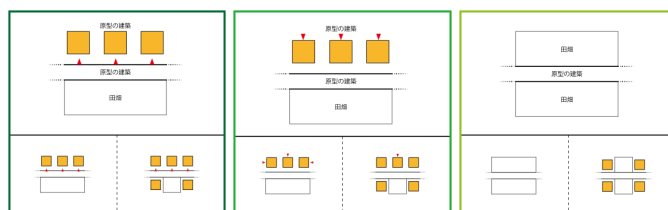


図 4.3.2.10 分布する空間要素

4-3-3. 薊野のスプロール現象と、その類型

薊野の「現在型」における類型の中からスプロール現象による新設のみの空間要素を示す。単一の空間要素は、両側建築型、片側空地型、両側空地型、幅広道路接続型、袋路型、片側空地袋型、両アプローチ型、共有空間型、空地共存型、共有空間型の15種類である。空間要素の結合体では、表裏混在型、袋路分岐型、内的共有空間型、空地内包型、最奥空地共存型の9種類である。但し、これらの類型はすべて、新設の街路、建築と空地に限る。以下では、これらの類型において各大字の分布を示す。

単一の空間要素

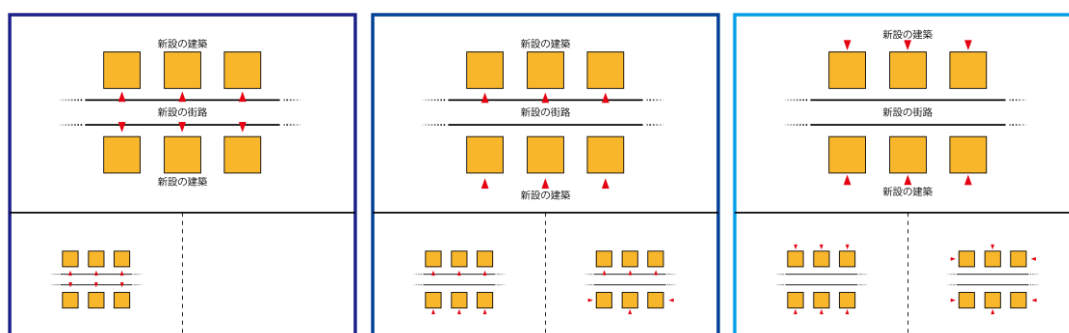


図 4.3.3.1 両側建築型の類型

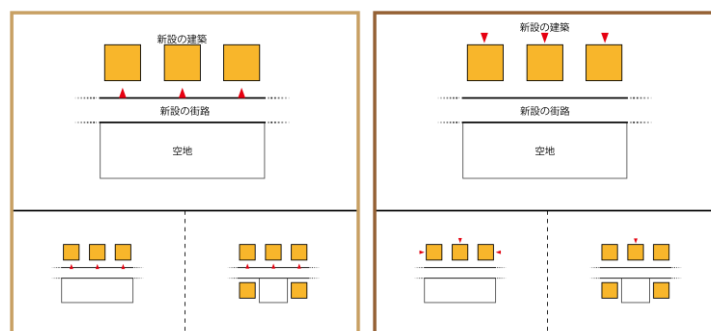


図 4.3.3.2 片側空地型の類型

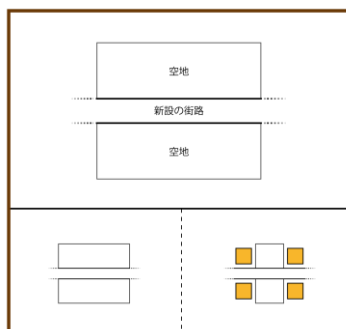


図 4.3.3.3 両側空地型の類型

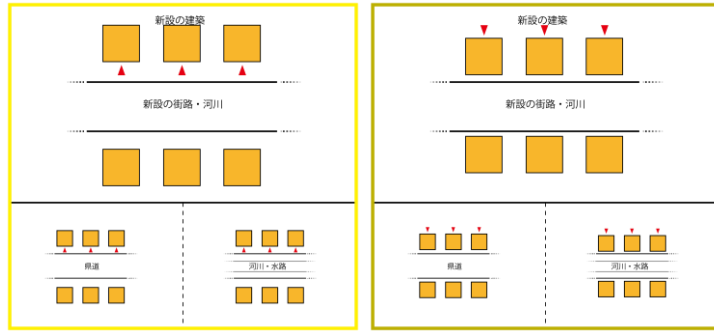


図 4.3.3.4 幅広道路接続型の類型

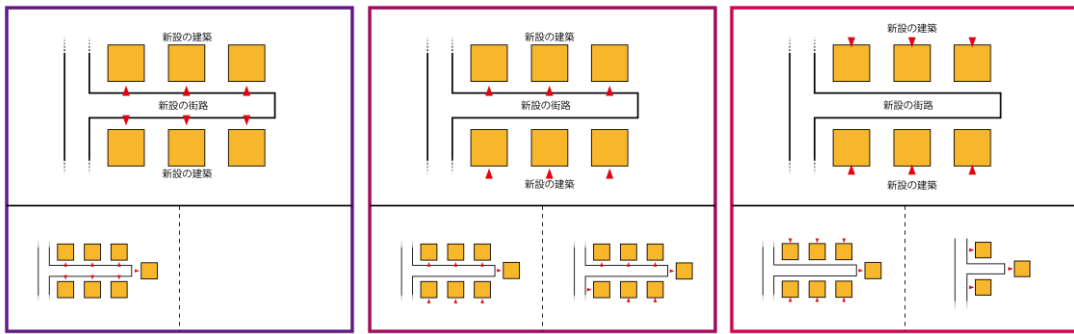


図 4.3.3.5 袋路型の類型

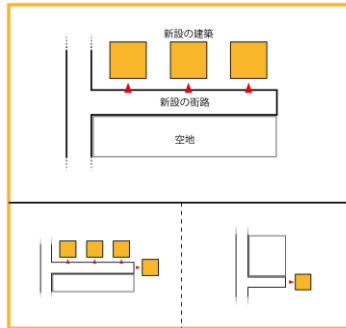


図 4.3.3.6 片側空地袋路型の類型

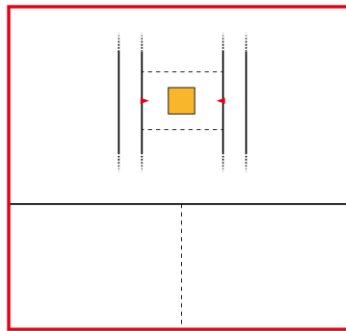


図 4.3.3.7 両アプローチ型の類型

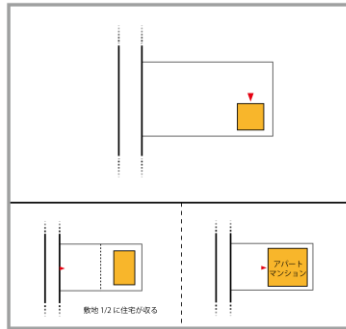


図 4.3.3.8 空地共存型の類型

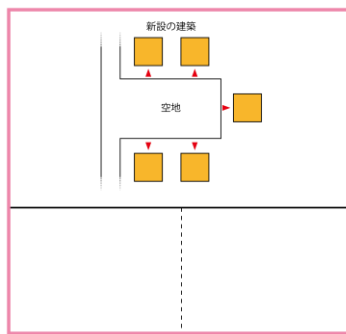


図 4.3.3.9 共有空間型の類型

空間要素の結合体

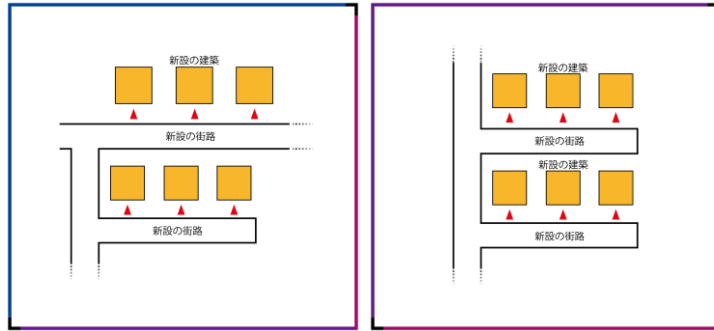


図 4.3.3.10 表裏混在型の類型

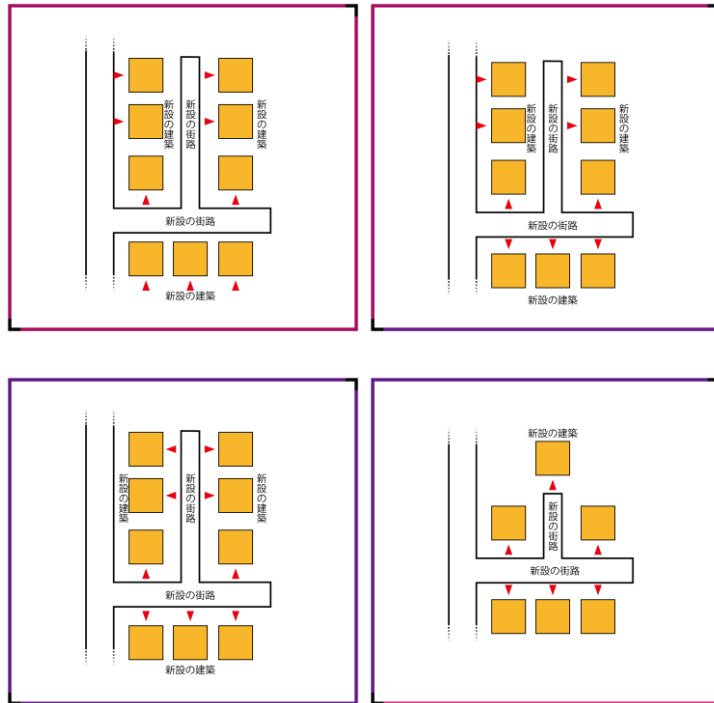


図 4.3.3.11 袋路分岐型の類型

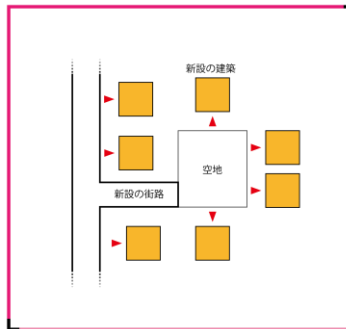


図 4.3.3.12 内的共有空間型の類型

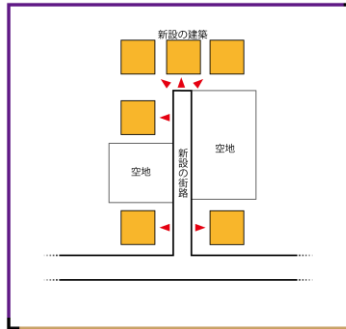


図 4.3.3.13 空地内包型の類型

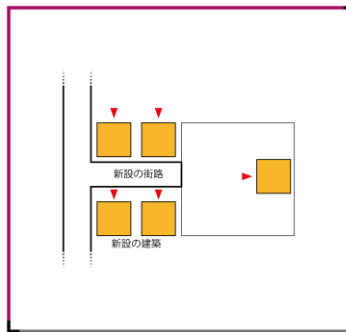


図 4.3.3.14 最奥空地共存型の類型

薊野東町

東町において単一の空間要素では、両側建築型が2種類、片側空地型が2種類、袋路型3種類、空地共存型が分布している。空間要素の結合体では、表裏混在型2種類、袋路型1種類、空地内包型1種類、最奥空地共存型が分布している。また、東町の特徴として袋路型や空地共存型は、特に奥行きが深く、行き止まりであることが最奥付近まで行かないと認識できないものが多い。



図 4.3.3.15 東町の新設のみの空間要素の分布

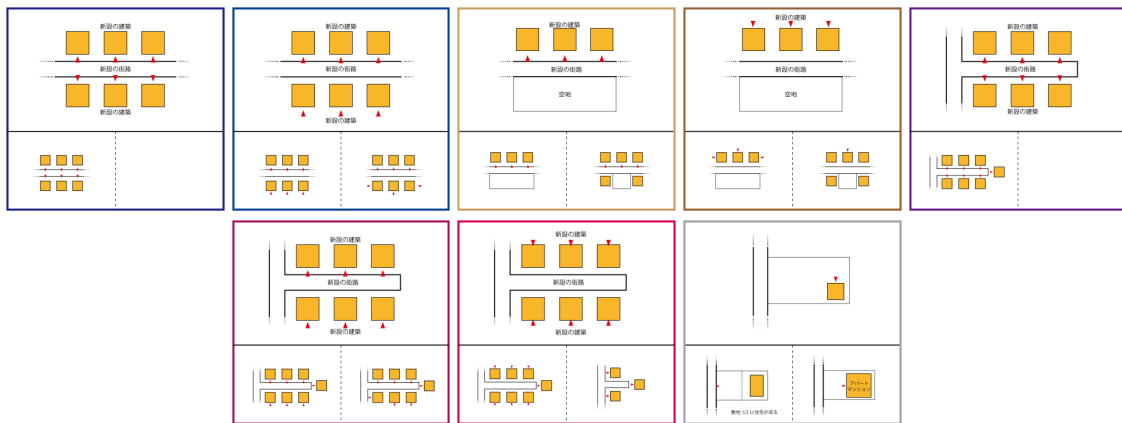


図 4.3.3.16 分布する単一の空間要素

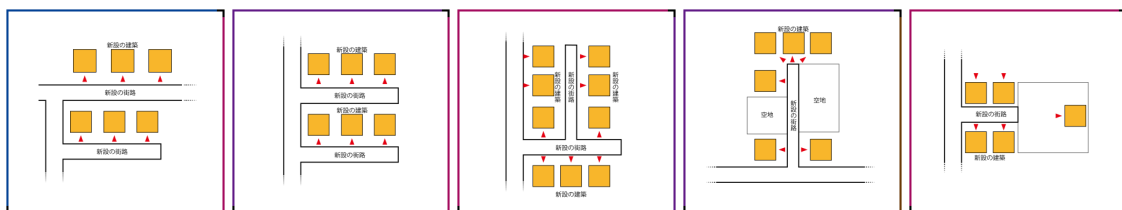


図 4.3.3.17 分布する空間要素の結合体

薊野西町

西町において単一の空間要素では、両側建築型 3 種類、片側空地型 2 種類、両側空地型、幅広道路型 2 種類、袋路型 3 種類、空地共存型と多くの類型が分布している。また空間要素の結合体では、表裏混在型、袋路分岐型 3 種類、空地内包型が分布している。また、袋路型が土佐街道沿いや土佐街道から敷かれた街路に接続しているものが多く南側に集中している。

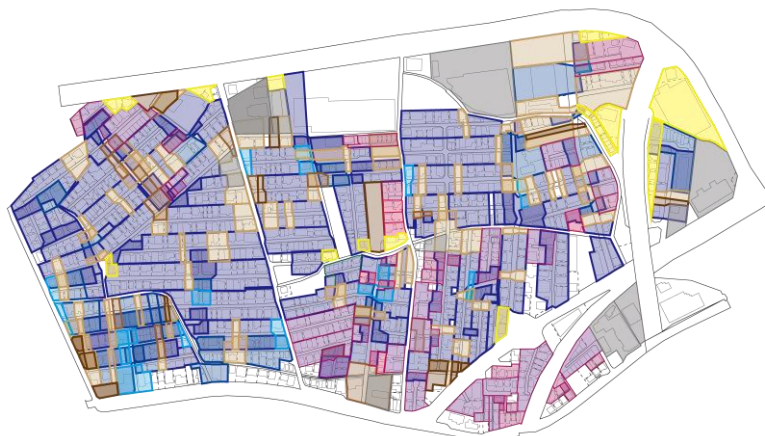


図 4.3.3.18 西町の新設のみの空間要素の分布

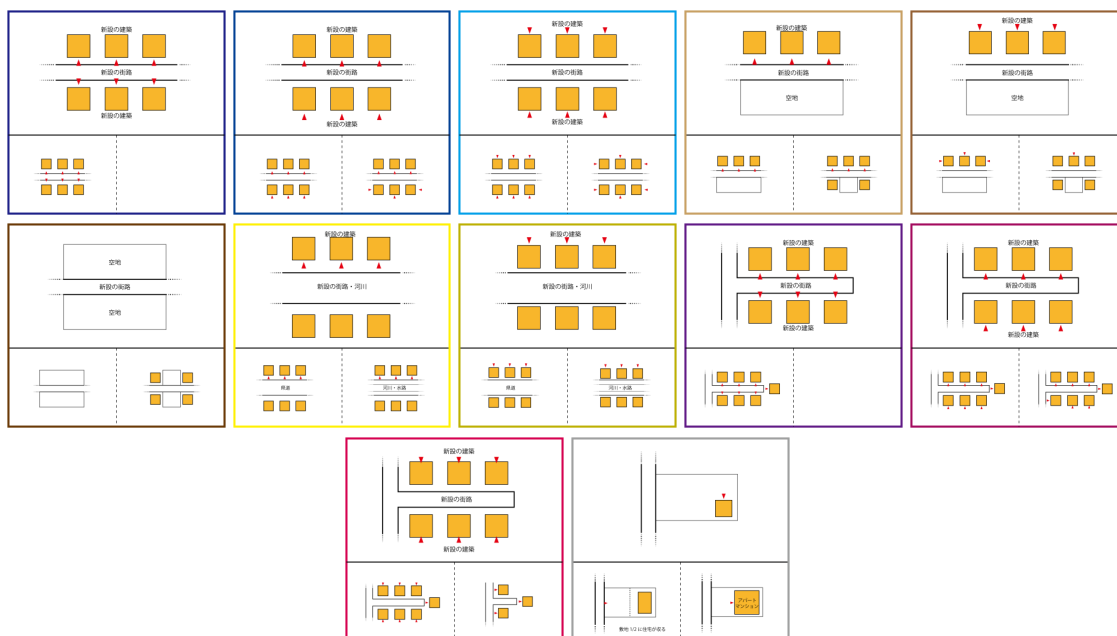


図 4.3.3.19 分布する単一の空間要素

薊野南町

南町において単一の空間要素では、両側建築型 3 種類、片側空地型 2 種類、両側空地型、幅広道路型 2 種類、袋路型 3 種類、両アプローチ型、空地共存型と多くの類型が分布している。また空間要素の結合体では、表裏混在型、袋路分岐型、空地内包型が分布している。また、南町では、1 階部分にピロティを設けた住宅が多く、両アプローチ型は南町に鹿分布しない。



図 4.3.3.21 南町の新設のみの空間要素の分布

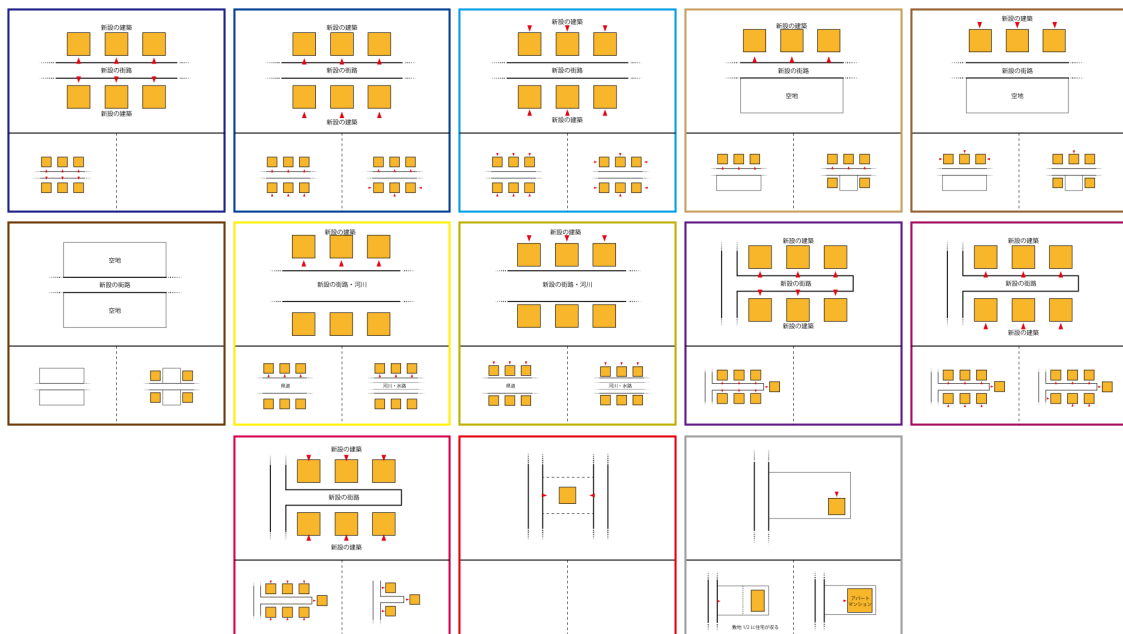


図 4.3.3.22 分布する単一の空間要素

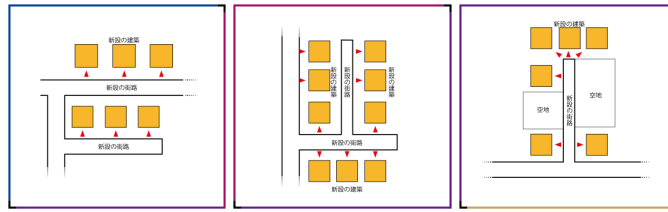


図 4.3.3.23 分布する空間要素の結合体

薊野北町

北町において単一の空間要素では、両側建築型 3 種類、片側空地型 2 種類、幅広道路型 2 種類、袋路型 3 種類、片側空地袋路型、空地共存型の類型が分布している。また空間要素の結合体では、表裏混在型、袋路分岐型 3 種類、空地内包型が分布している。

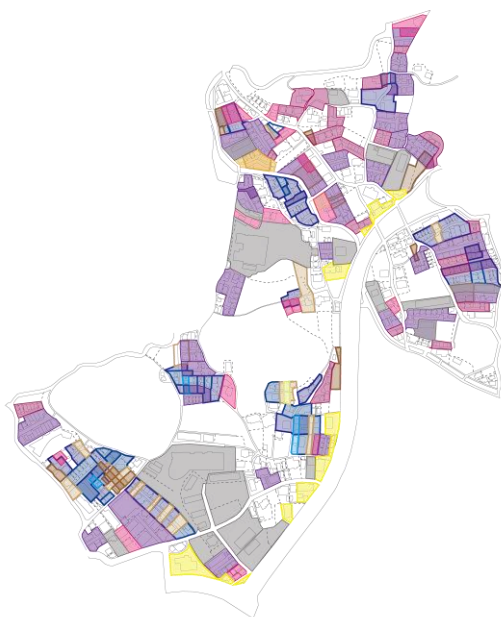


図 4.3.3.24 北町の新設のみの空間要素の分布

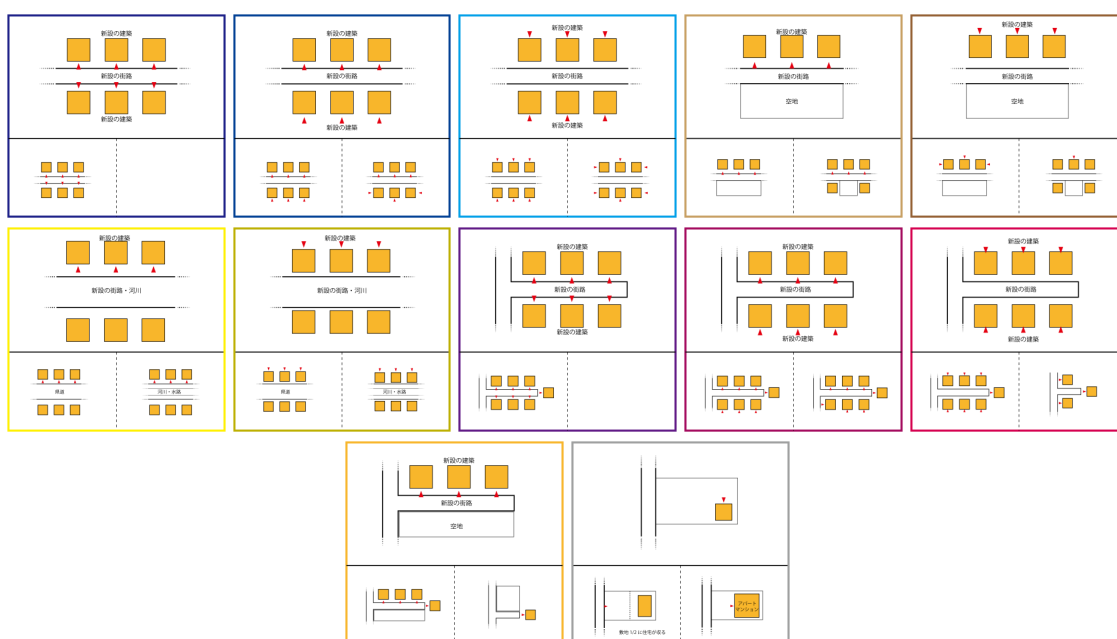


図 4.3.3.25 分布する単一の空間要素

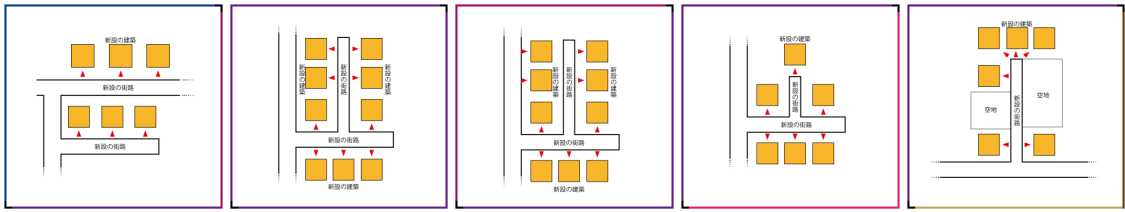


図 4.3.3.26 分布する空間要素の結合体

薊野中町

中町において単一の空間要素では、両側建築型 3 種類、片側空地型 2 種類、両側空地型、幅広道路型 2 種類、袋路型 3 種類、片側空地袋路型、空地共存型、共有空間型と多くの類型が分布している。また空間要素の結合体では、表裏混在型、袋路分岐型 4 種類、内的共有空間型、空地内包型と多くの類型が分布している。



図 4.3.3.27 中町の新設のみの空間要素の分布

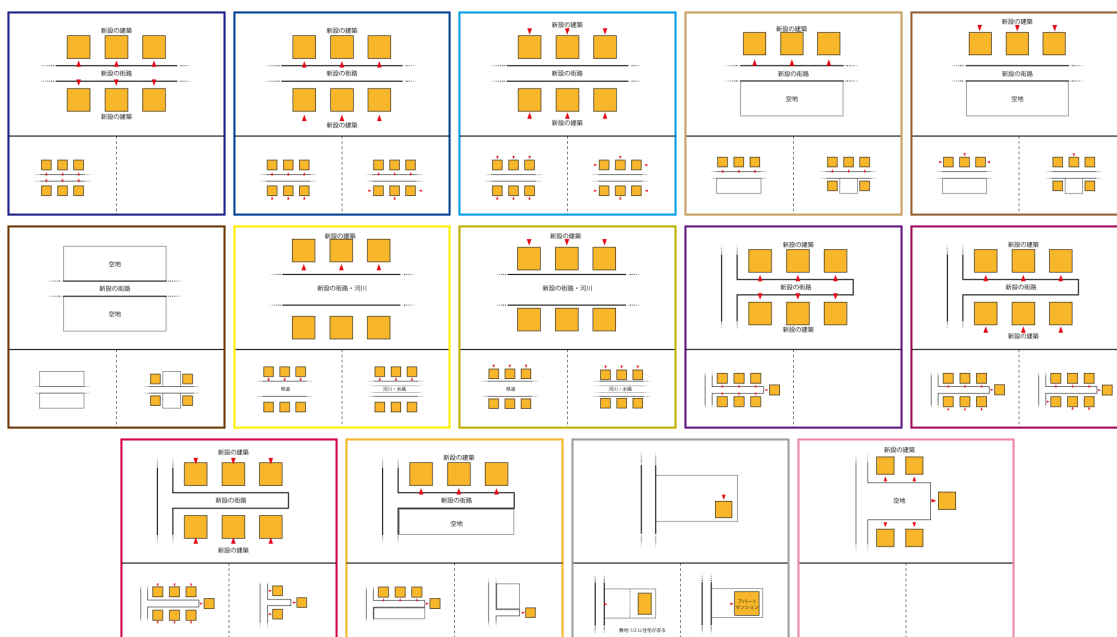


図 4.3.3.28 分布する単一の空間要素

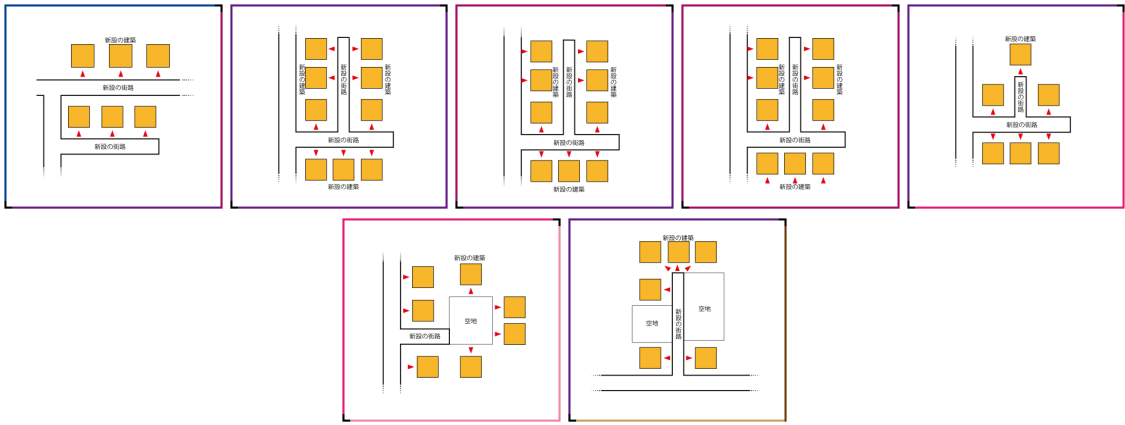


図 4.3.3.29 分布する空間要素の結合体

4-3-4. 薊野の「原型」とスプロール現象の重なりと、その類型

薊野の「現在型」における類型の中から「原型」と新設の重なる空間要素（以下、重なり空間要素）を示す。単一の空間要素は、両側建築型、片側空地型、片側田畑型、両側空地型、田畑空地対面型、両側田畑型、幅広道路接続型、袋路型、片側田畑袋路型、共有空間の15種類である。結合体の空間要素は、表裏混在型、袋路分岐型、内的共有空間型、田畑内包型の4種類である。但し、原型の街路に新設の住宅や空地が接続しているもの、新設の街路沿いに田畑が残存しているものなど、「原型」と新設が共存している領域とする。

単一の空間要素

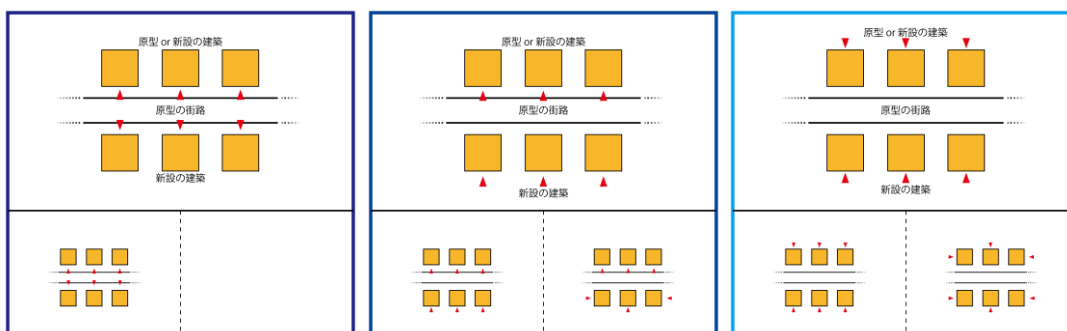


図 4.3.4.1 両側建築型の類型

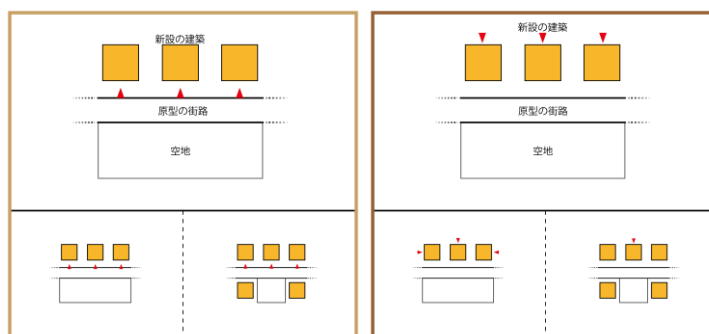


図 4.3.4.2 片側空地型の類型

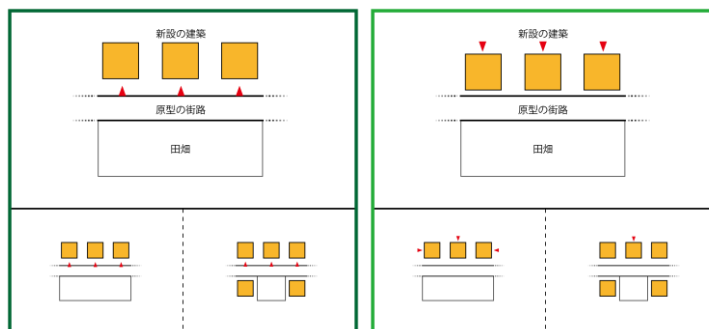


図 4.3.4.3 片側田畑型の類型

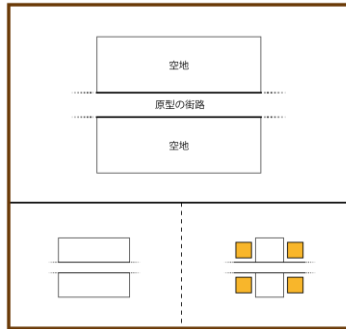


図 4.3.4.4 両側空地型の類型

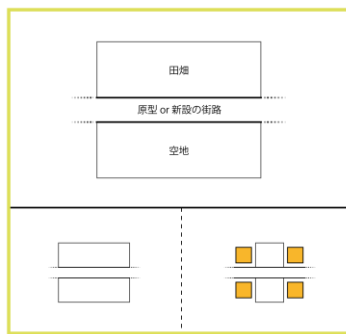


図 4.3.4.5 田畑空地対面型の類型

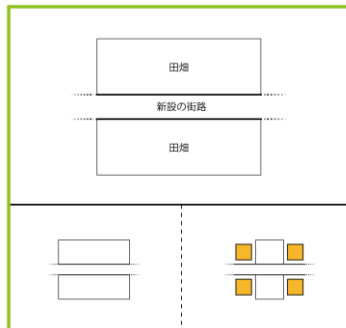


図 4.3.4.6 両側田畑型の類型

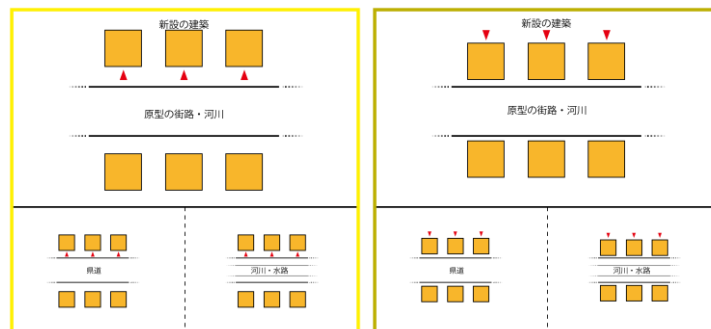


図 4.3.4.7 幅広道路接続型の類型

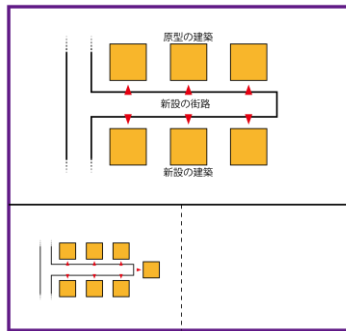


図 4.3.4.8 袋路型の類型

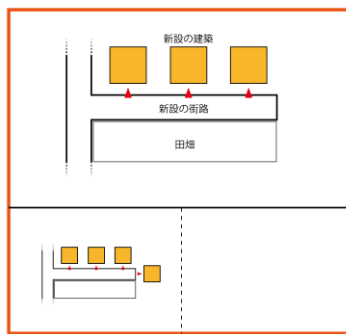


図 4.3.4.9 片側田畑袋路型の類型

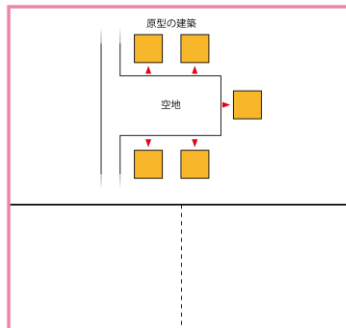


図 4.3.4.10 共有空間型の類型

空間要素の結合体

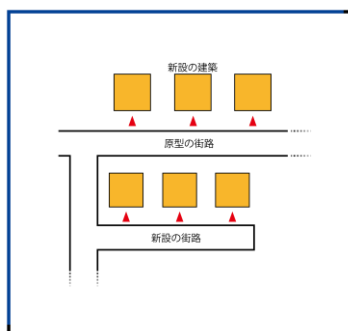


図 4.3.4.11 表裏混在型の類型

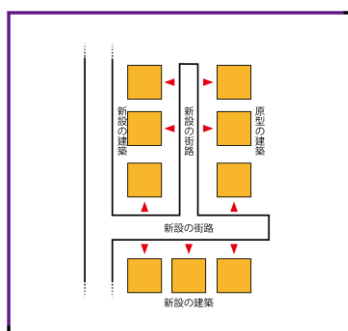


図 4.3.4.12 袋路分岐型の類型

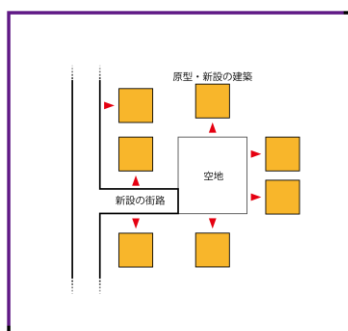


図 4.3.4.13 内的共有空間型の類型

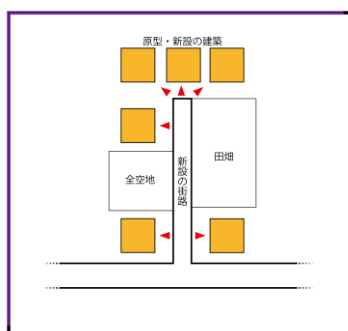


図 4.3.4.14 田畑内包型の類型

薊野東町

東町において単一の空間要素では、両側建築型が3種類、片側空地型が2種類、片側田畑型が2種類、両側空地型、田畑空地対面型、幅広道路接続型が2種類、袋路型、片側田畑袋路型の13種類が分布している。空間要素の結合体では、表裏混在型が分布している。分布としては、基本的に原型の街路に沿って分布しているが、田畑などが広域に残っている箇所もあり、広範囲に空間要素が存在する。



図 4.3.4.15 東町の重なる空間要素の分布

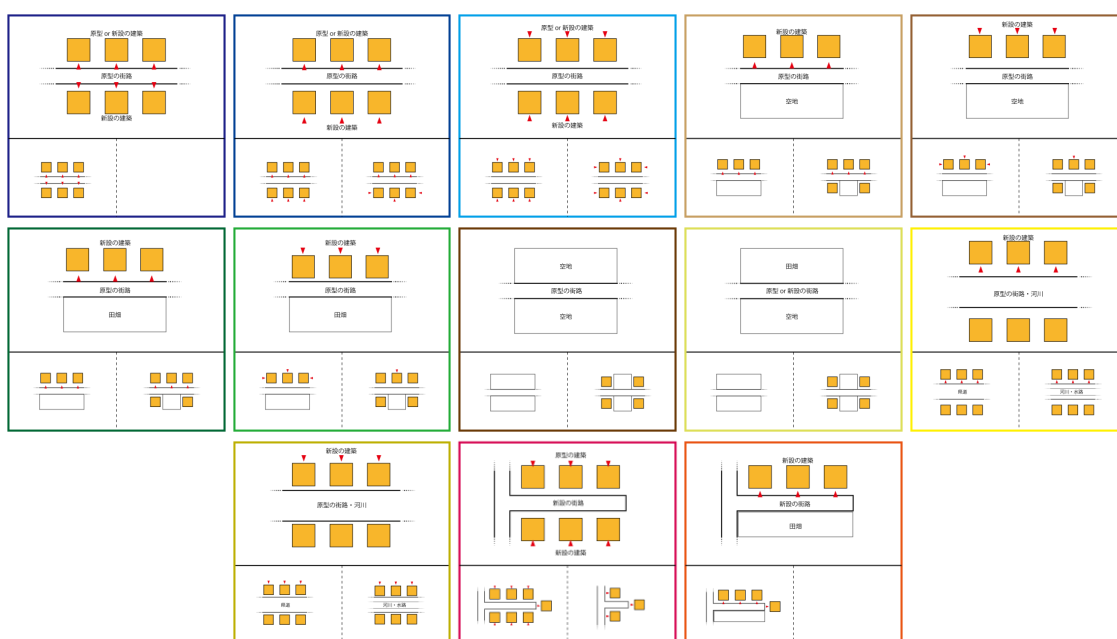


図 4.3.4.16 分布する単一の空間要素

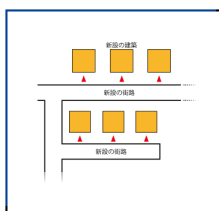


図 4.3.4.17 分布する空間要素の結合体

薊野西町

西町において単一の空間要素のみが分布しており、両側建築型が3種類、片側空地型が2種類、片側田畑が2種類、両側空地型、田畑空地対面型、幅広道路接続型が2種類の11種類である。基本的に原型の街路に沿ってきれいに分布しており、範囲としては狭小である。



図 4.3.4.18 西町の重なる空間要素の分布

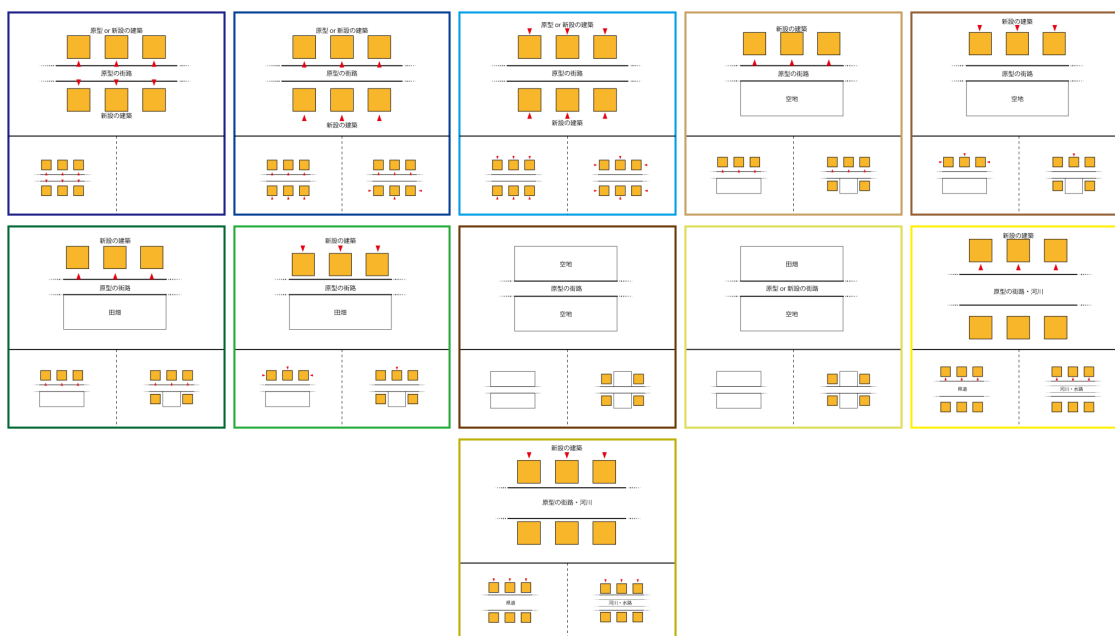


図 4.3.4.19 分布する単一の空間要素

薊野南町

南町では単一の空間要素のみが分布しており、両側建築型が3種類、片側空地型が2種類、片側田畑型、幅広道路接続型が2種類の8種類と種類自体はあまり多くない。ただ、分布としては、基本的に原型の街路に沿っているものの地区面積がそれほど広くないため、東側の工場や商業地を除けば、ある程度の範囲に重なる空間要素が存在する。



図 4.3.4.20 南町の重なる空間要素の分布

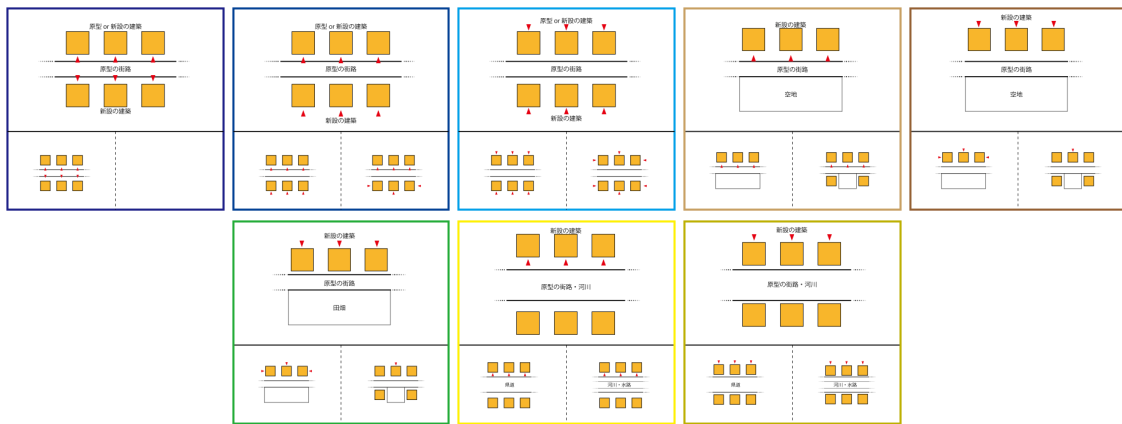


図 4.3.4.21 分布する単一の空間要素

薊野北町

北町では単一の空間要素のみが分布しており、両側建築型が3種類、片側空地型が2種類、片側田畑型が2種類、両側空地型、田畑空地対面型、幅広道路接続型、袋路型、片側田畑袋路型の13種類が分布している。分布としては、原型時から多くの街路を敷いていたこともあり、基本的に原型の街路に沿って分布しているが、広範囲に空間要素が存在する。

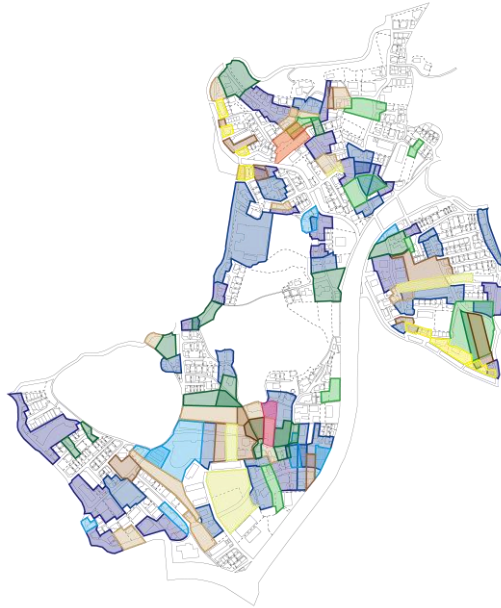


図 4.3.4.22 北町の重なる空間要素の分布

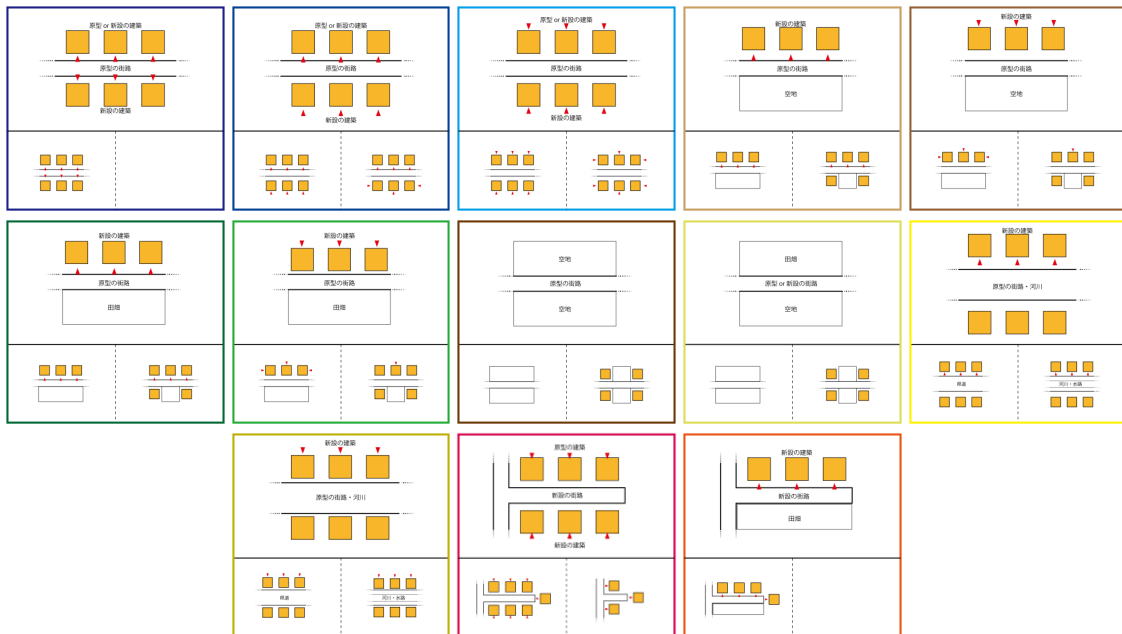


図 4.3.4.23 分布する単一の空間要素

薊野中町

中町において単一の空間要素では、両側建築型が3種類、片側空地型が2種類、片側田畑型が2種類、両側空地型、田畑空地対面型、両側田畑型、幅広道路接続型、袋路型、共有空間型の14種類が分布している。空間要素の結合体では、田畑内包型、内的共有空間型が分布しており、多種の空間要素を有している。分布を見ても中町の全域に重なる空間要素が分布しており、非常に広範囲に存在している。

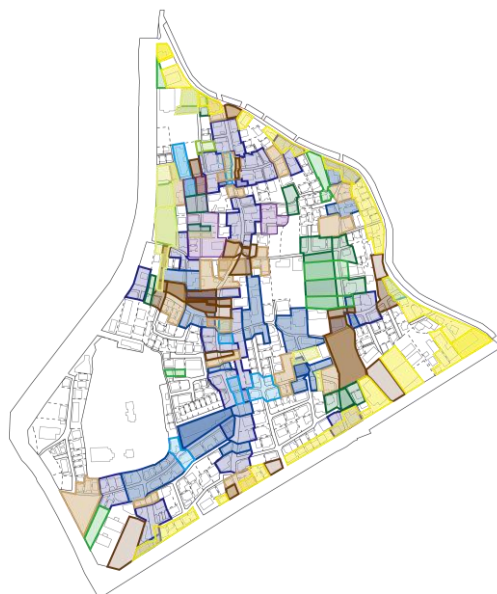


図 4.3.4.24 南町の重なる空間要素の分布

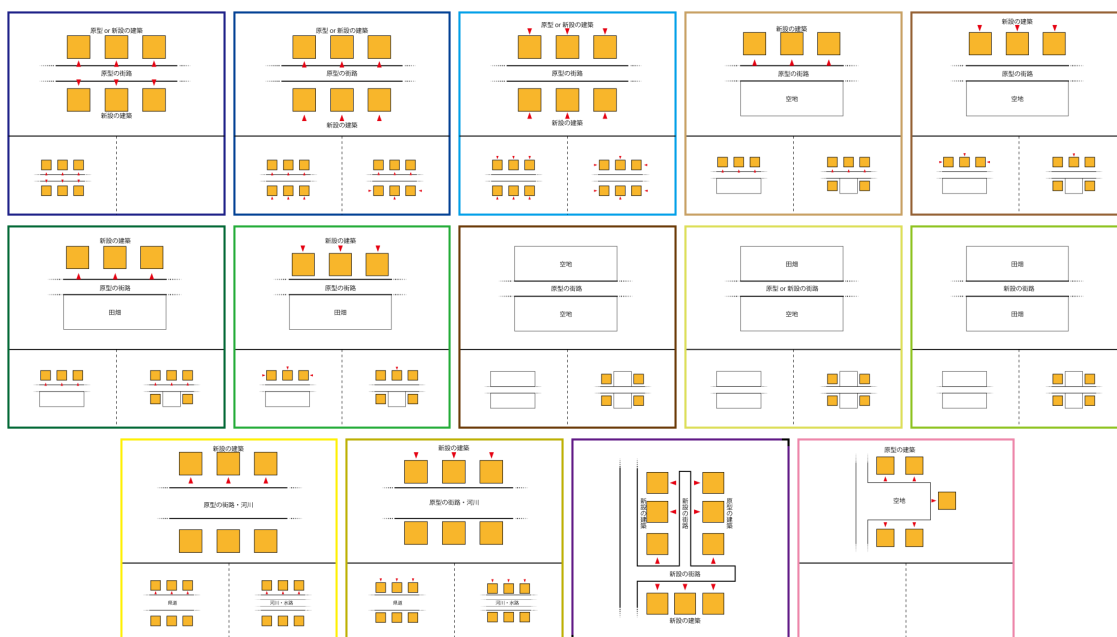


図 4.3.4.25 分布する単一の空間要素

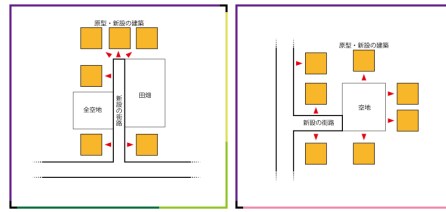


図 4.3.4.26 分布する空間要素の結合体

4-4. 薊野「現在型」と戸建住宅地の工夫

高度経済成長期初頭に急速に開発が進んだ合理的な住宅地を見直すため、共有空間の導入など、地域コミュニティを重要視する住宅地開発が行われた。そうした地域コミュニティを図る住宅地開発の工夫が数多く紹介されている「住まいのまちなみを創る」という書籍を参考に、コミュニティが生まれる「まちなみ」の計画手法や空間を構成する要素を開発事例から読み取り、その要素と薊野の「現在型」に見られる空間要素との相関性を示す。

4-4-1. 「住まいのまちなみを創る」に見る戸建て住宅地開発事例

「住まいのまちなみを創る」という書籍では、共有空間の導入・環境共生・伝統的まちなみとの調和・特定の国や地域の街並み再現など、テーマを据えて、それに叶う工夫が盛り込まれた177の住宅地開発事例を紹介している。その中でも、共有空間を導入した街、環境共存の町をテーマに計画された住宅地が多く、ここでは、この2つをテーマに掲げている住宅地の事例をいくつか取り出す。

事例 1 : 諏訪野

計画意図は、自然環境との共生（緑化、雨水の地下涵養）みち空間の工夫により、公共空間と私有空間が相互に広がりを作り出す、まちなみの景観と交流の場づくりや住民主体の管理をテーマとしている。

計画の特徴として、地区内の幹線道路により3つの街区にわけ、地区外の幹線道路と接続する街道を5つに絞っている。全ての道路は曲線を用いて、不整形宅地のデッドスペースを意図的に作り、公私的空間の拡大化を図っており、ヒエラルキーを設けた道路は、地区内幹線道から細街路、さらにコモン広場、フットパスへとつながる。5～10戸の住宅でコモン広場を囲むクラスター状の配置を基本とし、これを細街路に接続させている。[4-1]



図 4.4.1.1 住宅地の全体計画

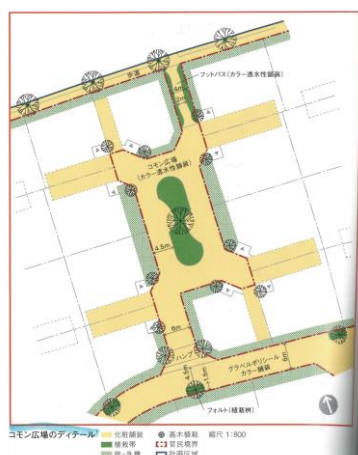


図 4.4.1.2 計画のディテール



図 4.4.1.3 住宅地の情景

事例 2 : イートピア名取

計画意図は、従前の自然林を緑地や公園として全体の24%を保全し、さらに移植樹を活用した緑の空間づくりを骨格としている。また、コミュニティ形成を重視し、小規模な住戸単位、暮らしの場（庭先）としたみちづくりのために、ヒエラルキー設定、直線を避けた道路線形、きめ細やかな道路のデザインに配慮している。

計画の特徴として、地区中央に公園などのコミュニティ施設を配置し、外周の骨格道路から細街路、さらにフットパスから公園へと、中心に行くにつれて人の空間となるような段階的な道路配置をしている。道路幅員を4～6mの範囲に設定し、通常の6mから幅員を減じた分を宅内緑地としている。道路は、クランク型、クルドサック型、ループ型、など街区毎に異なり、街区感はフットパスがつないでいる。



図 4.4.1.4 住宅地の全体計画



図 4.4.1.5 計画のディテール

事例3：みらい平 陽光台

計画意図は、新しいまちなみの創造と住民参加のコミュニティ、次世代基準の住まいと自然環境との共生を開発のコンセプトとしている。

計画の特徴としてコミュニティの核となる集会場と広場（センターコート）を街の中心に配置、西側幹線道路（外周）に街のメインゲートを設け、センターコートと結ぶ緩やかな曲線の骨格街路を配置している。これに通過交通のないループ道路をつなげたクラスターを構成している。クラスター内は、身近なコミュニティづくりを意識し、7～8戸程度ごとにみち広場（コミュニティコート）を配置し、これらを歩行者専用道路でつないでいる。



図 4.4.1.6 住宅地の全体計画

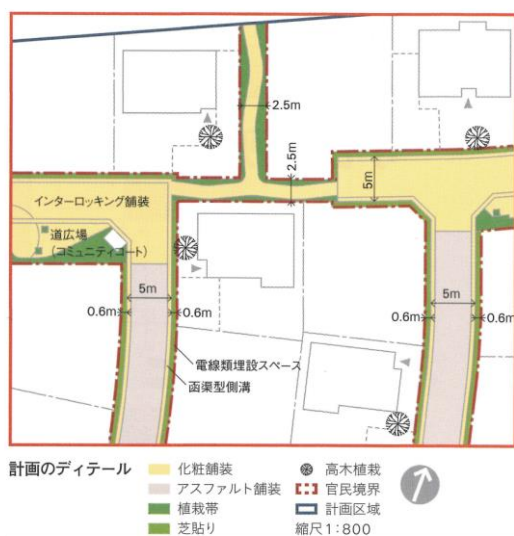


図 4.4.1.7 計画のディテール



図 4.4.1.8 住宅地の情景

事例4：ミリオンアベニュー

計画意図は、住民が空間や時間を共有し、互いにコミュニケーションしながら豊かな暮らしが実現するまちをイメージし、コモン（共有空間）のある暮らしをコンセプトとしている。

計画の特徴として、中央にS字道路を配置し、道路沿いに奥行1mの植栽帯（宅内）を設け、緑あふれる骨格とする。全ての住戸は中庭を思わせるクルドサック道路からのアプローチとし、6戸前後のクラスター構成とする。

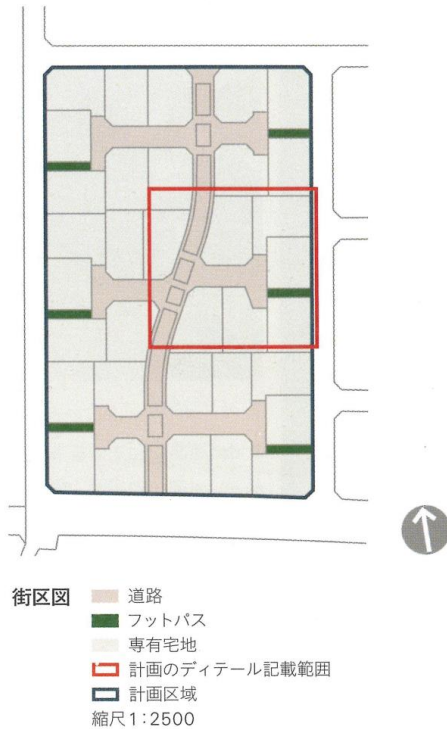


図 4.4.1.9 住宅地の全体計画

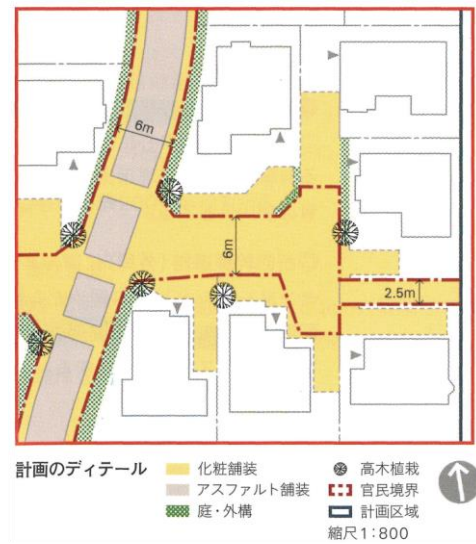


図 4.4.1.10 計画の詳細



図 4.4.1.11 住宅地の情景

事例5：アメリカンビレジ

計画意図は、北米スタイルの居住環境づくりのノウハウの集大成として、低廉で良質な住まいと環境の実現を目指している。

計画の特徴として、背割りのまちなみに変化を持たせるため、建物配置を道路に対してわずかに振り（3度～6度）、まちなみとして意識される面を2面としている。2路線は公園と東南端のフットパスに接続する袋小路とし、歩行者のための道路としての意識を持たせる。



図 4.4.1.12 住宅地の全体計画



図 4.4.1.13 計画のディテール



図 4.4.1.14 住宅地の情景

4-4-2. 地域コミュニティを図る戸建て住宅地の構成

ここでは、薊野の空間との相関を見るため、前記している戸建て住宅地の事例に共通して見られる基本的な構成と住宅地の工夫を抽出している。

戸建て住宅地の基本構成

戦後高度経済成長期の急速な都市化とそれに伴う人口増加が、短期的に大量の住宅を要求することとなった。そのため、住宅地開発は効率的に行えるよう、団地やニュータウンと呼ばれる大規模住宅地が大量供給され、合理的で画一的な住宅地が次々に開発される。そうした住宅地は合理的で均質な空間を有しており、空間の退屈さや地域コミュニティの希薄さが問題とされていた。その後、戦後高度経済成長期の合理的で均質な住宅地の反省から、この均質な住宅地をベースに公的であり私的である共有の空間を取り入れた開発が行われる。その手法として、住宅地内の中心（人がよく集う場所）に公園や集会場が設置され、通過交通としての機能や人が集える機能などの多様な機能を街路に持たせるため、骨格街路、幹線街路、細街路のように街路のヒエラルキーを設定している。これが地域コミュニティを形成するための基本構成となる。

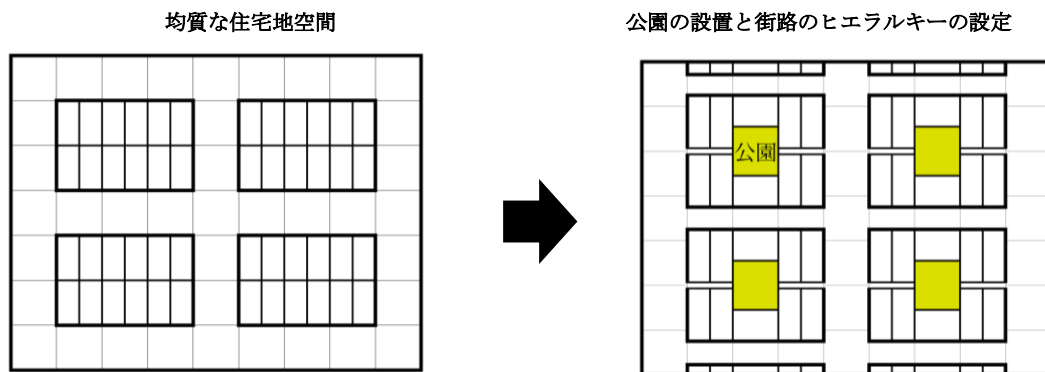


図 4.4.2.1 住宅地の基本的な構成

戸建て住宅地の工夫

合理的で均質な住宅地をベースに共有空間を取り入れた住宅地は、さらなる地域コミュニティの促進と豊かな町並みの形成に向け、歩行者専用道路（フットパス）や緑化による緑溢れる町並みを形成している。また、交通の安全性と町並みに変化をもたらす目的として、背割り宅地の敷地に住宅の角度をランダムに配置したり、骨格街路には曲線、ボンエルフ、ループが用いられている。さらに、住宅地内には幾つものクラスターを形成し、それぞれのクラスター内で小さなコミュニティ形成を図るため、骨格街路に接続する細街路を拡幅し、みち広場や中庭型クルドサックなどが設けられている。

全体計画

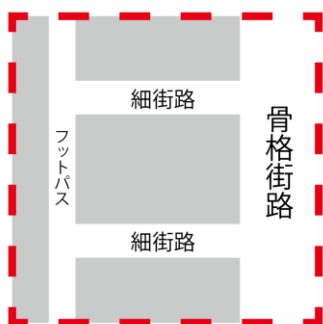


図 4.4.2.2 フットパス

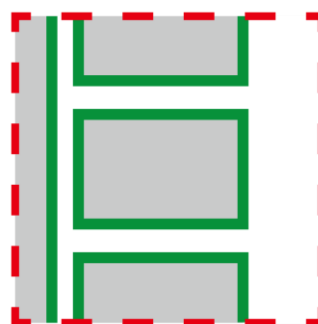


図 4.4.2.3 緑化

骨格街路の形状



図 4.4.2.4 曲線街路



図 4.4.2.5 ボンエルフ街路

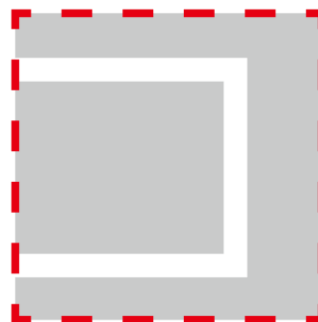


図 4.4.2.6 ループ街路

クラスター内のコミュニティ広場

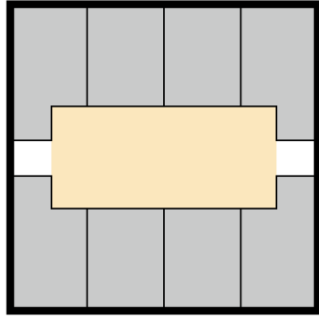


図 4.4.2.7 みち広場の細街路

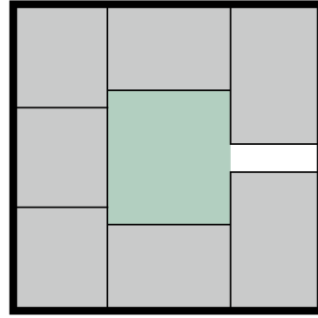


図 4.4.2.8 中庭的クルドサック

背割り宅地のランダムな配置

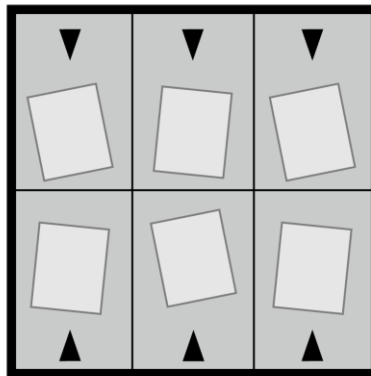


図 4.4.2.9 ランダムな住宅配置

4-4-3. 薊野の「現在型」と戸建て住宅地との相関

ここでは、薊野の「現在型」と戸建て住宅地の工夫の相関性を記述する。その際、残存する田畑は空間の広がりや緑化効果を与えるため、住宅地の工夫に見られる緑化と相関関係であるとされる。以下では各大字に見る相関性を記述している。

薊野東町と戸建て住宅地との相関

諏訪野団地と東町を見くらべると幹線街路から地区内へのループを描く骨格街路が敷かれ、その骨格街路から幾つもの袋路が接続する街路体系は共通している。また、フットパスが設けられており、街路のヒエラルキーも見られ、地域コミュニティを図る空間を東町が有していることが言える。さらに、東町では、広域な田畑が残存しており、住宅地の工夫に見られる緑化も有している。

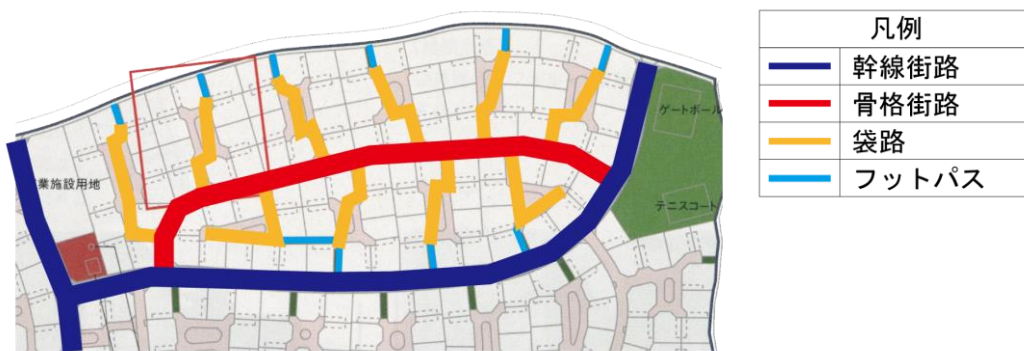


図 4.4.3.1 諏訪野団地の計画

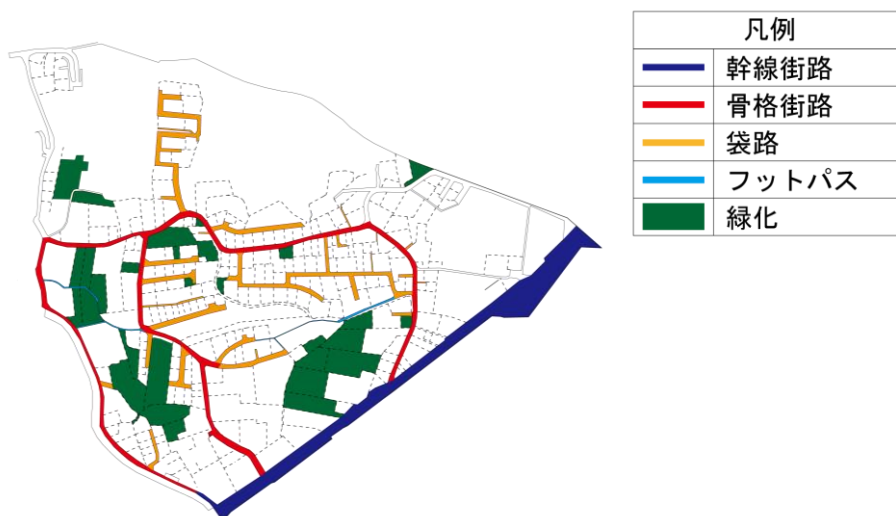


図 4.4.3.2 諏訪野団地との相関（東町）

薊野南町・中町と戸建て住宅地との相関

工夫された住宅地の事例より「みらい平」と南町、中町を見比べてみると非常に似通った町並みを形成していることが伺える。街路体系では、どちらも赤で示す曲線形状の骨格街路とそこから幾つも枝分かれするループが敷かれている。地域コミュニティを図る空間を南町、中町が有していると言える。特に中町では、現在もなお残存する田畑による緑化、フットパスや街路のヒエラルキーもあり、より事例が目指している空間に近い住宅地空間となっている。



図 4.4.3.3 みらい平の計画



図 4.4.3.4 みらい平との相関（南町）



図 4.4.3.5 みらい平との相関（中町）

薊野西町と均質な住宅地との相関

戦後高度経済成長期の合理的で均質な住宅地開発と西町を見比べると似ている空間が多々存在する。ただ、かつての参道が地区外をつなぐ通過交通へと機能を変え、原型の水路が強制的に袋路を形成している。これらの部分的な不備は、均質な住宅地の持つ一体性を弱めることとなり、全体的には均質空間になりきれない町となっている。



図 4.4.3.8 均質な住宅地の計画

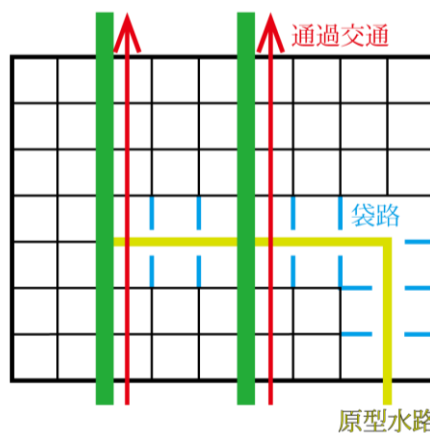
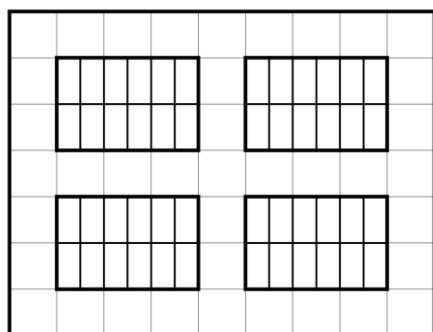


図 4.4.3.9 基本にある均質性

図 4.4.3.10 部分的な均質空間の不備

第5章 薊野の空間的特質と魅力

5-1. 薊野の空間変遷の特質

高知の市街拡大と薊野

1965年には、高知市の市街拡大が急速に進んでおり、1976年には、薊野を含め、郊外の宅地開発が進んでいる。その後、1988年までの12年間で一気に開発が進み、市街の範囲は広域に及ぶ。また、薊野は、高知市市街地から北東に位置しており、市街に最も近い西町が真っ先に都市化の影響を受けている。その後、土佐街道に隣接する中町、南町の開発が進み、遅れて東町、1997以降の市街拡大による宅地開発にかげりが見え始めた頃に、北町が開発が徐々に増えている。

薊野東町

市街拡大の影響を受け、宅地化が急速に進み出すのは、1976年以降であり、それまでの東町は広大な田園風景を形成していた。開発の順序としては、早々に葬地を有していた低山が整備され住宅地となり、その後は、土佐街道と集落を繋いでいた旧道に沿う形で、ゆっくりと住宅が建ち始める。その後、土佐街道沿いに住宅が建ち始めると徐々に範囲を北へと広げて行き、1990年後半に県道44号線が建設されるとその近辺は、短期間の間に商業施設が新設され、南東から北西へと侵食が進んでいる。

薊野西町

5つの大字の中で真っ先に市街拡大の影響を受け、1965年から1976年までの12年での開発速度が異常に速い。開発順序としては、まず、土佐街道に沿って南北に深い開発が行われ、その後、市街拡大による急速な宅地化により、西側の大半を住宅が埋め尽くすことになる。そのため、1976年の西町では、かつて葬地への参道であった街道を境に開発の方向が異なる住宅地が隣接している。その後、県道が2本敷かれるとその道に沿って商業施設が建ち始め、田畑のほぼ全域が住宅地へと塗り替えられている。

薊野南町

土佐街道に北端に敷かれており、比較的市街地に近い立地のため、早期に短期的な宅地開発が行われる。西町と同様に、1976年から1988年の12年間の開発速度が異常に速い。開発順序としては、西から土佐街道に沿って宅地化が進み徐々に内部へと侵食していく。その後、国道が東側に整備され、国道に沿って広域な開発が幾つも行われたことで、短期間の間に一気に居住領域を広げていった。

薊野北町

土佐街道から距離をおいた地区であるため、5つの大字の中で最も市街拡大の影響を受ける時期が遅い。開発順序としては、原型時に集落の周辺に住宅が建ち始め、少しずつ居住領域を広げていく順序と山麓部を新たに宅地化して住宅と建てていく順序の2タイプにより領域を広げていく。そのため、開発自体の方向性はなく、幾つものポイントが領域を広げていき徐々に浸食している。また、2000年頃に北町の東側に国道が敷かれたこともあり、北町全域に宅地化が進んでいく。

薊野中町

星神社までの伸びる主要な里道と各集落をつなぐ里道が分岐する点を中心に据える中町は、「原型」時に多くの街路が敷かれていた。開発の順序としては、土佐街道に沿って開発が進み掛川神社の参道沿いも宅地化が進んでいることがうかがえる。その後は「原型」の里道が全域敷かれていたため、侵食する方向性は生まれず、全域にわたり徐々に住宅密度が濃くなっていくような居住領域の広げ方をしている。

空間変遷の比較

地図による空間の変遷を追った結果、市街地に近く、幹線道路として機能する土佐街道が接する西町や南町が比較的早期に短期的な開発が行われ、市街地からの距離のある東町や北町の開発時期は遅く、速度は緩やかである。5つの字の中で中間的な場所に位置する中町は、開発時期も速く、その上開発速度は緩やかであり、最も長期的にスプロール現象の影響を受けている町であると言える。また、宅地開発の順序として、原型時に集落を有している地区では、早い時期から集落の周りに住宅を建てながら居住領域を広げていく傾向が伺える。そのため、原型時に幾つもの集落が存在する中町や北町、東町では、幾つものポイントで宅地化が波形的に広がり、断片的なスプロール空間の形成につながると考えられる。

表 5.1.1 地区内における居住地割合の変遷表

	原型	1965年	1976年	1988年	2005年	2015年
東町	8.5%	25.9%	25.9%	37.2%	57.2%	68.3%
西町	0.0%	10.7%	72.4%	81.2%	98.4%	99.4%
南町	0.0%	2.5%	41.7%	85.0%	93.9%	93.7%
北町	4.8%	14.4%	24.2%	48.3%	64.6%	69.2%
中町	20.4%	60.7%	70.7%	77.1%	83.9%	86.8%

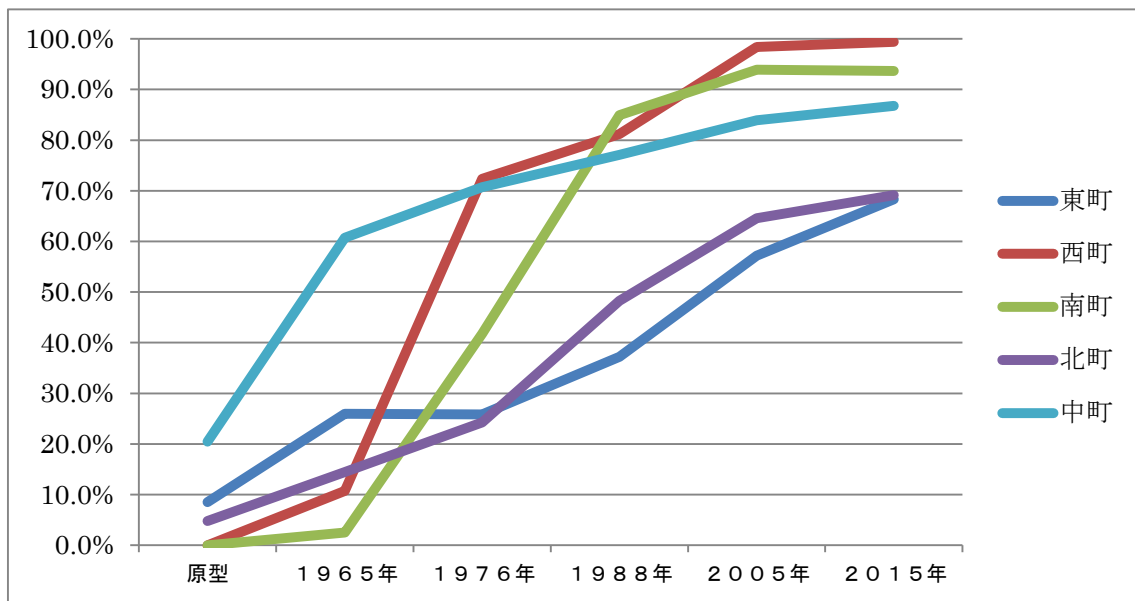


図 5.1.1 地区内における居住地割合の変遷図

5-2. 薊野の「現在型」にみる空間的特質

5-2-1. 街路体系と街区形状にみる空間的特質

薊野東町

原型の街路体系では、南端の土佐街道が走り、そこから弧を描くように集落に向け曲線形状の里道が敷かれ、全域にわたりループを形成している。現在では、この原型の街路が地区の骨格街路として機能し、その街路にいくつもの袋路の新設街路が接続する街路体系となっている。

原型街路がそれほど多く敷かれていなかったため、ほとんどの街区形状は原型の街区線を含んでおり、不均質な住宅地空間を作り出している。

薊野西町

原型の街路は、南端の川沿いの街路から北方向に伸びる葬地への2本の参道のみであり、街路体系としては地区外にわたり巨大なループを形成していた。この2本の参道が、現在では通過交通のための街路となっている。そのため、原型街路が地区内の秩序を作る骨格街路とはならず、2本の参道の東西には新設街路により袋路やハモニカ体系やグリッド体系が形成されている。そのため、西町の街区の多くは原型線を含まず、背割り線の方型街区が多く見られる。

薊野南町

北端に敷かれた都市機能の土佐街道と南端から東端にかけ川沿いの道により南町という領域を原型の街路が縁取っている。また、南町の中心を東西に敷かれた里道から土佐街道や南端の川沿いの道をつなぐ幾つもの里道が、結果として小規模なループを作り出している。原型時に集落を有していなかったが、原型街路が住宅地の骨格街路となり、地区内の秩序を作っている。ただ、原型街路により形成された街区の多くが新設街路により細分化され、原型線を含む街区はそれほど多くない。

薊野北町

北町のさらに奥に祀られた星神社へ向けて土佐街道から主要な街路と幾つもの集落から敷かれた里道が北町の北端で集約する。そのため、街路体系としては放射状を構成している。原型の街路が多く敷かれていたため、原型の街路を地区の骨格街路に設定し、新設街路は街区を細分化するか袋路が形成される。特に北町では小規模な袋路が数多く見られる。そのため、多くの街区形状は原型線により構成され不定形な街区形状を形成し、変化に富んだ町並みを作り出している。

薊野中町

原型時の街路体系として南端の土佐街道から中町の中心を星神社まで伸びる主要な街路が走り、その街路から枝分かれしている幾つものループ接続している。この原型街路が地区内の基本的な街路体系を形成されている。そのため、新設街路は街区を細分化するような計画が行われている。そのため、ほとんどの街区の形状は原型線で構成されており、変化に富む住宅地空間を作り出す。

5-2-2. 空間要素にみる空間的特質

「現在型」空間の分析では、建築、街路、空地の配列パターンによる類型化と時間の重なりによる細分化を行った。その結果、薊野空間では、46種類もの性質の異なる空間を抽出した。この分析結果から薊野の町が多彩な空間を有していることが言える。以下では、大字ごとに「現在型」空間の特質を示す。

薊野東町

空間要素の抽出と分布による分析を行った結果、東町では、全19種類のうち17種類の単一要素を抽出した。また、空間要素の結合体は9種類のうち5種類もの空間要素を有している。また、17種類もの単一の空間要素の全体における各型の面積割合をグラフで表すと17種類の空間要素は、どれか1つの空間要素が広域な面積を占めることなく分布されていることがわかる。これにより、多様な空間を東町が有していると言える。

表 5.2.2.1 単一空間要素の面積割合

	「原型」空間	スプロール空間	重なり空間	「現在型」空間
両側建築型(青色)	0.0%	4.2%	9.7%	13.9%
両側建築型(藍色)	0.0%	0.9%	0.7%	1.6%
両側建築型(水色)	0.0%	0.0%	1.8%	1.8%
片側空地型(黄土色)	0.0%	4.4%	5.0%	9.4%
片側空地型(茶色)	0.0%	2.2%	5.4%	7.6%
片側畑畑型(深緑色)	0.0%	0.0%	6.1%	6.1%
片側畑畑型(緑色)	0.0%	0.0%	0.9%	0.9%
両側空地型(焦茶色)	0.0%	0.0%	0.0%	8.2%
畑畑空地対面型(淡黄色)	0.0%	0.0%	3.8%	3.8%
両側畑畑型(黄緑色)	1.7%	0.0%	0.0%	1.7%
幅広道路接続型(黄色)	0.0%	0.0%	6.7%	6.7%
袋路型(青紫色)	0.0%	10.0%	0.0%	10.0%
袋路型(紫色)	0.0%	6.7%	0.0%	6.7%
袋路型(赤紫色)	0.0%	2.9%	0.9%	3.8%
片側畑畑袋路型(朱色)	0.0%	0.0%	1.6%	1.6%
空地共存型(灰色)	0.0%	16.3%	0.0%	16.3%
総計	1.7%	47.6%	42.5%	100.0%



図 5.2.2.1 東町の分布図

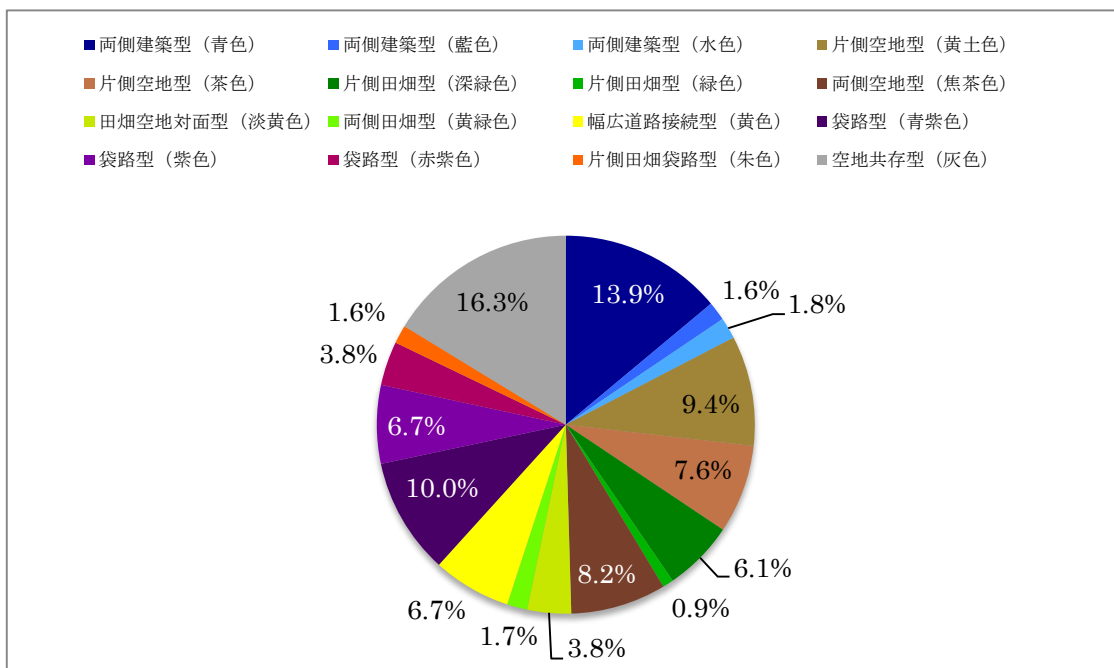


図 5.2.2.2 単一空間要素の面積割合図

薊野西町

空間要素の抽出と分布による分析を行った結果、西町では、全19種類のうち14種類の単一要素を抽出した。また、空間要素の結合体は9種類のうち6種類もの空間要素を有している。また、14種類もの単一の空間要素の全体における各型の面積割合をグラフで表すと両側建築型（青色）だけで36.2%の面積を占め、また、両側建築型の3種を合計すると50%を超える。そのため、住宅が密集する比較的均質な空間になっていると考えられる。

表 5.2.2.2 単一空間要素の面積割合

	「原型」空間	スプロール空間	重なり空間	「現在型」空間
両側建築型(青色)	0.0%	35.6%	0.7%	36.2%
両側建築型(藍色)	0.0%	7.5%	2.1%	9.6%
両側建築型(水色)	0.0%	3.8%	2.0%	5.8%
片側空地型(黄土色)	0.0%	11.3%	2.0%	13.3%
片側空地型(茶色)	0.0%	1.8%	1.7%	3.5%
片側田畑型(深緑色)	0.0%	0.0%	0.7%	0.7%
片側田畑型(緑色)	0.0%	0.0%	1.0%	1.0%
両側空地型(焦茶色)	0.0%	1.9%	2.2%	4.1%
田畑空地対面型(淡黄色)	0.0%	0.0%	0.5%	0.5%
幅広道路接続型(黄色)	0.0%	2.7%	6.2%	8.8%
袋路型(青紫色)	0.0%	6.7%	0.0%	6.7%
袋路型(紫色)	0.0%	2.7%	0.0%	2.7%
袋路型(赤紫色)	0.0%	0.6%	0.0%	0.6%
空地共存型(灰色)	0.0%	6.6%	0.0%	6.6%
総計	0.0%	81.1%	18.9%	100.0%



図 5.2.2.3 西町の分布図

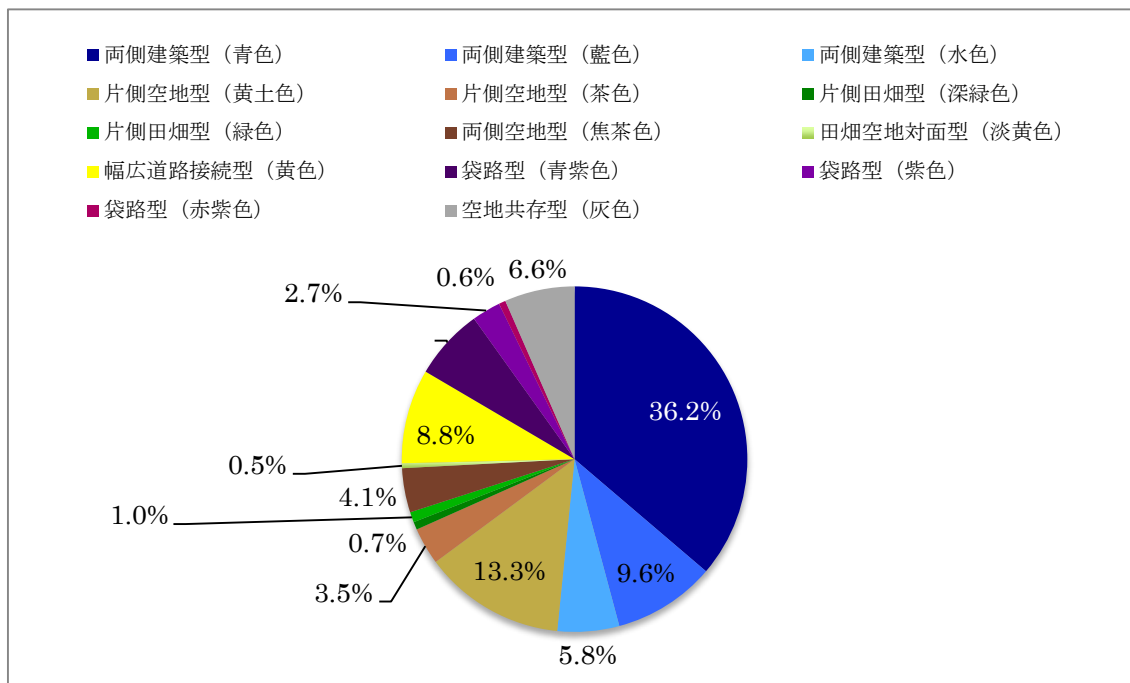


図 5.2.2.4 単一空間要素の面積割合図

薊野南町

空間要素の抽出と分布による分析を行った結果、南町では、全19種類のうち14種類の単一要素を抽出した。また、空間要素の結合体は9種類のうち3種類もの空間要素を有している。空間の多様性としては5つの大字の中で最も乏しい。ただ、14種類もの単一の空間要素の全体における各型の面積割合をグラフで表すと共有空地型が多くなっているが、東側の商業地がその大半を占めているためであり、住宅地のみで見ると地区面積も狭小であるため、多様な空間を有していると言える。

表 5.2.2.3 単一空間要素の面積割合

	「原型」空間	スプロール空間	重なり空間	「現在型」空間
両側建築型(青色)	0.0%	3.8%	0.5%	4.3%
両側建築型(藍色)	0.0%	2.2%	1.0%	3.1%
両側建築型(水色)	0.0%	0.3%	0.8%	1.1%
片側空地型(黄土色)	0.0%	2.7%	1.3%	4.0%
片側空地型(茶色)	0.0%	1.5%	1.4%	2.8%
片側田畑型(緑色)	0.0%	0.0%	2.3%	2.3%
両側空地型(焦茶色)	0.0%	0.6%	0.0%	0.6%
幅広道路接続型(黄色)	0.0%	2.9%	2.6%	5.4%
袋路型(青紫色)	0.0%	3.0%	0.0%	3.0%
袋路型(紫色)	0.0%	0.7%	0.0%	0.7%
袋路型(赤紫色)	0.0%	0.2%	0.0%	0.2%
両アプローチ型(赤色)	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%
空地共存型(灰色)	0.0%	8.8%	0.0%	8.8%
総計	0.0%	26.8%	9.8%	36.5%



図 5.2.2.5 南町の分布図

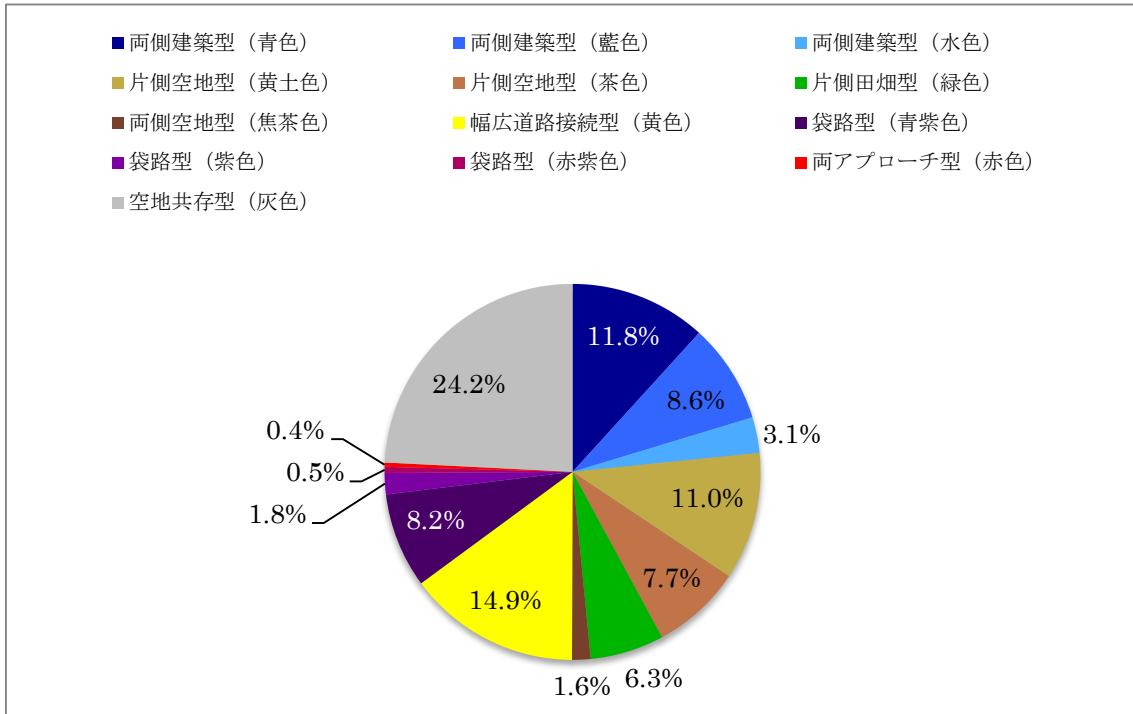


図 5.2.2.6 単一空間要素の面積割合図

薊野北町

空間要素の抽出と分布による分析を行った結果、北町では、全19種類のうち16種類の単一要素を抽出した。また、空間要素の結合体は9種類のうち6種類もの空間要素を有している。空間要素の結合体自体の種類は東町と変わらないが、15箇所と分布している箇所が多い。また、17種類もの単一の空間要素の全体における各型の面積割合をグラフで表すと面積の偏りはあまりなく、どれか1つの空間要素が広域な面積を占めることなく分布されていることがわかる。これらにより、北町は比較的多彩な空間を有していると言える。

表 5.2.2.4 単一空間要素の面積割合

	「原型」空間	スプロール空間	重なり空間	「現在型」空間
両側建築型(青色)	0.0%	6.0%	8.1%	14.1%
両側建築型(藍色)	0.0%	3.1%	9.8%	12.9%
両側建築型(水色)	0.0%	0.3%	3.0%	3.3%
片側空地型(黄土色)	0.0%	2.6%	4.5%	7.2%
片側空地型(茶色)	0.0%	1.3%	2.8%	4.1%
片側田畑型(深緑色)	11.2%	0.0%	4.9%	16.0%
片側田畑型(緑色)	0.0%	0.0%	3.5%	3.5%
両側空地型(焦茶色)	0.0%	0.0%	0.5%	0.5%
田畑空地対面型(淡黄色)	0.0%	0.0%	2.6%	2.6%
幅広道路接続型(黄色)	0.0%	2.1%	1.0%	3.1%
袋路型(青紫色)	0.0%	12.7%	0.0%	12.7%
袋路型(紫色)	0.0%	3.7%	0.0%	3.7%
袋路型(赤紫色)	0.0%	2.7%	0.0%	2.7%
片側空地袋路型(橙色)	0.0%	0.4%	0.0%	0.4%
片側田畑袋路型(朱色)	0.0%	0.0%	0.6%	0.6%
空地共存型(灰色)	0.0%	12.6%	0.0%	12.6%
総計	11.2%	47.5%	41.3%	100.0%



図 5.2.2.7 南町の分布図

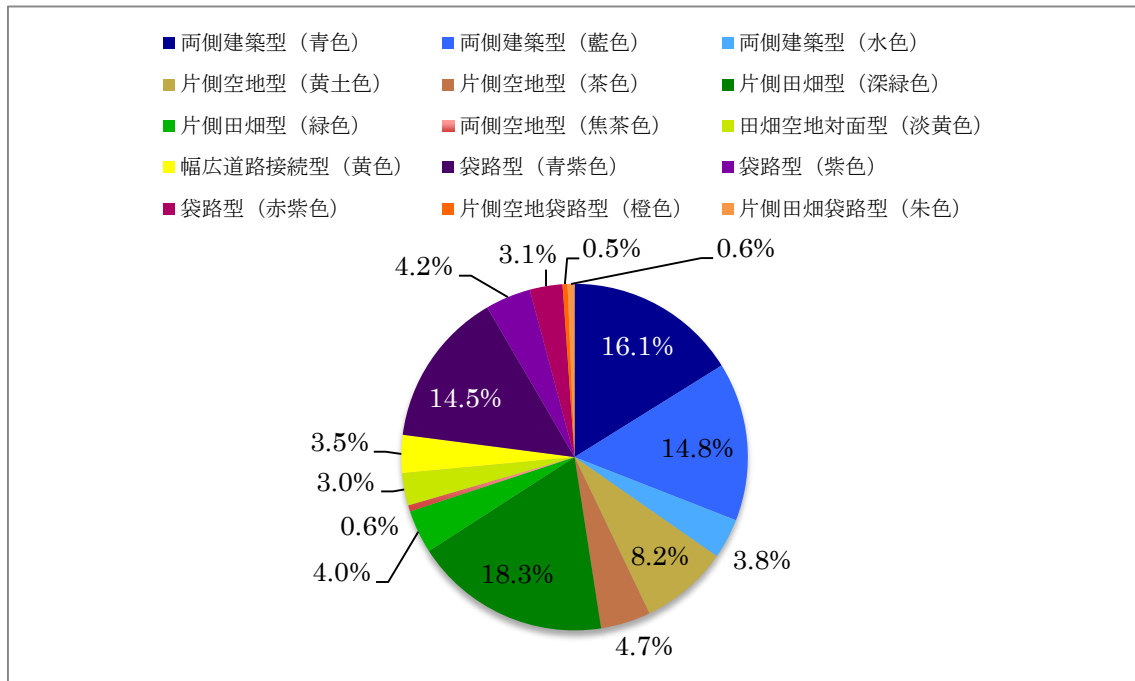


図 5.2.2.8 単一空間要素の面積割合図

薊野中町

空間要素の抽出と分布による分析を行った結果、中町では、全19種類のうち17種類の単一要素を抽出した。また、空間要素の結合体は9種類のうち8種類もの空間要素を有している。中町は5つの字の中で最も多くの空間要素を有している。また、17種類もの単一の空間要素の全体における各型の面積割合をグラフで表すと面積の偏りはあまりなく、どれか1つの空間要素が広域な面積を占めることなく分布されていることがわかる。これらにより、中町は非常に多彩な空間を有していることが言える。

表 5.2.2.5 単一空間要素の面積割合

	「原型」空間	スプロール空間	重なり空間	「現在型」空間
両側建築型(青色)	0.0%	6.8%	9.3%	16.1%
両側建築型(藍色)	0.0%	10.3%	8.0%	18.3%
両側建築型(水色)	0.0%	1.1%	2.3%	3.5%
片側空地型(黄土色)	0.0%	2.6%	7.1%	9.6%
片側空地型(茶色)	0.0%	0.5%	2.9%	3.5%
片側田畑型(深緑色)	1.3%	0.0%	4.3%	5.5%
片側田畑型(緑色)	0.4%	0.0%	2.9%	3.2%
両側田畑型(黄緑色)	0.0%	3.8%	2.7%	6.5%
田畑空地対面型(淡黄色)	0.0%	0.0%	1.9%	1.9%
両側田畑型(黄緑色)	0.2%	0.1%	0.0%	0.3%
幅広道路接続型(黄色)	0.0%	1.9%	7.1%	9.0%
袋路型(青紫色)	0.0%	5.9%	1.6%	7.5%
袋路型(紫色)	0.0%	3.2%	0.0%	3.2%
袋路型(赤紫色)	0.0%	4.3%	0.0%	4.3%
片側田畑袋路型(朱色)	0.0%	0.6%	0.0%	0.6%
空地共存型(灰色)	0.0%	6.0%	0.0%	6.0%
共有空間型(薄紅色)	0.0%	0.6%	0.4%	1.0%
総計	1.8%	47.8%	50.4%	100.0%



図 5.2.2.9 南町の分布図

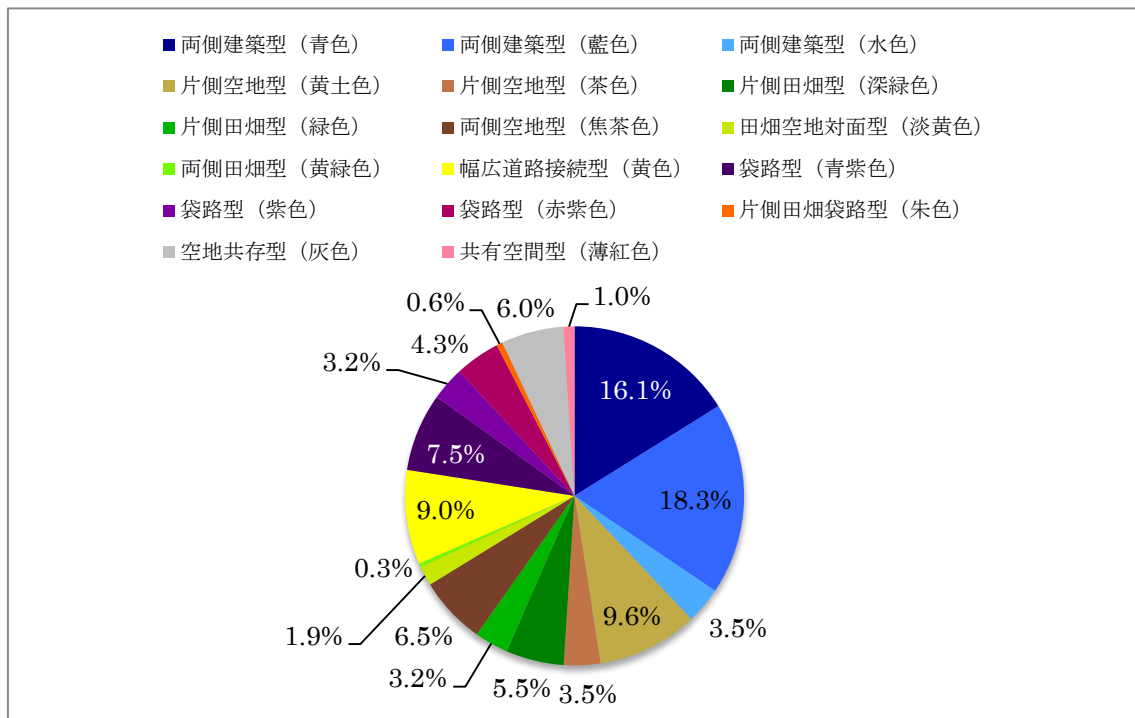


図 5.2.2.10 単一空間要素の面積割合図

5-2-2. 豊かな地域コミュニティ空間の形成

薊野東町

諏訪野団地と東町を見くらべると幹線街路から地区内へのループを描く骨格街路が敷かれ、その骨格街路から幾つもの袋路が接続する街路体系は共通している。また、フットパスが設けられており、街路のヒエラルキーも見られ、地域コミュニティを図るための基本的な構成を持った住宅地空間であることが言える。

薊野西町

戦後高度経済成長期の合理的で均質な住宅地開発と西町を見比べると似ている空間が多々存在する。ただ、かつての参道が地区外をつなぐ通過交通へと機能を変え、原型の水路が強制的に袋路を形成している。これらの部分的な不備は、均質な住宅地の持つ一体性を弱めることとなり、全体的には均質空間になりきれない町となっている。

薊野南町

工夫された住宅地の事例より「みらい平」と南町を見比べてみると似通った町並みを形成していることが伺える。街路体系では、曲線形状の骨格街路とそこから幾つもの枝分かれするループが敷かれている。地域コミュニティを図る空間を南町が有していることが言える。

薊野北町

工夫された住宅地の事例よりイートピア名取と北町を見比べてみる。多様な空間を持った住宅地の点では共通する部分がある。北町では、県道による陸橋や薊野川、2つの低山により幾つもの領域に分けられており、それぞれの領域では少しずつ空間の質が異なる。また、基本的には、曲線形状の骨格街路から袋路やループが接続し、フットパスなども見られ、街路のヒエラルキーが設けられている。さらに田畑も多く散在しているため、緑化効果も期待でき、地域コミュニティの空間を有していると言える。

薊野中町

工夫された住宅地の事例より「みらい平」と中町を見比べてみると非常に似通った町並みを形成していることが伺える。街路体系では、曲線形状の骨格街路とそこから幾つもの枝分かれするループが敷かれている。地域コミュニティを図る空間であることが言える。また、中町では、現在もなお残存する田畑による緑化、フットパスや街路のヒエラルキーもあり、より事例が目指している空間に近い住宅地空間となっている。

終章

6-1. 研究の成果

空間的特質としては、空間を形成する要素（街路、街区、建築、空地）の構成を、1.原型空間、2.スプロール空間、3.現在型空間の順に示し、原型とスプロール空間の重なり方がいかなる現在型空間を生み出しているかを示せた。また、住宅地空間の魅力としては、戦後の均質的住宅地開発への反省から生み出された「豊かな地域コミュニティを形成する住宅地」の事例との相関を分析し、数多く見られる類似性から薊野の現在型空間が豊かな地域コミュニティを形成するための空間を持っていることを確認した。さらには原型空間の特質とスプロール現象の重なり方の密度や規模・速度の違いが、薊野空間の生活環境と空間の質に及ぼす影響を考察している。その結果、原型空間としては薊野全域の骨格（中心）となる街路または、場を有していること、スプロール現象としては小規模かつ断片的な開発が長期に渡り緩やかに行われることが、住宅地空間の魅力を高める大きな要因であることを示せた。

6-2. 研究の課題

今後の課題として、薊野の町が都市機能と地域コミュニティが重なった地区であり、その重なりが及ぼす住宅地への影響を分析する必要がある。また、戦後から現在にかけて開発された、場所生が欠落した均質な住宅地空間、それらを反省に開発された共有空間導入の住宅地空間の整備手法を打開する見地、さらには、既存の空間的特質を継承しつつ、新しさと豊かさを備えた空間の整備手法への手がかりも導きだしたいと考えている。

主要参考文献

第1章

- [1-1] 石田頼房 (2004年) 『日本近現代都市計画の展開 1868-2003』 自治体研究社
- [1-2] 中井検裕 (2010年) 『工夫された住宅地・設計事例集 住まいのまちなみを創る』 建築資料研究社
- [1-3] 柴田建、菊池成朋、方琢也 (2001年)
『日本における戸建て住宅地の計画手法の変遷と課題』 都市・建築学研究
九州大学大学院人間環境学研究紀要
- [1-4] 石田頼房 (1978年) 『新市街地形成の計画化に関する手法について』 総合都市研究第4号
- [1-5] 小学館 日本大百科全書ニッポニカ (1993年) 小学館

第2章

- [2-1] 川崎誠樹 (1985年) 『薊野の今昔』 川崎誠樹

第4章

- [4-1] 中井検裕 (2010年) 『工夫された住宅地・設計事例集 住まいのまちなみを創る』